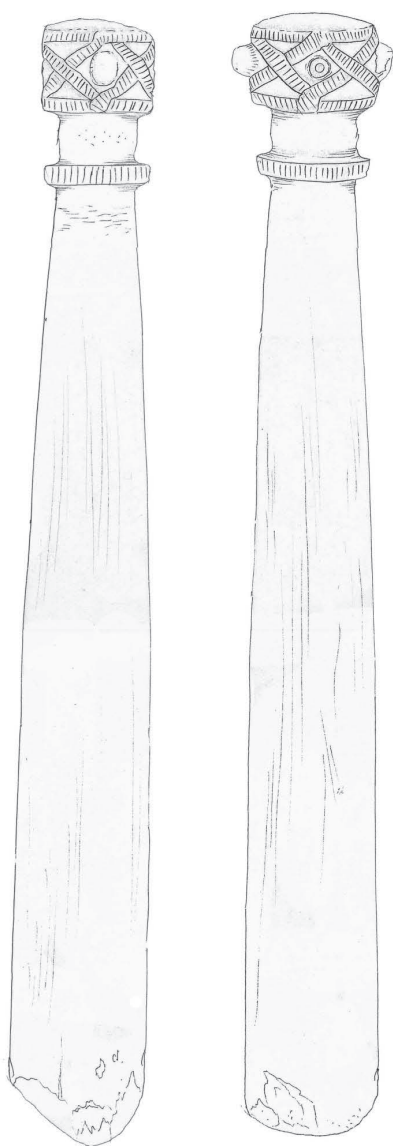
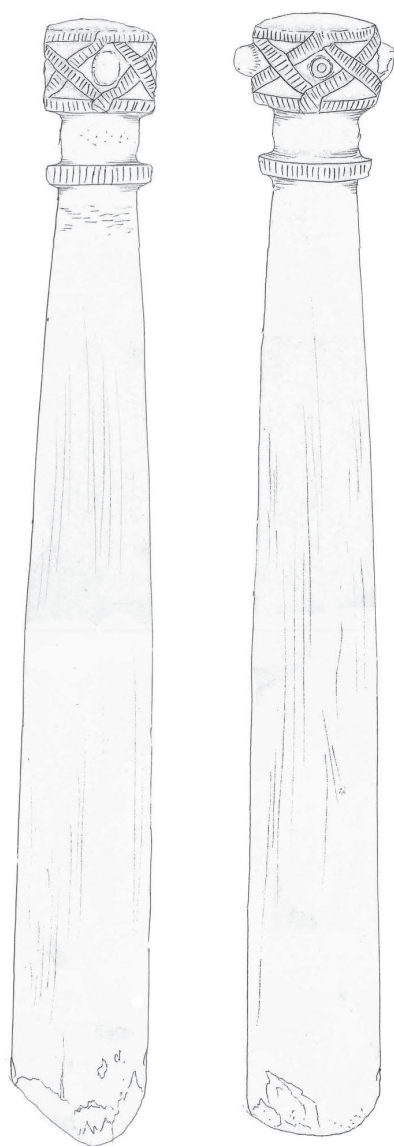


佐藤 郁 考古画譜Ⅲ



弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター
2011

佐藤 部 考古画譜Ⅲ



弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター
2011

目 次

目次・例言

遺物解説

(1) 石器	1
(2) 土製品・土器（補遺）	6
(3) 骨角器	6
(4) 古墳時代以降の資料	6
(5) 遺構図・その他の考古資料	7
(6) 佐藤薔筆以外の考古資料	7

遺物リスト	10
-------	----

写真図版	35
------	----

例言

1. この図録は、平成21年度に青森市の成田恵子氏から弘前大学に寄贈された成田彦栄氏考古資料に含まれる、佐藤薔が描いた考古・歴史・民俗資料に関する約560枚の絵画の図録である。これまで弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センターでは、『佐藤薔 考古画譜Ⅰ』（2009年刊）、『佐藤薔 考古画譜Ⅱ』（2010年刊）を刊行しており、この図録は第三冊目に該当する。この図録では石器を中心に、骨角器・金属製品・遺構図などこれまでの図録に掲載されなかった考古資料計183枚を選び掲載した。
2. 図版の縮尺は1/2を基準としているが、紙幅に合わせて適宜調整した部分がある。実寸で描かれているものにはスケールを入れた。
3. 本図録の執筆および遺物リストの作成は上條信彦（人文学部講師）が行った。
4. 図版の版組は、平成21～22年度の考古学実習として行った。実習の参加者は以下の通りである。
葛西早津紀、菅野七瀬、菊池咲江、櫻田智恵、奈良美穂、本間大揮、三浦倫子、渡辺信彦、（以上、当時人文学部3年）、尾崎美由紀（当時人文学部2年）
5. 本図録作成に関わる費用は、平成22年度弘前大学機関研究補助金から支出した。
6. 本図録の作成に関し、次の方々・機関の協力を得た（順不同・敬称略）
成田恵子、成田容子、成田滋彦、関根達人、藤沼邦彦、村越 潔、梶原義実、青木政幸、山口卓也、加藤俊吾、白石陸弥、品川欣也、福田友之、塩村 耕
青森県立郷土館、大館市中央図書館、大阪歴史博物館、(財)辰馬考古資料館、東京国立博物館、関西大学博物館、東北大学大学院文学研究科考古学研究室、弘前市立弘前図書館

遺物解説

本図録に掲載した183枚の画譜には、石器482点（重複を除く）が描かれている。また、土器・石器以外の考古資料として、骨角器・金属製品・遺構図および『考古画譜Ⅰ・Ⅱ』の補遺資料（関根編2009・2010、以下『画譜Ⅰ』『画譜Ⅱ』と呼ぶ）、そして整理中に発見された佐藤葎以外の人物の手による資料を本図録に掲載した。

石器が描かれていた画譜のうち231～240には複数の資料が器種別にまとめられている。これは土器と同様（『画譜Ⅰ』64～69・72～74）、1枚に1点描かれた画譜と重複することが多いことから、一連の画譜の「目次」あるいは「索引」に相当するとみられる（関根編2009）。また258～260は値段とみられる表示があることから古物商でのスケッチとみられる。出土地の判明している遺跡は青森県域、特に津軽地域が主体で、県外では北海道・秋田県・茨城県・栃木県、海外ではサイパン島がある。秋田県以外の資料については佐藤葎自身が現地に赴いた記録はないので、おそらく県内の収集家蔵の資料を描いたとみられる。描かれた資料の帰属時期は縄文時代、特に後・晩期が多いが、弥生時代以降の資料も数多くあり、佐藤葎の幅広い素養がうかがえる。

（1）石器

【剥片石器】

石槍14・石鏃34・石匙41・石鏃8・スクレイパー2・石錐9・打製石斧4・異形石器16点がある。石槍は大型品が中心で、木の葉状で明瞭な茎部をもたないもの（233-4, 242-1, 244, 258-4・6）、茎部をもつもの（233-3, 241, 242-2, 258-5, 351裏-8）、つまみ部をもつもの（233-1・2, 242-3, 243）、異形の茎部をもつもの（249-5, 371-1）に区分できる。多くは円筒下層・上層式土器に伴うが、つまみ部をもつものは縄文前期後半～後期前葉、異形の茎部をもつものは縄文前期後半（円筒下層c・d式）と時期が限られる（齋藤2010）。また、茎部をもつ2点（241, 261-2）は北海道出土である。

石鏃には無茎凹基・無茎平基・有茎凸基・有茎平基がある。このうち、三内丸山遺跡出土（256-1・2）は凹基と有茎凸基で前期～後期前葉に多い形態である。また青森市細越地区出土の石鏃（245-1～4）は細形の無茎凹基・有茎凸基・有茎平基で晩期前半に多い形状である。359-2はつがる市亀ヶ岡遺跡出土の燕の翼のように二又に分かれた基部をもつ石鏃である。この石鏃は県内では後期後葉～晩期前半・弥生時代の事例があり、亀ヶ岡遺跡の継続時期に一致する。

石匙は剥片石器のなかで最も多く描かれている器種である。刃部に対するつまみ部の位置によって縦形と横形に区分される。246, 258-1は大型の縦形石匙で、前期～中期前半に多くある。245-11や253裏-3, 359-1には、黒色物の付着部分とその範囲が記されており、佐藤葎の観察眼の鋭さがうかがえる。232には「皮ハギ」と記されており、皮革加工具としての用途が推定されていたことが分かる。

石鏃はつまみ部をもつ逆T字状の形態が1点（247-4）あるほかは長台形である。石錐はつまみを整形するもの（232-13・14・16・19・20, 245-6）と整形しないもの（232-15・17・18）がある。

打製石斧は短冊形（235・236-47, 249-7, 257）と分銅形（285-2）がある。打製石斧は青森県では後期以降増加するが、一部には在地産磨製石斧の敲打整形途中の資料が含まれる。235・236-47の注記に「石磬」とあるように、画譜の描かれた時代には楽器としての用途も推定されている。分銅形は宮崎県の資料で、同例が成田彦栄氏考古資料中にもある。

異形石器は一般的に石器組成中では少ない器種ではあるが、画譜には多くの異形石器が描かれており、佐藤葎の関心の高さがうかがえる。異形石器は形状によりV字状に分岐する雁股形（245-5, 248

-3・5, 249-1, 254-1, 255, 256-3, 359-4, 374-1)、三日月形(247-11)、十字形(248-4)、放射状に多数の分岐点をもつ放射形(249-4, 253裏-4, 258-18)に区分される。これらのうち、雁股形・三日月形は中期後半～後期前葉を中心に晩期前葉まで認められるが、Y字状の柄をもつ雁股形(254-1, 255)は晩期大洞C式期にも認められる。放射形は後期後葉(十腰内V・VI式期)の類例が多い。

【磨製石斧・環状石斧・多頭石斧】

磨製石斧は42点ある。その大きさから①長さ3cm前後の小型、②10cm前後の中型、③20cm以上の大型に区分される。①小型には擦切技法で製作された長さが幅の3倍以上の長細形があり、石鑿ともいわれる(249-6, 268, 351表-6)。②中型は擦切技法の特徴をもつもの(263-1・2, 264-1・2, 270-2, 333-2)と、刃部のみが研磨されたもの(247-18, 254-2)に細分できる。後者の刃部のみが研磨されたものは縄文後・晩期に増加する。なお、側面に抉りを入れた分銅状(265, 332)があり、これらは石斧として紹介されているが、後期後半の独鈷石(独鈷状石器)の可能性もある。③大型品は縄文前・中期に多い。県外の例としてオホーツク文化期の北海道利尻島出土の石斧がある(261-1)。この石斧は幅2cm程の凹部が2段、裏面を除いて巡る。類例は本学所蔵の船木コレクションの樺太宗仁遺跡出土資料の中にも認められる(サハリン考古学会編1994)。

環状石斧や多頭石斧は弥生前期のものと推定される。327-4(下北郡佐井村出土)は、欠損の状況や出土地の記載から『蓑虫山人写真』および『津軽全国神代石古陶図』掲載の環状石斧と同一と分かった。さらに資料調査の結果、同じ画譜中にある327-2・3と合わせ現在関西大学博物館蔵であることが判明した。関西大学博物館の旧本山コレクションは神田孝平の資料の多くを引き継いでいる。したがって、資料は下北に滞在していた蓑虫山人の手を経て神田孝平へ渡った可能性が高い。

【石皿】

石皿は39点ある。形態には①使用の結果凹んだもの(237・238-2・4)と、②凹部・縁部を作り出したものがある。①使用の結果凹んだものには237・238-2のように中期後半の北海道式石冠とセットになる石皿がある。②使用前に凹部・縁部を作り出した石皿は、凹部・縁部の整形と脚部の有無によって細分可能である(上條2007)。まず、外形を加工せず深い凹部のみを作り出すもの(239-1～6・8, 240-2・3・5・6, 286, 287, 298-1, 303-2)と、外形を整え明瞭な縁部を作り出すものがある。前者の深い凹部を形成する大型品は、晩期前半に比較的多い。

次に後者の明瞭な縁部を作り出すものには、平面が楕円形および不定形(237・238-1, 240-4, 288, 289, 291～293, 295～297, 392-2)と長方形(239-7, 240-1, 290, 294, 303-1)にさらに区分される。これらは中期後葉～晩期前半に多い。有脚石皿は四脚が多いが、三脚(293)や台付(297)、脚間に隆帯を施すもの(294)もある。有脚は中期末～後期中葉に盛行する。このうち脚間に隆帯を施すものは中期末、三脚や台付は北東北の中期末～後期前葉にある。中高石皿(299～302)は晩期前葉に多い。

なお、295は1886年東京人類學會報告第2巻第10号で「石の鞋草」として紹介された資料であることが判明した(下澤1886)。この文章は下澤保躬が著者で、県内の人物による初めての東京人類學會報告の投稿である。また石器の研究史上、本資料がおそらく有脚石皿紹介の初例とみられ、やがて「石皿」の呼称が用いられるきっかけとなった。さらに本資料は蓑虫山人旧蔵で神田孝平の手を経て関西大学本山コレクションとして現存していることが分かった。本資料が東京人類學會報告掲載資料であることは、赤塚2001において東京人類學會報告のスケッチとの比較によって推測されていたが、佐藤薊の精密な図面および所有者・来歴の記述が、東京人類學會報告の記述と関西大学博物館蔵資料と一

致したことにより、ほぼ間違いないだろう。また297は蓑虫山人の『津軽全国神代石古陶図』『蓑虫山人写真』掲載資料で、これらの図では中高石皿のように描かれているが、佐藤薮画譜では有脚石皿として描かれている。このことから蓑虫山人が描いた本資料は、中高石皿として脚色された可能性がある。

【砥石】

砥石は5点ある。237・238-3・6は帯状にのびた長楕円形の溝をもっており、石斧刃部など大型品を磨くための砥石とみられる。237・238-5は幅1cmほどの帯状の溝を複数もつ玉砥石で中期末～後期前葉に増加する。306は磨製石斧と同じ石材であり、中央にV字状の深い溝をもつことから磨製石斧製作時の擦切段階の途中を示す資料とみられ、擦切技術を知ることのできる好例である。324-4は県外の資料である。

【石錘・土錘】

3点ある。333-1はつがる市田小屋野遺跡出土で前・中期に属すとみられる。381表-1はいわゆる揚子江型土錘とみられる（渡辺1973）。短軸一周の溝が2本、長軸半周の溝が1本施されている。分布域は東北南部に多く、おそらく本例が分布の北限に近い例とみられる。縄文晩期前半に多い。

【青龍刀形石器】

青龍刀形石器は3点ある。『画譜Ⅰ』78にも3点掲載されているので、画譜全体では6点になる。注記には「青龍刀石」（『画譜Ⅰ』78, 235・236-48, 274）と記されており、明治期にはその名が定着していたことがうかがえる。6点とも刃部に突起部をもつことから、青森県域の中期末にみられる形状に類似する。また274には柄部の付け根に2個の穿孔がある。

【石冠】

石冠（石冠状石製品）は5点ある。284・285は頭部が斧状で底面が湾曲する例である。類例は八戸市葦窪遺跡や青森市近野遺跡など後期前葉十腰内Ⅰ式期に多い（齋藤2009）。260-1は頭部が球状となる例で晩期中葉大洞C式期に属す。いずれのタイプも中部高地から北海道まで広範囲に分布する。351表-8・9は中期後半の北海道式石冠とみられる。

【独鈷石（独鈷状石器）】

独鈷石（独鈷状石器）は11点ある。全て中央に2本の隆帯をもつ。隆帯と先端部の形状で区分できる。234-10は中央部が凹み、その両側の隆帯が低い。また先端部が斧状で他に比べ古い特徴をもっており、時期は後期に遡る可能性がある。石斧状の先端部をもつタイプ（234-8・9）、先端部が石棒状の球状になるタイプ（277-1, 281）は晩期に多い。先端部が細く尖り、全体形が弧状をなすタイプ（233-5・6, 282）は弥生時代まで認められる。また、327-3の隆帯にはV字状の抉りが入れられており、同図の環状石斧と同じく弥生時代の所産とみられる。なお、器種名称は279には「石劔」、233-5には「獨鈷石」と記されている。233の作画時期は不明であるが、複数個をまとめていることから、279より後に描かれたと想定される。明治時代に描いた当初、佐藤薮は独鈷石を「石劔」として捉えていたのかもしれない。

【石棒】

石棒は45点あり、中期～後期前葉にみられる径10cm以上の太形大型と、後期後葉～晩期前葉にみら

れる径5cm前後の細形小型に区分される。

太形大型には①円柱形のもの(237・238-7・9, 308~313, 317, 318-1)、②頭部が球状のもの(237・238-10, 314, 315)、③棒状の自然礫をそのまま、あるいは若干整形したもの(237・238-8, 316)がある。①には237・238-9、311のように両頭部が若干開くものがある。②・③は長さ60cm以上の大型品が多い。

細形小型は①両頭部が球状になるもの(258-20, 319, 320, 343-1, 344-2)、②頭部が円柱状でその下に突帯を有するもの(321~323, 324-2)、③頭部が半球形でその下に突帯を有するもの(325, 326-1, 327-1・2, 351表-7)、④把部に1条の凹線または2~4条の沈線を巡らし、先端部が鈍く尖るもの(341, 342-1, 343-2)に四区分される。これらは後藤1987と対比すると①が大澤型、②が興野型、③が墓沢型、④が柏木所型に該当する。①は縄文後期中葉~後葉、②は後期後葉、③は後期中葉~後葉、④は晩期前葉の東日本に分布する。なお器種呼称について、309・328表は「石棒」、326-1・342・343は「石劔」と記している。中期以前の太形大型を石棒、後期後葉以降の細形小型を石劔と区別していた可能性がある。

描かれた資料について調査したところ、蓑虫山人が描いた資料と同じ画譜を多く見つけることができた(309, 314, 316, 321, 323, 325, 327-1・2)。323は明治13年第二回弘前博覧会の陳列品である(405裏-12と同一)(藤沼ほか2008)。第二回弘前博覧会は8月11日から25日まで(その後、9月7日までに延長)開催された。佐藤蓜は石皿(295)とともに、この石棒を同年旧8月3日(新暦9月7日)に描いていることから、博覧会の最終日に所蔵者を訪ねて描いたことになる。その後蓑虫山人が同石棒を明治15年に描いている(青森県立郷土館2008)。もしかしたら佐藤蓜の紹介があったのかもしれない。なお『蓑虫山人写画』におけるこの石棒は、半割品を反転してくっつけ、あたかも完形品のように描かれているが、『津軽全国神代石古陶図』に描かれている方が正しい。この石棒はやがて毛内氏の手を離れ、行方不明となった。ところが辰馬考古資料館で画譜と照合させたところ、詳細まで一致し所在が確認された。これら辰馬考古資料館現蔵資料の来歴を見ると、青森県域の資料の多くは工藤(彦一郎・祐龍)旧蔵であったが、この1点のみ高島多米治を経由して下郷伝平旧蔵であった。このことは画譜に描かれた津軽の資料が、二つのルートを通じて最終的に、西日本の一つの博物館に収まっていたことになる。

343-1は『陸奥考古』(中村1928)に紹介された石棒で、元津軽藩主伯爵家所蔵となっている。その経緯がこの画譜に記されている。

【石劔・石刀】

石劔は2点ある。324-3は頭部が扁平な略球形を呈し、刀身が直線状である。後藤1987の分類を参照すると、なすな原型石劔に該当する。なすな原型石劔は晩期前半の関東地方から中部地方太平洋側に分布する。この資料は福島県出土と記されていることから分布上整合する。334-1は刀身のみであるが峰が描かれていることから両側縁に刃部がある石劔と判断した。

石刀は24点ある。後藤1987分類を参考に分類すると、把頭や刀身の形状から①刀背に関を造り出し、把部と刀身を明瞭に区分しており、先端部が刃部のほうに反りあがって尖るもの(保土沢型、後藤1987分類、以下同)(349)、②直刀で刀身中央がやや幅広となり、把部と刀身部の区別が不明瞭であるもの(新田型の一部)(344-1, 345, 347)、③把頭が扁平な略球形を呈し、把部と刀身部の区別が不明瞭で太形であるもの(寺家にしきど型の一部)(338~340, 351, 350)、④把頭が若干扁平な円柱状を呈し数条の沈線を巡らし、先端部が刃部のほうにやや反りあがるもの(小谷型の一部)(330-1, 331, 336-1, 373-1)、⑤把頭が三角状もしくは台形状を呈し、文様は数条の沈線を巡らすか無文であるもの(九年橋型)(334-3, 337-1)、⑥把頭部が横長の隅丸長方形で入組三叉文やS字状渦卷文、

同心円文が施され、刀身はやや反りあがるもの（札苅型）（334-2, 335, 336-2・3, 337-2, 348）に区分できる。このうち①が後期前葉、②～⑥が晩期後半（大洞C2～A）に分布する。特に②～⑥の完形品は土壙墓に副葬される場合がある。

349は神田孝平旧蔵品、350は若林勝邦が亀ヶ岡遺跡調査した際の出土品を描いている。これにより、東京人類学会を通じた佐藤部と両者との交友関係をうかがい知ることができる。

【玉類】

玉類は重複を除くと105点描かれている。一部に石材の色調が記述されていることから、ヒスイなどの石材がある程度特定できる。玉類のうち大珠は10点あり、全てヒスイ製である可能性が高い。長楕円状の鯉節形（360-2, 361, 362）、短円柱状の根付形（234-11, 358, 359-5）、長軸に沿った溝を有す有溝形（235・236-1）がある（鈴木2004）。362は不整形である。鯉節形は黒石市一ノ渡遺跡など中期後葉～後期前葉に類例がある。根付形は北海道南部から東北北部の中期後葉に分布する。有溝形は中期後葉に属す可能性がある。

管玉は6点ある。うち縄文時代は4点、古墳時代は2点である。235・236-34は、楕円礫を縦方向に穿孔した管玉で、他3点（359-6・10, 363-2）は胴部が膨らむ断面エンタシス状の形態である。エンタシス状の形態は県内では青森市三内丸山（2）遺跡、三戸町泉山遺跡、六ヶ所村沖附（2）遺跡など後期前葉に属す遺跡にみられる。

勾玉は44点ある。これらの帰属時期は古墳時代の15点以外は縄文時代後・晩期とみられる。頭部に刻み目をもつ勾玉は後期後葉～晩期に多い。うち丸みを帯びた複数の刻み目をもつ勾玉（235・236-4, 365, 368-1・2）は後期後葉～晩期前葉にみられる。372-6はX字状の刻みを頭部や側面に施す。八戸市風張遺跡例に同様の沈線を施す土製勾玉があることから、後期後葉の所産とみられる。「く」の字状に屈曲の増した勾玉（235・236-2・13, 364-2・3）は晩期中葉大洞C1・C2式期ごろに増加する。六ヶ所村上尾駱（1）遺跡では類例が土壙墓より大量の小玉とともに検出されている。

垂飾は28点あり、楕円・不整形・扁平素材に穿孔している。東北北部では中期後半～後期前葉に径が比較的大きく、縄文後・晩期に小型の楕円形や円形に近くなる。不整形はヒスイ角礫に穿孔しており、横断面が三角形（360-1）を呈す。青森市三内丸山（6）遺跡や六ヶ所村大石平遺跡など後期前半に認められる。扁平垂飾品（235・236-36, 256-4, 351表-1, 371-3, 372-3・7, 375-6, 380-2）は凝灰岩など比較的緻密軟質な素材が用いられる。また縄文中期後葉～後期前葉の遺跡に多い。351表-1は三角形を呈し、2つの穿孔がある。類例は青森市稲山遺跡など後期前葉に属す遺跡にみられる。235・236-36はボタン状石製品に類似しており後期後葉～晩期前半の資料とみられる。

块状耳飾（353-2）は秋田県真崎勇助旧蔵資料で、楕円形を呈すことから縄文前期後葉～中期前葉の所産とみられる（大館市教育委員会1993）。

丸玉は16点、小玉は1点ある。古墳時代のガラス小玉3点以外は縄文時代の資料である。青森市源常平遺跡・六ヶ所村上尾駱（1）遺跡例など東北や北海道の後期後葉～晩期の土壙墓から副葬品として大量出土する場合がある。

【その他の石製品】

その他の石製品には三角形石製品、棒状石製品、環状石製品、容器形石製品、ボタン状石製品、岩版などがある。三角形石製品（248-1, 356-2）は縄文後期に多い。棒状石製品（253・236-24・26, 259-4・5・9）は中央に細い沈線を巡らすものがある。環状石製品（352-2・3, 372-1）は中期後半以降増加する。370-1は容器形石製品で赤彩されている。青森市三内丸山（6）遺跡に類例があることから後期前葉の石製品とみられる。ボタン形石製品（259-12・14, 356-3）は後期後葉～

晩期前半主体に分布する。うち円形で裏面の抉りの深い例（356-3）は晩期前半に多い。岩版（352-1）は亀ヶ岡遺跡出土で両面に渦巻文を刻む。この文様の特徵から大洞C1式に属すとみられる。なお、この岩版は現在東北大学蔵であることが分かった。

その他として器種分類不明の石製品がある。258-19は後期の管状土製品の可能性がある。356-1は台形状で後期前葉の六ヶ所村大石平遺跡例に形状が類似する。354は真崎勇助旧蔵資料である（大館市教育委員会1993）。359-3は東京人類學會雑誌上で最小の石棒として紹介されている（佐藤1898a.195頁）。

■ (2) 土製品・土器（補遺）

土製品には土偶、土版、スタンプ形土製品、V字形土製品、菱形土製品、土製耳飾、管状土製品がある。土偶（259-1, 260-2, 382）のうち、260-2は輪郭のみ描かれているが、後期後葉の腕を組む蹲踞土偶とみられる。382は大洞C2式の小型土偶である。土版（353-1, 355-2）のうち、353-1は石刀の頭部の文様に類似しており大洞C2に属す。355-2は岩版の可能性がある。V字形土製品（355-1）は青森市小牧野遺跡例など後期前葉に類例がある。菱形土製品（375-5）は、八戸市葦窪遺跡に類例があり、中期末～後期前葉に属す（金子2010）。土製耳飾（375-8）はいわゆるC2ネジ形の耳栓で大洞C2～A式期に属す（金子2009）。土器は画譜Ⅰ・Ⅱに掲載できなかった補遺である。うち、193の注記には「紙ヲ（遠）ハリテ（者里天）、ミソ（溝）へ墨ヲ入タルモノ也、全体ノ模様如此」とある。193は明治13年（1880年）旧5月5日に描かれており（『画譜Ⅱ』）、画譜の中で年代の分かる最も古い拓本である。拓本の説明をわざわざ記している点からすると、おそらくこの画譜（193）が佐藤蓜の拓本の初例ではないかとみられる。

■ (3) 骨角器

骨角器は骨篋（380-3）、鈎針（383B-1）、ヤス（381表-2）、骨針（382-3・4）、垂飾（383A, 383B-2）計6点がある。骨篋（380-3）には上部に沈線による装飾がある。ヤス（381表-2）には互い違いに多数の逆刺がつく。拓本から鹿角製であることが分かる。骨針（382-3・4）はシカの中手・中足骨を縦割りして先端部のみが加工されている。垂飾（383A, 383B-2）は東京人類學會雑誌上に紹介され、亀ヶ岡遺跡を代表する工芸品のひとつとして早くから知られている（若林1892）。用途として佐藤蓜は穿孔部に縄を通して物を掛ける鈎のようなものを想像している。鈎針（383B-1）は『画譜Ⅱ』p.84. 162の下書きとみられる。383Bには鈎針と垂飾が一緒に描かれていることから、鈎針と垂飾の図は本来セットであったことが分かる。なお383A・Bの資料は1909（明治42）年に宮内省東宮職（現宮内庁）から現在東京国立博物館へ下付されている（東京国立博物館2009）。明治41年（1908）皇太子嘉仁親王（大正天皇）の弘前への行啓があったことから、この頃に宮内省へ渡った可能性が高い。

■ (4) 古墳時代以降の資料

古墳時代の資料には耳環2点・勾玉10点・管玉2点・ガラス小玉3点・石製模造品5点がある。勾玉はC字状でメノウ・水晶・硬玉製である。石製模造品は劔形（376-1・2・3・5）と有孔円形（376-4）がある。

石帯（388）や軒丸瓦（389）は奈良時代に属すとみられる。石帯は県内の出土品とみられる。『蓑虫山人写画』（青森県立郷土館2008.図6-29）にも類似品が描かれているが同一かどうかは不明である。

軒丸瓦は鋸齒文縁単弁十六弁蓮華文軒丸瓦で、8世紀半ばの資料である。このような瓦は県内には類例がなく、県外からの収集品とみられる^{*1}。平安時代と推定される資料には製塩土器（400-1・2）がある。この資料は東京人類學會雑誌上で紹介されており製塩土器の紹介としては初例とみられる（若林1895）。ただし、東京人類學會雑誌上では製塩土器としては想定されておらず、土器製法が輪積みであることを説明するための資料として扱われている。

中世の資料には須恵器壺・銅銭・金属製品・石製品がある。須恵器壺は13世紀の珠洲焼とみられる。銅銭（386-1~3）と鉄刀？（386-4）は一枚の用紙に描かれていることから一括出土例とみられる。銅銭は1点（386-3）のみ唐国通宝（959初鑄・南唐）と判別できる。387は鉄槍先である。藤崎町藤崎城内出土とみられる。断面平三角の直槍である。390は茶臼の下臼である。旧岩木町内の中村川のなかで見つかったものである（407）。387・390の帰属時期は出土地から室町時代と推定される。

■ (5) 遺構図・その他の考古資料

サイパン島のスクレイパー（379-1）とパン搗石（379-2）がある。いずれも民族資料とみられる。391は土器の内部に入っていた植物の根である。これは亀ヶ岡式土器の内部に残存していた植物として東京人類學會雑誌上で報告されている（佐藤1897）。着眼点としては、おそらく土器の用途研究の初期の例となろう。また平安時代の環濠集落の略図（392-1, 393, 394-1・2, 395）がある。この資料により明治年間にはまだ地中に埋没、削平されずに、遺構の痕跡が地表に残っていた遺跡がいくつかあったことが分かる。この図を描いた背景には明治23年の佐藤重紀の環濠集落の図（佐藤1890）、明治31年の佐藤傳蔵の津軽地域での堅穴の調査報告（佐藤1898b）の影響があったのかもしれない。特に佐藤傳蔵の調査結果が4月28日に発表されており、佐藤部は同年7月26日に環濠集落の図を描いている（394）。

405の複数の資料のスケッチは整理当初、詳細について不明であった。ところが明治13年開催の第二回弘前博覧会を伝える当時の青森新聞の記事内容を比較した結果（藤沼ほか2008）、本スケッチの内容と一致したことから、この博覧会の出品物が描かれていることが判明した。この博覧会の出品物の詳細は新聞ではうかがえないが、本スケッチにより何が出品されていたか分かる貴重な資料である。さらに本スケッチが描かれた明治13年は部が画譜を書き始める最初の時期であり、画譜を描きはじめてきっかけを知るうえでも貴重である。一方、406・407は「昭和12年」の記載からその日以後に書かれた画譜の最末期の資料とみられる。営林局関係の用紙に書かれており、文字の筆運びが不安定なため、図の横に別人の手による文章が再筆されている。また407には所蔵品の出土地について記載している。おそらく、余生が長くはないと判断した佐藤部が、備忘録として記したのだろうか。

■ (6) 佐藤部筆以外の考古資料

画譜を整理するなかで、佐藤部以外の人物によって描かれた考古資料の図が見つかったのでここに合わせて掲載した。まず一つはメモ書き（408）である。このメモ書きには画譜に関する情報などが書き込まれていることから、ある時期に成田彦栄氏が画譜を整理した際の記録とみられる。

二つめは平尾魯仙筆『考古圖』である。弘前市立図書館に同図があり、内容がほぼ一致する。ほかに平尾魯仙筆「考古圖」の一部とみられるのは、『画譜Ⅰ』58・62が該当する^{*2}。この「考古圖」は明治8~12年に描かれたものがある。佐藤部は平尾魯仙に師事しており、考古資料に興味を持ち始めた部に対して魯仙が贈ったものかもしれない。409は蓑虫山人蔵の勾玉である。魯仙のもとへ蓑虫山人が訪ねてきたことが記されており、魯仙と蓑虫山人そして佐藤部との交友関係がうかがえる資料であ

る。

三つめは松井淳風なる人物による拓本である。その内容は北海道の磨製石斧（410）や土器（411）、そして平安時代の瓦（412～414）である。松井淳風に関する資料は少なく、本名や人物の詳細については不明である。ただし、龍門文庫（奈良県）に松井淳風輯『古印集影』が所蔵されているほか、売立目録にもその名がみえること（京都美術倶楽部1933）、平安京の文字瓦が採拓されていることから、関西の故実・収集家の可能性が高い。平安時代の瓦は文字瓦である。文字瓦には「鴻臚館」（412）、「白虎楼」（413-1）、「雅楽寮」（413-2）、「右坊」（414）銘がある。このうち、「右坊」銘瓦は、大内裏出土で平安京やその瓦窯で検出されており、平安中期頃の瓦とみられる。

413には「好古日録原瓦」と記されている。『好古日録』は藤原貞幹著『好古日録』（寛政9年刊）のことであり、同資料が掲載されていた。しかし、これら文字瓦について偽作された可能性が指摘されている（上原2000）。本図録の文字瓦の拓本も拓本の不明瞭さや文字の表出状況から、偽作拓本の可能性もある。偽作は「二重採拓法」という、はじめ普通の平瓦の拓本を採り、その際文字を入れる部分の墨を薄めにして置き、その後再度文字を刻んだ型を重ねて採拓する方法である。本拓本を観察すると414「右坊」文字の中に布目痕が残っている。この点でもし瓦製作の際、最後に文字を入れたならば、不自然であり文字瓦が「二重採拓」である根拠となる可能性がある。ところで、この拓本は明治25年～28年に採られており、『好古日録』発刊から95年の歳月が経っている。偽作と考えた場合、貞幹によって採られたとは考えにくい。また貞幹のものが流出した可能性もあるが、磨製石斧や土器の拓本も瓦拓本と同じ質の画仙紙が用いられており、これらも貞幹が採ったとは考えにくい。したがって貞幹の時代以降、明治期になっても一部の好事家のなかで、このような手法が流布していた可能性がある。ではなぜ蒨がこの拓本を所持しているのか、拓本のなかに東北の資料がないことから淳風が蒨のもとへ訪ねた可能性は低い。推測ではあるが、蒨が資料を収集するなかで手に入れたこともあるが、東京人類学会会員として知られていた蒨に対して淳風自身が貴重な拓本として売りつけた可能性もあろう。いずれにしても、『好古日録』に掲載された拓本の類例が残されていた点や、明治期に至ってもこのような拓本が採られ続けていたことが分かる点で、文字瓦研究の一助となろう。

註

- 1：梶原義実氏（名古屋大学）の御教示によると、下総結城廃寺の瓦の可能性が高いとのことであった。
- 2：本図録掲載以外にも画譜の中に考古圖の一部とみられる図がみつかり、改めて掲載する予定である。

引用・参考文献

【論文】

- 赤塚 亨2001「脚付石皿と中高石皿―関西大学博物館所蔵資料の紹介に関連して―」『関西大学博物館紀要』第7号.関西大学博物館
- 上原真人2000「文字瓦と考古学―藤原貞幹の転向―」『文字瓦と考古学』日本考古学協会66回総会.国士舘大学大会実行委員会
- 岡本孝之1999「遺物研究 独鈷状石器（独鈷石・白川型石器）」『縄文時代』第10号.縄文時代文化研究会
- 金子昭彦2005「東北地方北部における縄文晩期の「石製品」（1）」『紀要』XXV(助岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター)
- 金子昭彦2009「縄文晩期・東北北部の土製耳飾」『縄文時代』第20号.縄文時代文化研究会
- 金子昭彦2010「東北北部・縄文晩期の菱形環状製品」『青森県考古学』第18号
- 上條信彦2007「縄文時代石皿・台石の研究」『古文化談叢』第56集.九州古文化研究会
- 後藤信祐1987「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究（上）（下）」『考古学研究』第33巻第3・4号.考古学研究会
- 齋藤 岳2009「青森県の石冠・土冠の実測図集成」『青森県考古学』第17号
- 齋藤 岳2010「青森県内出土例を中心とした異形石槍について」『青森県考古学』第18号
- 佐藤傳蔵1897「共同備忘録」『東京人類學會雑誌』第12巻第138号
- 佐藤傳蔵1898a「共同備忘録」『東京人類學會雑誌』第13巻第143号

佐藤傳藏1898b「日本本州に於ける堅穴發見報告」『東京人類學會雜誌』第13卷第145号
佐藤重紀1890「陸奥國上北郡ノ堅穴（圖入）」『東京人類學會雜誌』第5卷第51号
下澤保躬1886「石器彙報」『東京人類學會報告』第2卷第10号
鈴木克彦2004「硬玉製大珠（ヒスイ大珠）」『季刊 考古学』第89号.雄山閣出版
鈴木克彦2005「緒締形、根付形、三角形大珠の研究」『玉文化』第2号.日本玉文化研究会
鈴木克彦ほか2006「青森県における装身具の集成」『研究紀要』第11号.青森県埋蔵文化財センター
関根達人・編2009『佐藤蒔 考古画譜Ⅰ』弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター
関根達人・編2010『佐藤蒔 考古画譜Ⅱ』弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター
中村良之進1928『陸奥考古』三
野村 崇1985『北海道縄文時代終末期の研究』みやま書房
福田友之1990「本州北端の硬玉（翡翠）製玉飾り」『青森県考古学』第5号
福田友之2010「奥羽人類学会と陸奥の考古家たち」『青森県考古学』第18号
藤沼邦彦・深見 嶺・工藤清泰2008「蓑虫山人の『陸奥全国神代石古陶之図』と青森新聞の『第二回弘前博覧会の記』について」『亀ヶ岡文化雑考集』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告7
村越 潔2007『青森県の考古学史：先覚者の足跡を尋ねて』弘前大学教育学部考古学研究会OB会
若林勝邦1892「石器時代ノ鈎鈎」『東京人類學會雜誌』第7卷第77号
若林勝邦1895「石器時代ノ土器製法」『東京人類學會雜誌』第10卷第107号
渡辺 誠1973『縄文時代の漁業』雄山閣出版

【報告書・図録】

青森県立郷土館2008『蓑虫山人と青森』
青森県教育委員会1977『近野遺跡発掘調査報告書（Ⅲ）三内丸山（Ⅱ）遺跡発掘調査報告書』（青森県埋蔵文化財調査報告書第33集）
青森県教育委員会1978『源常平遺跡発掘調査報告書』（青森県埋蔵文化財調査報告書 第39集）
青森県埋蔵文化財調査センター1984『埴窪遺跡発掘調査報告書』（青森県埋蔵文化財調査報告書第84集）
青森県教育委員会1984『一ノ渡遺跡発掘調査報告書』（青森県埋蔵文化財調査報告書第79集）
青森県埋蔵文化財調査センター1985『大石平遺跡 むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書』（青森県埋蔵文化財調査報告書 第90集）
青森県埋蔵文化財調査センター1986『沖附（2）遺跡』（青森県埋蔵文化財調査報告書 第101集）
青森県埋蔵文化財調査センター1988『上尾駁1 遺跡C地区』（青森県埋蔵文化財調査報告書 第113集）
青森県埋蔵文化財調査センター1996『泉山遺跡Ⅲ』（青森県埋蔵文化財調査報告書 第190集）
青森県埋蔵文化財調査センター2002『三内丸山（6）遺跡Ⅳ』（青森県埋蔵文化財調査報告書 第327集）
青森市教育委員会2002『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（青森市埋蔵文化財調査報告書 第62集）
青森市教育委員会2006『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅸ』（青森市埋蔵文化財調査報告書 第85集）
大館市教育委員会1993『真崎勇助翁コレクション目録』
関西大学博物館1998『博物館資料図録』
京都美術倶楽部1933『関保之助氏・大坪正義氏・松井淳風氏・桜松居蘇石氏所蔵品入札目録』
サハリン考古学研究会編1994『樺太西海岸の考古資料 船木鐵太郎考古コレクション目録』
末永雅雄1934『本山考古室目録』岡書院
辰馬考古資料館1988『考古資料図録』
東京国立博物館2009『東京国立博物館蔵 骨角器集成』同成社
東北大学文学部1982『東北大学文学部考古資料図録』第1・2巻

遺物リスト 1

(図番号は『佐藤部画譜Ⅱ』からの続きである)

図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
						長	幅	厚			
231		233～ 240を まとめたもの									
232	1	石筥	縄文	打製石斧 2個	弘前市十腰 内遺跡	9.5	4.3	1.3	佐藤部→久原 房之助→東北 大学		
232	2	石筥	縄文		青森市細越 地区	8.5	6.2	1.4			
232	3	石匙	縄文	皮ハギ 実大	東津軽郡蓮 田村瀬部地 遺跡	9.2	4.0	1.0	佐藤部→久原 房之助→東北 大学		
232	4	石匙	縄文			9.2	6.0	1.1			
232	5	石匙	縄文			8.9	3.0	1.2			
232	6	石匙	縄文		青森市大別 内地区	7.3	6.3	1.1	佐藤部→久原 房之助→東北 大学		
232	7	石匙	縄文			8.1	3.1	0.7			
232	8	石匙	縄文			9.5	2.1	0.8			
232	9	石匙	縄文			8.5	4.1	1.6			
232	10	石匙	縄文		青森市大別 内地区	8.1	2.5	0.7	佐藤部→久原 房之助→東北 大学		
232	11	石匙	縄文			6.7	4.0	1.2			
232	12	石匙	縄文			4.2	4.1	0.8			
232	13	石錐	縄文	錐 実大		4.8	1.6	—	佐藤部→久原 房之助→東北 大学		
232	14	石錐	縄文			4.7	1.3	—			
232	15	石錐	縄文			4.4	1.8	—			
232	16	石錐	縄文			5.2	1.9	—			
232	17	石錐	縄文			3.9	2.0	—			
232	18	石錐	縄文			5.5	2.0	—			
232	19	石錐	縄文			5.9	1.2	—			
232	20	石錐	縄文			4.2	1.4	—			
233	1	石槍	縄文前・ 中期	石鋒 焦茶色ニ シテ光沢アリ		21.0	4.9	1.7	佐藤部→久原 房之助→東北 大学		「石槍」は当時「石鋒」 と称す 243と同じ
233	2	石槍	縄文前・ 中期	薄茶色光沢アリ		18.0	4.1	1.6	佐藤部→久原 房之助→東北 大学		242-3と同じ
233	3	石槍	縄文前・ 中期	黒曜石		13.3	4.3	1.7			242-2と同じ
233	4	石槍	縄文前・ 中期	薄茶色光沢アリ		13.7	2.8	1.4			242-1と同じ
233	5	独鈷石	縄文晩期	獨鈷石五個アリ 薄茶色ニ緑色 ヲ帯フ	東津軽郡外 ヶ浜町算用 師遺跡	19.3	4.8	3.2	佐藤部→久原 房之助→東北 大学		東北大学文学部 1982『考古学資料図 録』第2巻J787
233	6	独鈷石	縄文晩期- 弥生前期	セピア色	つがる市亀 ヶ岡遺跡	20.8	5.9	4.0	佐藤部→久原 房之助→東北 大学		279と同じ 東北大 学文学部1982『考古 学資料図録』第2巻 J790
234	7	独鈷石	縄文晩期- 弥生前期	薄青茶色		20.4	5.0	3.6			278-1と同じ
234	8	独鈷石	縄文晩期	ウオムセピア色	黒石市牡丹 平地区	15.7	5.5	4.4	佐藤部→久原 房之助→東北 大学		278-2と同じ東北大 学文学部1982『考古 学資料図録』第2巻 J793

- ・法量の欄の朱字で書かれた数値は、図から推定した大きさであり、佐藤部の記した計測値ではない。なお、計測値は尺貫表示をメートル表示に変更して記した。
- ・遺跡名および所蔵者（旧蔵者）の欄の朱字で書かれた名前は、画譜中には注記されていないが、資料調査から推定されるものである。
- ・参考文献の一部は、「遺物解説」に記されている。

遺物リスト 2

図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
						長	幅	厚			
234	9	独鈷石	縄文晩期			16.4	4.7	4.7			277-2と同じ
234	10	独鈷石	縄文後期-晩期		秋田県糠塚遺跡	17.8	4.7	3.4	佐藤部→久原房之助→東北大学		東北大学文学部1982『考古学資料図録』第2巻J792
234	11	大珠	縄文中期後葉-後期前葉			7.4	6.2	3.1	佐藤部→久原房之助→東北大学		
235・236	1	大珠	縄文中期後葉-後期前葉		黒石市牡丹平地区	6.6	2.6	0.9	佐藤部→久原房之助→東北大学		東北大学文学部1982『考古学資料図録』第2巻J786左端
235・236	2	勾玉	縄文晩期後半(大洞C式)			2.7	1.9	—			1~4・9・10を線で繋ぐ
235・236	3	勾玉	縄文晩期			2.4	1.5	—			
235・236	4	勾玉	縄文晩期			2.7	0.8	—			
235・236	5	勾玉	縄文晩期			3.2	1.6	—			
235・236	6	勾玉	縄文晩期			1.9	0.9	—			
235・236	7	勾玉	縄文晩期			3.2	1.3	—			
235・236	8	勾玉	縄文晩期			3.3	1.7	—	佐藤部→久原房之助→東北大学		
235・236	9	垂飾	縄文後・晩期			2.2	1.0	—			
235・236	10	大珠	縄文後期前葉			4.6	2.0	—			
235・236	11	小玉	縄文時代後期後葉-晩期			0.4	0.3	—			
235・236	12	小玉	縄文時代後期後葉-晩期			0.7	0.6	—			
235・236	13	勾玉	縄文晩期後半(大洞C式)			2.6	1.2	—			
235・236	14	垂飾	縄文			2.1	1.1	—			
235・236	15	勾玉	縄文晩期			2.3	1.5	—			
235・236	16	垂飾	縄文		青森市長森遺跡	3.2	2.1	—	佐藤部→久原房之助→東北大学		
235・236	17	勾玉	古墳時代			3.3	1.7	—			
235・236	18	勾玉	古墳時代			2.7	1.7	—			
235・236	19	勾玉	縄文晩期			3.9	2.0	—			
235・236	20	垂飾	縄文晩期			2.1	1.7	—			
235・236	21	丸玉	縄文時代後期後葉-晩期			1.5	1.5	—			

遺物リスト 3

図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
						長	幅	厚			
235・ 236	22 垂飾	縄文後・ 晩期	ミトリ			2.8	1.8	—			
235・ 236	23 垂飾	縄文	少ク透明ニシテ 薄緑ニコキ緑ノ 班アリ穴通ラズ		つがる市亀 ヶ岡遺跡	3.3	2.5	—	佐藤部→久原 房之助→東北 大学		
235・ 236	24 棒状石 製品	縄文後・ 晩期	朱ヌリノ如シ		つがる市亀 ヶ岡遺跡	3.6	1.6	—	佐藤部→久原 房之助→東北 大学		
235・ 236	25 垂飾	縄文後・ 晩期	焼黄土色		青森市長森 遺跡	2.3	2.3	—	佐藤部→久原 房之助→東北 大学		
235・ 236	26 棒状石 製品	縄文後・ 晩期	黒ヌリノ如シ		つがる市亀 ヶ岡遺跡	3.7	1.6	—	佐藤部→久原 房之助→東北 大学		
235・ 236	27 勾玉	縄文晩期	黒緑キノ班			3.4	1.6	—			
235・ 236	28 垂飾	縄文中期 後葉-後期 前葉				2.8	1.6	—			28～35を線で繋ぐ
235・ 236	29 丸玉	縄文時代 後期後葉- 晩期				1.4	1.2	—			
235・ 236	30 丸玉	縄文時代 後期後葉- 晩期				1.5	0.7	—			
235・ 236	31 丸玉	縄文時代 後期後葉- 晩期				0.6	0.6	—			
235・ 236	32 丸玉	縄文時代 後期後葉- 晩期				1.3	1.3	—			
235・ 236	33 丸玉	縄文時代 後期後葉- 晩期				1.7	1.5	—			
235・ 236	34 管玉	縄文中期 後葉-後期 前葉	白六 穴通ラズ 内ニ割レタルモ ノ		つがる市亀 ヶ岡遺跡	3.4	2.7	—	佐藤部→久原 房之助→東北 大学		
235・ 236	35 垂飾	縄文中期 後葉-後期 前葉	白六 蛇紋石ニ 似タリ			残2.7	2.3	—			
235・ 236	36 垂飾	縄文後・ 晩期	不透明アイカツ ノ薄緑色			8.7	4.1	—			36～46を線で繋ぐ
235・ 236	37 丸玉	縄文時代 後期後葉- 晩期				1.7	1.4	—			
235・ 236	38 丸玉	縄文時代 後期後葉- 晩期				1.2	1.3	—			
235・ 236	39 丸玉	縄文時代 後期後葉- 晩期				0.9	0.9	—			
235・ 236	40 丸玉	縄文時代 後期後葉- 晩期				0.9	0.9	—			
235・ 236	41 丸玉	縄文時代 後期後葉- 晩期				1.4	1.3	—			
235・ 236	42 丸玉	縄文時代 後期後葉- 晩期				1.0	1.0	—			
235・ 236	43 丸玉	縄文時代 後期後葉- 晩期				1.2	1.3	—			
235・ 236	44 丸玉	縄文時代 後期後葉- 晩期				1.9	1.5	—			

遺物リスト 4

図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
						長	幅	厚			
235・ 236	45	丸玉	縄文時代 後期後葉- 晩期			1.5	1.8	—			
235・ 236	46	丸玉	縄文時代 後期後葉- 晩期			1.0	1.0	—			
235・ 236	47	打製石 斧?	縄文後・ 晩期	石磬 音ハシヤ ウゴノ如シ 色 中墨ニアイヲフ クム		20.3	5.1	2.3			
235・ 236	48	青龍刀 形石器	縄文中期 末-後期前 葉	青龍刀石	東津軽郡外 ヶ浜町算用 師遺跡	17.8	8.0	1.9	佐藤蒨→久原 房之助→東北 大学		274と同じ 東北 大学文学部1982『考古 学資料図録』第2巻. J794
237・ 238	1	石皿	縄文中期 後葉-後期 前葉	茶色ニシテ光沢 アリ	東津軽郡蓬 田村瀬辺地 遺跡	42.7	21.2	4.5	佐藤蒨→久原 房之助→東北 大学		有縁 東北大学文学 部1982『考古学資料 図録』第2巻,J830
237・ 238	2	石皿	縄文前・ 中期			37.9	25.8	12.1			
237・ 238	3	砥石	縄文			47.9	20.6	10.6			
237・ 238	4	石皿	縄文中期 後葉-晩期			残 36.4	22.7	15.2			
237・ 238	5	砥石	縄文晩期		つがる市亀 ヶ岡遺跡	残 16.7	15.2	0.0	佐藤蒨→久原 房之助→東北 大学		玉砥石 東北大学文 学部1982『考古学資 料図録』第2巻,J817 右
237・ 238	6	砥石	縄文			28.8	27.3	5.2			
237・ 238	7	石棒	縄文中期			38.8	12.7	12.1			
237・ 238	8	石棒	縄文中期			39.4	12.1	8.5			
237・ 238	9	石棒	縄文中期			51.5	14.8	—			
237・ 238	10	石棒	縄文中期			—	12.1	8.2			
237・ 238	11	石冠	縄文中期 後葉-後期 前葉	灰色ニシテ光沢		—	10.3	4.2			285-1と同じ
237・ 238	12	石冠	縄文中期 後葉-後期 前葉	セピア色ニシテ 光沢	五所川原市 高野・萩館 地区	68.2	11.2	5.2	佐藤蒨→久原 房之助→東北 大学		
239	1	石皿	縄文中期 後葉-晩期			48.5	34.2	9.1			有縁 305-1と同じ
239	2	石皿	縄文中期 後葉-晩期			50.0	36.4	15.2			有縁
239	3	石皿	縄文晩期 前葉			48.5	36.4	10.6			有縁
239	4	石皿	縄文中期 後葉-晩期			32.7	25.8	9.7			有縁
239	5	石皿	縄文晩期 前葉			39.4	34.2	9.7			有縁 305-2と同じ
239	6	石皿	縄文中期 後葉-晩期			32.1	25.1	9.1			有縁 305-3と同じ
239	7	石皿	縄文中期 後葉-後期 前葉			37.9	24.8	7.9			有脚 304-2と同じ
239	8	石皿	縄文中期 後葉-晩期			40.9	13.9	—			砥石の可能性あり
240	1	石皿	縄文中期 後葉-後期 前葉		上北郡六ヶ 所村平沼水 の上遺跡?	20.3	12.7	1.5	佐藤蒨→久原 房之助→東北 大学		有脚 東北大学文学 部1982『考古学資料 図録』第2巻,J831

遺物リスト 5

図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
						長	幅	厚			
240	2	石皿	縄文中期 後葉-晩期			14.2	7.9	1.5			有縁
240	3	石皿	縄文中期 後葉-晩期			45.5	24.2	—			有縁
240	4	石皿	縄文晩期 前葉			36.4	16.7	—			有縁
240	5	石皿	縄文中期 後葉-晩期			残 40.0	32.1	10.6			有縁 304-1と同じ
240	6	石皿	縄文中期 後葉-晩期			残 26.1	20.6	9.1			有縁 305-4と同じ
241		石槍		禮文尻ヨリ出ス 十勝石ヲ以テ 造ル	禮文尻	北海道網走 市嘉多山地区 か礼文島	13.0	3.2	1.0	蟹沢氏の蔵	
242	1	石槍	縄文前・ 中期	石鋒 黒曜石		13.2	2.7	1.2	唐牛氏の蔵		「石槍」は当時「石 鋒」と称す 233-4 と同じ
242	2	石槍	縄文前・ 中期	黒曜石		13.2	4.4	1.7			233-3と同じ
242	3	石槍	縄文前・ 中期			18.0	4.0	1.6			233-2と同じ
243		石槍	縄文前・ 中期			21.1	5.4	1.9		明治24年9月 13日写	表面拓本 233-1と同 じ
244		石槍	縄文前・ 中期			21.6	6.5	2.0			表面・裏面拓本
245	1	石鏃	縄文晩期 前半		青森市細越 地区	4.0	1.0	—	角田猛彦		1～13は 角田 猛彦 1891「陸奥國東津輕 郡石器時代の遺跡 探求報告」『東京人 類學會雜誌』第6卷 第64号.359—362頁 所収 原画
245	2	石鏃	縄文晩期 前半		青森市細越 地区	4.8	1.6	—	角田猛彦		
245	3	石鏃	縄文晩期 前半		青森市細越 地区	3.9	1.5	—	角田猛彦		
245	4	石鏃	縄文晩期 前半		青森市細越 地区	1.9	1.2	—	角田猛彦		
245	5	異形石 器	縄文中期 後半-後期 前葉		青森市細越 地区	2.2	4.2	—	角田猛彦→成 田彦栄		成田彦栄旧蔵資料 NA2016
245	6	石錐	縄文晩期 前半		青森市細越 地区	4.5	3.8	—	角田猛彦→成 田彦栄		成田彦栄旧蔵資料 NA1791
245	7	石匙	縄文晩期 前半		青森市細越 地区	3.7	5.4	—	角田猛彦		角田猛彦1981(ホ)
245	8	石匙	縄文晩期 前半		青森市細越 地区	5.3	残5.1	—	角田猛彦		角田猛彦1981(ト)
245	9	石匙	縄文晩期 前半		青森市細越 地区	4.4	残6.4	—	角田猛彦→成 田彦栄		角田猛彦1981(ヘ)・ 成田彦栄旧蔵資料 NA605
245	10	石匙	縄文晩期 前半		青森市細越 地区	11.1	2.9	—	角田猛彦→成 田彦栄		角田猛彦1981(イ)・ 成田彦栄旧蔵資料 NA549
245	11	石匙	縄文晩期 前半		青森市細越 地区	3.8	6.2	—	角田猛彦		角田猛彦1981(ハ)
245	12	石匙	縄文晩期 前半		青森市細越 地区	6.2	7.4	—	角田猛彦		角田猛彦1981(ニ)
245	13	石匙	縄文晩期 前半		青森市細越 地区	8.9	残4.1	—	角田猛彦→成 田彦栄		角田猛彦1981(ロ)・ 成田彦栄旧蔵資料 NA516
245	14	勾玉	縄文晩期 前半		青森市細越 地区	1.8	1.1	0.9			
246		石匙	縄文前・ 中期	東津軽郡 奥内村大字 清水天神林	青森市奥内 地区	10.4	4.1	—		明治27年11 月15日写	
247	1	石鏃	縄文			2.6	1.3	—			

遺物リスト 6

図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
						長	幅	厚			
247	2	石鏃	縄文			2.1	1.3	—			
247	3	石鏃	縄文			4.7	2.1	—			
247	4	石筥	縄文			4.7	3.7	—	佐藤部→成田彦栄		成田彦栄旧蔵資料 NA475
247	5	石筥	縄文			5.4	2.2	—	佐藤部→成田彦栄		成田彦栄旧蔵資料 NA490
247	6	石匙	縄文			6.3	—	1.2			
247	7	石匙	縄文			5.5	1.2	—			
247	8	石匙	縄文		安田田子ノ上	4.3	3.6	—			
247	9	石匙	縄文			6.8	1.6	—	佐藤部→成田彦栄		成田彦栄旧蔵資料 NA721
247	10	石匙	縄文			6.7	3.8	—			
247	11	異形石器	縄文中期後半-後期前葉			4.4	—	1.2	佐藤部→成田彦栄		成田彦栄旧蔵資料 NA2004
247	12	石匙	縄文前-後期	三内	青森市三内地区	5.5	—	1.1	佐藤部→成田彦栄		成田彦栄旧蔵資料 NA2027
247	13	石匙	縄文			9.2	7.3	—			
247	14	石匙	縄文			6.0	3.7	—			
247	15	石匙	縄文			7.0	3.3	—	佐藤部→成田彦栄		成田彦栄旧蔵資料 NA537
247	16	石匙	縄文			7.4	2.4	—			
247	17	石匙	縄文			6.3	4.2	—			
247	18	磨製石斧	縄文			9.6	4.8	2.1			
248	1	三角形石製品	縄文後期			4.9	4.8	1.0			
248	2	異形石器	縄文後期			2.3	5.8	—	佐藤部→成田彦栄		成田彦栄旧蔵資料 NA729
248	3	異形石器	縄文中期後半-後期前葉			2.2	3.2	0.9			
248	4	異形石器	縄文後期			3.0	2.8	0.8	佐藤部→成田彦栄		成田彦栄旧蔵資料 NA2034
248	5	異形石器	縄文中期後半-後期前葉			1.8	4.0	—	佐藤部→成田彦栄		成田彦栄旧蔵資料 NA2014
249	1	異形石器	縄文中期後半-後期前葉			1.6	4.5	—			
249	2	石匙	縄文後期			3.4	4.7	0.4			
249	3	スクレイパー	縄文			6.3	3.1	—			
249	4	異形石器	縄文後期後葉			3.2	5.7	—	佐藤部→成田彦栄		成田彦栄旧蔵資料 NA2017
249	5	石槍	縄文前期			11.9	3.5	—	佐藤部→成田彦栄		成田彦栄旧蔵資料 NA775
249	6	磨製石斧	縄文			7.1	—	0.9	佐藤部→成田彦栄		成田彦栄旧蔵資料 NA1876
249	7	打製石斧	縄文後・晩期			9.0	2.9	—			
250		石匙	縄文			9.7	2.4	0.7			
251		石匙	縄文			8.0	2.5	0.9			
252	1	須恵器片?		泊川之産		3.2	3.5	残0.6			表面拓本
252	2	石匙	縄文			8.5	5.5	—			表面・裏面拓本

遺物リスト7

図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献	
						長	幅	厚				
252	3	石匙	縄文			9.0	3.0	—			表面・裏面拓本	
252	4	石鏃	縄文			4.0	1.5	—			表面・裏面拓本	
252	5	石鏃	縄文			4.1	1.4	—				
253表	1	注口土器	縄文後期 後葉(十 腰内V 式)			10.1	12.7	—				
253表	2	石匙	縄文中期			12.8	3.2	0.9			工藤祐龍1894「亀ヶ岡発見の奇形石器」『東京人類學會雜誌』第9巻第95号、所収	
253裏	3	石匙	縄文			5.7	8.2	—			茎部にアスファルト付着(幅0.4cm)	
253裏	4	異形石器	縄文後・ 晩期			5.5	6.8	—				
254	1	異形石器	縄文後期 前葉-晩期 後半	矢之根石之圖 湯口山ノ内くめ 山ノ麓かさこ山 上りいつるなり 色ハエンスヘ 墨ヲ加ヘル	湯口山の 内くめ山 の麓かさ こ山	弘前市相馬 湯口地区	5.0	5.5	1.5	佐藤部→成田 彦栄	明治14年旧 閏7月21日 写	成田彦栄旧蔵資料 NA2008
254	2	磨製石斧	縄文後期	雷斧石 石質萌 黄			5.0	8.9	—			佐藤部→成田 彦栄
255		異形石器	縄文後期 前葉-晩期 後半	大別内		青森市大別 内地区	3.5	5.3	0.7			
256	1	石鏃	縄文中期- 後期前葉	三内字丸山小川 ヨリ出ス		青森市三内 丸山遺跡	2.7	1.2	—			
256	2	石鏃	縄文中期- 後期前葉			青森市三内 丸山遺跡	4.1	1.9	—			
256	3	異形石器	縄文中期 後半-後期 前葉			青森市三内 丸山遺跡	1.4	5.2	—			
256	4	垂飾	縄文中期- 後期前葉	石盤石ナラン		青森市三内 丸山遺跡	6.4	7.7	—			
257 表・裏		打製石斧	縄文後・ 晩期			21.2	7.1	2.7			表面拓本	
258	1	石匙	縄文前・ 中期	御入手御不用ノ 節ハ(1・2・3・4) までハ○ハ頂戴 致ナシ 或いは 之考ニツヅク得 共当其若シ御眼 ヲ以テ御買取可 能ト○石棒モ端 欠ノモノナレハ 七円余之価間○ 得共不実金ノ節 ハ価○之石質堅 実金ニシテ一尺 八九寸ノモノナ レハ拾円ノ価間 ○且シ石色ハ黒 又ハ薄緑リ石斧 ニヨクアル石也 七八拾錢			15.5	8.0	—			「1」朱字
258	2	石鏃	縄文	二拾錢			11.1	5.3	—			「3」朱字
258	3	石鏃	縄文	二拾錢			10.3	4.6	—			「2」朱字
258	4	石槍	縄文	七錢			9.2	3.4	—			「8」朱字
258	5	石槍	縄文	拾錢			6.7	4.3	—			「7」朱字
258	6	石槍	縄文	拾二錢			7.9	4.1	—			「5」朱字
258	7	石鏃	縄文	五厘			3.5	1.6	—			「9」朱字
258	8	石鏃	縄文	拾錢			4.5	3.5	—			「6」朱字

遺物リスト 8

図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
						長	幅	厚			
258	9	石鏃	縄文			4.4	1.0	—			
258	10	石鏃	縄文			5.4	1.5	—			「10」朱字
258	11	石鏃	縄文			3.3	1.6	—			
258	12	石鏃	縄文			2.9	1.0	—			
258	13	石鏃	縄文			2.5	1.3	—			
258	14	石鏃	縄文			2.8	1.1	—			
258	15	石鏃	縄文			3.0	1.4	—			
258	16	石鏃	縄文			2.5	1.0	—			
258	17	石鏃	縄文			1.5	1.3	—			
258	18	異形石器	縄文	拾五銭		3.9	2.2	—			「4」朱字 石鏃の可能性あり
258	19	石製品	縄文			7.5	2.4	—			管状土製品か
258	20	石棒	縄文後期 後葉	壱円		57.6	3.6	3.6			
259	1	土偶		麻前 10円	麻前	(該当不明)	14.9	8.3	—		偽物の可能性有
259	2	石匙	縄文後・ 晩期	十腰内 5銭	十腰内	弘前市十腰 内(1)・(2)遺 跡	6.7	2.2	—		
259	3	石匙	縄文後・ 晩期	十腰内 5銭	十腰内		6.3	2.1	—		
259	4	棒状石 製品	縄文後・ 晩期	十腰内	十腰内		6.1	1.0	—		
259	5	棒状石 製品	縄文後・ 晩期	十腰内	十腰内		9.1	1.3	—		
259	6	磨製石 斧	縄文後・ 晩期	十腰内	十腰内		5.3	2.2	—		
259	7	磨製石 斧	縄文後・ 晩期	十腰内	十腰内		3.8	2.1	—		
259	8	磨製石 斧	縄文後・ 晩期	十腰内	十腰内		4.6	2.5	—		
259	9	棒状石 製品	縄文後・ 晩期	十腰内 アヲ	十腰内		3.7	1.2	—		
259	10	磨製石 斧	縄文	2円 小友	小友	弘前市小友 館遺跡・宇 田野遺跡	21.6	6.4	—		
259	11	磨製石 斧	縄文後・ 晩期	獨孤 80銭	獨孤	弘前市独狐 遺跡	16.3	5.2	—		
259	12	ボタン 状石製 品	縄文後期 後葉-晩期	十腰内 35銭	十腰内	弘前市十腰 内(1)遺跡	6.1	2.5	0.7		
259	13	石製品	縄文後・ 晩期	十腰内 10銭			2.0	1.7	—		
259	14	ボタン 状石製 品	縄文晩期	十腰内 17銭			1.9	2.8	—		
259	15	スタン プ形土 製品	縄文後期				4.8	2.3	—		
260	1	石冠	縄文晩期 中葉	高杉村字高杉字 寺屋敷 5円	高杉村字 高杉字寺 屋敷	弘前市高杉 地区	7.1	11.0	—		
260	2	土偶	縄文後期 後葉(十 腰内V 式)	十腰内 2円	十腰内	弘前市十腰 内(1)・(2)遺 跡	5.8	4.8	—		輪郭のみ
261	1	磨製石 斧	オホーツ ク文化期	北海道利尻島ヨ リ出ス			16.0	4.5	—	蠣崎氏の蔵	
261	2	石槍					9.4	4.5	—		表面拓本・スクレイ パーの可能性あり

遺物リスト 9

図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
						長	幅	厚			
262	磨製石斧	縄文	ウス緑ニ少シク墨ヲ加ヘウクビシチヤニ黒味ヲ帯フ	中津軽郡一ノ渡	黒石市一ノ渡遺跡	22.9	5.9	4.0			図の中に花の絵を描く
263	1 磨製石斧	縄文				16.0	4.5	3.6			
263	2 磨製石斧	縄文				11.5	5.1	2.9			
264	1 磨製石斧	縄文				11.7	4.1	2.6		卯ノ4月27日写(明治24年)	
264	2 磨製石斧	縄文				12.4	3.7	3.0			
265	磨製石斧	縄文後・晩期	東津軽郡高田村大字大谷	東津軽郡高田村大字大谷	青森市朝日山(1)・(2)・(3)遺跡	13.2	5.6	3.0			表面・側面拓本 364-1と同じ 独鈷石か
266表	1 磨製石斧	縄文				6.3	3.4	1.2			
266裏	2 磨製石斧?	縄文				14.5	3.9	2.8			外形・側面拓本
267	磨製石斧	縄文				6.9	1.7	1.4	滝氏蔵		
268	磨製石斧	縄文	同前 黒色ヲ帯フ			12.3	1.9	1.5			擦切
269	磨製石斧	縄文				25.0	3.5	1.9			正面・側面・裏面拓本 擦切
270	1 環状石斧	弥生前期	色淡白			残 10.7	内径 3.0	1.8	蒔田氏蔵		表面拓本
270	2 磨製石斧	縄文	色緑			残 17.0	4.3	3.1			
271	1 石筥	縄文				7.1	4.1	0.9			表面拓本
271	2 磨製石斧	縄文				12.5	4.2	2.5			
271	3 壺	縄文晩期中葉				11.5	5.2	11.1			
272	1 磨製石斧	縄文				18.0	5.5	3.3			
272	2 磨製石斧	縄文				12.6	4.5	2.9			
272	3 青龍刀形石器	縄文中期末-後期前葉				18.5	9.3	2.5			
273	青龍刀形石器	縄文中期末-後期前葉			八戸市堀田遺跡	18.2	10.5	3.5	佐藤部→成田彦栄		成田彦栄旧蔵資料 NA245
274	青龍刀形石器	縄文中期末-後期前葉	青龍刀石 薄クシテ刃ノ如シ	三厩村字算用子山畑	東津軽郡外ヶ浜町算用師遺跡	19.5	8.5	1.8	佐藤部→久原房之助→東北大学		235・236-48に同じ 東北大学文学部 1982『考古学資料図録』第2巻,J794
275	多頭石斧	弥生前期				13.3	13.3	2.4			
276表	環状石斧	弥生前期	浪館字平岡ヨリ掘得ル	浪館字平岡	青森市浪館(2)遺跡	13.6	13.4	2.1			
276裏	(文章)					—	—	—			
277	1 独鈷石	縄文晩期	算用子ヨリ出ス	算用子	東津軽郡外ヶ浜町算用師遺跡	残 13.0	6.4	3.0	三厩 山田亀治氏の蔵		
277	2 独鈷石	縄文晩期	コロコロ川ヨリ出ス 青茶色ニ黒点アリ	コロコロ川	東津軽郡外ヶ浜町石崎地区頃頃川	16.4	5.0	—			234-9と同じ
278	1 独鈷石	縄文晩期-弥生前期	薄青茶色			20.4	5.0	3.8			234-7と同じ

遺物リスト10

図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
						長	幅	厚			
278	2	独鈷石	縄文晩期	ウオムセビア色		15.4	5.6	4.6	佐藤 蒨→久原 房之助→東北 大学		234-8と同じ 東北 大学文学部1982『考古 学資料図録』第2巻 J793
279		独鈷石	縄文晩期- 弥生前期	石剣之圖 胡麻 石ノ如ニシテ細 筋少ク高ス		20.9	4.5	3.0	佐藤 蒨→久原 房之助→東北 大学	午の旧4月 21日写(明 治15年)	233-6と同じ 東北 大学文学部1982『考古 学資料図録』第2巻 J790
280	1	磨製石 斧	縄文		板留	16.7	4.8	4.4			表面拓本
280	2	独鈷石	縄文晩期		上十川	16.7	6.1	3.6			表面・上面拓本
281		独鈷石	縄文晩期			16.1	3.9	2.4		酉の旧正月 25日写(明 治18年)	表面拓本
282		独鈷石	縄文晩期- 弥生前期	北海道濱増毛郡 別村字雄冬出土	北海道濱 増毛群別 村字雄冬	23.7	5.8	3.6		明治32年10 月29日写	「青森大林區署」原 稿用紙使用
283	1	石刀?	縄文後期 前葉	後澤村銅屋ノ沢	銅屋ノ沢	32.2	4.7	2.2		明治32年10 月29日写	「青森大林區署」原 稿用紙使用
283	2	磨製石 斧?		後澤村銅屋ノ沢	銅屋ノ沢	10.1	4.6	1.9			
284		石冠	縄文中期 後葉-後期 前葉			14.9	5.5	6.0	角田(猛彦)氏 の所蔵→成田 彦栄		成田彦栄旧蔵資料 NA1971
285	1	石冠	縄文中期 後葉-後期 前葉			8.0	3.6	—			237・238-11と同じ
285	2	打製石 斧	縄文晩期- 弥生前期		宮崎県児湯 郡高鍋町鬼 ヶ久保地籍	11.9	13.5	2.1	佐藤 蒨→久原 房之助→東北 大学		分銅形
286A	石皿	縄文晩期 前半				35.8	18.8	8.5			深さ2.7cm
286B								—			286Aの側面
287A	石皿	縄文晩期 前半				51.5	27.3	9.7		未ノ旧11月 2日写(明治 16年)	深さ2.7cm
287B								—			287Aの側面
288		石皿	縄文中期 末-後期前 葉			30.7	22.0	5.8			深さ2.7cm
289		石皿	縄文中期 末-後期前 葉			残 23.5	残 18.1	4.0	越田長五郎蔵		凹部内面・側面拓本
290A	石皿	縄文中期 末-後期前 葉	点線ノ部分缺損	玉清水畑 地	青森市玉清 水(1)・(3)遺 跡	35.5	21.0	5.8		明治25年4月 25日出土	「点線の部分缺損」 表面・側面拓本
290B			石皿表裏ナク両 面共ニフツアリ				21.5	—	(角田)猛彦蔵		「点線の部分缺損」 裏面拓本
291A	石皿	縄文中期 末-後期前 葉	黒質堅ニシテ光 沢ナシ古物ナル ト伝ワル		弘前市高杉 地区	27.3	29.1	—	高杉村加茂神 社 祠掌齋藤 氏の秘蔵	庚辰旧5月 29日写(明 治13年)	深さ1.1cm
291B			其二 裏				—	—			
292		石皿	縄文中期 末-後期前 葉	河内官林字与兵 衛沢ヨリ出ズ	むつ市川 内地区	残 11.0	22.1	—	河内村大野忠 右衛門蔵		鉛筆書
293		石皿	縄文中期 末-後期前 葉			27.1	17.9	—			深さ1.8cm 一面に 表面・裏面双方を描 く

遺物リスト11

図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
						長	幅	厚			
294 表・裏	石皿	縄文中期 末-後期前 葉	百澤街道高館山 麓ヨリ掘り出ス 石目粗ク灰色 ナリ	百澤街道 高館山ノ 麓	弘前市向野 遺跡	34.5	24.5	6.7	松島鏡太郎蔵 也		明治13年 第二回弘 前博覧会の陳列物
295	石皿	縄文中期 末-後期前 葉	石器皿目細カナ レモ細工ナシ 但黒色ニシテ甚 ダ古雅ナリ方今 ハ蓑虫仙人ノ物 トナレリ 傳曰 享和年中上仙公 新田開拓ノ件奉 行岩瀨八右衛門 豊岡村辺ノ水沢 ノ地ヨリ掘り出 セルモノト云	豊岡村辺	中泊町豊岡 地区	24.2	9.7	4.5	浪岡村土族岩 瀨房五郎之蔵 →蓑虫山人→ 神田孝平→ 本山彦一→関 西大学博物館 (本山コレク ション)	庚辰旧8月3 日写(明治 13年)	①明治13年弘前博 覧会の陳列品 ② 下澤保躬1886「石器 彙報」『東京人類學 會報告』第2卷第10 号.47頁に「石の鞋 草」として紹介。有 脚石皿紹介の初例 ③赤塚2001第1図1
296	石皿	縄文中期 末-後期前 葉	色淡白	高杉村	弘前市高杉 地区	21.8	9.6	6.1	高杉村加茂神 社の宝物	庚辰旧5月 29日写(明 治13年)	
297	石皿	縄文晩 期?	石ノ杯ト云 石 質俗ニ胡床石ト 云 内ノミ磨テ 且ツ光沢アリ	同村八幡 山麓の畑 ヨリ出ス 今明治 12年ヨリ 30年ヨリ 前ノ時ト 云 是ヨ リ以前此 畑ヨリ朱 ノ溜メタ ル大瓶1 個堀エタ リト	(弘前市独 狐地区)	48.5	33.6	—	獨狐村 惣三 郎之蔵	明治13年旧 正月29日写	①青森県立郷土館 2008「蓑虫山人写真 6-80」『蓑虫山人と 青森』②蓑虫山人 「津軽全國神代石古 陶図」掲載
298	1 石皿	縄文	石銚ノ記 予ノ 實父柳崎浅次郎 古稀ノ珎石ヲ所 有セリ其卒後予 其遺産ヲ(図と の関連なし)			16.1	15.8	5.8			
298	2 石棒	縄文中期				残4.0	3.3	3.6			頭部上面拓本
299A	石皿	縄文晩期 前葉	野辺地村字下町 田ノ中	字下町田 の中	上北郡野辺 地町寺ノ沢 遺跡	27.5	16.5	11.0	野辺地村安田 彦兵衛	明治25年7 月3日写	鉛筆書 中高石皿
299B		縄文晩期 前葉				28.1	16.2	11.0			裏面に外形を描く 中高石皿
301 表・裏	石皿	縄文晩期 前葉				30.6	15.0	—			中高石皿
302 表・裏	石皿	縄文晩期 前葉				33.3	20.9	10.0			中高石皿
303	1 石皿	縄文中期 末-後期前 葉	畑ヨリ掘出ス石 器ナリ 灰色ニ シテ光沢ナス		つがる市亀 ヶ岡遺跡	残 30.3	28.8	—	館岡村野呂米 次郎	明治18年乙 酉旧6月3日 写	お稲荷の図あり
303	2 石皿	縄文中-晩 期				—	—	13.0	館岡村野呂米 次郎		
304	1 石皿	縄文中期 後葉-晩期				24.2	23.6	7.9			240-5と同じ
304	2 石皿	縄文中期 末-後期前 葉				32.1	40.0	10.6			有脚 239-7と同じ
305	1 石皿	縄文中期 後葉-晩期				48.5	34.2	9.1			239-1と同じ
305	2 石皿	縄文晩期 前葉				39.4	34.2	9.7			239-5と同じ
305	3 石皿	縄文中期 後葉-晩期				32.1	25.1	9.1			239-6と同じ
305	4 石皿	縄文中期 後葉-晩期				26.1	20.6	9.1			240-6と同じ

遺物リスト12

図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
						長	幅	厚			
306	砥石 (擦切 石斧未 成品)	縄文後・ 晩期	石斧製造残り石 ニシテ色緑ナリ		(青森市堀 越地区)	残 27.0	10.5	7.5	細越 角田猛 彦氏蔵→成田 彦栄		擦切石斧未成品 成 田 彦 栄 旧 蔵 資 料 NA945
307	石棒?					36.4	12.7	9.1			
308A	1 石棒	縄文中期				62.7	11.8	—			拓本
308A	2 石棒	縄文中期				58.9	11.8	—			拓本
308B	1 石棒	縄文中期				45.5	9.4	—			308A-2と同一個体 拓本
308B	2 石棒	縄文中期				48.5	9.4	—			308A-1と同一個体 拓本
309	石棒	縄文中期	五本松村加茂神 社之石棒			—	11.8	—			頭部・頭部上面拓本 「蓑虫山人」津軽全 國神代石古陶図」掲 載
310	石棒	縄文中期	明治19年旧7月 14日字遠手澤 三十番畑ヨリ掘 出シタル石ナリ 尤地中ニ柱ノ如 ク直立アルヲ地 上ヨリ三尺余掘 揚ゲ	字遠手澤 三十番地 ヨリ掘出 □タル	平川市新屋 遠手澤地区	49.2	14.1	—		明治19年旧 7月14日 出 土	拓本
311	石棒	縄文中期		字村元田 ノ中より 掘得る	平川市石郷 村元地区	51.5	13.3	12.7	石郷 三浦氏 蔵→新屋 葛 西豊蔵蔵		拓本
312	石棒	縄文中期	北浮田ノ畑ヨリ 掘り得トイヘリ 茶色ニシテ光沢 アリ磨キアタル 物ナドシテ上下 端ハ磨カズ	北浮田村 の畑	西津軽郡鰺 ヶ沢町北浮 田地区	48.5	径 10.3	—	岡本氏の蔵		石棒敲打痕拓本 石棒を置いていた? 台の計測図を 付ける
313A	石棒	縄文中期		山形村	(黒石市浅 瀬石地区)	50.0	11.6	—	山形村袋村社 神体石棒(黒 石市浅瀬石 白山姫神社)		拓本
313B						—	12.1	10.6			313Aの頭部上下面 拓本
314A	石棒	縄文中期				87.4	25.1	11.1	①中津軽郡下 湯口村石岡林 兵衛 ②中津 軽郡下湯口村 岡林氏	明治18年旧 7月11日	拓本 ①青森県立 郷土館2008「蓑虫 山人写真 6-81 神代 石」『蓑虫山人と青 森』②蓑虫山人「津 軽全國神代石古陶 図」掲載
314B											314Aの頭部・頭部 上面拓本
314C											314Aの頭部拓本
315	石棒	縄文中期	焼石ノ如ク見ユ		(青森市三 内地区)	75.4	7.3	—	三内 渡邊氏 蔵		
316	石棒	縄文中 期?	茶色ニシテ光沢 アリ		(弘前市高 杉地区)	67.9	13.9	14.6	高杉村加茂神 社	明治13年旧 5月29日写	蓑虫山人「津軽全 國神代石古陶図」掲 載
317	石棒	縄文中期				—	10.7	10.0			
318	1 石棒	縄文中期				45.5	10.6	—			
318	2 石棒	縄文中期				34.8	10.6	—			
318	3 石棒	縄文中期				—	13.9	—			
319	石棒	縄文後期				27.4	7.2	—	越田長五郎	7月26日写	
320	石棒	縄文後期	頒ツル若カスシ ト既ニシテ意決 セリ仍テ其竣工 ヲ俟ス更ニ周地 ニ一祠宇ヲ建テ 以テ之ヲ納メテ 永遠保存ノ道謀 ラント欲ス 明 治14年8月15日 水原衛作識 (鉛筆書・後筆か)			68.8	4.2	3.8		明治14年8月 15日	胴廻り31.0cm 水 原衛作 識 出土地 に祠を建てて納め る

遺物リスト13

図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
						長	幅	厚			
321	石棒	縄文後期 後葉	黒色ニシテ光沢 アリ 且つ同社 ノホトリヨリ掘 リタリト		(平川市広 船地区か本 町八坂神社 付近)	残 30.9	残4.3	—	南広船村八坂 神社祠掌石山 氏蔵	辰の旧5月6 日写(明治 13年)	蓑虫山人「津軽全 國神代石古陶図」掲載
322	石棒	縄文後期 後葉	黒色ニシテ薄キ 斑文アリ	西目屋村 大字砂子 瀬より土 出	中津軽郡西 目屋村砂子 瀬遺跡	35.6	4.3	4.2	嶋崎氏之蔵	明治39年12 月4日写	
323	石棒	縄文後期 後葉	石質堅ク黒色茶 ノ筋二三本有テ 光沢アリ		(五所川原 市)	57.3	4.5	5.1	五所川原村 毛内治兵衛→ 高島多米治→ 下郷伝平→辰 馬考古資料館	明治13年旧 8月3日写	①明治13年弘前博 覧会の陳列品 ②青 森県立郷土館2008 「蓑虫山人写画 6-66 神代石」『蓑虫山人 と青森』③蓑虫山 人「津軽全 國神代石古陶図」掲載 ④辰 馬考古資料館1988 『考古資料図録』27 右・台帳番号227
324	1 石鏃	縄文		栃木県塩 谷郡塩原 村大字上 塩原字白 戸	栃木県那須 塩原市上塩 原地区	5.9	1.8	—			
324	2 石棒	縄文後期 後葉				残7.3	3.9	3.1			
324	3 石剣	縄文晩期 前半		福島県相 馬郡石神 村大字馬 場	福島県南相 馬市原町区 石神 滝の 原遺跡・中 の内遺跡か	33.8	3.4	1.7			
324	4 砥石	縄文		西茨城郡 宍戸町大 字平山官 林内より得 る	茨城県笠間 市宍戸・平 山地区	12.5	5.4	2.3			矢柄研磨器か
325	石棒	縄文後期 後葉	字田ノ澤堤新築 ノ際掘得ル	字田ノ澤 新築ノ際 掘得ル	青森市田ノ 沢遺跡	64.5	4.6	4.1	本郷 林豊蔵 氏ノ蔵 「津 軽全 國神代石古陶図」では 林松治郎蔵		表面・側面拓本 蓑 虫山人「津軽全 國神代石古陶図」掲載
326	1 石棒	縄文後期 後葉	神代石劔 茶色 ニシテ光沢アリ			36.4	5.5	4.5	中津軽 岩間 氏	己卯年旧 9月21日写 (明治12年)	
326	2 石棒	縄文晩期 前半	東津軽郡三内村 畑ヨリ掘出ス 丸キ物ニシテ尻 3寸トリ次第二 峯アリ質堅ク黒 色ナシテ光沢アリ 是ヲオトリヲ落 シ神ニ祭レルニ 其シルスアリト 云信ニネンスレ バ左モアランカ	東津軽三 内村	青森市三内 地区	8.0	2.8	—	佐藤幸一蔵		付箋 343-2・404裏 -13と同じ
327	1 石棒	縄文後期 後葉		下北郡川 内村	むつ市川内 地区	残 20.3	4.8	3.9			表面拓本 ①青森県 立郷土館2008「津 軽全 國神代石并古陶 之図」7 - 22「蓑 虫山人と青森」② 蓑虫山人「津軽全 國神代石古陶図」掲載
327	2 石棒	縄文後期 後葉	黒	南津軽郡 尾崎村	平川市尾崎 地区	残 45.5	5.5	5.2	蓑虫山人→神 田孝平→本山 彦一→関西大 学博物館(本 山コレクション)	明治18年旧 正月12日写	表面拓本 ①青森県 立郷土館2008「津 軽全 國神代石并古陶 之図」7 - 20「蓑 虫山人と青森」② 蓑虫山人「津軽全 國神代石古陶図」掲載 ③ 末永雅雄1934『本 山考古室目録』目録番 号247

遺物リスト14

図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
						長	幅	厚			
327	3	独鉦石	縄文晩期- 弥生前期	黄土ノ茶色ナリ	南津軽郡 尾崎村	平川市尾崎 地区	24.5	6.1	3.0	明治18年旧 正月12日写	①青森県立郷土館 2008「津軽全国神代 石并古陶之図」7・ 21『蓑虫山人と青 森』②蓑虫山人「津 軽全国神代石古陶 図」掲載③末永雅雄 1934『本山考古室目 録』第16圖4
327	4	環状石 斧	弥生前期	灰ニ萌黄ヲ帯フ	下北郡南 部佐井	下北郡佐井 村	11.1	11.1	2.7		
328表		石棒	縄文後期	報恩寺ノ宝物 石棒之図 黒色 ニシテ光沢アリ 質堅カラス		(弘前市)	残 13.5	4.4	3.9	弘前市法恩寺	
328裏		(算術 の表)					—	—	—		
329表		石棒？ 懸仏 光背輪 郭？					—	—	—		
329裏		(算術 の表)					—	—	—		
330	1	石刀	縄文晩期 後半	其二			残 16.0	1.8	0.9		
330	2	石刀	縄文晩期				残 19.9	2.8	1.1		
331		石刀	縄文晩期 後半	其三 石質石盤 石ナリ			残 23.6	3.8	1.8		
332		磨製石 斧	縄文後・ 晩期	其四 石斧 石 質堅クシテ色ハ 薄茶ナリ			14.9	6.1	3.3		独鉦石か
333	1	石錘	縄文前・ 中期	其五 石質少シ ク堅クシテ淡白 色ヲ帯ブ	字田小屋 野	つがる市 田小屋野貝 塚	9.4	9.4	—		表面・側面拓本
333	2	磨製石 斧	縄文前・ 中期	色ハ薄緑ナリ	字田小屋 野	つがる市 田小屋野貝 塚	9.4	4.2	2.6		
334	1	石剣	縄文晩期 前半	黒			残 12.1	—	1.5		
334	2	石刀	縄文晩期 後半	淡黒			残5.5	—	1.2		
334	3	石刀	縄文晩期 前半				残 12.2	—	1.8		
335		石刀	縄文晩期 中葉(大 洞C2)				残 13.9	3.7	1.0		表面・裏面・側面拓 本
336	1	石刀	縄文晩期 後半				残 18.1	3.3	0.9		表面・裏面拓本
336	2	石刀	縄文晩期 中葉(大 洞C2)				残 14.7	3.6	0.9		表面・裏面・側面・頭 部上面拓本
336	3	石刀	晩期中葉 (大洞C2)				残 14.0	1.8	1.5		表面・頭部・頭部上 面拓本
336	4	石製品					5.6	3.9	3.4		不明

遺物リスト15

図番号		種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
							長	幅	厚			
336	5	壺	縄文晩期中葉(大洞C2)				4.8	0.9	4.3			
337	1	石刀	縄文晩期後半				残 17.8	3.0	2.4	佐藤蒨→久原房之助→東北大学		裏面・側面拓本 東北大学文学部1982『考古学資料図録』第2巻J805. K1171
337	2	石刀	縄文晩期中葉(大洞C2)				残 16.5	4.1	1.6	佐藤蒨→久原房之助→東北大学		表面・側面拓本 東北大学文学部1982『考古学資料図録』第2巻J805. K1143
338A		石刀	縄文晩期後半	二本アリ			27.8	11.5	9.4			
338B												338Aの断面図
339		石刀	縄文晩期後半	茶色ニシテ光沢アリ			24.9	6.5	残3.7	岡本氏の蔵	酉の旧正月24日写(明治18年)	表面拓本 蓑虫山人「津軽全國神代石古陶図」掲載
340A		石刀	縄文晩期後半				33.2	6.0	3.3	岡本氏の蔵		表面・下面拓本 蓑虫山人「津軽全國神代石古陶図」掲載
340B		石刀	縄文晩期後半				33.3	5.8	3.2			340Aと同じ
341		石棒	縄文晩期前半				残 28.9	2.9	2.5			
342	1	石棒	縄文晩期前半	獨狐村八幡山麓ヨリ掘出シタル石劔ノオレ 黒質ナリ	獨狐村八幡山麓	弘前市独狐七面山遺跡	残 11.7	2.0	—			
342	2	化石(木の葉)		木葉形ノ石ナリ川原ヨリ得ト云	川原	三ツ森?	—	—	—			
343	1	石棒	縄文後期後半	古懸山之宝物 石劔之圖 石ハ灰色ニシテ文字ハ後ニ墨ニテ書シ者ナリ 箱之中ニ左之文字アリ 石劔長1尺4寸7分本末厚幅敢不同其重1斤四十六錢也 古懸村有農民善次郎者一日耕不動野不困古劔一葉得之千時享保八癸卯年三月廿八日也 敬尊之奉古懸山国上真言寺住職朝忍婆利而為什物也 大守公九年甲辰四月二日詣彼寺而一柱矣而後朝忍言上古劔張本 大守奇之敬之使武運家珍永傳不朽■曰此寺凡千有余年干今侍講大場正甫蒙命謹志	古懸村不動野	平川市古懸地区	45.1	2.7	2.1	平川市古懸山不動院国上寺元津輕藩主伯爵家所蔵	明治13年旧8月3日写	表面に梵字墨書 中村良之進1928『陸奥考古』三所載
343	2	石棒	縄文晩期前半				46.7	—	2.8	青森 佐藤 幸一		326-2・404裏-13と同じ
344	1	石刀	縄文晩期後半				58.9	3.6	2.7	工藤(彦一郎・祐龍)氏之蔵→辰馬考古資料館		拓本 辰馬考古資料館台帳番号223
344	2	石棒	縄文後期後半				43.1	4.2	3.3	工藤(彦一郎・祐龍)氏之蔵→辰馬考古資料館		辰馬考古資料館台帳番号228

遺物リスト16

図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
						長	幅	厚			
345	石刀	縄文晩期 後半				69.5	3.8	2.7			成田彦栄旧蔵資料 NA1967か
346	石棒	縄文晩期 前半				47.3	2.7	2.1			
347 表・裏	石刀	縄文晩期 後半	無頭ノ石棒			50.7	3.4	2.4			
348	石刀	縄文晩期 中葉(大 洞C2)	外濱宇鉄出土石 刀東北大字外	外が浜宇 鉄	東津軽郡三 厩村宇鉄Ⅰ 遺跡	33.2	2.5	2.7	佐藤 蒔→久原 房之助→東北 大学		全面拓本 東北大学 文学部1982『考古 学資料図録』第2巻 J798
349	石刀	縄文後期 前半	草宅へ御来臨ア ッテ古器物御覧 此日余御札ニ出 テ石場宅ニテ写 ス 色薄墨アヘ ナリ 大きき如 図ス			19.5	1.8	0.9	東京正4位 元老院議官 神田孝平所蔵 →本山彦一→ 関西大学博物 館(本山コレ クション)	明治19年旧 7月13日	表面拓本
350	石刀	縄文晩期 後半	明治22年7月東 京人類学委員若 林勝邦氏本県瓶 ヶ岡へ出張探掘 セルニ係ル 石 質石盤石ナリ	瓶ヶ岡へ 出張探掘 セルニ係 ル	つがる市亀 ヶ岡遺跡	39.2	2.8	1.8	若林勝邦氏 東京大学	明治22年7月 発掘	
351表 1	垂飾	縄文		山形村字 袋	黒石市袋遺 跡・落合遺 跡・白沢遺 跡・上野遺 跡・上野(4) 遺跡	5.0	4.1	—			鉛筆書・輪郭のみ
351表 2	磨製石 斧	縄文	黒石試金石	山形村田 代	黒石市	7.8	3.1	—			鉛筆書・輪郭のみ
351表 3	磨製石 斧	縄文	青ミヲ帯タル石	山形村字 花巻夏焼 野	黒石市夏焼 沢遺跡	17.0	6.7	—			鉛筆書・輪郭のみ
351表 4	磨製石 斧	縄文	青磁色			5.8	2.3	—			鉛筆書・輪郭のみ
351表 5	磨製石 斧	縄文	黒色ニ青ミヲ帯 タル石			13.7	3.8	—			鉛筆書・輪郭のみ
351表 6	磨製石 斧	縄文	黒色			4.5	1.4	—			鉛筆書・輪郭のみ
351表 7	石棒	縄文後期 後半	外ニ石鏃2個ア リ 4尺四面位 石ヲ以テ囲イタ ル中ヨリ発見	山形村牡 丹平字大 澤	黒石市牡丹 平地区	34.2	5.0	—			鉛筆書
351表 8	石冠	縄文中期	質青色ノ帯タル 石	山形村字 袋山	黒石市袋遺 跡・落合遺 跡・白沢遺 跡・上野遺 跡・上野(3) 遺跡	12.4	11.2	—			鉛筆書
351表 9	石冠	縄文中期	質ミカゲ石ノ如 ク金砂交リ	山形村袋	黒石市袋遺 跡・落合遺 跡・白沢遺 跡・上野遺 跡・上野(4) 遺跡	12.1	9.1	—			鉛筆書
351表 10	石刀	縄文晩期 後半	黒イ石板石木目 アリ 完全			34.5	3.2	—			鉛筆書
351裏 1	石鏃	縄文				4.5	3.7	—			鉛筆書・輪郭のみ
351裏 2	石鏃	縄文				5.0	1.6	—			鉛筆書・輪郭のみ
351裏 3	石鏃	縄文				4.8	1.4	—			鉛筆書・輪郭のみ
351裏 4	石鏃	縄文				5.0	1.8	—			鉛筆書・輪郭のみ
351裏 5	石鏃	縄文				2.8	1.6	—			鉛筆書・輪郭のみ
351裏 6	石鏃	縄文				2.6	1.5	—			鉛筆書・輪郭のみ

遺物リスト17

図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献	
						長	幅	厚				
351裏	7	石篋	縄文				6.9	5.7	—			鉛筆書・輪郭のみ
351裏	8	石槍	縄文				6.4	3.1	—			鉛筆書・輪郭のみ
351裏	9	石匙	縄文				5.4	5.2	—			鉛筆書・輪郭のみ
351裏	10	石鏃	縄文				3.2	2.2	—			鉛筆書・輪郭のみ
351裏	11	石鏃	縄文				4.0	1.4	—			鉛筆書・輪郭のみ
351裏	12	磨製石斧	縄文				8.3	4.3	—			鉛筆書・輪郭のみ
351裏	13	磨製石斧	縄文				11.1	4.0	—			鉛筆書・輪郭のみ
351裏	14	磨製石斧	縄文				9.6	3.9	—			鉛筆書・輪郭のみ
351裏	15	磨製石斧	縄文				10.0	5.0	—			鉛筆書・輪郭のみ
351裏	16	磨製石斧	縄文				12.1	4.8	—			鉛筆書・輪郭のみ
352	1	岩版	縄文晩期中葉(大洞C1)	瓶ヶ岡出	瓶ヶ岡	つがる市亀ヶ岡遺跡② 文献では秋田県麻生?となっているが亀ヶ岡が正しい	5.0	4.6	1.5	佐藤部→久原房之助→東北大学		①佐藤傳蔵1897「共同備忘録」『東京人類學會雑誌』第12巻第138号487頁所収 原図 ②東北大学文学部1982『考古学資料図録』第2巻J775
352	2	環状石製品		瓶ヶ岡出	瓶ヶ岡	つがる市亀ヶ岡遺跡	5.8	5.5	1.2			
352	3	環状石製品		築木館出	築木館	青森市築木館岩瀬遺跡	9.0	9.3	2.8	佐藤部→久原房之助→東北大学		
353	1	土版	縄文晩期中葉(大洞C2)	河辺郡御所野台	阿辺郡御所野台	秋田県秋田市御所野台遺跡	4.8	5.4	0.6	秋田市真崎勇助→大館市中央図書館(真崎文庫)		大館市教育委員会1993『真崎勇助翁コレクション目録』石器類出土一覽24
353	2	玦状耳飾	縄文前期後葉・中期前葉	南秋田郡寺内村字石器	南秋田郡寺内村字	秋田県秋田市寺内地区	5.1	4.2	—	秋田市真崎勇助→大館市中央図書館(真崎文庫)		大館市教育委員会1993『真崎勇助翁コレクション目録』石器類出土一覽3
354		石製品	縄文後・晩期	南秋田郡豊川村字眞形	南秋田郡豊川村字眞形	秋田県昭和町眞形向遺跡	4.4	5.8	1.2	秋田市真崎勇助		
355	1	V字形土製品	縄文後期前葉		湯口 二ノ下ノ山	弘前市湯口地区	4.5	2.8	1.4			
355	2	土版?	縄文後・晩期		唐ナイ坂	弘前市常盤坂字唐内坂地区	6.3	6.9	1.1			表面拓本
356	1	石製品	縄文後期	細越外長沢ヨリ掘得ル	細越外長沢	青森市細越地区	5.6	4.7	1.1	細越村角田(猛彦)氏蔵	明治27年7月1日写	表面拓本
356	2	三角形石製品	縄文後期前葉(十腰内Ⅰ式)	土器円白色	細越外長沢	青森市細越地区	4.2	3.5	1.5	細越村角田(猛彦)氏蔵→成田彦栄		成田彦栄旧蔵資料NA201
356	3	ボタン状石製品	縄文晩期前半	駒籠字月見野畑ヨリ得ル 薄黒ニ青色ヲ含ム	駒込月見野畑	青森市月見野遺跡	3.7	3.6	1.6	細越村角田(猛彦)氏蔵→成田彦栄		成田彦栄旧蔵資料NA2661
357		岩版?	縄文晩期?				残7.0	残5.3	—			土版もしくは十字型土偶の可能性あり
358		大珠	縄文中期後葉				4.4	4.1	3.9			成田彦栄旧蔵資料NA199

遺物リスト18

図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献	
						長	幅	厚				
359	1	石匙	縄文晩期		瓶ヶ岡	つがる市亀ヶ岡遺跡	4.4	7.8	—	枝川村工藤 (彦一郎・祐龍)氏之蔵→ 辰馬考古資料館	明治27年6月 27日写	
359	2	石鏃	縄文晩期		瓶ヶ岡	つがる市亀ヶ岡遺跡	2.3	4.7	—			東京人類學會1897「雜報」『東京人類學會雜誌』第12巻第133号.293頁に輪郭のみ所収
359	3	石製品 (垂飾)	縄文晩期	石剣質色薄墨アヘ加エ	瓶ヶ岡	つがる市亀ヶ岡遺跡	6.8	1.3	1.1			佐藤傳蔵1898「共同備忘録」『東京人類學會雜誌』第13巻第143号.195頁所収 最小の石棒として紹介 辰馬考古資料館台帳番号208
359	4	異形石器	縄文中期後半-後期前葉		瓶ヶ岡	つがる市亀ヶ岡遺跡	1.0	4.0	0.6			
359	5	大珠	縄文中期後葉	白半透明 萌黄色ノ内薄モーキホカシ	花巻	黒石市花巻地区	4.5	4.7	4.0			辰馬考古資料館シール番号96
359	6	管玉	縄文後・晩期		花巻	黒石市花巻地区	3.1	2.1	1.7			辰馬考古資料館シール番号3
359	7	垂飾	縄文中期後葉		花巻	黒石市花巻地区	3.5	5.5	1.8			
359	8	勾玉	弥生か	ウシミドリ	田舎館	南津軽郡田舎館村垂柳遺跡?	3.1	1.6	0.9			辰馬考古資料館
359	9	大珠	縄文中期中葉-中期後葉		大根子	南津軽郡田舎館村大根子松森遺跡	3.2	2.9	2.1			辰馬考古資料館シール番号29
359	10	管玉	縄文後・晩期		大根子	南津軽郡田舎館村大根子松森遺跡	3.5	2.0	1.1			
360	1	垂飾	縄文後期前半	半透明ニシテ薄緑色ナリ		南津軽郡田舎館村	2.6	1.7	1.3	枝川村工藤 (彦一郎・祐龍)氏之蔵→ 辰馬考古資料館		
360	2	大珠	縄文中期後葉-後期前葉	質堅ク半透明ニシテ白ニ緑及ヒ黒ノ班アリ		黒石市花巻地区	7.2	3.6	1.7	下山形村熊澤慶次郎→枝川村工藤 (彦一郎・祐龍)氏之蔵→辰馬考古資料館		工藤彦一郎1888「陸奥の珠玉」『東京人類學會雜誌』第4巻第33号.75頁所収 辰馬考古資料館シール番号26
361		大珠	縄文中期後葉-後期前葉	石質半透明ニシテ緑白ノ斑アリ			7.6	3.0	1.7	青森大町山本氏所蔵		穴径1.2cm
362		大珠	縄文中期後葉-後期前葉				7.1	3.1	1.2	浅利八百氏の蔵		
363	1	磨製石斧	縄文				13.6	2.0	1.2			
363	2	管玉	縄文後・晩期				4.2	1.7	2.2			
364	1	磨製石斧	縄文後・晩期				13.2	5.7	3.0			輪郭のみ 265と同じ
364	2	勾玉	縄文晩期後半(大洞C式)		造道村大字駒込字玉清水	青森市玉清水(1)・(3)遺跡①には東津軽郡外ヶ浜町(平館村)と記載	2.6	1.6	1.1	枝川村工藤 (彦一郎・祐龍)氏之蔵→ 辰馬考古資料館		①辰馬考古資料館シール番号4
364	3	勾玉	縄文晩期後半(大洞C式)		高田村大字大谷字小谷	青森市朝日山(1)・(2)・(3)遺跡	2.6	1.6	1.1			

遺物リスト19

図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
						長	幅	厚			
365		勾玉	縄文晩期 前半		青森市細越 地区	3.5	1.5	0.7	佐藤部→成田 彦栄		佐藤傳蔵1897「共同 備忘録」『東京人類 學會雜誌』第13卷 第140号.63頁 所収 成田彦栄旧蔵資料 NA218
366	1	不明				—	—	—			断面か
366	2	勾玉	縄文晩期	外濱鬼泊村岩穴 ヨリ出ス 但シ 大人骨共ニ出ス キヨク	外ノ濱鬼 泊村岩穴	3.1	2.0	0.9	下澤(保躬)氏 之蔵→(佐藤 部)→成田彦 栄	明治17年夏 出土	大人の骨とともに 出土 成田彦栄旧 蔵資料NA220
366	3	勾玉	縄文晩期	文政ノ始六七年 ノ頃 南津軽郡 八幡崎ヨリ出ス メノウ	南津軽郡 八幡崎	2.8	1.8	0.9		文政6、7年 ごろ出土	367と同じ 成田彦栄 旧蔵資料NA2621-21
367		勾玉	縄文晩期	南津軽郡八幡崎 畑ニテ出ス 下 先ハカラシ如シ	南津軽郡 八幡崎畑	3.8	2.0	1.1			366-3と同じ「寒帯 地方に住セルエス キモー人は皆水を 以て家屋を造れる なり」(『東京人類 學會雜誌』文章 図と の関連なし)
368表	1	勾玉	縄文晩期 前半		平館村	3.2	1.7	0.9	枝川村工藤 (彦一郎・祐 龍)氏之蔵→ 辰馬考古資料 館		辰馬考古資料館シ ール番号3
368表	2	勾玉	縄文晩期 前半			3.3	1.8	0.9	枝川村工藤 (彦一郎・祐 龍)氏之蔵→ 辰馬考古資料 館		辰馬考古資料館シ ール番号1
368表	3	勾玉	縄文後・ 晩期	中ミドリ		2.1	1.4	1.0	枝川村工藤 (彦一郎・祐 龍)氏之蔵→ 辰馬考古資料 館		
368表	4	勾玉	縄文晩 期?	赤 メノウ		2.4	1.5	0.7			
368裏		勾玉	縄文晩 期?			3.4	1.8	—			
369		勾玉	縄文後・ 晩期	勾玉ノ圖 大き さ如圖 石質雷 斧石と同じ萌黄 色之 横内村の 田の中より得と 云へり	横内村の 田	1.9	1.0	6.5	弘前 岡本氏 の蔵	明治17年旧 6月20日写	
370	1	容器形 石製品	縄文後期 前葉			2.4	2.5	1.1	成田彦栄		成田彦栄旧蔵資料 NA2672
370	2	勾玉	縄文晩期		青森市細越 地区	2.6	1.9	1.1	成田彦栄		佐藤傳蔵1897「共同 備忘録」『東京人類 學會雜誌』第13卷 第140号.63頁 所収 成田彦栄旧蔵資料 NA2622-216
370	3	垂飾	縄文晩期		青森市細越 地区か	1.3	1.3	0.7	成田彦栄		成田彦栄旧蔵資料 NA2621-6
371	1	石槍	縄文前期			8.0	3.2	1.3			
371	2	勾玉	縄文後・ 晩期			1.6	1.8	0.4			
371	3	垂飾	縄文中期 後葉-後期 前葉			1.6	1.8	0.4			
371	4	垂飾	縄文後・ 晩期			2.8	1.7	0.8			

遺物リスト20

図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
						長	幅	厚			
372	1	環状石製品	縄文前・中期			4.4	2.7	1.5			
372	2	垂飾	縄文中・後期			5.2	2.3	0.9			
372	3	垂飾	縄文中期後葉-後期前葉			2.2	2.0	1.2			
372	4	垂飾	縄文後・晩期			4.1	4.1	1.8			
372	5	垂飾	縄文前期後葉-中期前葉	東津軽郡大野村大字細越字種元	青森市細越地区	6.6	2.4	0.6	角田猛彦		(球状耳飾か) 角田猛彦1892「石包丁の類か(甲、乙、丙、大さ圖の如し)『東京人類學會雜誌』第8巻 第82号.143頁 甲所収
372	6	勾玉	縄文後期後葉		青森市玉清水遺跡	3.1	1.5	1.0	佐藤郁→成田彦栄		佐藤傳蔵1897「共同備忘録」『東京人類學會雜誌』第13巻第140号.63頁 所収 成田彦栄旧蔵資料NA210
372	7	垂飾	縄文中期後葉-後期前葉			2.5	1.6	0.6			
372	8	勾玉	縄文晩期?			3.7	2.0	1.5			成田彦栄旧蔵資料NA2622-6
372	9	小玉	縄文時代後期後葉-晩期			0.8	0.7	0.8			
372	10	小玉	縄文時代後期後葉-晩期			0.8	0.8	0.5			
373	1	石刀	縄文晩期後半			残6.9	2.6	1.6			
373	2	垂飾	縄文中-晩期			3.8	2.1	1.0			
374	1	異形石器	縄文中期後半-後期前葉			3.2	2.2	0.7			
374	2	勾玉	縄文後・晩期			3.0	5.9	1.0			
375	1	勾玉	古墳時代			3.1	1.7	—			
375	2	勾玉	古墳時代	メノウ		2.8	1.8	—			
375	3	勾玉	古墳時代	シイシヤウ(水晶)		2.7	1.8	—			
375	4	管玉	古墳時代			3.1	1.1	—			
375	5	菱形土製品	縄文中期末-後期前葉			3.3	3.1	1.4			
375	6	垂飾	縄文後期			2.2	1.7	0.6			
375	7	垂飾	縄文後期前半			1.9	1.2	—			
375	8	土製耳飾	縄文晩期前半			1.6	0.9	—			
375	9	管状土製品	縄文後期前半			3.0	1.4	1.2			
375	10	勾玉	古墳時代?	トウメイ(透明)		1.9	1.0	—			
376	1	石製模造品	古墳時代	薄黒色ニシテ石盤石ニ似タリ		4.5	1.7	—	野辺地 安田氏の蔵		

遺物リスト21

図番号		種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
							長	幅	厚			
376	2	石製模 造品	古墳時代	薄黒色ニシテ石 盤石ニ似タリ			2.4	2.2	0.3	野辺地 安田 氏の蔵		
376	3	石製模 造品	古墳時代				残6.0	2.5	0.6			
376	4	石製模 造品	古墳時代				4.5	2.0	—			
376	5	石製模 造品	古墳時代				4.5	1.9	0.6			
376	6	勾玉	古墳時代				1.8	1.1	—			
376	7	勾玉	古墳時代		薄緑		1.7	1.1	—			
377	1	耳環	古墳時代				2.9	3.1	—			
377	2	耳環	古墳時代				3.0	3.0	—			
377	3	管玉	古墳時代	ロク			2.0	0.7	0.6			
377	4	小玉	古墳時代	ガラス薄墨色ヲ 加へ			0.8	0.7	0.4			
377	5	小玉	古墳時代	ガラス ミドリ			0.5	0.6	—			
377	6	小玉	古墳時代				0.9	0.9	0.8			
377	7	勾玉	古墳時代				3.0	1.8	1.0			
377	8	勾玉	古墳時代				3.1	1.4	0.9			
378	1	有孔石		大キサハ図ノ通 り	西郡十腰 内村	弘前市十腰 内地区	20.3	12.7	—			管玉か
378	2	有孔石			西郡十腰 内村	弘前市十腰 内地区	3.8	3.0	—			自然礫か
379	1	スクレ イパー		灰ニ大シヤ少シ	南洋 サ イパン島	サイパン島	6.8	17.7	—	昭和11年6月 28日	民族資料	
379	2	バン掲 石		目荒シ	南洋 サ イパン島	サイパン島	14.8	16.3	14.9		民族資料	
380	1	石鏃	縄文後・ 晩期・弥 生時代				3.3	残1.3	0.5			
380	2	垂飾	縄文後期 前半				残3.7	3.2	0.3			
380	3	骨篋	縄文晩期				残10	2.0	0.8			
381表	1	土鍾	縄文晩期			弘前市十腰 内遺跡	6.0	4.2	3.7	佐藤部→久原 房之助→東北 大学		(381裏に側面あり)
381表	2	鹿角製 ヤス	縄文晩期				15.5	残2.4	残1.2			(枝部欠損)
381裏		石鍾	縄文晩期				10.5	5.8	5.5			
382	1	土偶	縄文晩期 後半				5.1	5.3	—			
382	2	鹿角製 ヤス	縄文晩期	角ツノニケ共 角ツノ			15.5	残2.4	残1.2			381表-2と同じ
382	3	骨針	縄文晩期				24.0	2.0	—			
382	4	骨針	縄文晩期				15.2	残2.4	—			
383A		骨角器 (垂飾)	縄文晩期	同前 質ハ堅固 ニシテ光沢アリ 而シテ薄黄色ヲ 帯ビ下図ノ黒キ 所ハ凹処ナリ 蓋シ下図(イ)ニ 縄ヲ通シ(ロ)ニ 物品ヲ掛け下ゲ タルモノナルベ キカ確定スベカ ラザルト雖モ蓋 シ綿羊ノ角ヲ以 テ製セルモノト 想像ス		つがる市亀 ヶ岡遺跡	12.4	4.0	2.3	館岡村野呂武 左衛門→宮内 省東宮職→東 京国立博物館		383Bと同じ ①佐 藤傳蔵1897「共同備 忘録」『東京人類學 會雑誌』第13巻第 140号.64頁所収 原 図 ②東京国立博物 館2009『骨角器集 成』2-3

遺物リスト22

図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
						長	幅	厚			
383B	1	骨角器 (鈎針)	縄文晩期		つがる市亀ヶ岡遺跡	8.4	7.0	1.6	館岡村野呂武左衛門→宮内省東宮職→東京国立博物館		画譜Ⅱ-162と同じ ①若林勝邦1892「石器時代ノ鈎鉤」『東京人類學會雜誌』第7巻第77号.382—385頁所収 ②東京国立博物館2009『骨角器集成』.2-2
383B	2	骨角器 (垂飾)	縄文晩期		つがる市亀ヶ岡遺跡	12.4	4.0	2.3			383Aと同じ
384		鯨骨							弘前岡本氏の蔵	(明治)17年旧7月5日写	
385	1	石棒?				残22.3	2.3				カミナリノタイコノハチ
385	2	石槍				残25.6		2.7			カミナリサマノヤリ
385	3	石鑿					2.3				カミナリノノミ
385	4	雷斧						1.0			カミナリサマノマサカリ
385	5	つぶて?					残5.9				カミノツフテ
385	6	キセル				残7.5	2.0				
385	7	石鏃									カミノヤノ子
385	8	注口土器									トイシユウ?
386	1	銅錢				径2.4					〇〇〇宝
386	2	銅錢				径2.3					錢種不明
386	3	銅錢				径2.3					唐国通宝(959初鑄・南唐)
386	4	鉄刀?				残63.5	4.5	—			
387		鉄槍先	室町-安土桃山時代	陸奥国南津軽郡藤崎村字岡本	南津軽郡藤崎町藤崎城跡	31.9	2.4	2.0	白崎太郎	明治13年7月18日出土	明治13年弘前博覧会の陳列品
388		石帯	奈良時代			2.1	4.1	0.5	弘前岡本氏の蔵	明治17年旧6月20日写	
389		軒丸瓦	奈良時代(8世紀半ば頃)			径18.9			(野辺地)安田氏の家蔵	明治17年旧8月4日写	鋸齒文縁単弁十六弁蓮華文軒丸瓦 下総 結城廃寺の瓦の可能性が高い

遺物リスト23

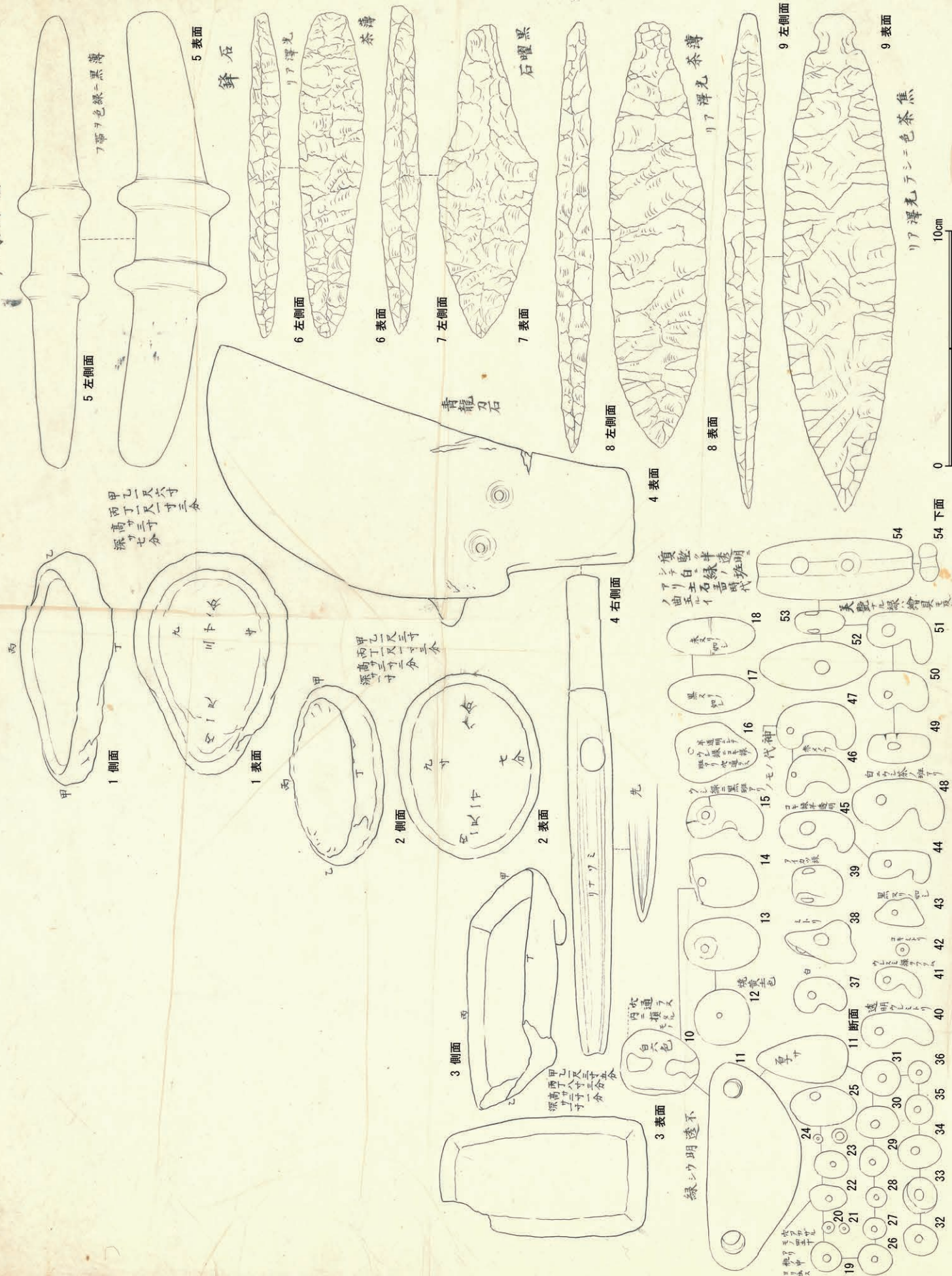
図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
						長	幅	厚			
390	茶臼	室町-安土 桃山時代		岩木山の かけ中村 川	弘前市岩木 地区中村川 上流中ノ川 屋敷址	径 31.5		10.3	佐藤部→成田 彦栄		406メモに土地掲載あり 岩木町1972『岩木町誌』掲載
391	植物 (草)		瓶ヶ岡土器掘取 ノ際十中ノ八九 此ノ草形ヲ成シ テ土器ノ内ニ在 リ	瓶ヶ岡	つがる市亀 ヶ岡遺跡	9.7	0.2～ 0.5	1.2			佐藤傳蔵1897「共同 備忘録」『東京人類 學會雜誌』第12巻第 138号.487頁所収
392	1 環濠集 落跡略図	平安時代		廣瀬大字 坂本字上 館長根	東津軽郡蓬 田村高根遺 跡						
392	2 石皿	縄文中期 末-後期前 葉		廣瀬村	東津軽郡蓬 田村広瀬	12.2	3.0	5.5	廣瀬村 久慈 与作写		
393	環濠集 落跡略図	平安時代									
394	1 環濠集 落跡略図	平安時代		廣瀬大字 坂本字下 館長根	東津軽郡蓬 田村広瀬					明 治31年7 月26日	
394	2 環濠集 落跡略図	平安時代									
395	環濠集 落跡略図	平安時代		東津軽郡 宮田村 旧字エリ ホリ	青森市宮田 遺跡					7月3日	
396	壺	縄文後期 (十腰内 I式)									拓本 画譜 I -84壺の 拓本か
397	1 (地図)				つがる市亀 ヶ岡遺跡						遺跡周辺の地籍図
397	2 注口土 器	縄文晩期 (大洞BC 式)		高館堤ノ 邊		(高さ) 7.0	—				注口拓本
398	台付鉢 破片	縄文晩期				残 11.7	—	底径 10.0			
399	壺(四 足付)	縄文晩期 (大洞C1 式)			青森市細越 地区	(高さ) 残6.5	—	(最大径) 7.2			角田猛彦1891「陸奥 國東津軽郡石器時代 の遺跡探求報告」『東 京人類學會雜誌』第6 巻第64号.359—362頁 所収 原画
193 補遺	壺	縄文晩期 (大洞A 式)	紙ヲ(遠)ハリテ (者里天)、ミソ (溝)へ墨ヲ入タ ルモノ也、全体 ノ模様如此		つがる市亀 ヶ岡遺跡				佐藤部→成田 彦栄		画 譜 II-193壺の肩 部文様 弘前大学 蔵「成田コレクショ ン考古資料図録」 (図録152) NA152
400表	浅鉢	縄文晩期 (大洞A 式)	雷斧石の漢名霹 靂礮和名きつね のまさかり(図 との関連なし)			(高さ) 5.8	(口径) 14.7	(最大径) 14.7			
400裏	(算学 書の一 部)										明治三年 佐藤常蔵
401	1 製塩土 器	平安時代		上北郡下 田村地内 字後谷地	上北郡おい らせ町下谷 地(1)遺跡	(高さ) 14.2	(口径) 11.8	(最大径) 11.8			
401	2 製塩土 器	平安時代		上北郡下 田村地内 字後谷地	上北郡おい らせ町下谷 地(1)遺跡	(高さ) 14.2	(口径) 11.8	(最大径) 11.8			若林勝邦1895「石器 時代ノ土器製法」 『東京人類學會雜 誌』第10巻第107号 .208頁所収 土器が 輪積みによって製 作されていること を説明

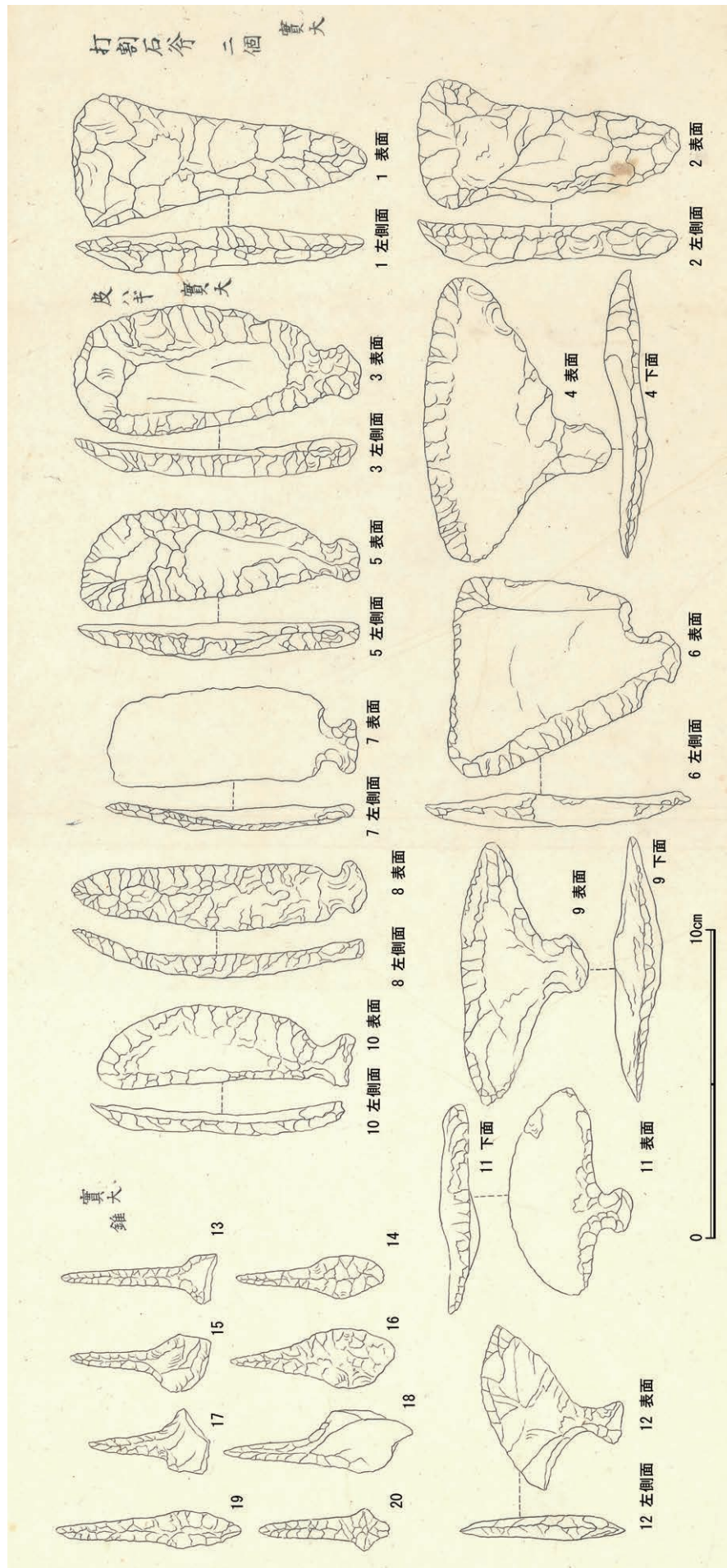
遺物リスト24

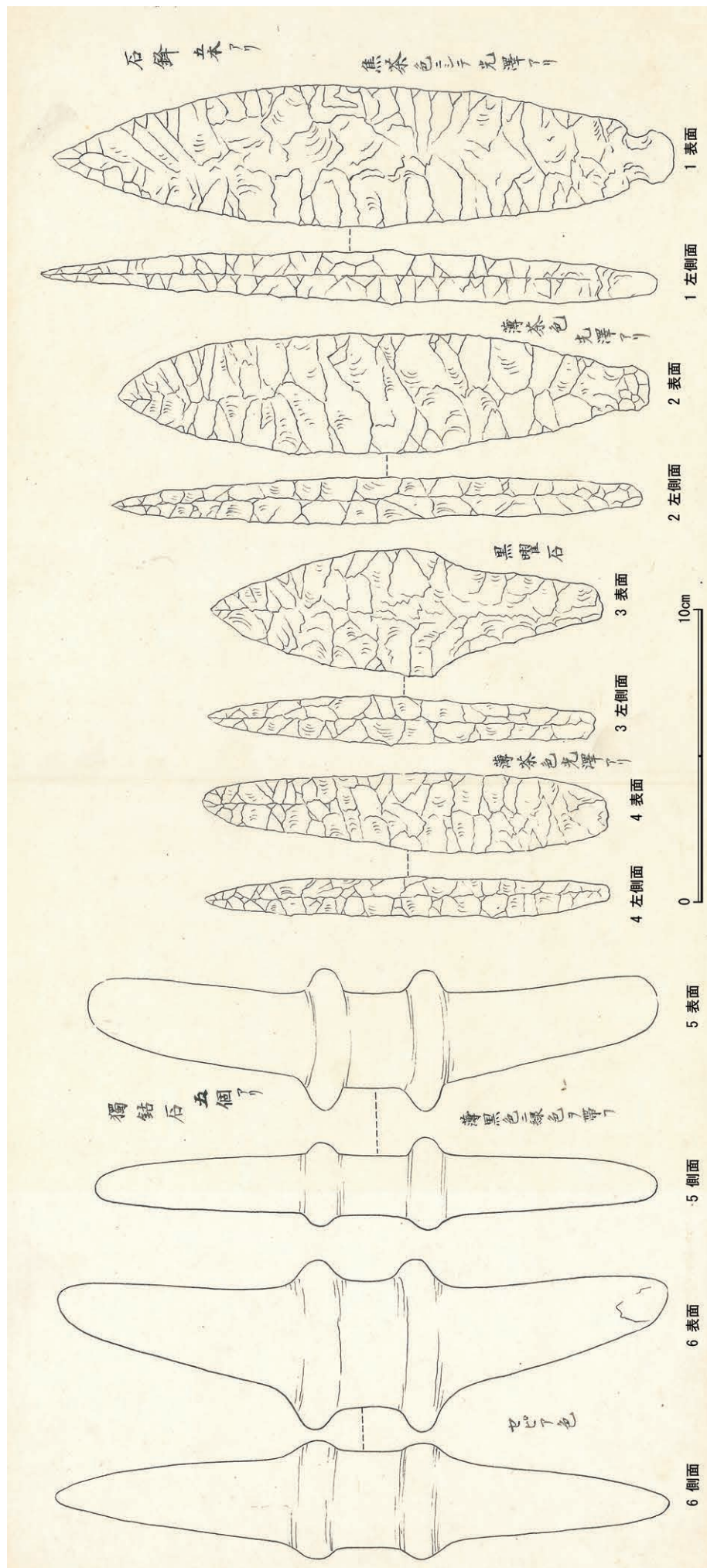
図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
						長	幅	厚			
402	須恵器 壺	13世紀 (珠洲焼)		相内―板 割の間字 赤坂	五所川原市	(高さ) 31.8	(口径) 11.5	(最大径) 25.8			鉛筆書 印文拓本 樋目綾杉文叩壺
230 補遺	内耳鉄 鍋	17世紀				(高さ) 15.3	(口径) 27.1	(最大径) 27.3			画譜Ⅱ－230の底面
403	内耳鉄 鍋	17世紀				(高さ) 15.2	(口径) 30.9	(最大径) 30.9			底径24.5 c m
404	内耳鉄 鍋	17世紀				(高さ) 13.3	(口径) 27.3	(最大径) 27.3			底径19.1 c m
405表	石棒		古物 石ギケン 石劔 大人形								
405裏 1	壺								百石町 今敬 一		鉛筆書 1～21は明 治13年開催の第二 回弘前博覧会の出 品物のスケッチで あることが判明
405裏 2	台付鉢								徳田町 神宇 作		
405裏 3	香炉形 土器								蔵主町 薄田 貞一		
405裏 4	壺								長尾助一郎		
405裏 5	壺								笹森町 棟方 覚彌		
405裏 6	香炉形 土器								長勝寺 門前 泉光院		
405裏 7	香炉								福田 山下良 助		
405裏 8	壺								茂森町 笠原 是太郎		
405裏 9	深鉢								茂森町 山田 浩蔵		
405裏 10	壺								南瓦ヶ町 小 山内助吉		
405裏 11	壺								竹内藤二郎		
405裏 12	石棒								五所川原村 毛内治兵衛		323と同じ
405裏 13	石棒								青森米町 佐 藤幸一		343-2・326-2と同じ
405裏 14	石刀								青森米町 佐 藤幸一		
405裏 15	石皿								松島鉄太郎		294表・裏と同じ
405裏 16	石皿								浪岡 岩渕彦 五郎		295と同じ
405裏 17	香炉								下土手町 藤 岡幸太郎		
405裏 18	面								大工町 岩渕 勇太郎		
405裏 19	面		支那古代面								
405裏 20	笛		新羅三郎ノ笛						馬屋町 大瀬 与三太		
405裏 21	金属工 芸								浪岡村 玄德 寺		
406表	磨製石 斧	縄文	南津軽郡女鹿沢 村花岡グランド 北方350m地点		青森市浪岡 大字女鹿沢 字花岡地区				三上茂兵衛→ 佐藤蒨→ 成田 彦栄	昭和8年8月 17日発見	昭和12年1月15日買 取る 成田彦栄旧蔵 資料NA237か
406裏	(植物 名称メモ)										
407	(メモ)										蔵品の備忘録

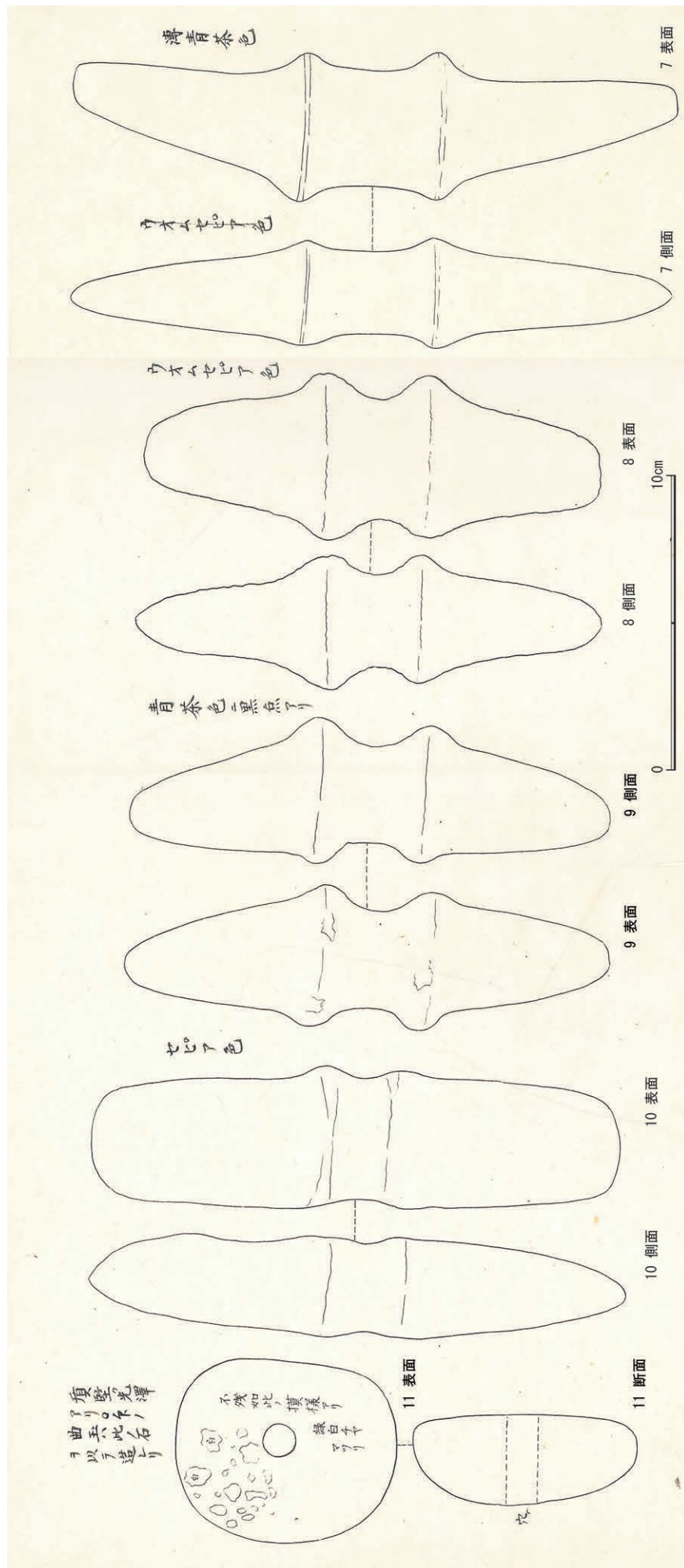
佐藤部画譜中に含まれていた佐藤部以外によって描かれた考古資料

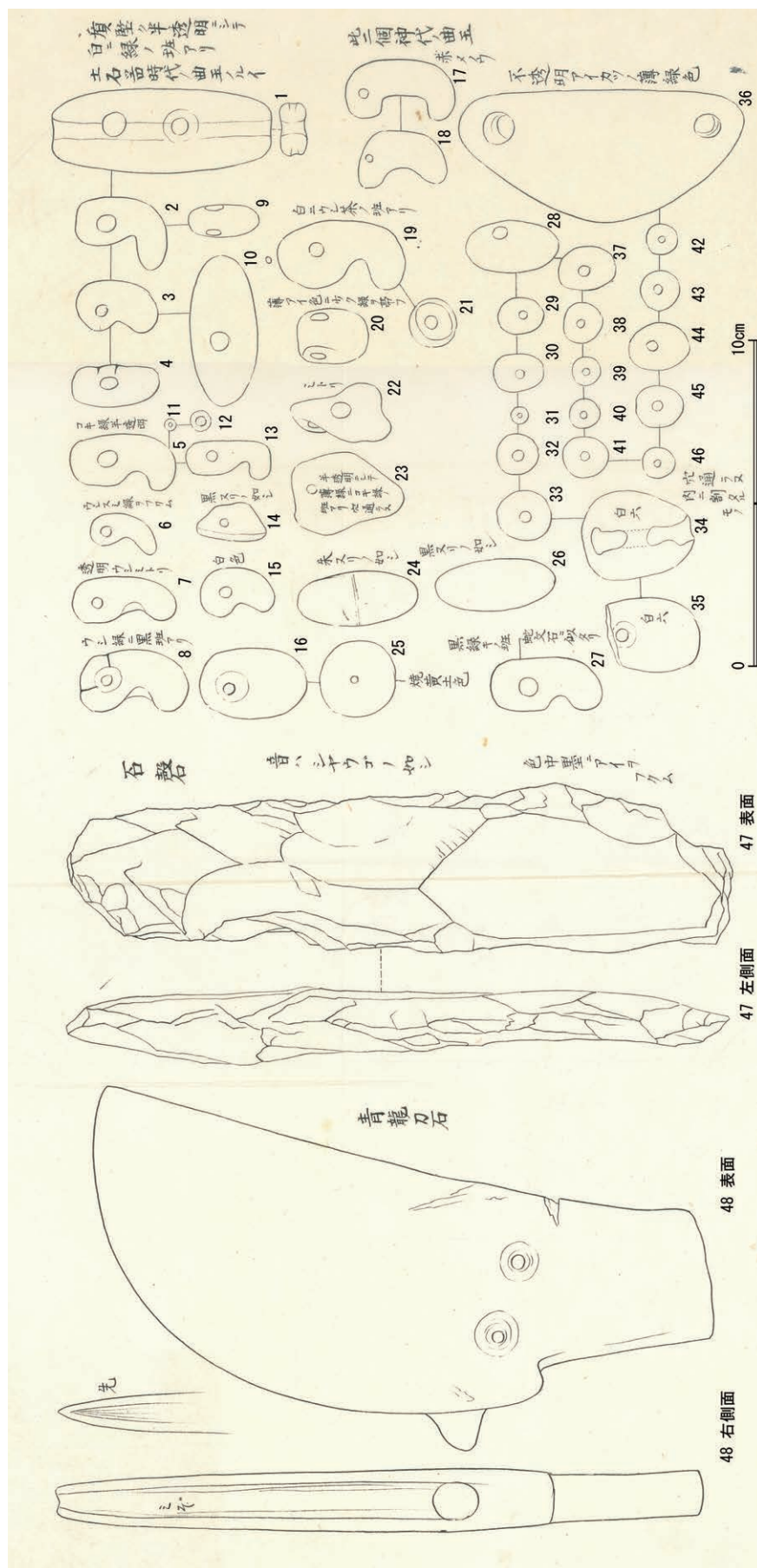
図番号	種類	推定時期 (型式)	注記	出土場所	遺跡名 (現地区)	法量 (cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日 (発見日)	備考・参考文献
						長	幅	厚			
409	1	勾玉	古墳時代	勾玉ノ圖 明治 12年6月25日写					蓑虫山人	明治12年6月 25日写	平尾魯仙 考古圖の 一部
409	2	勾玉	古墳時代	蔵主美濃乃画人 蓑虫山人と云ふ 此日余を訪ねて 見せたるなり							
409	3	勾玉	古墳時代	明徴なるあり然 らざるあり 色 図如し							
409	4	勾玉	古墳時代								
409	5	勾玉	古墳時代								
409	6	土器	縄文後・ 晩期	此器も独狐村の 山畑より出たり と	独狐村	弘前市高杉 地区			蓑虫山人→東 北大学		小型土器
410		磨製石 斧		純墨質量百十匁	石狩國原 野出土雷 斧	北海道				明治25年11 月6日写	「淳風堂」朱印 拓本
411		壺	統縄文時 代(後北 式)	千島挾捉紗那村 出土係ル素焼瓶 片 窺形目(印) 千 歳ふる千島の国 の古瓶ノ片破な (奈)から世に残 るらむ(印) 此地にて写之 平安まつゐ淳風 (印)	千島挾捉 紗那村出 土	挾捉島紗那 郡紗那村				(明治) 26年 6月11日	「あつかぜ」「淳風」 朱印 拓本
412		瓦(文 字瓦)	平安時代		鴻臚館	京都市平安 京				(明治) 28年 春写之	平安人「淳風堂章」 朱印 拓本 藤原貞 幹『好古日録』寛政9 年所収
413	1	瓦(文 字瓦)	平安時代	白虎楼	白虎楼	京都市平安 京					平安淳風蔵「淳風堂 章」朱印 拓本 藤 原貞幹『好古日録』 寛政9年所収
413	2	瓦(文 字瓦)	平安時代	好古日録原瓦 雅楽寮左文	雅楽寮	京都市平安 京					
414		瓦(文 字瓦)	平安時代	大内理出土古瓦 右坊	大内裏右 房	京都市平安 京				(明治) 28年 春	平安「淳風堂章」朱 印 藤原貞幹『好古 日録』寛政9年所収





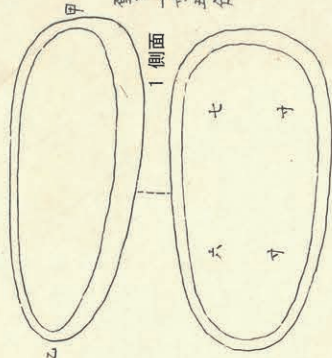






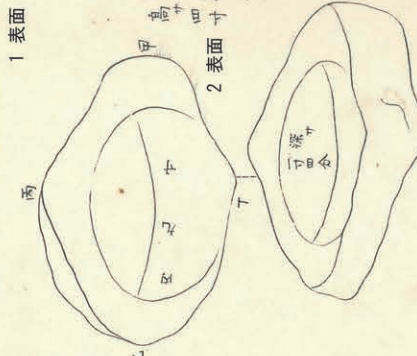
石皿

茶色ニシテ光澤アリ
甲乙一尺四寸一分
厚一寸五分

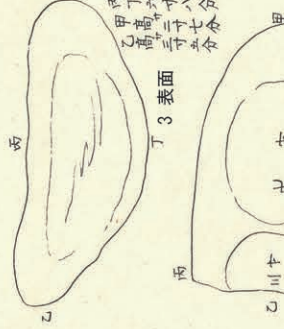


砥石 五個

甲乙一尺二寸五分
丙丁八寸五分
高四寸五分



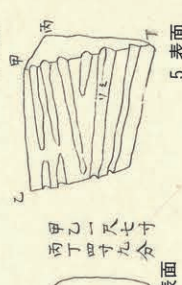
甲乙一尺五寸八分
丙丁六寸八分
甲高四寸七分
乙高四寸七分



甲乙一尺二寸
丙丁七寸五分
甲高四寸五分
乙高四寸五分



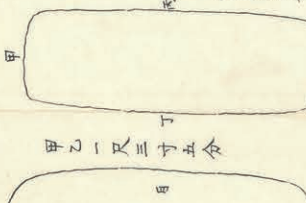
甲乙五寸五分
丙丁五寸五分



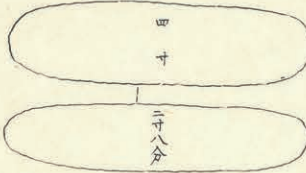
甲乙七寸五分
丙丁九寸五分
厚一寸五分



甲乙一尺二寸八分
丙丁七寸五分
厚一寸五分



甲乙一尺三寸五分

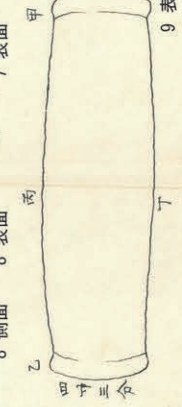


7 表面

8 表面

8 側面

9 表面



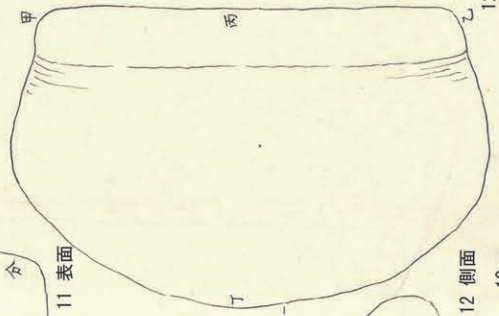
甲乙一尺五寸五分



10 側面

11 表面

甲乙三寸七分



12 表面

12 側面

10cm

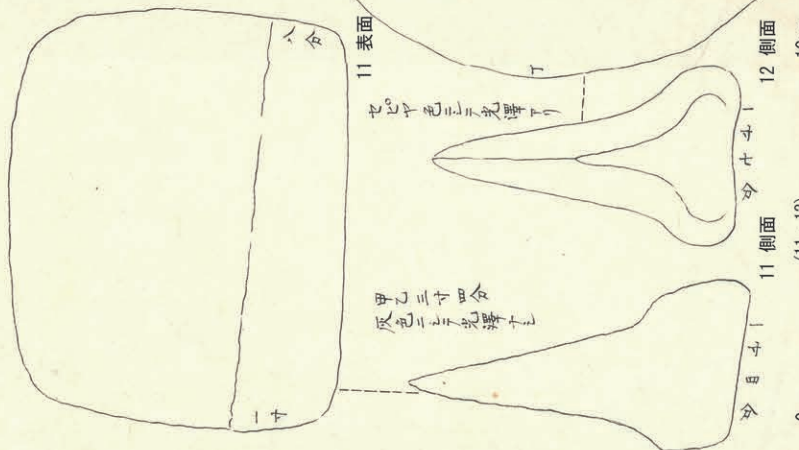
0

11 側面

(11・12)

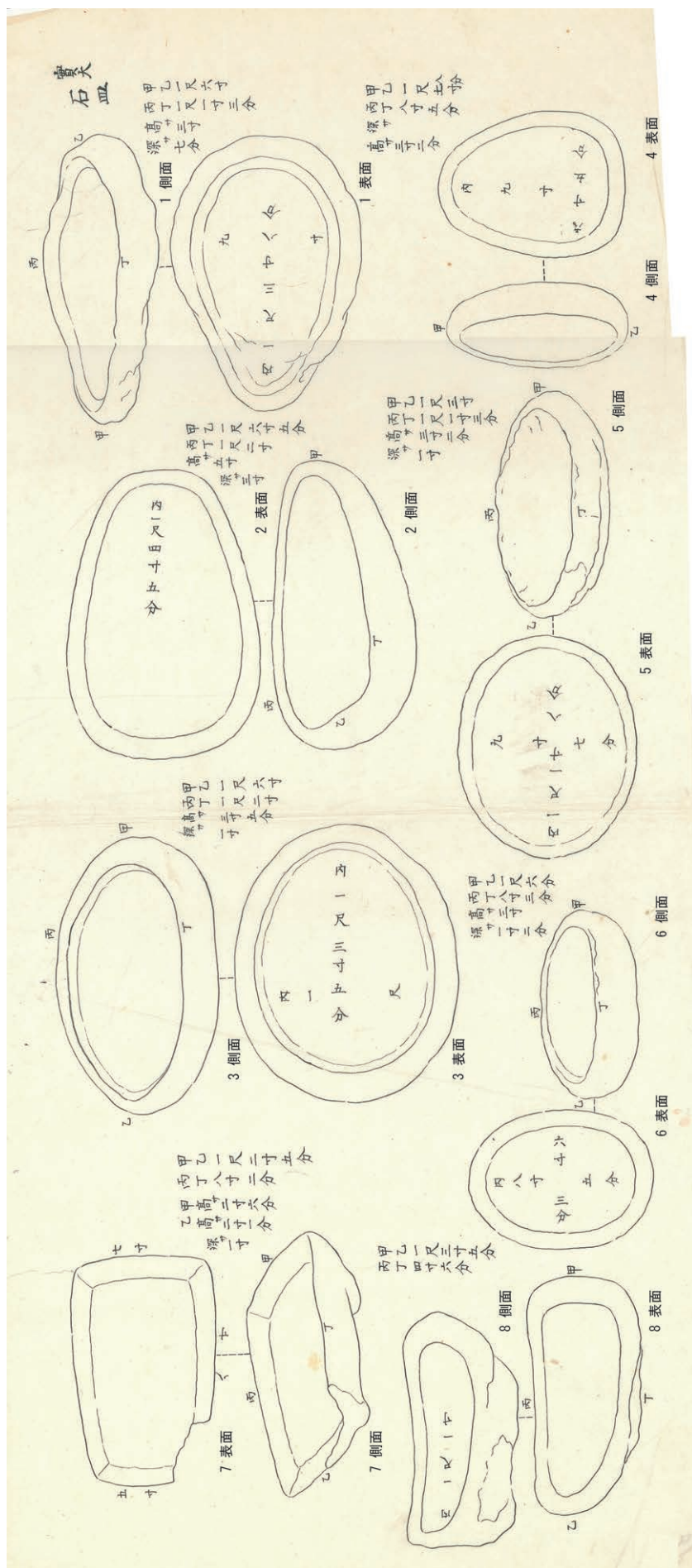
12 側面

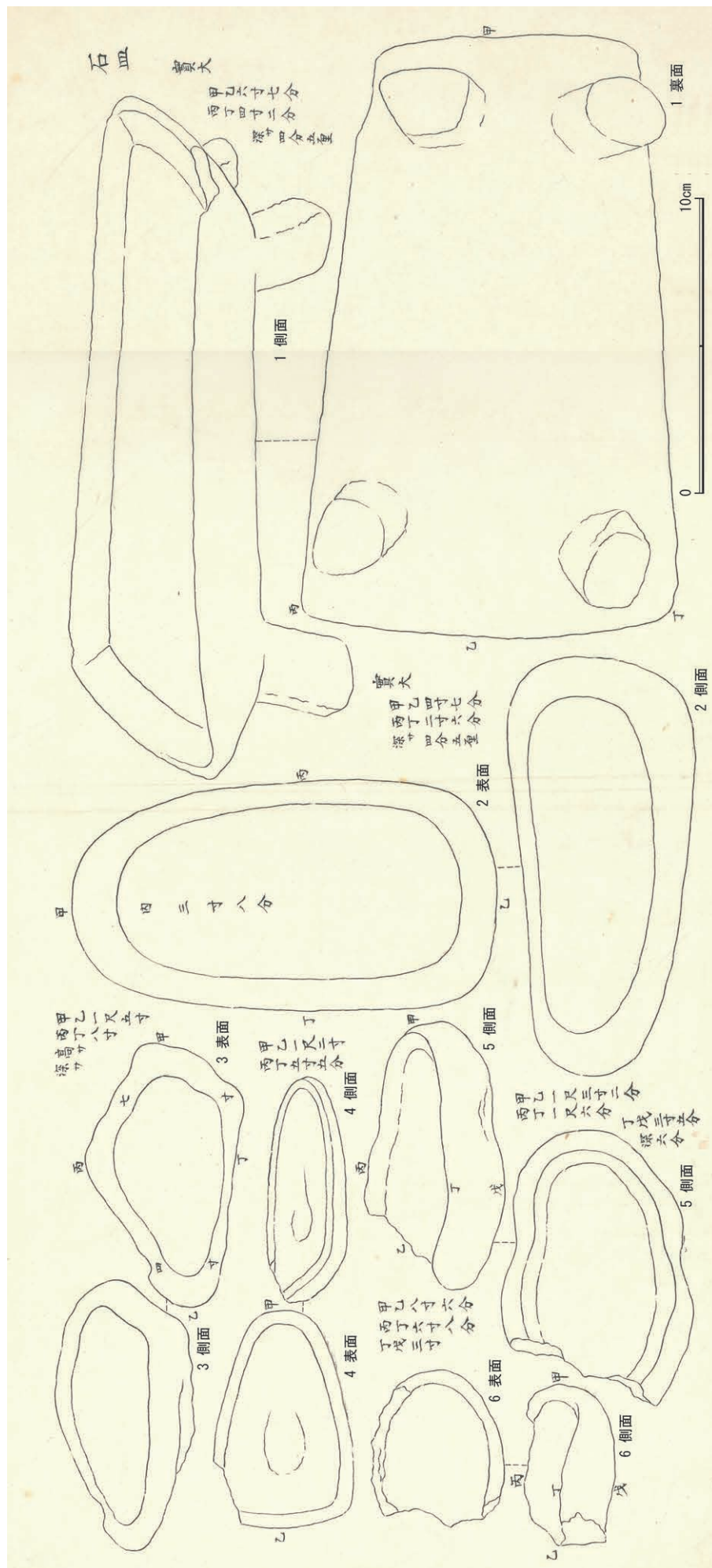
二個トモ實大

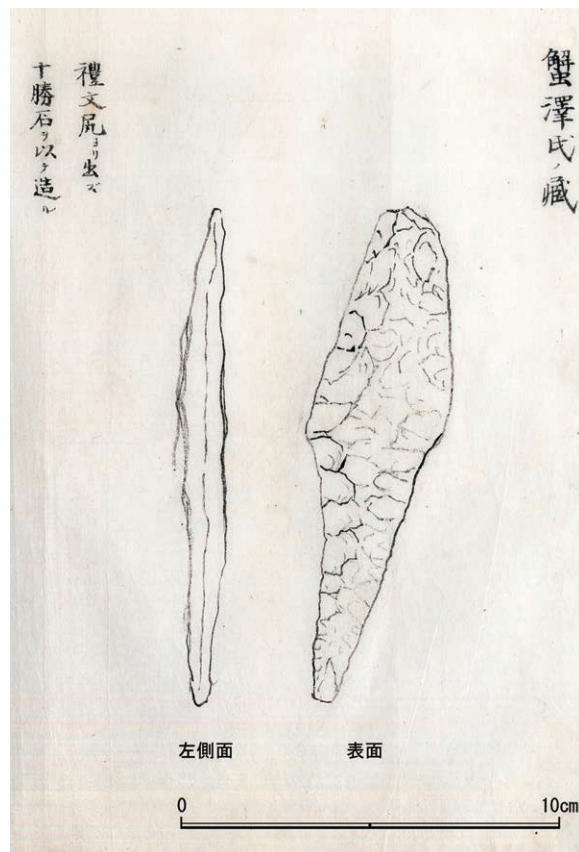


甲乙三寸四分
灰色ニシテ光澤アリ

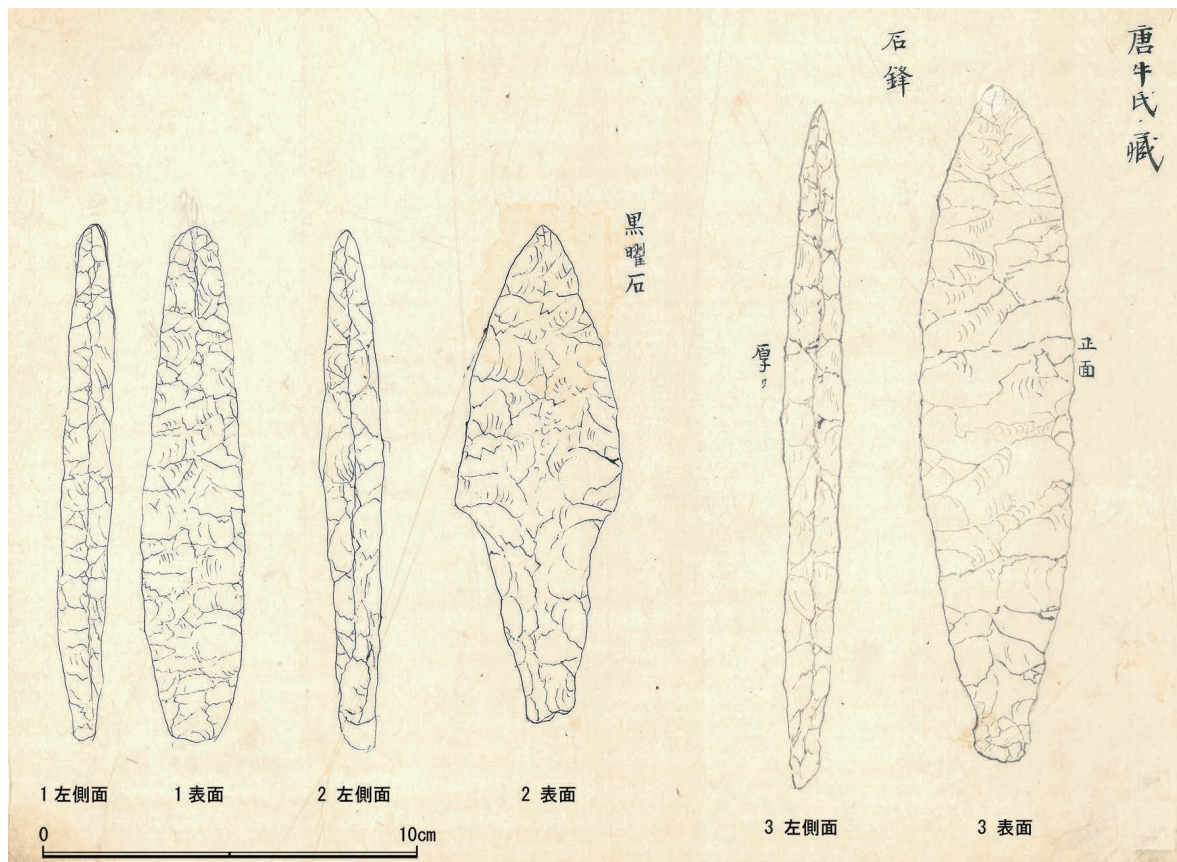
セシヤ色ニシテ光澤アリ



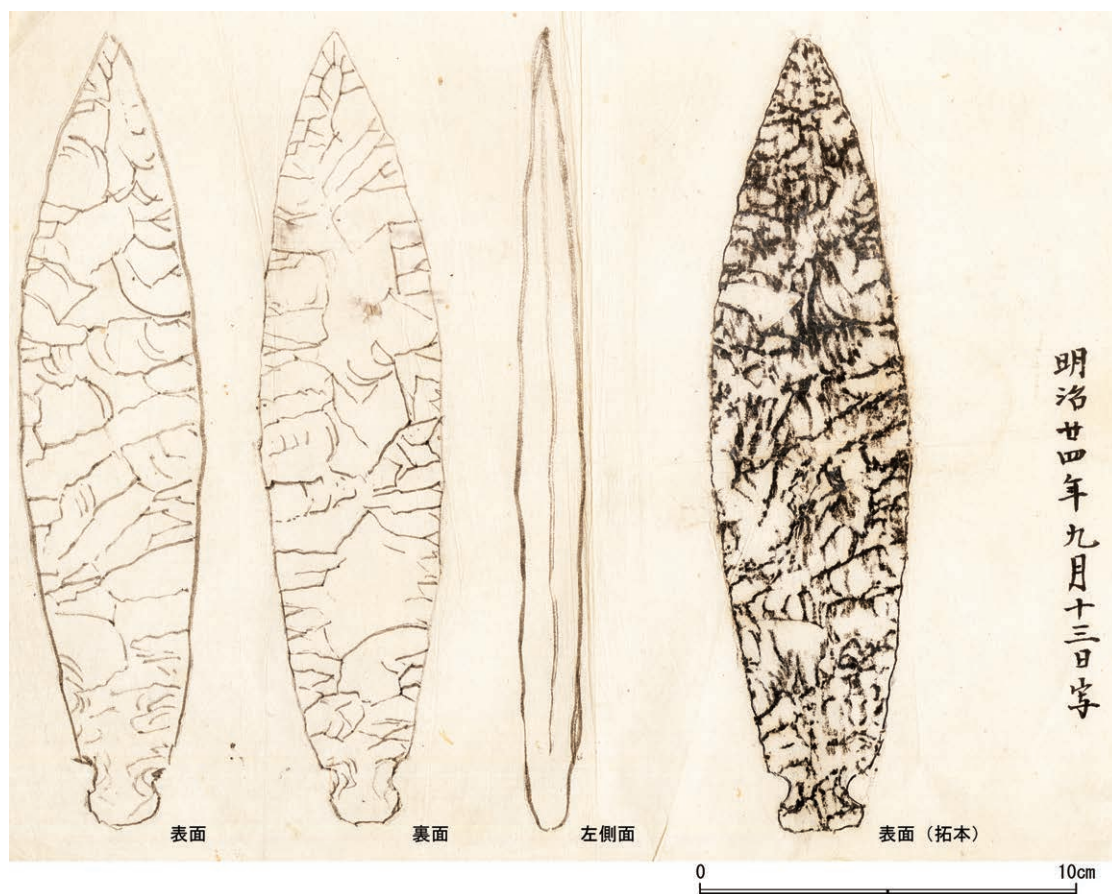




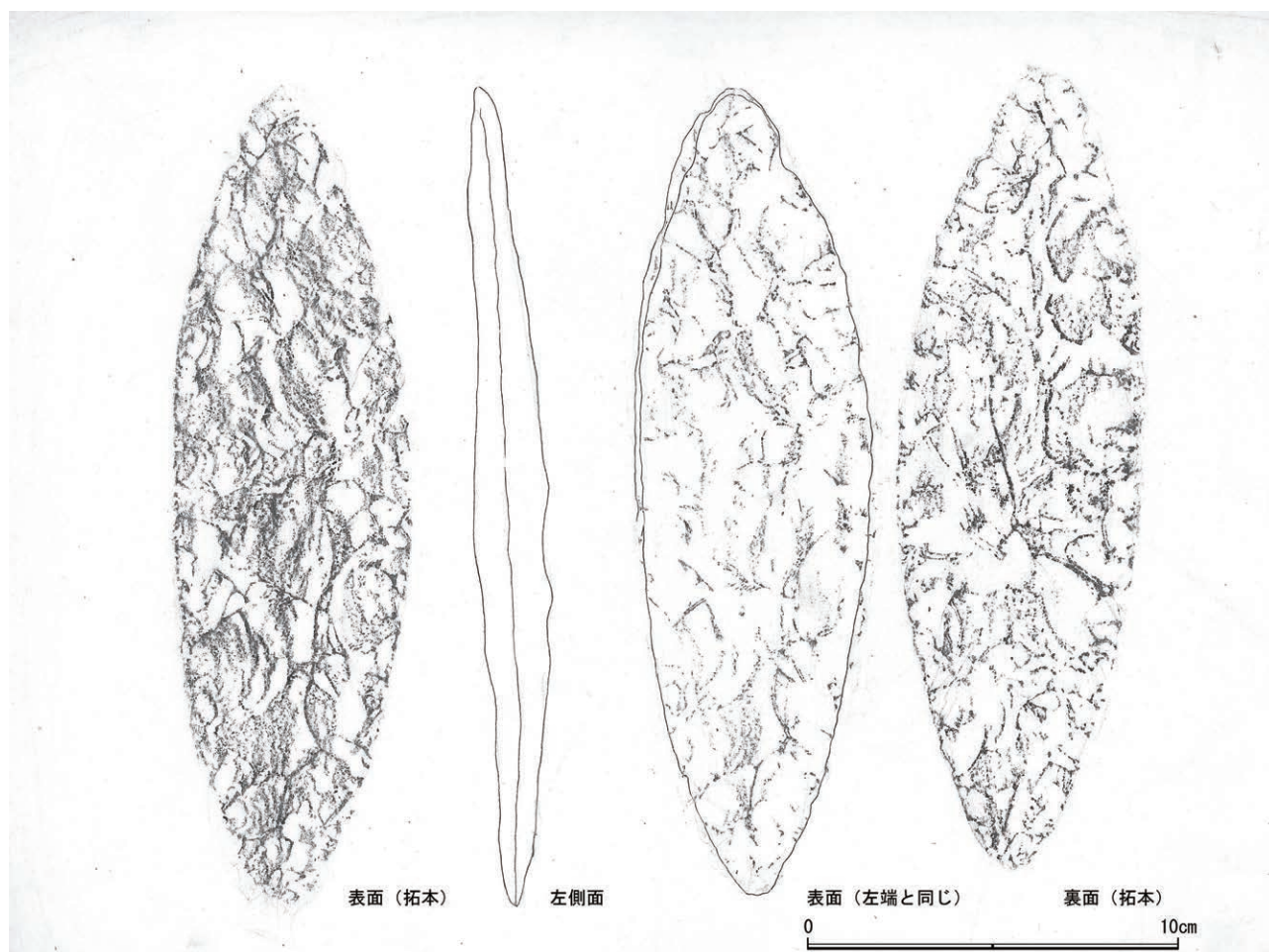
241



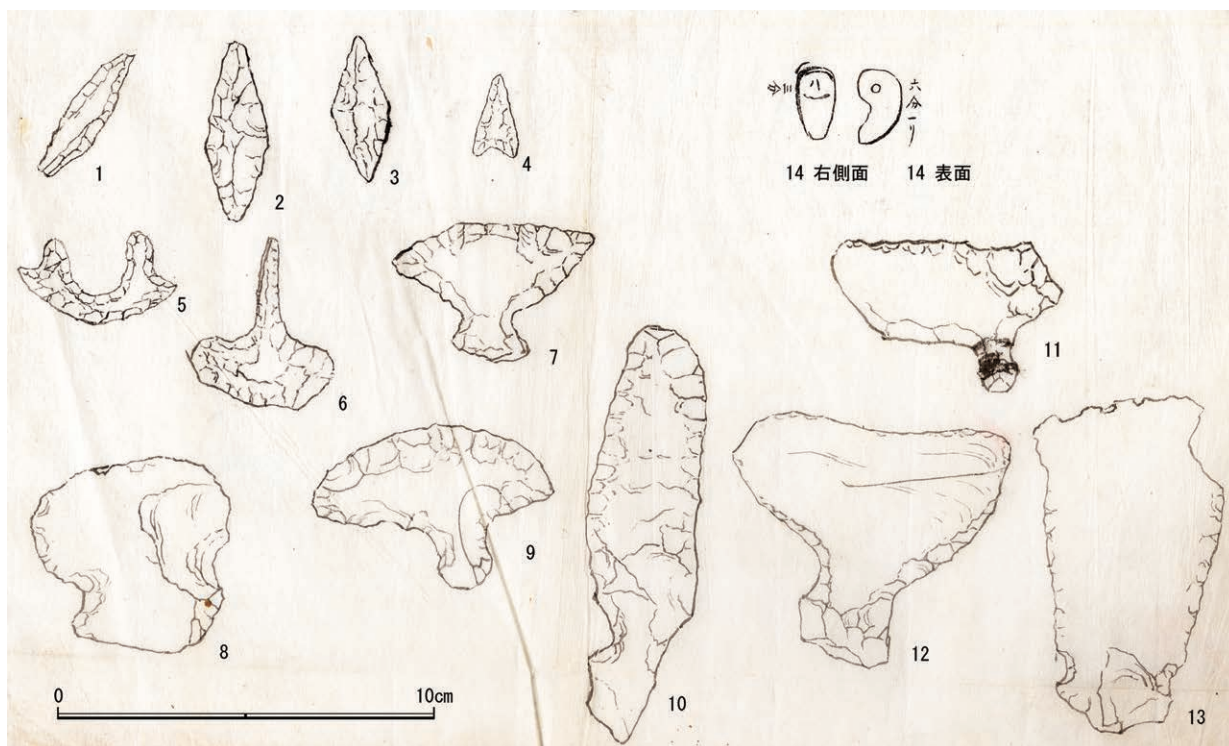
242



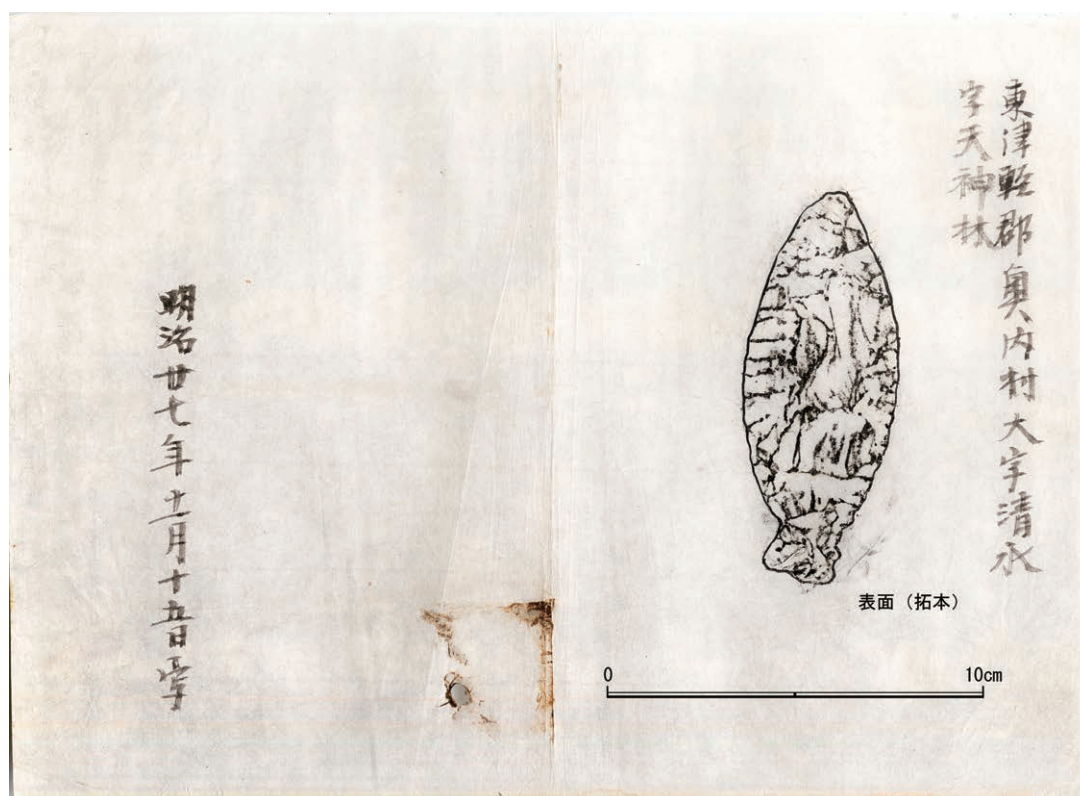
243



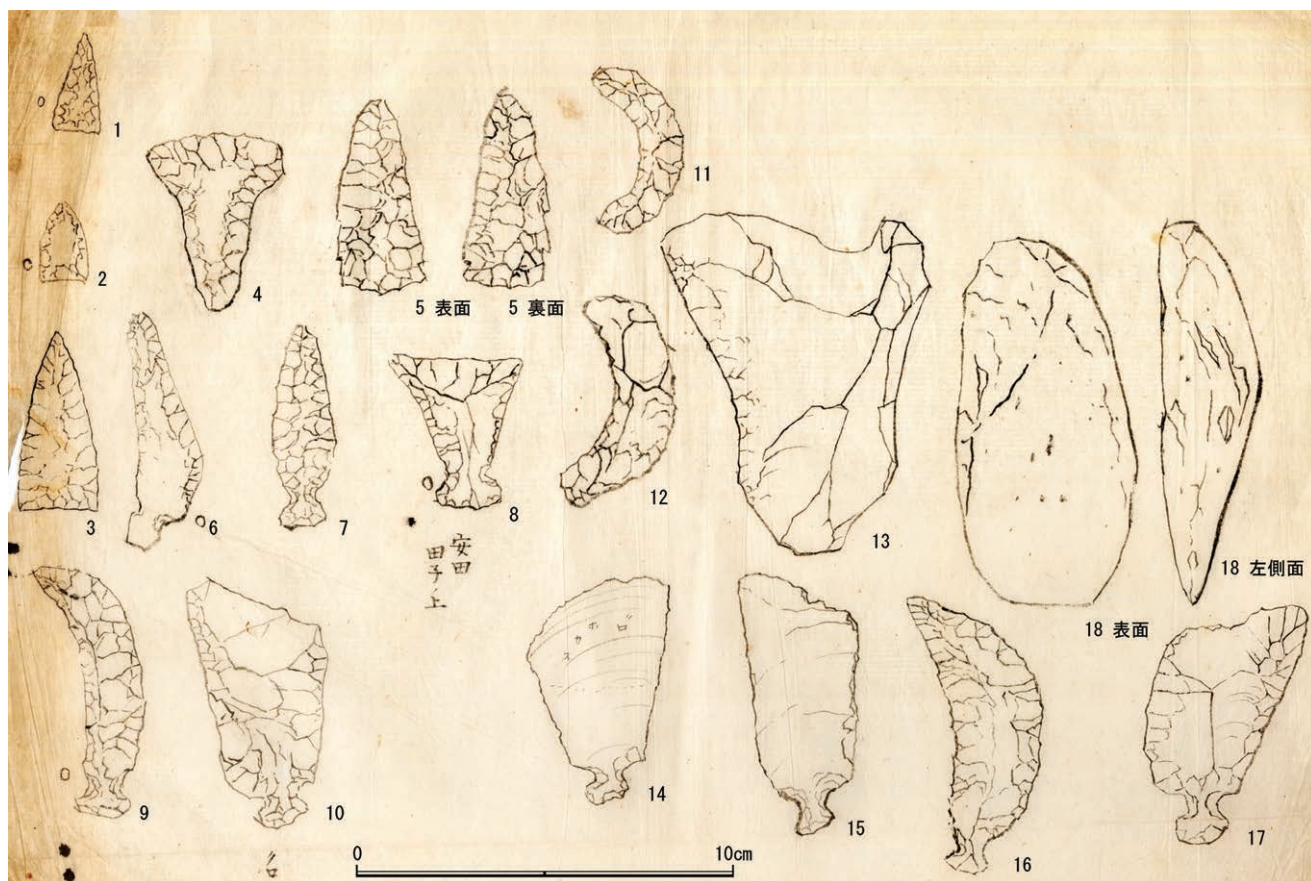
244



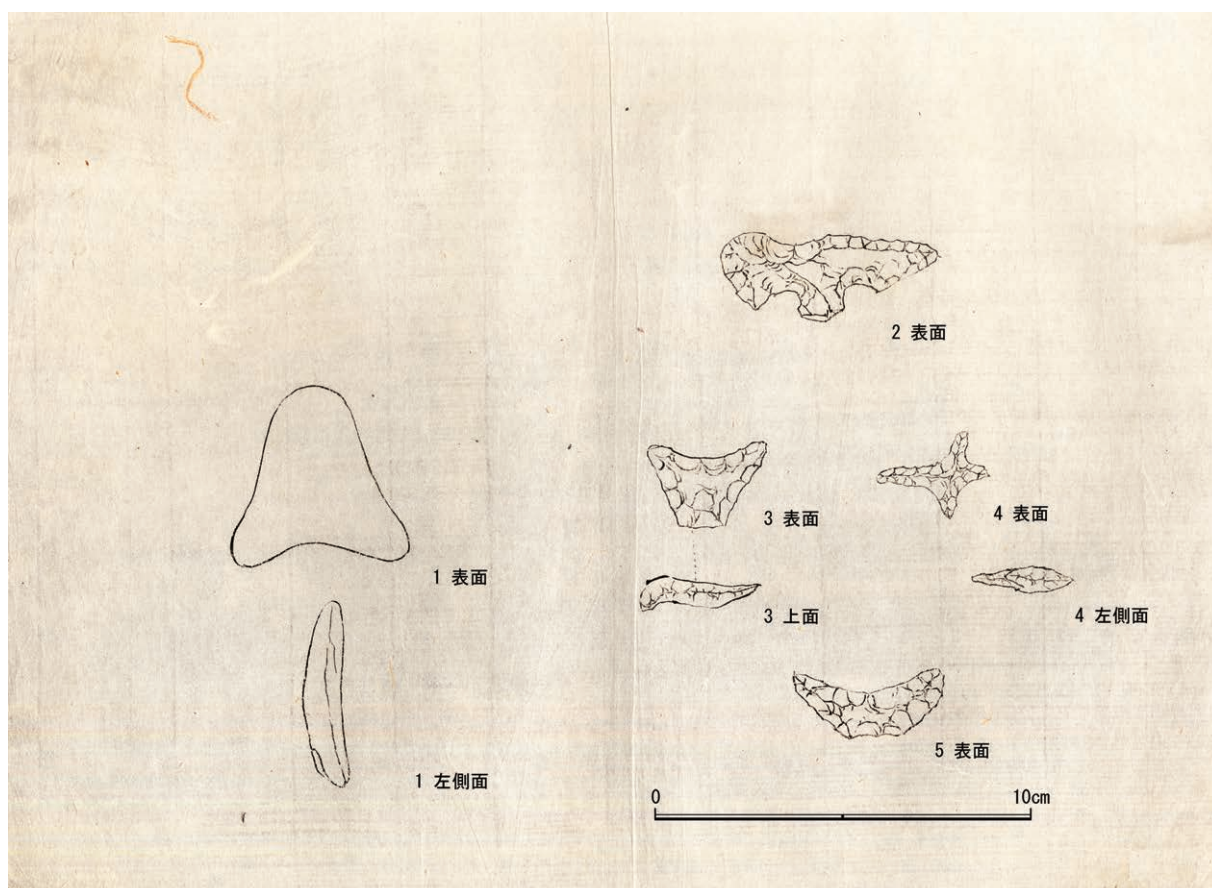
245



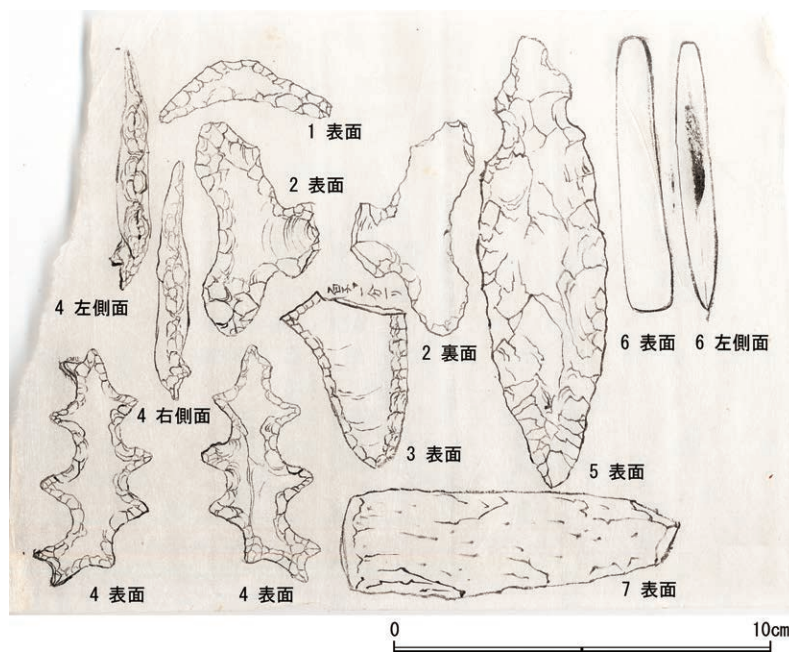
246



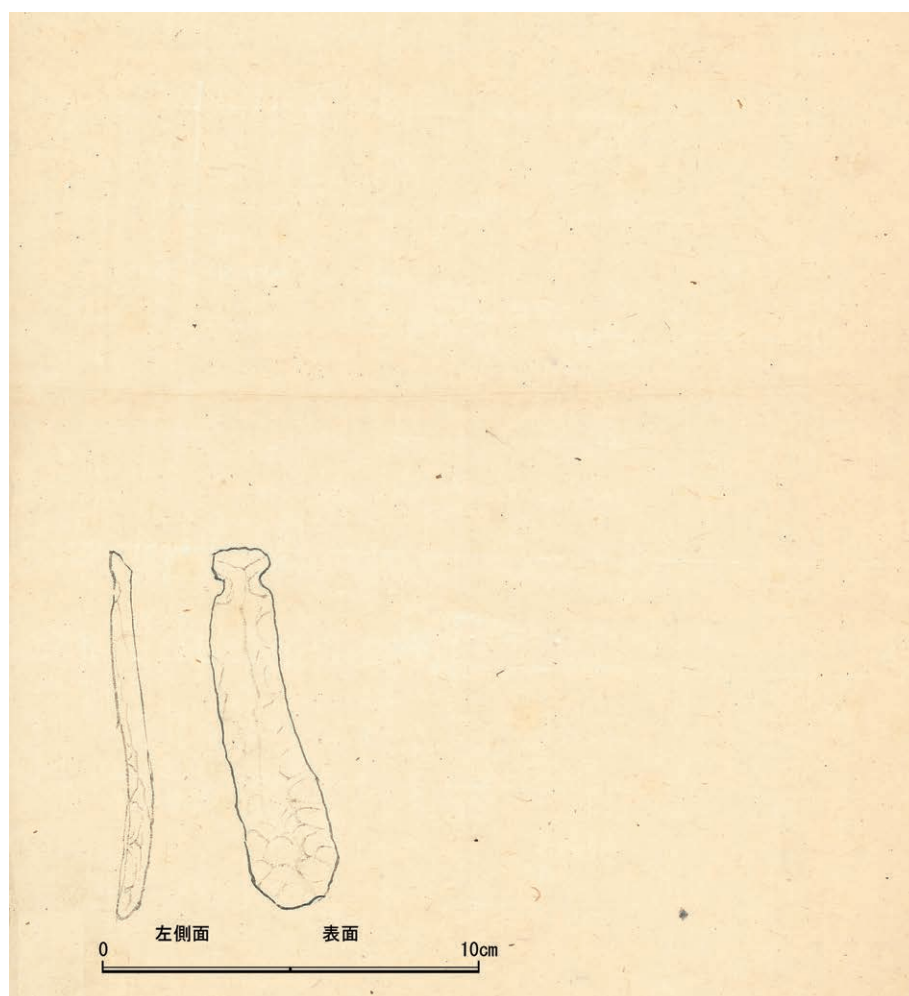
247



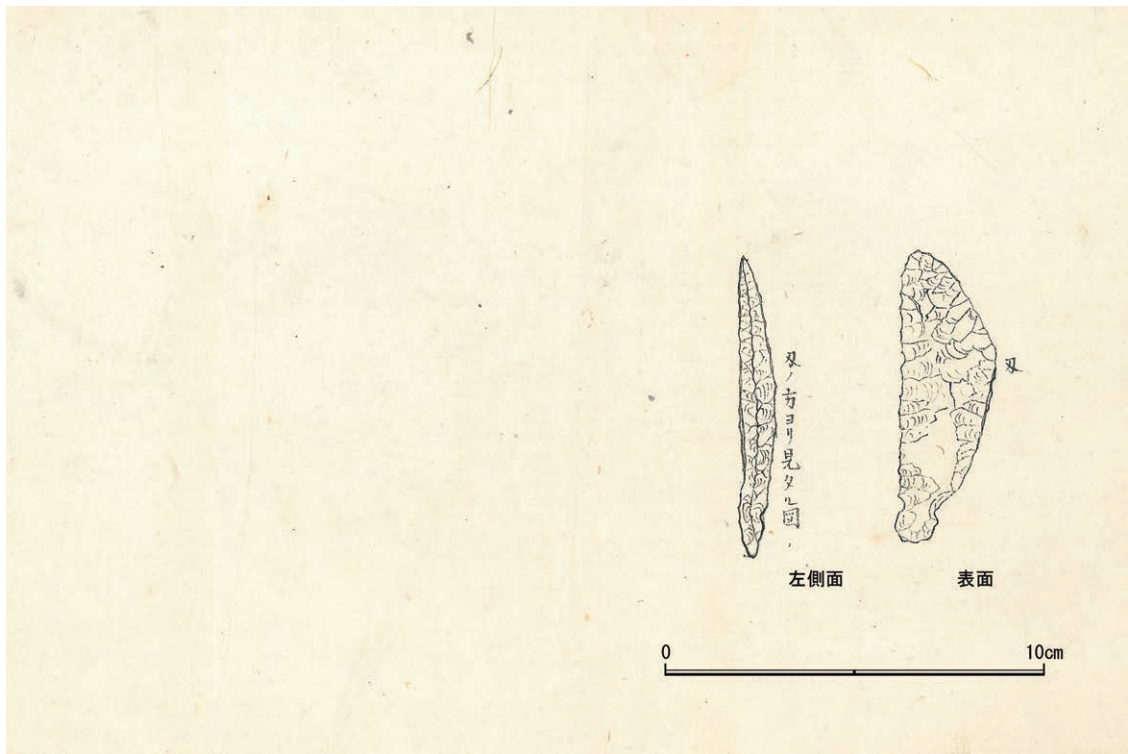
248



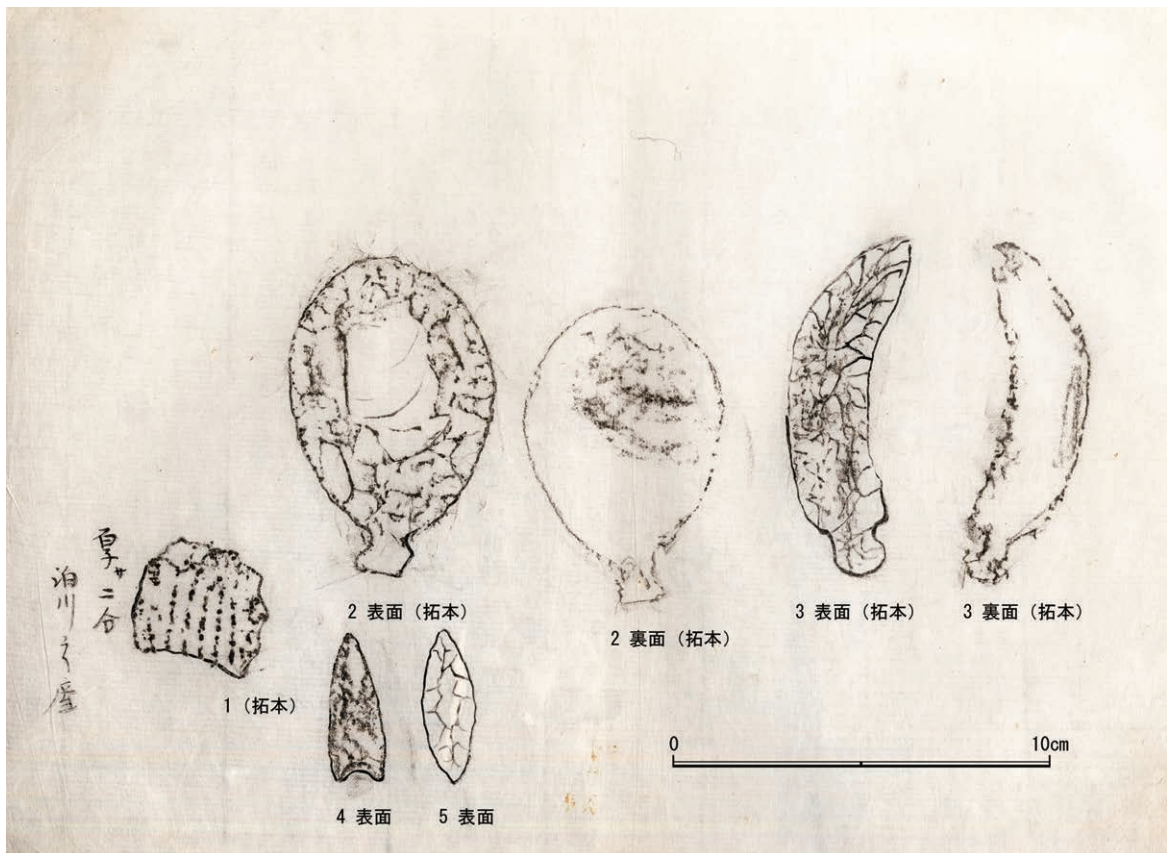
249



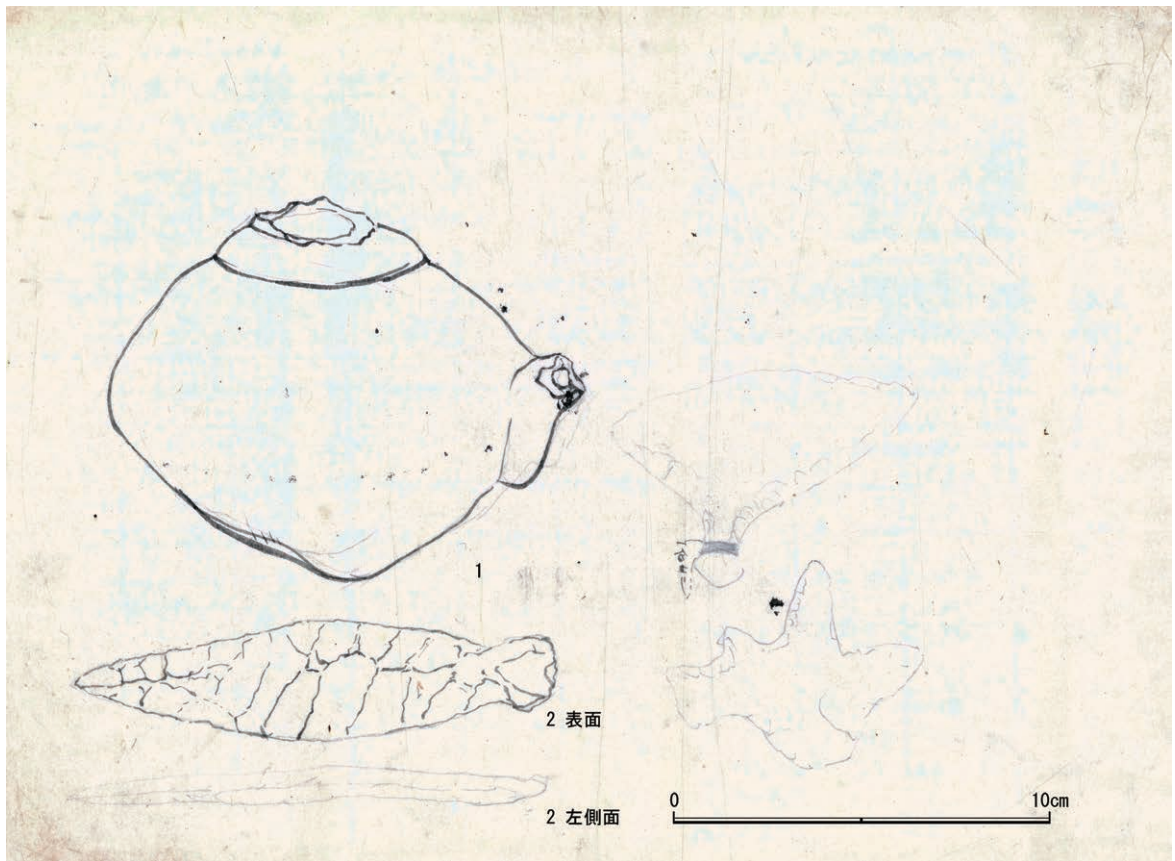
250



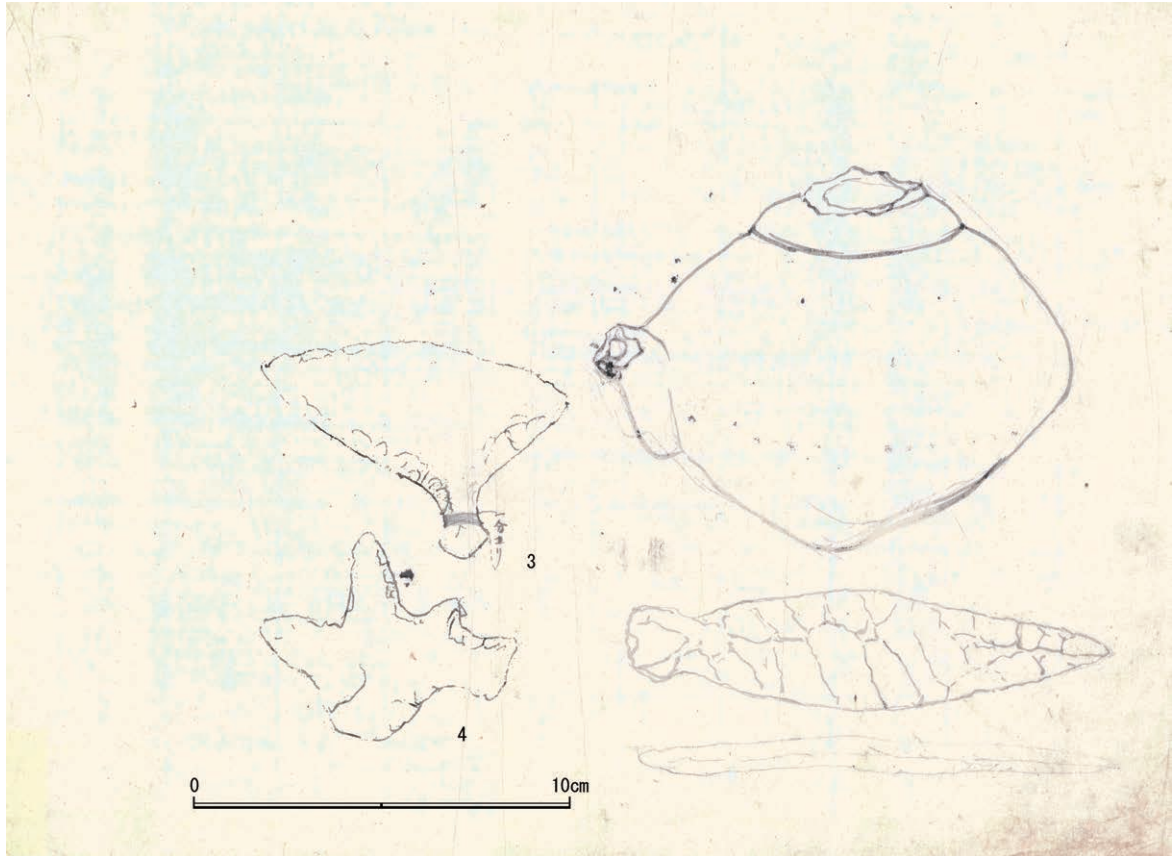
251



252



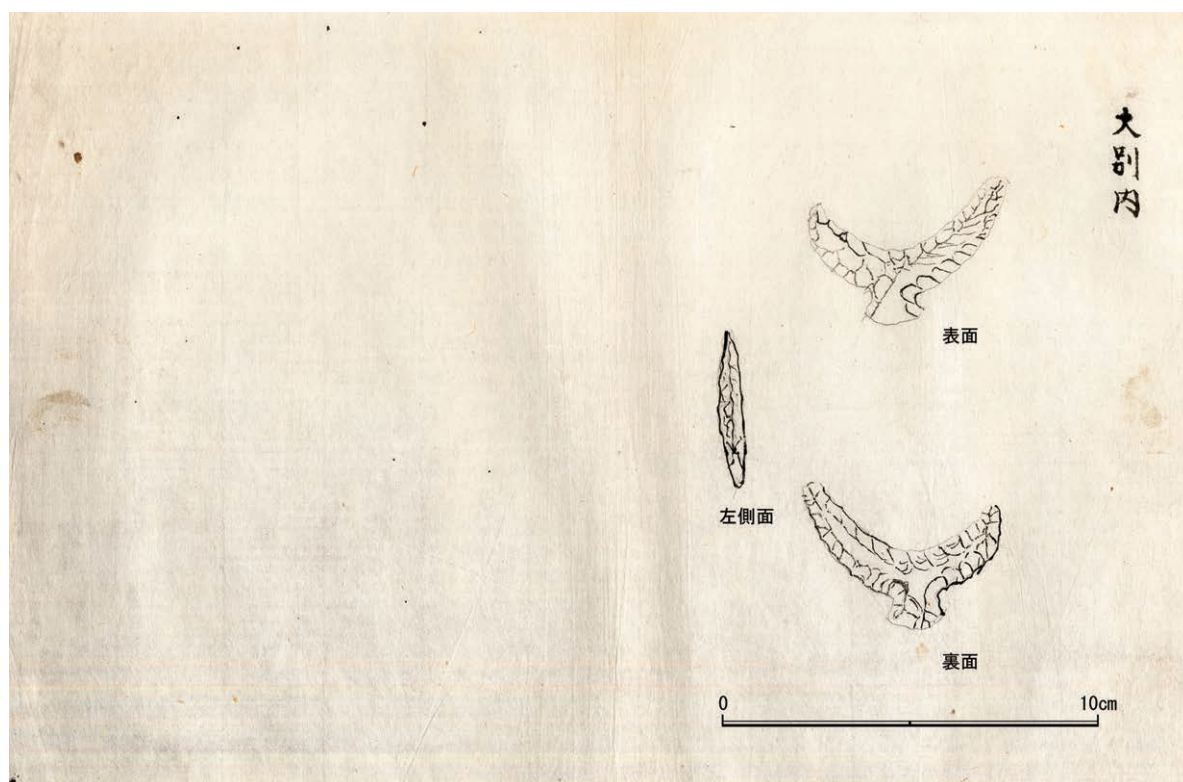
253表



253裏



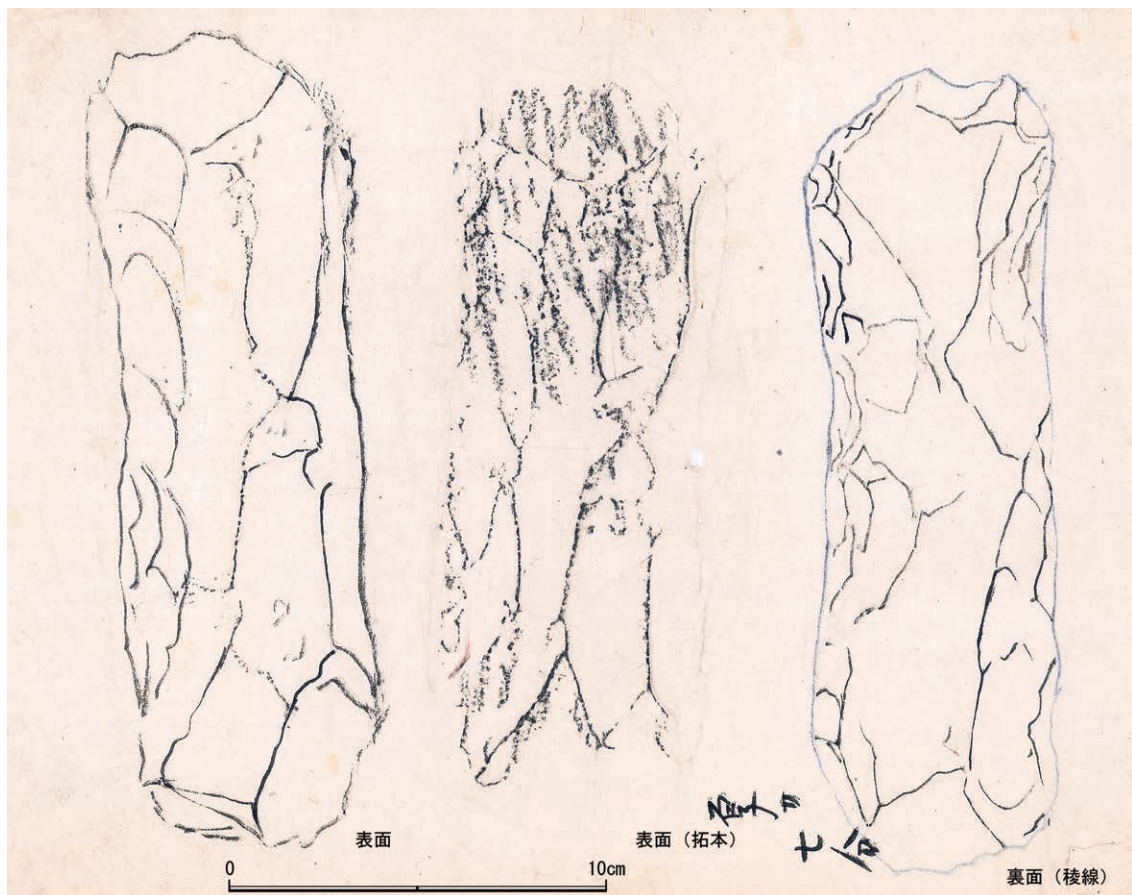
254



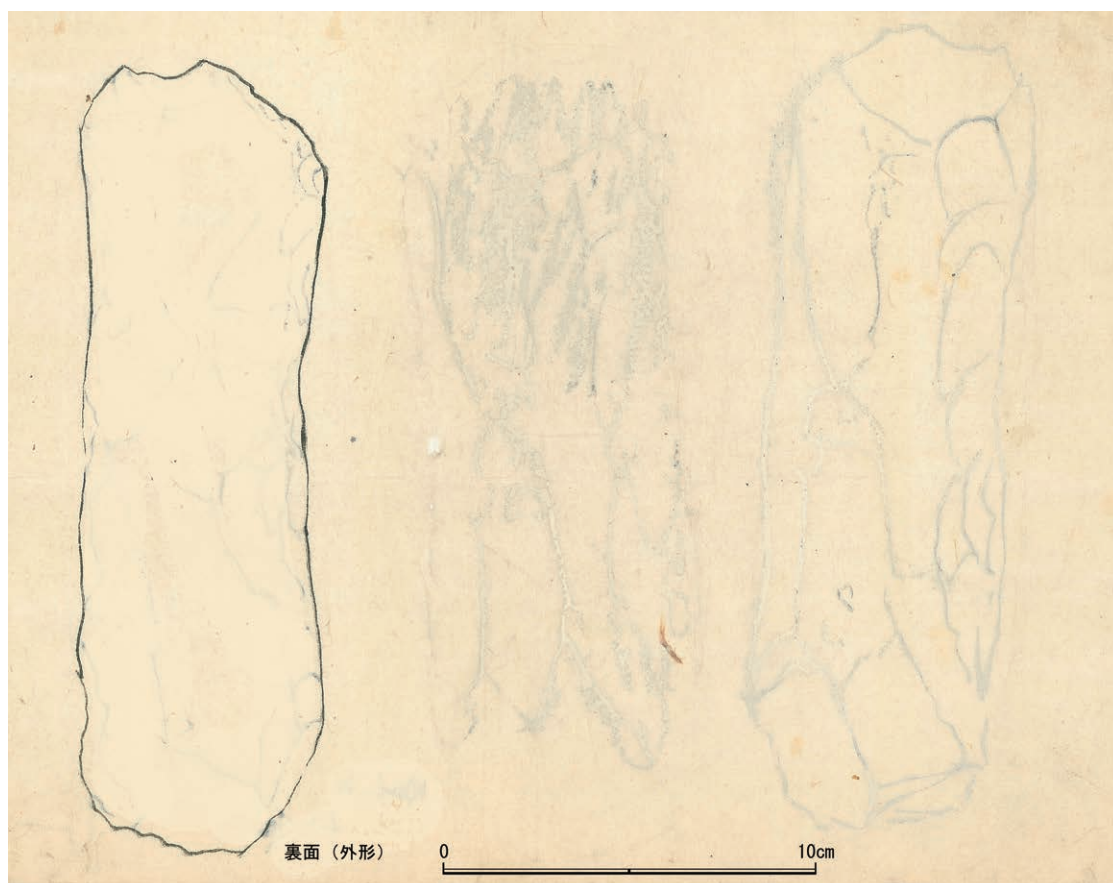
255



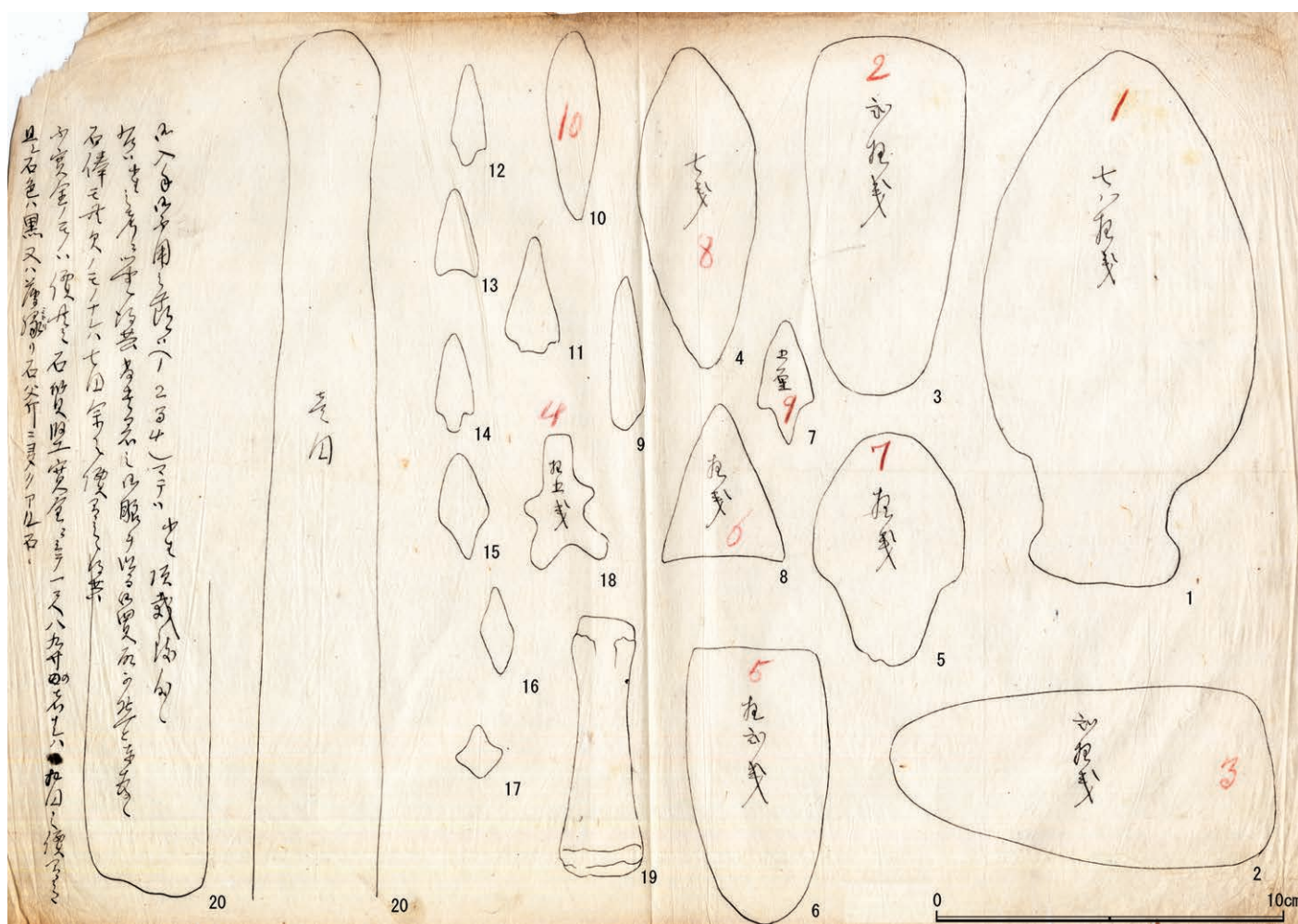
256



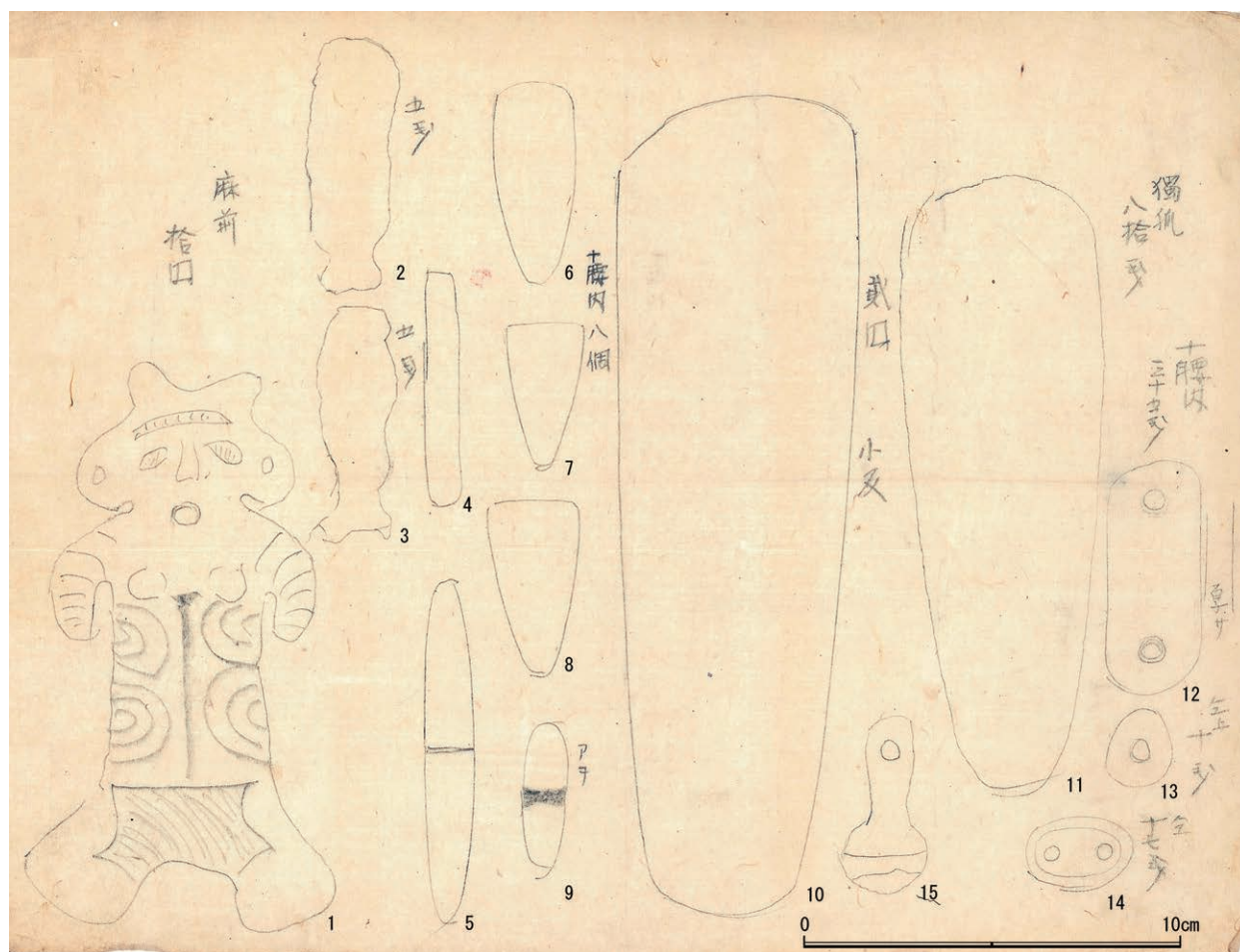
257表



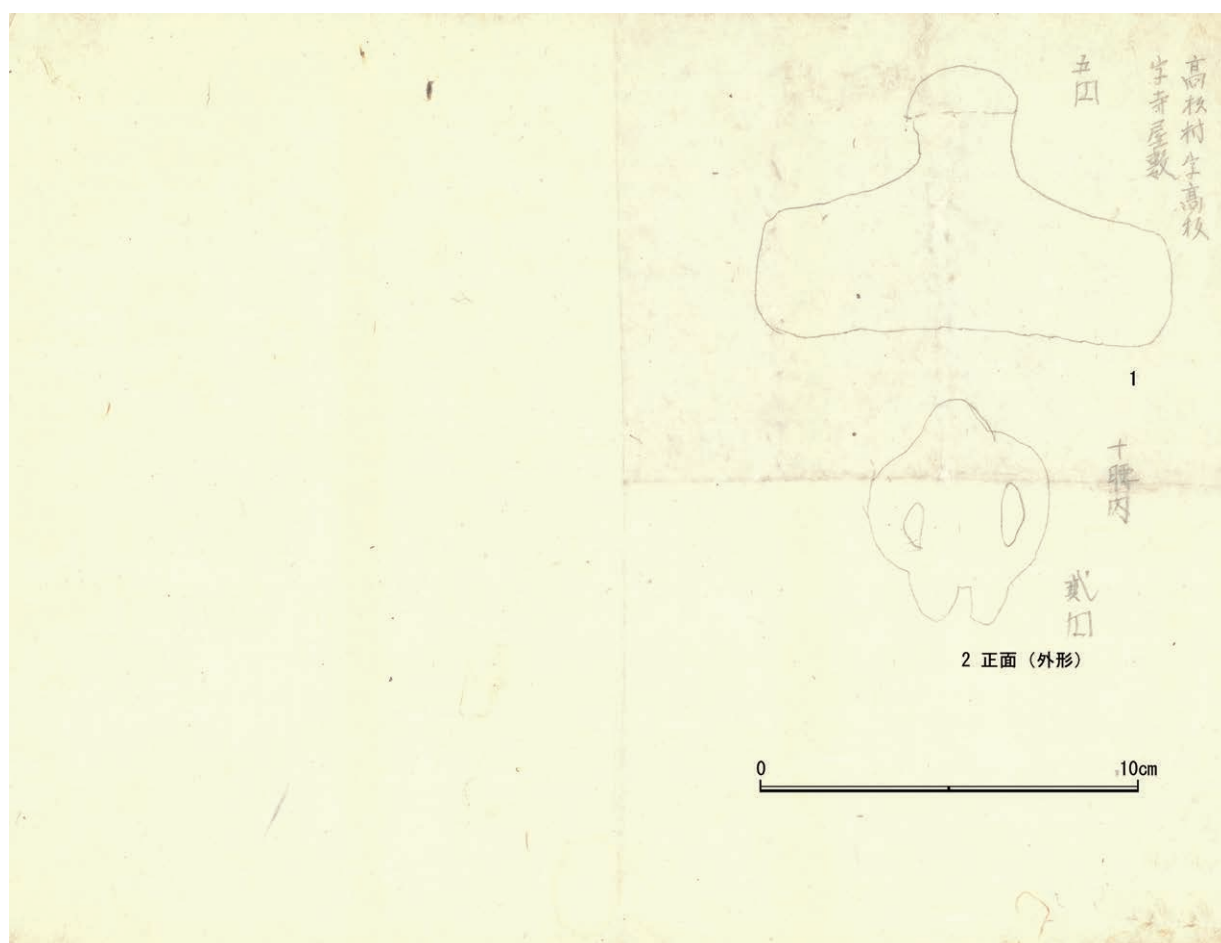
257裏



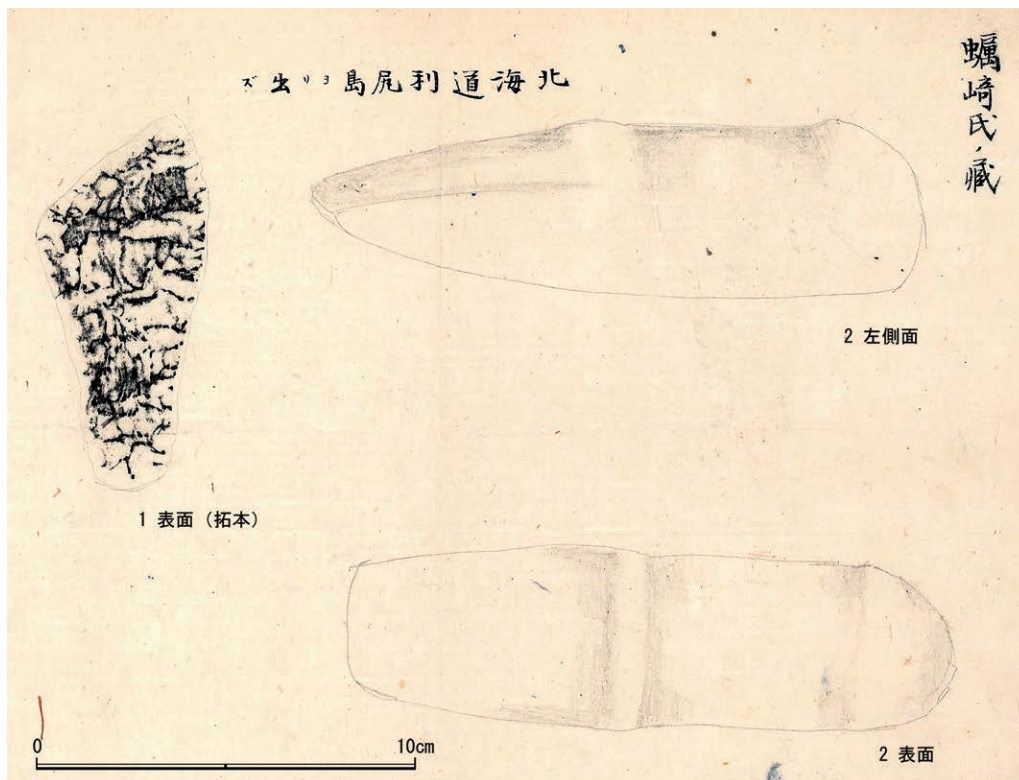
258



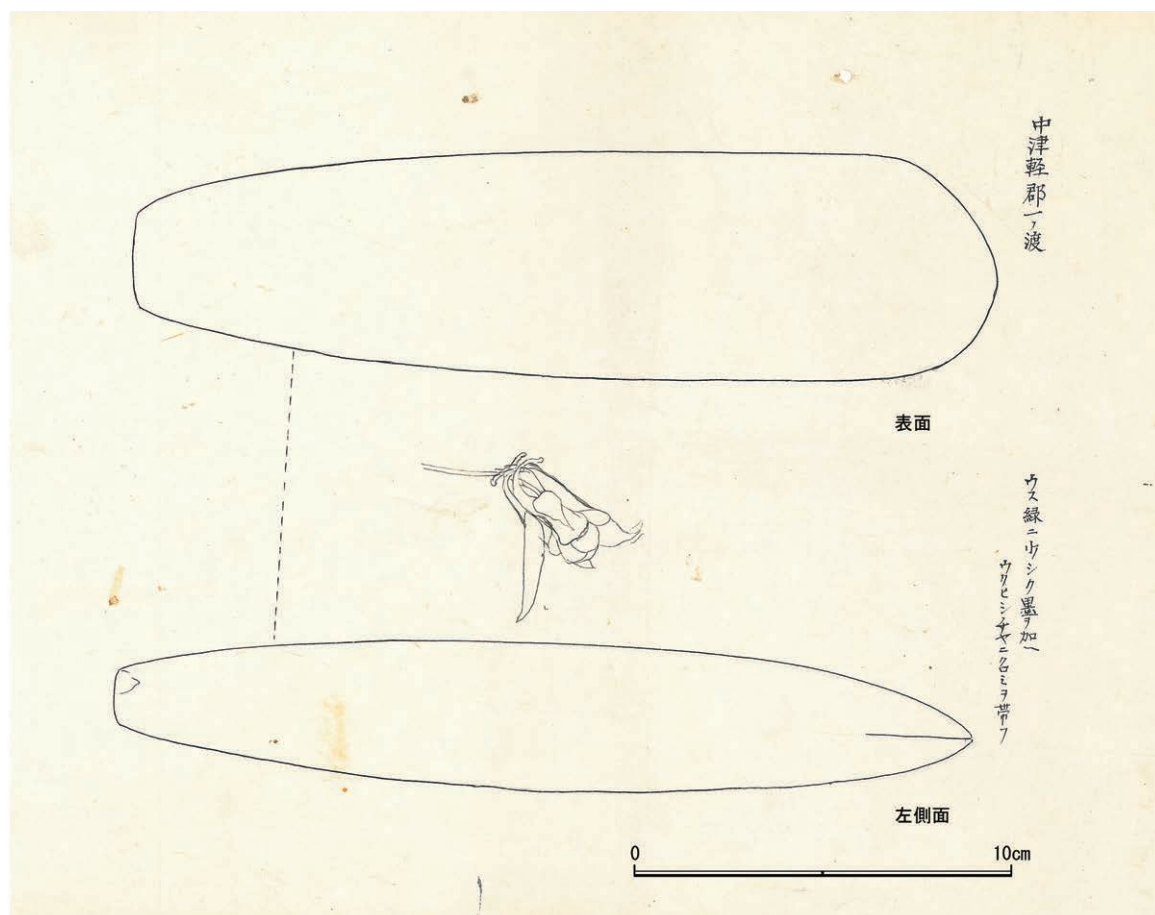
259



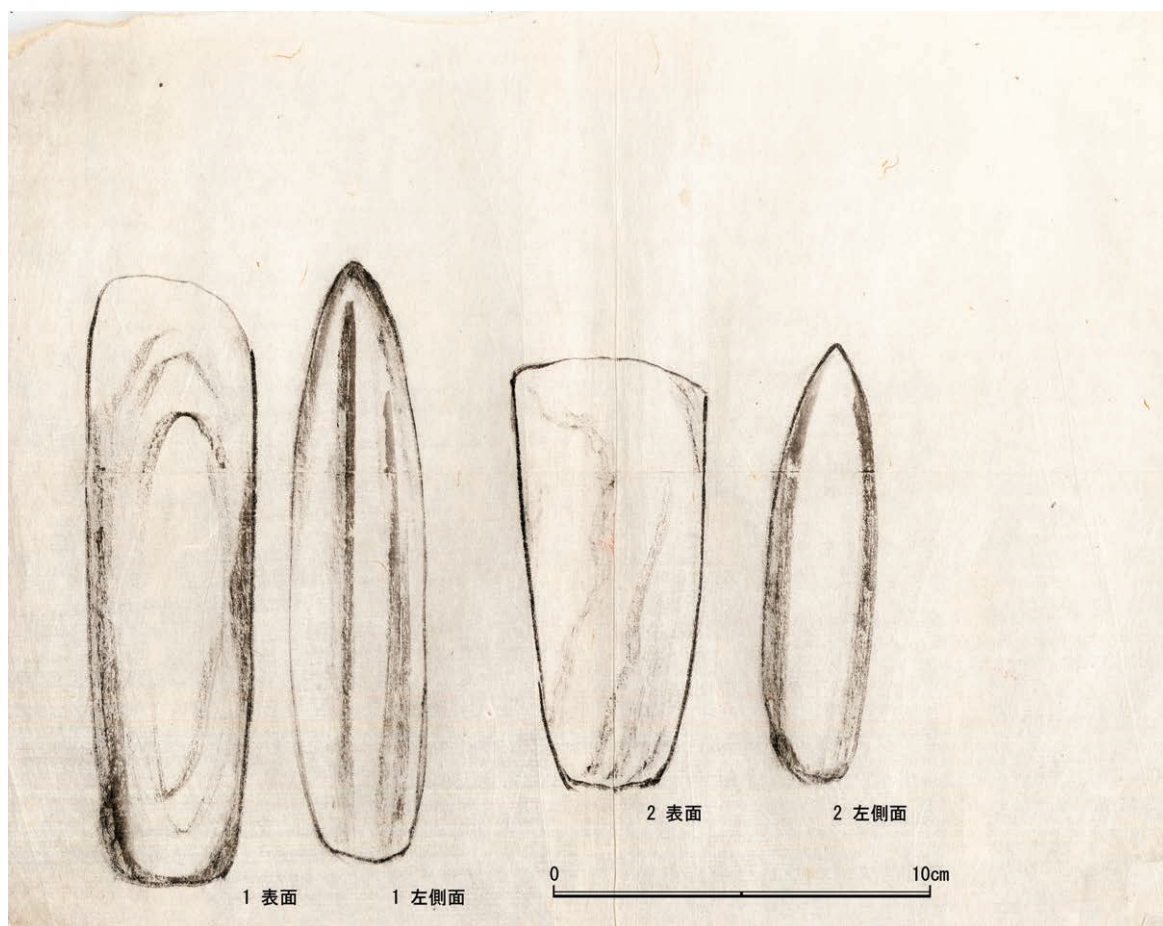
260



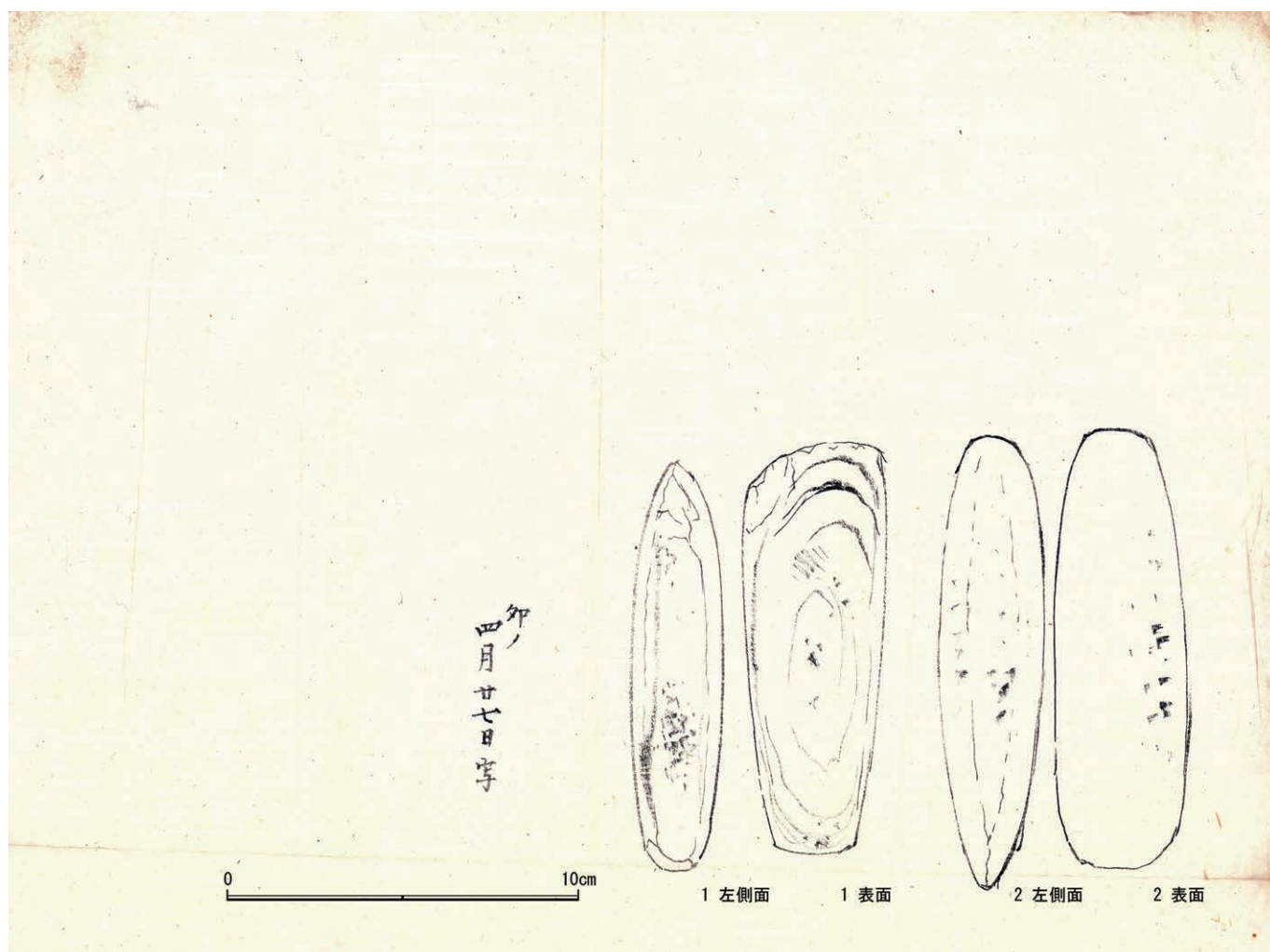
261



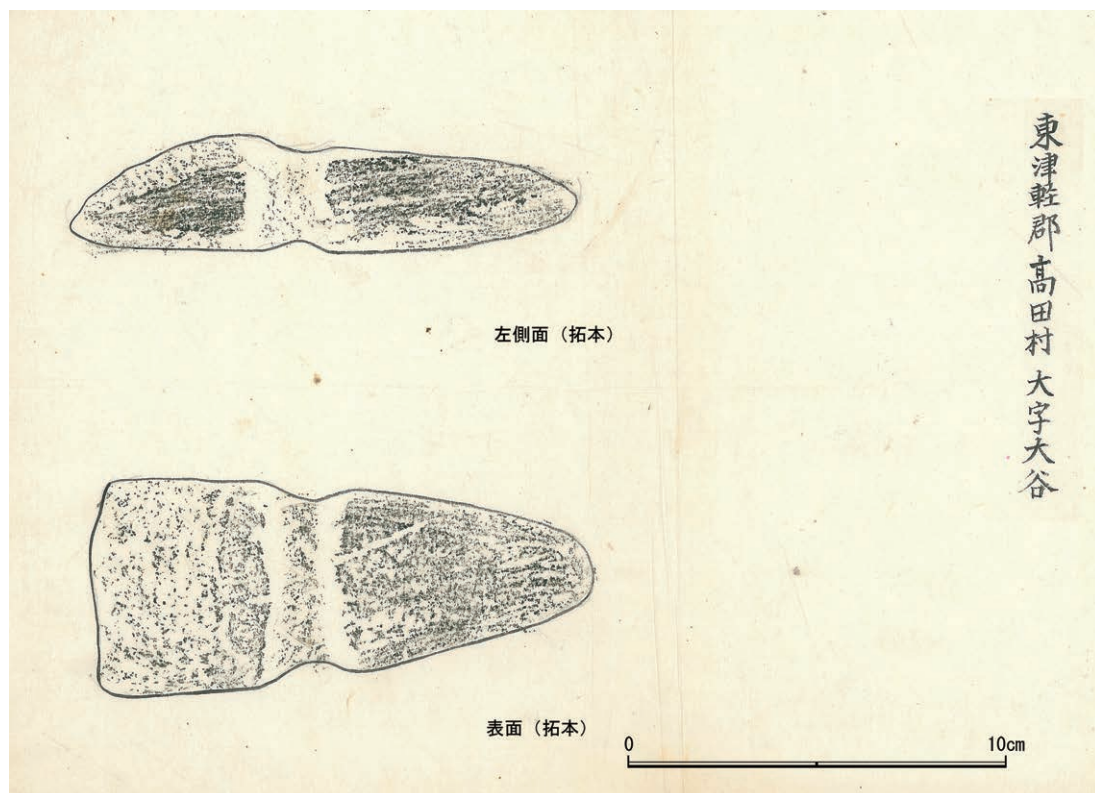
262



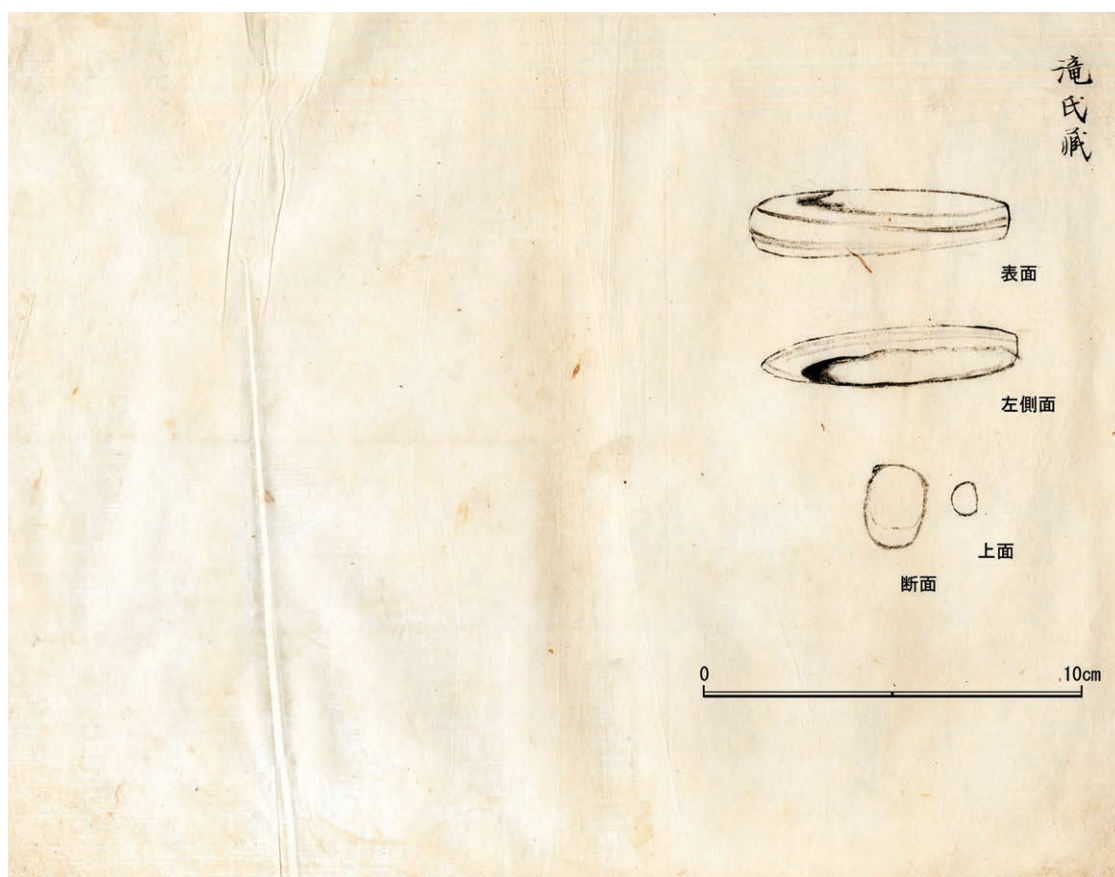
263



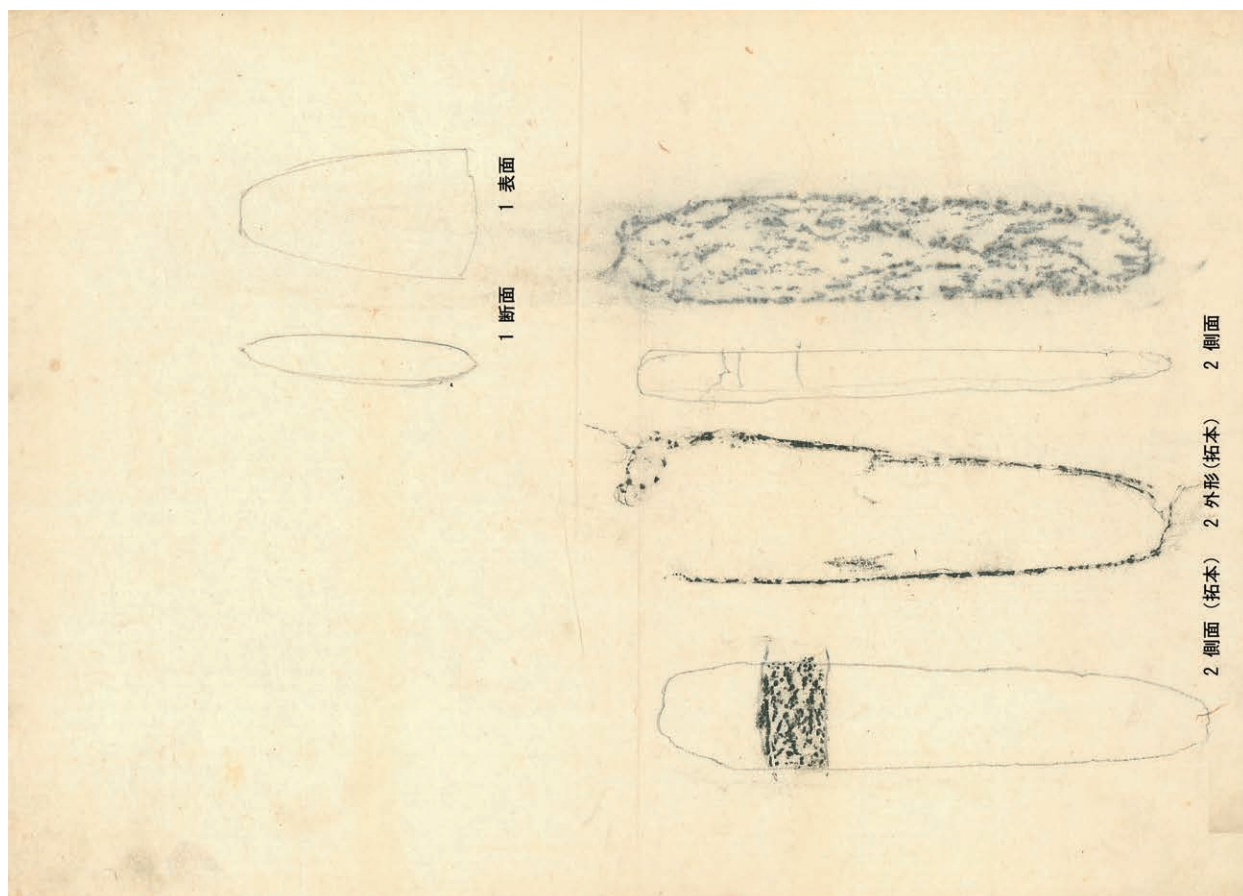
264



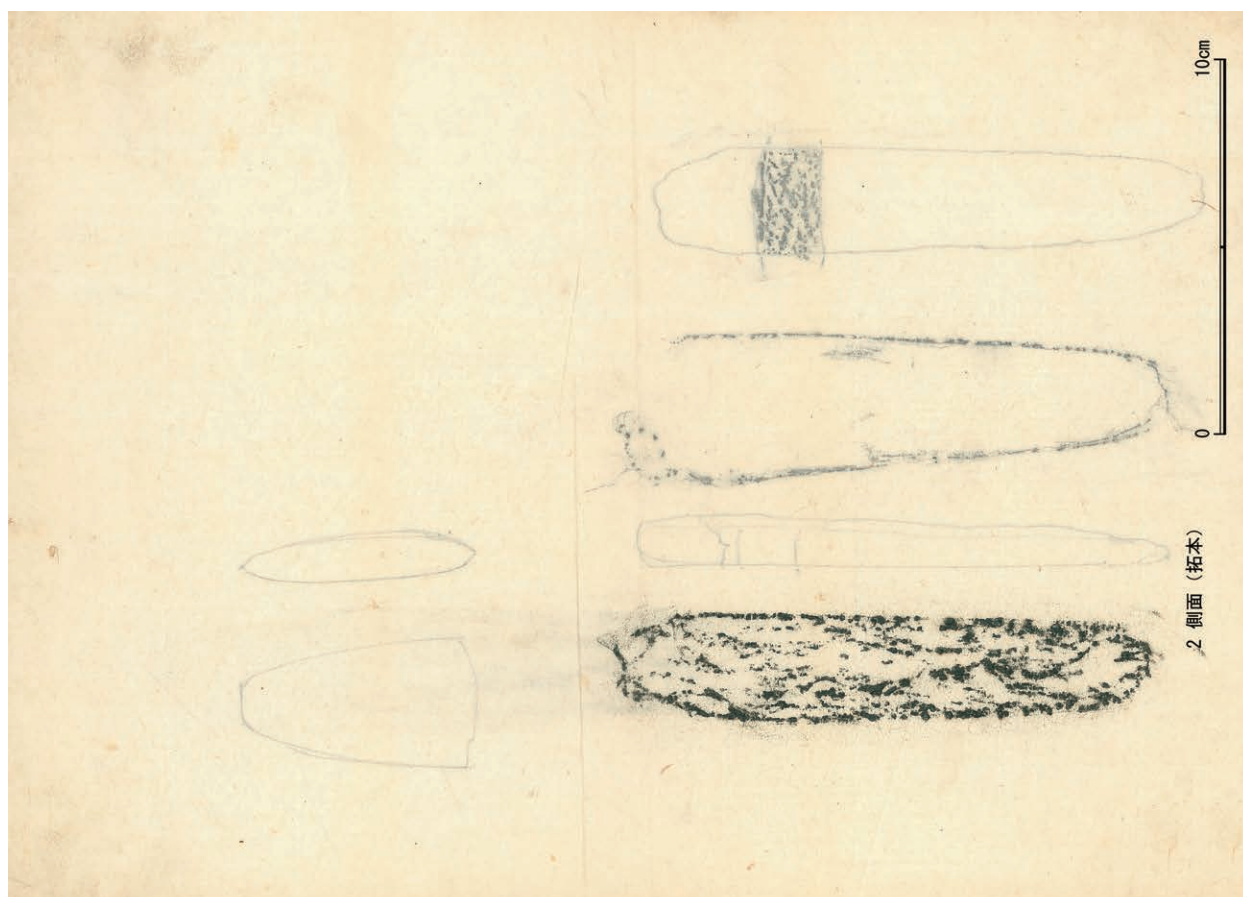
265



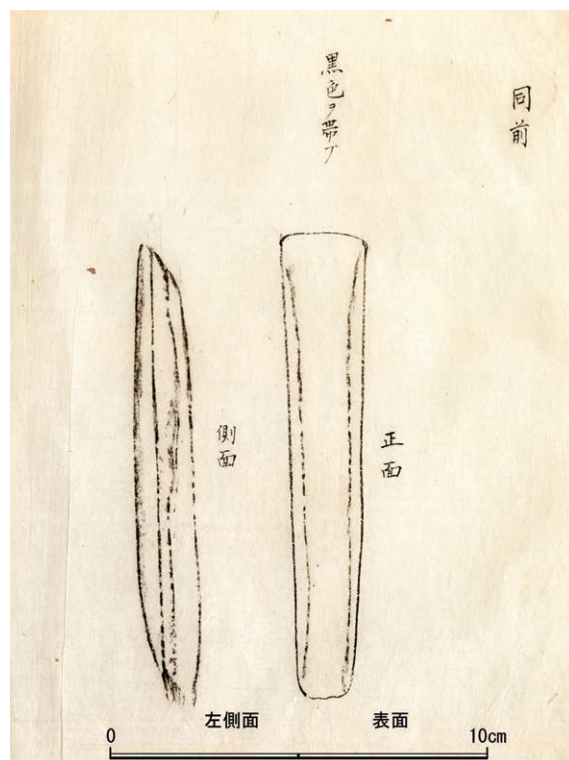
267



266表



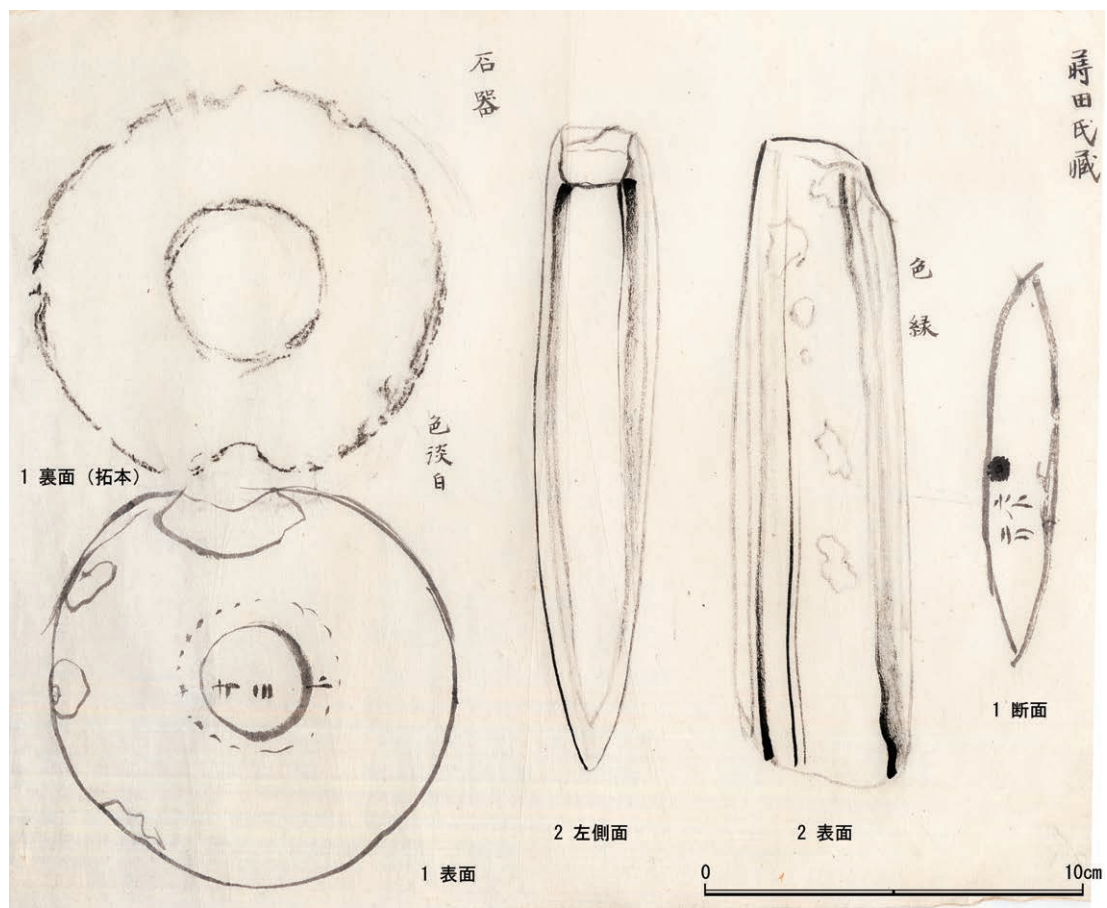
266裏



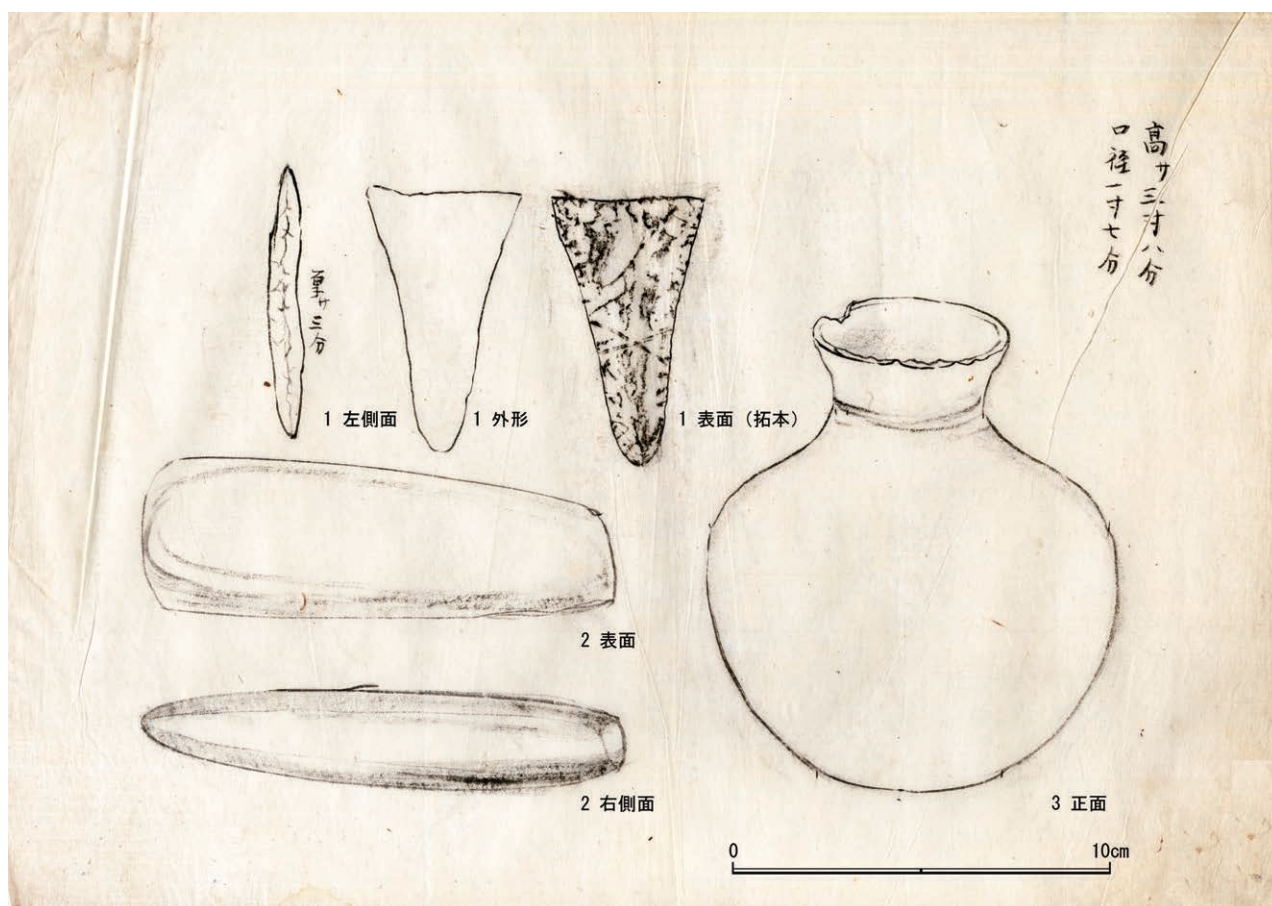
268



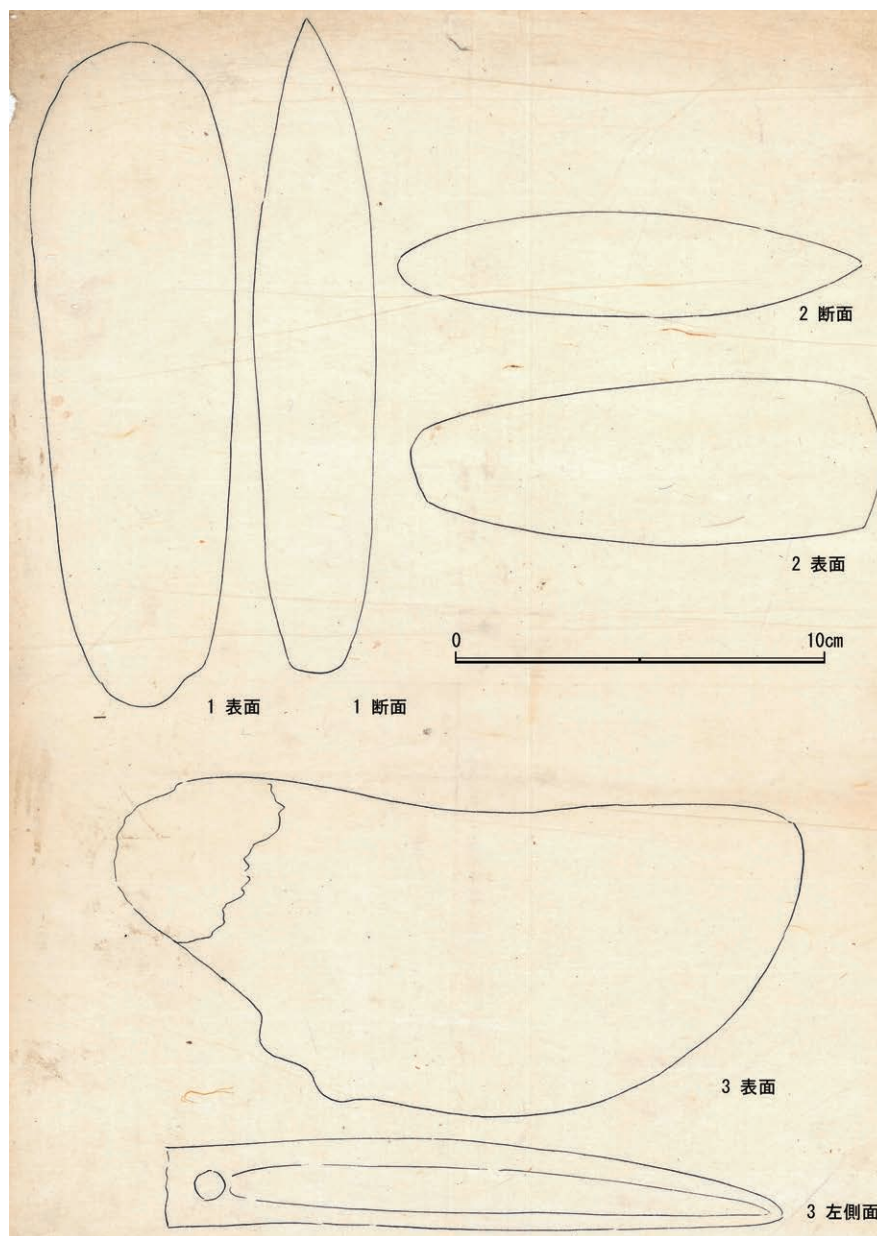
269



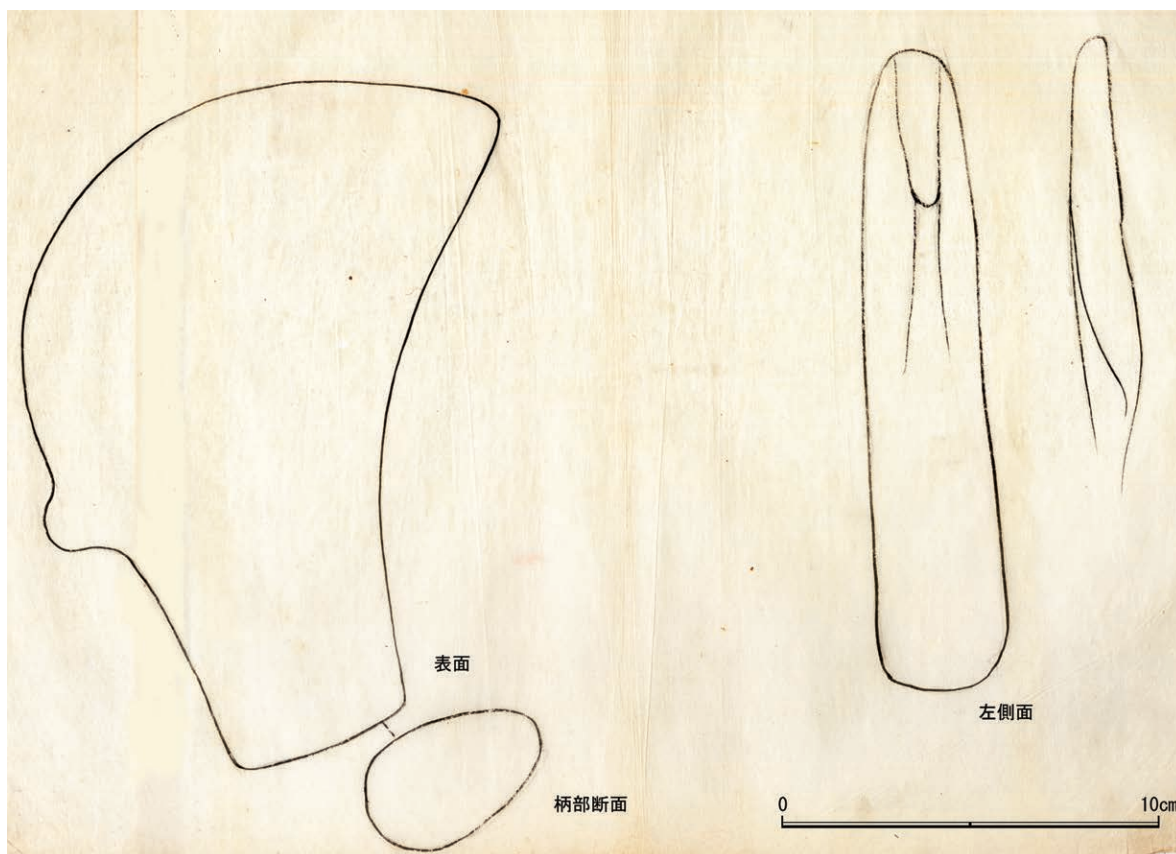
270



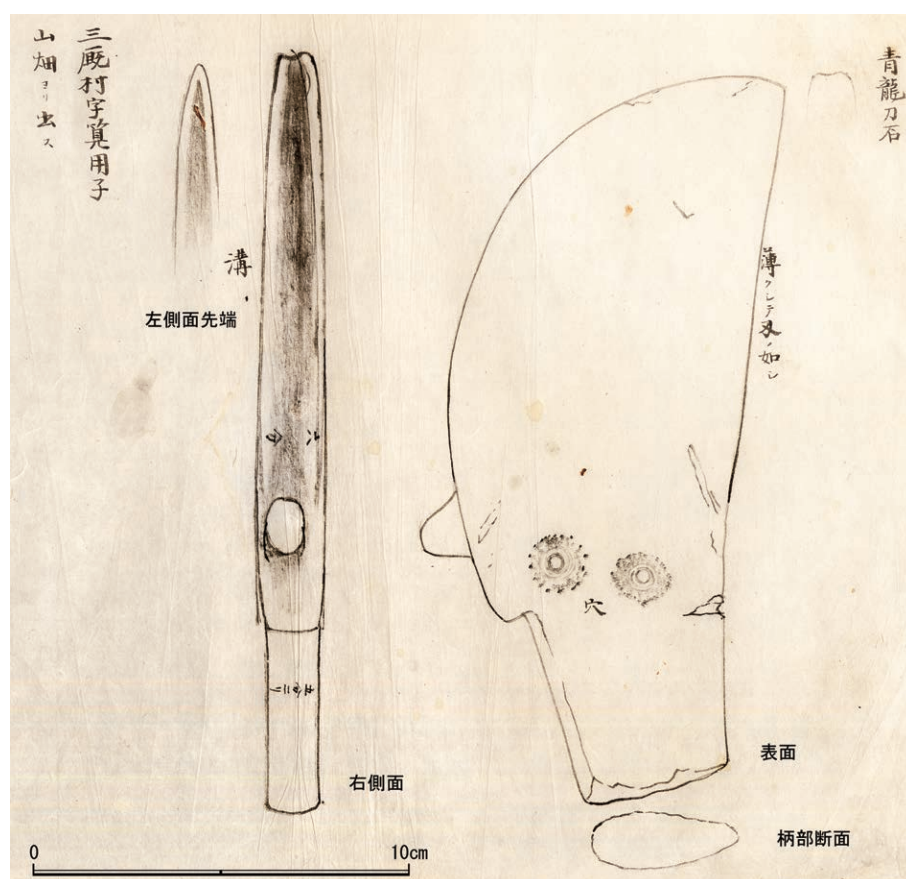
271



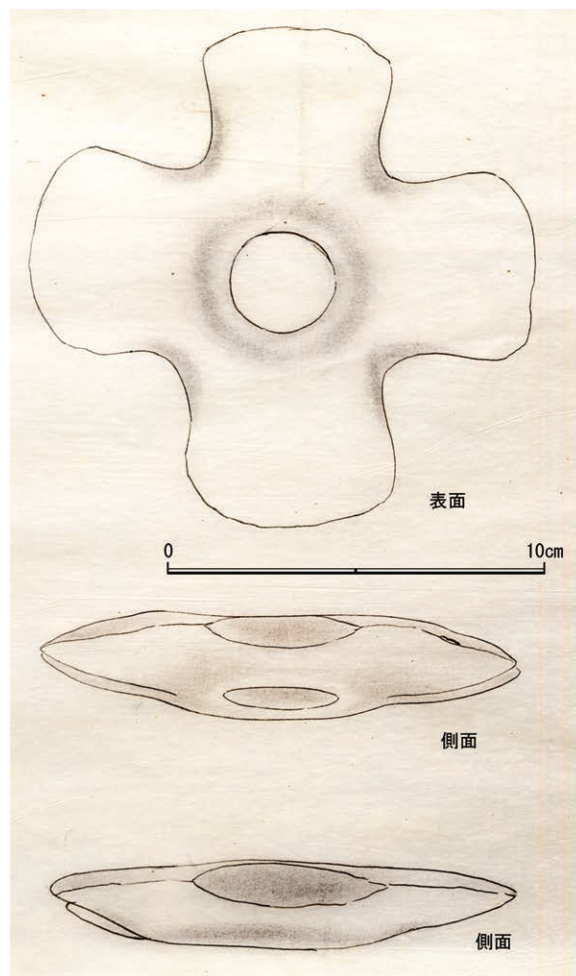
272



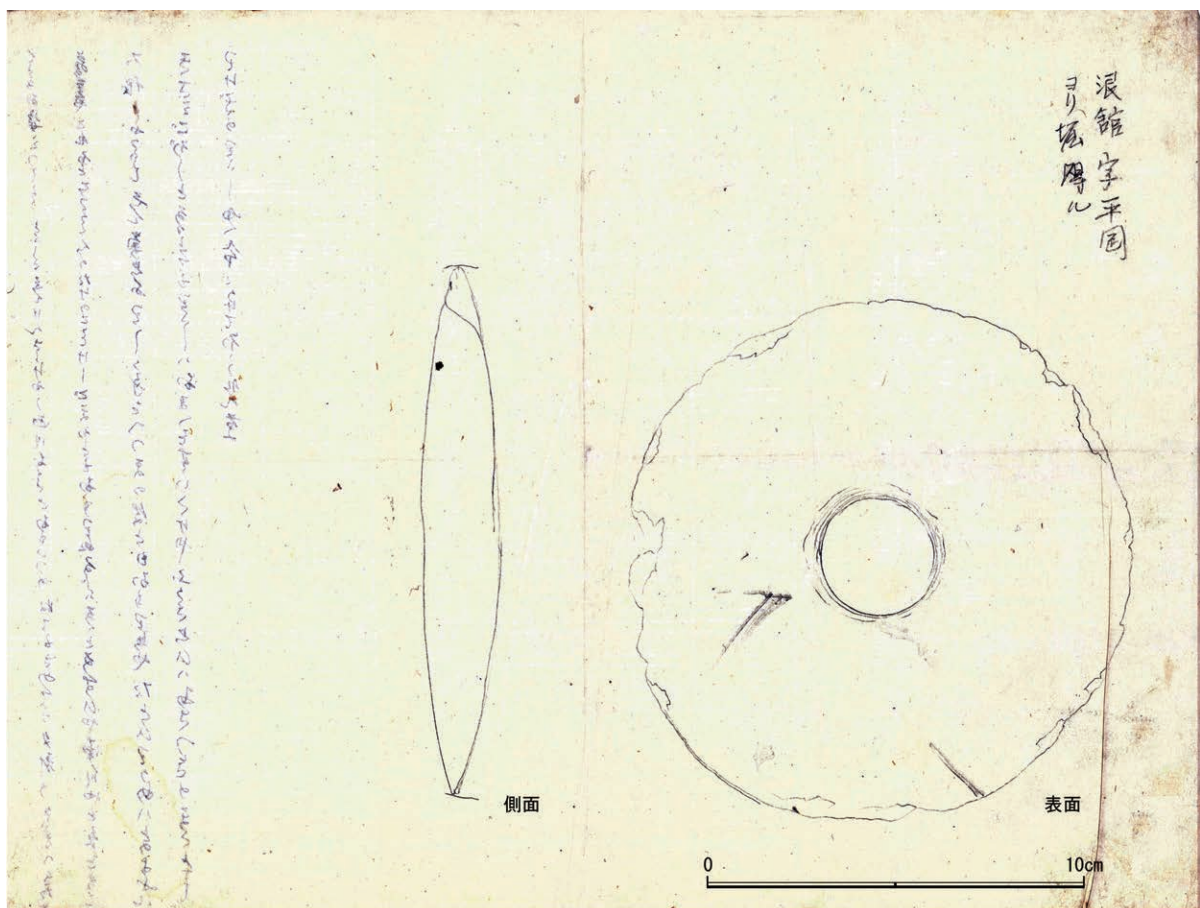
273



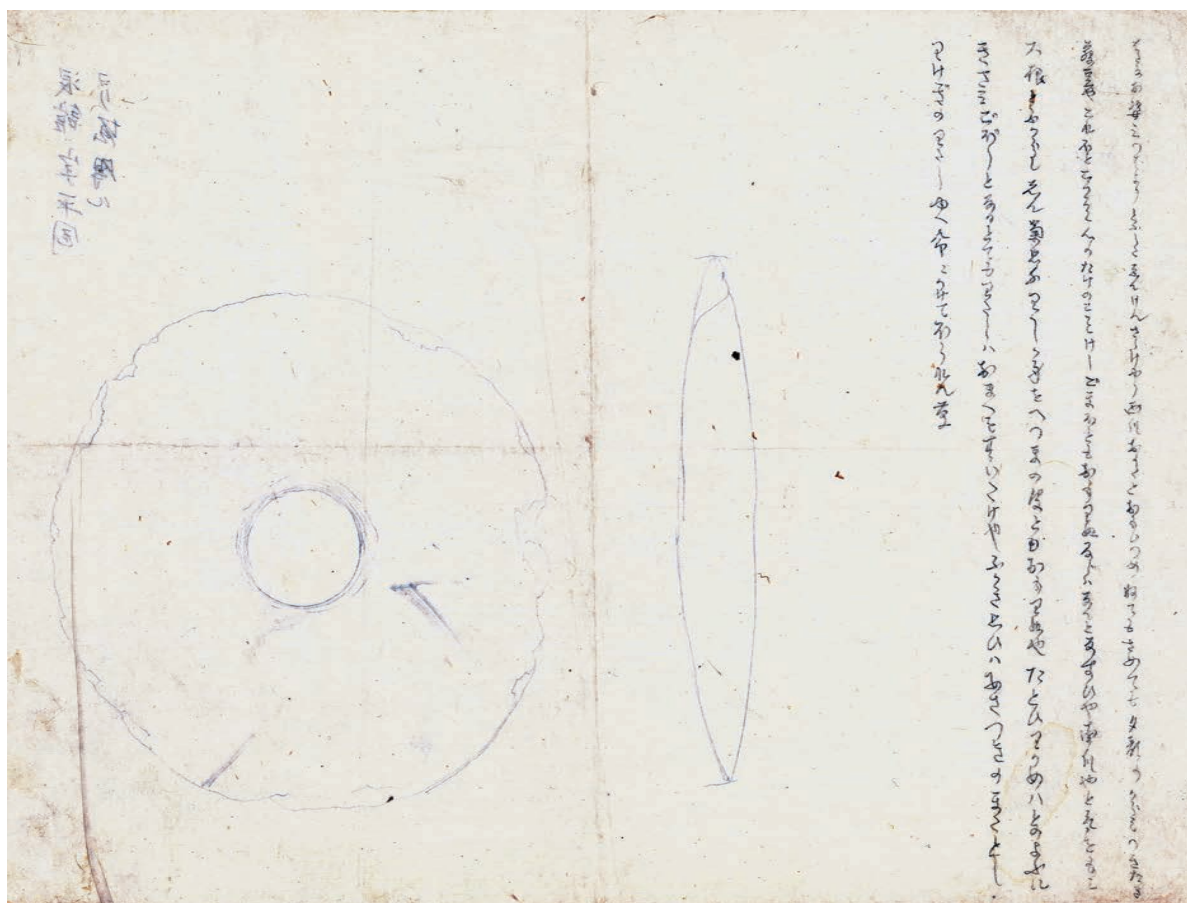
274



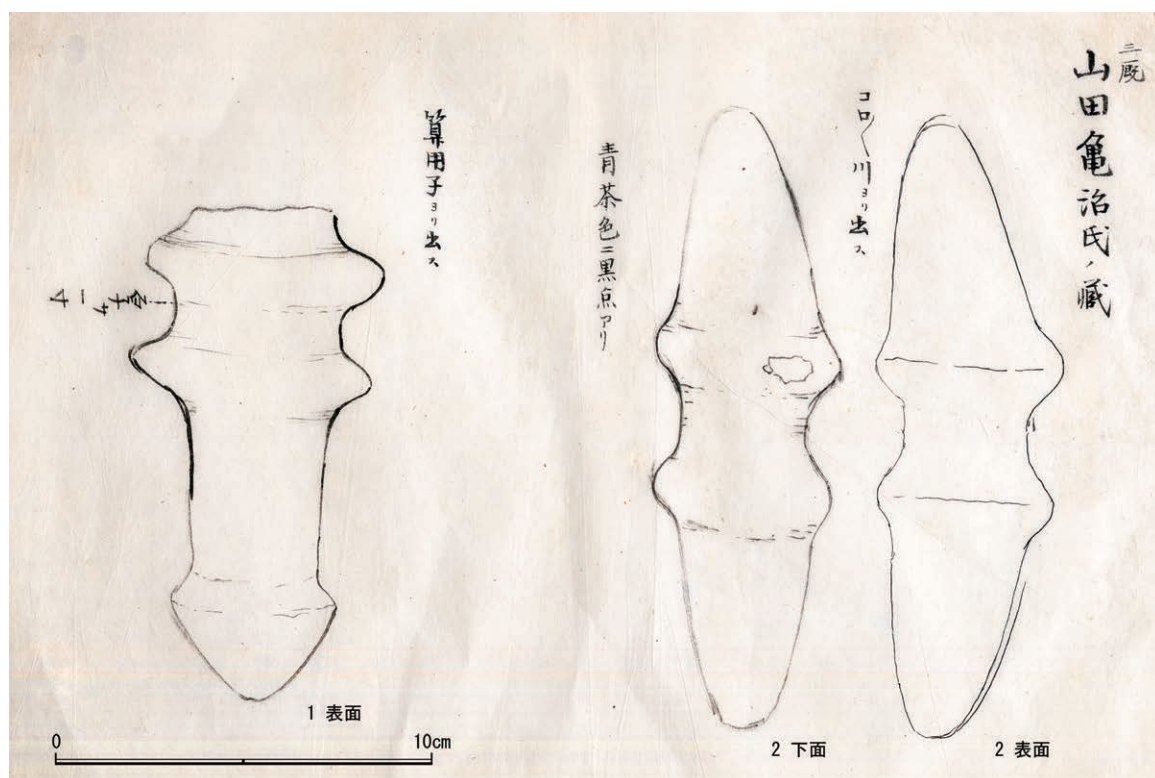
275



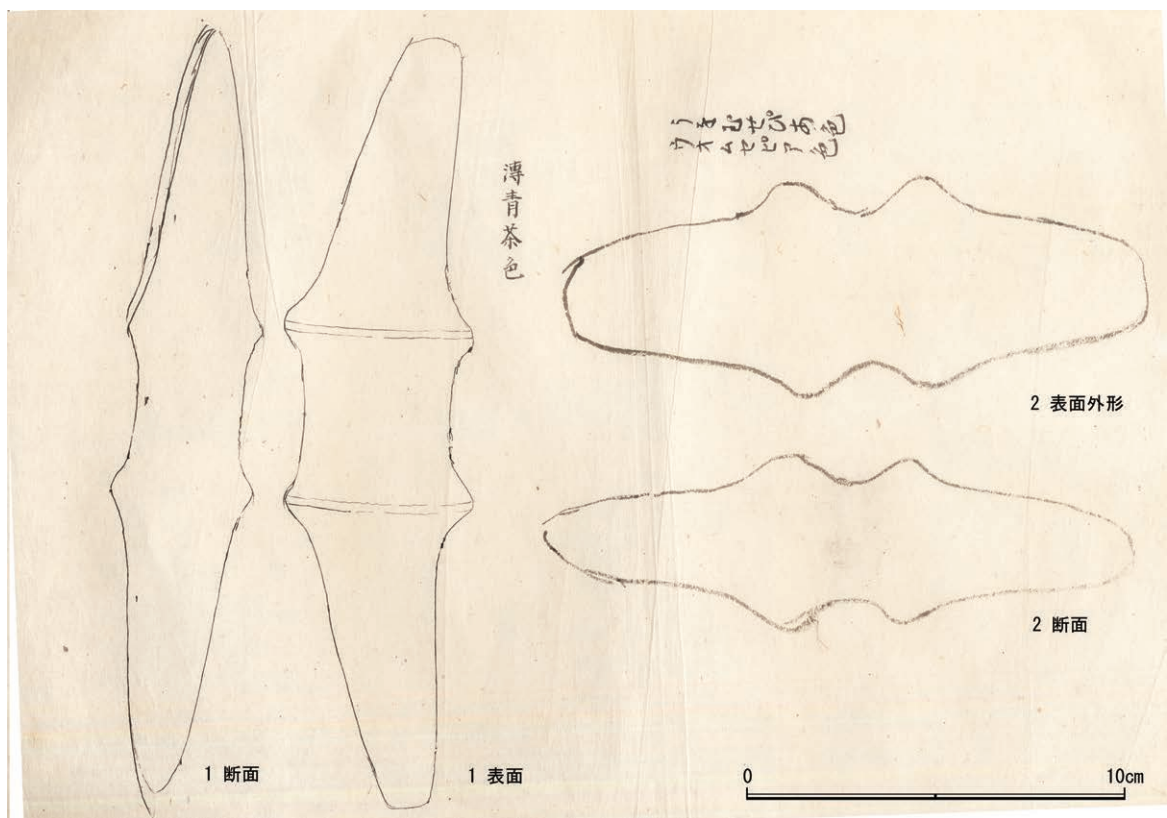
276表



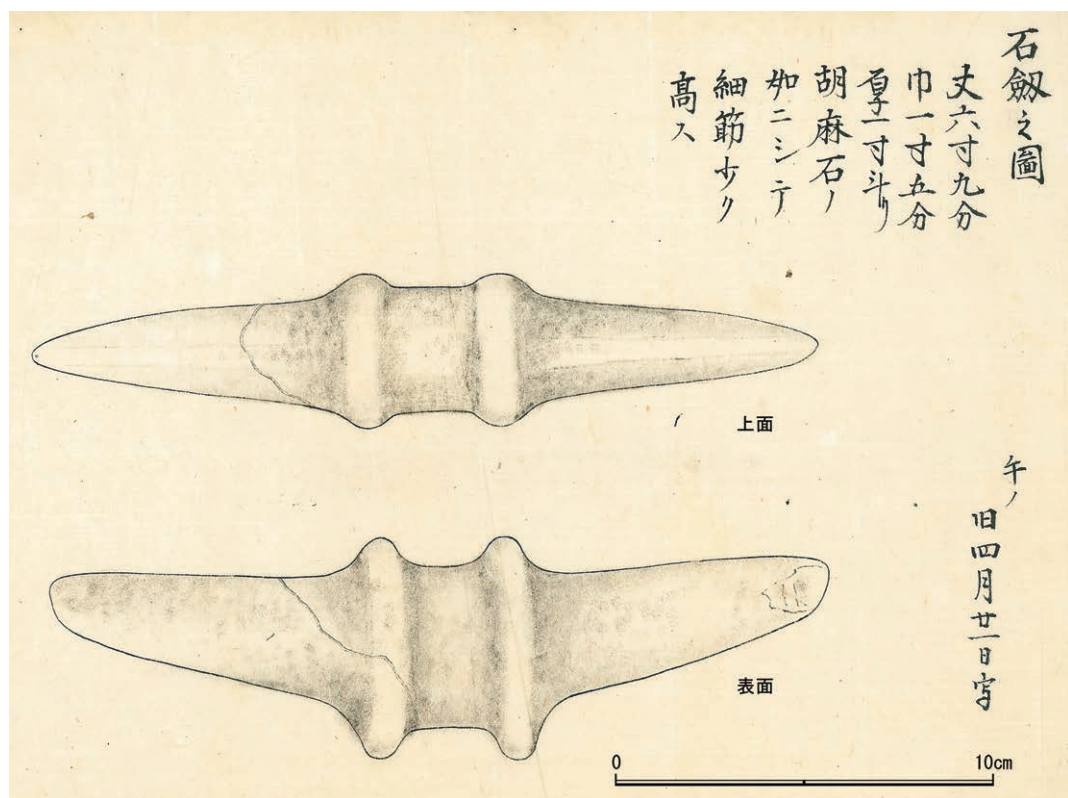
276裏



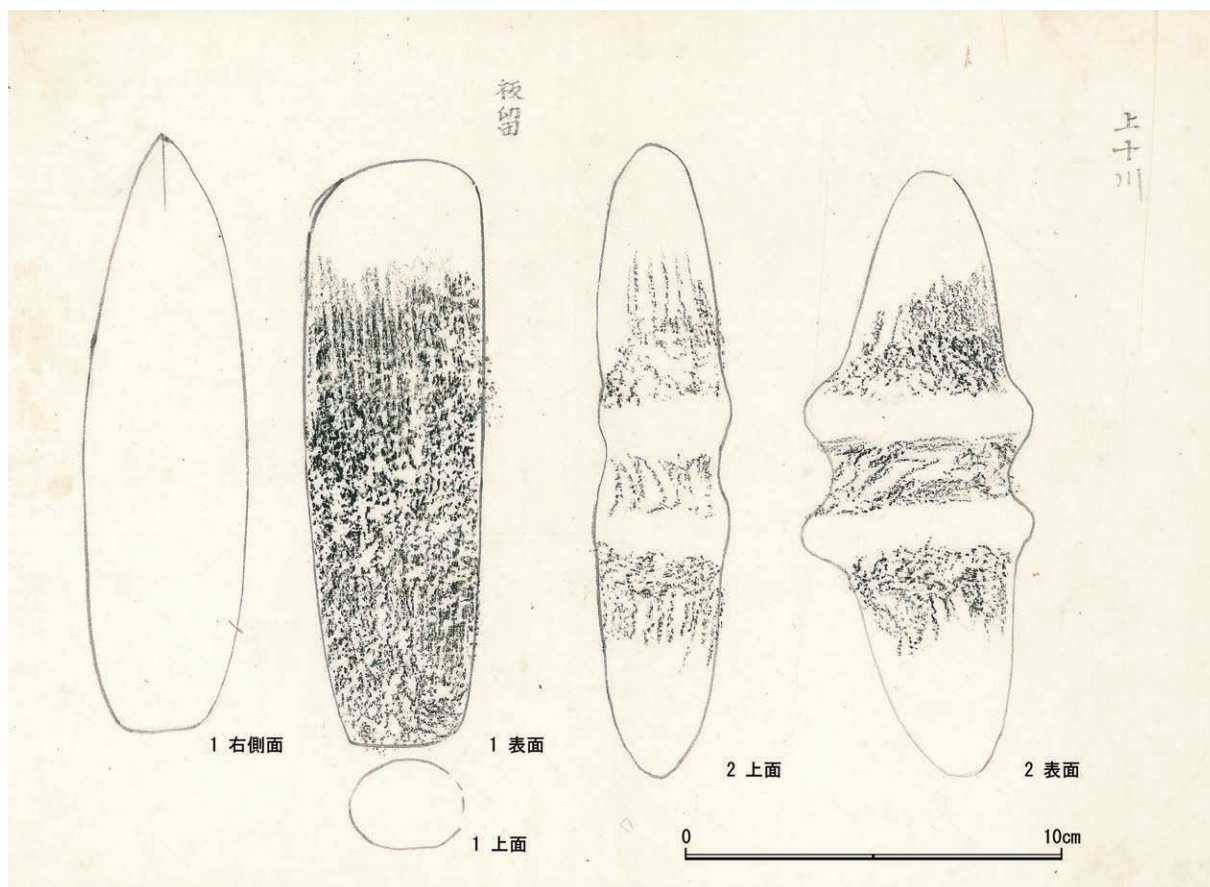
277



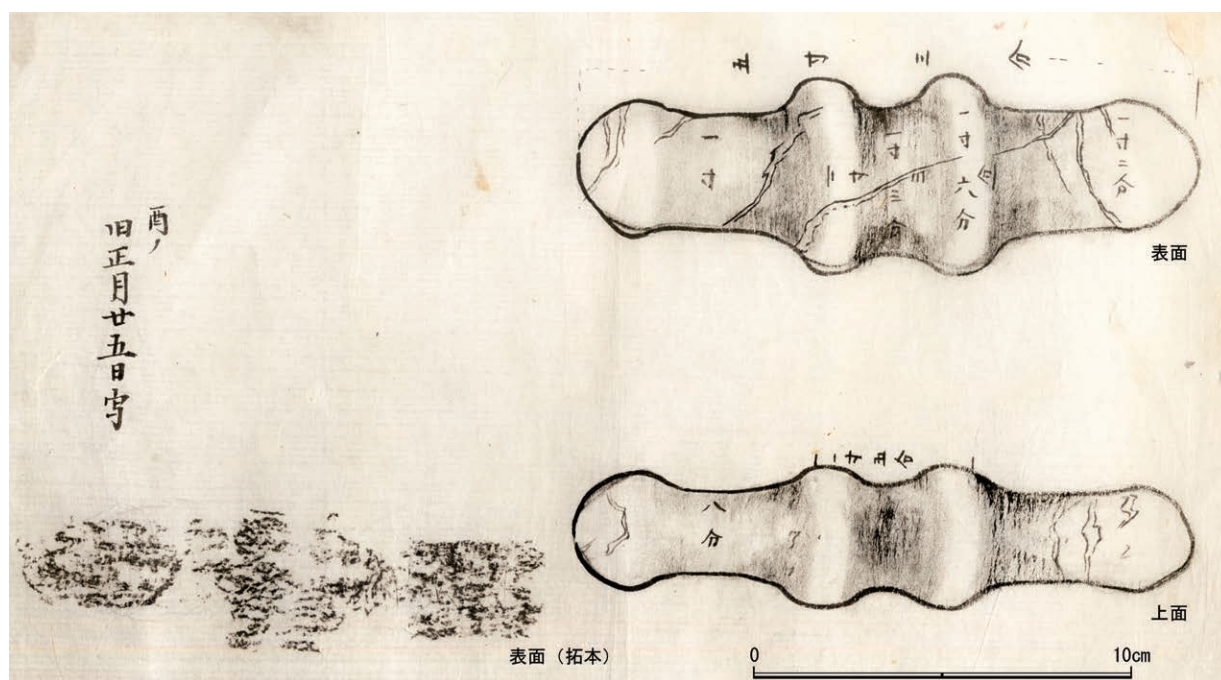
278



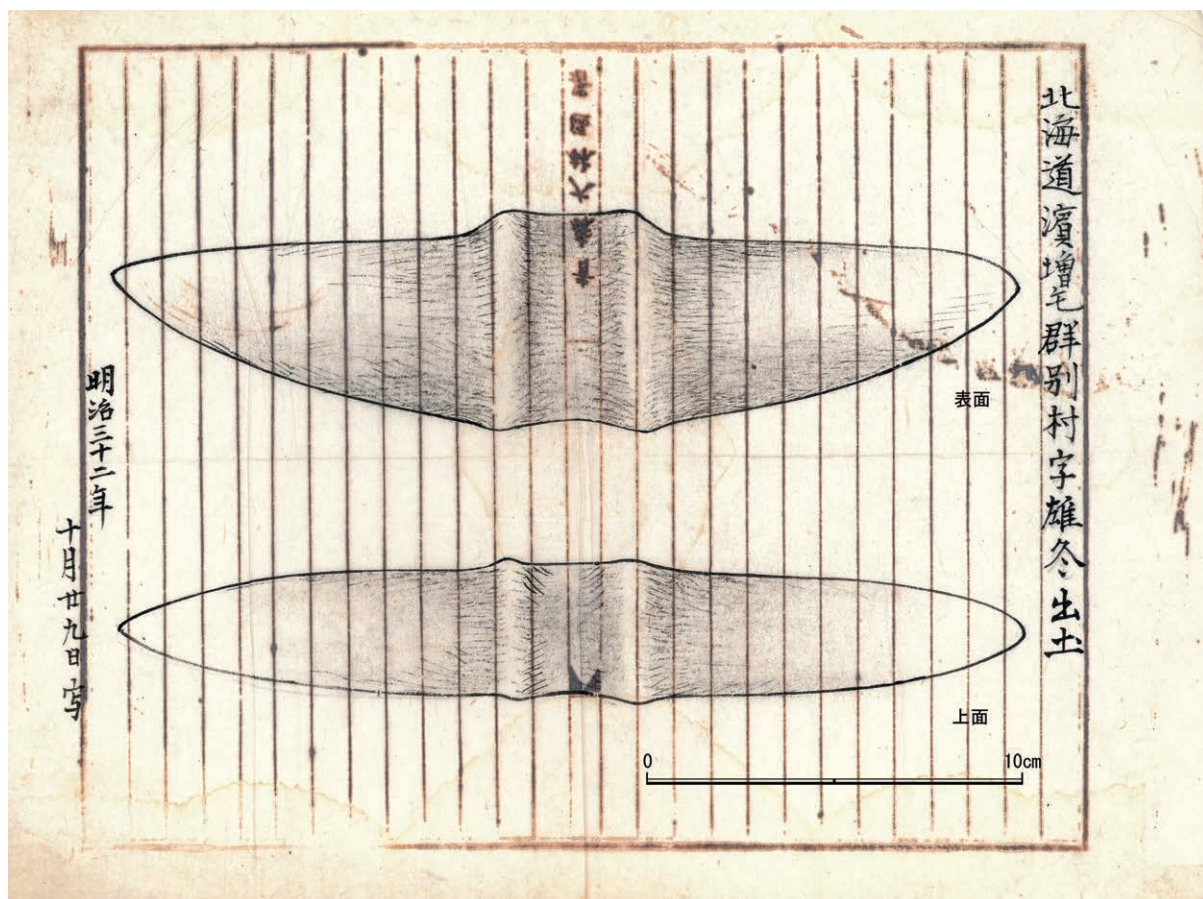
279



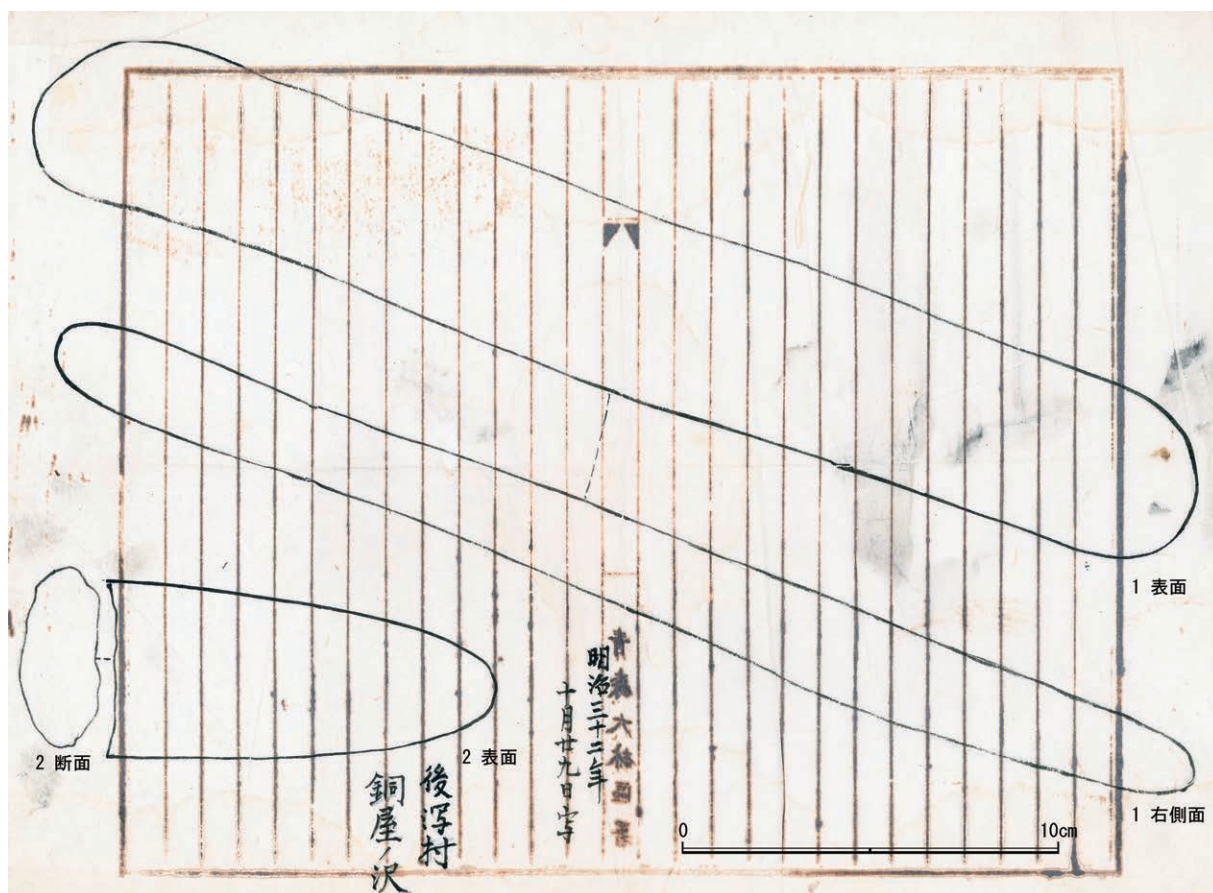
280



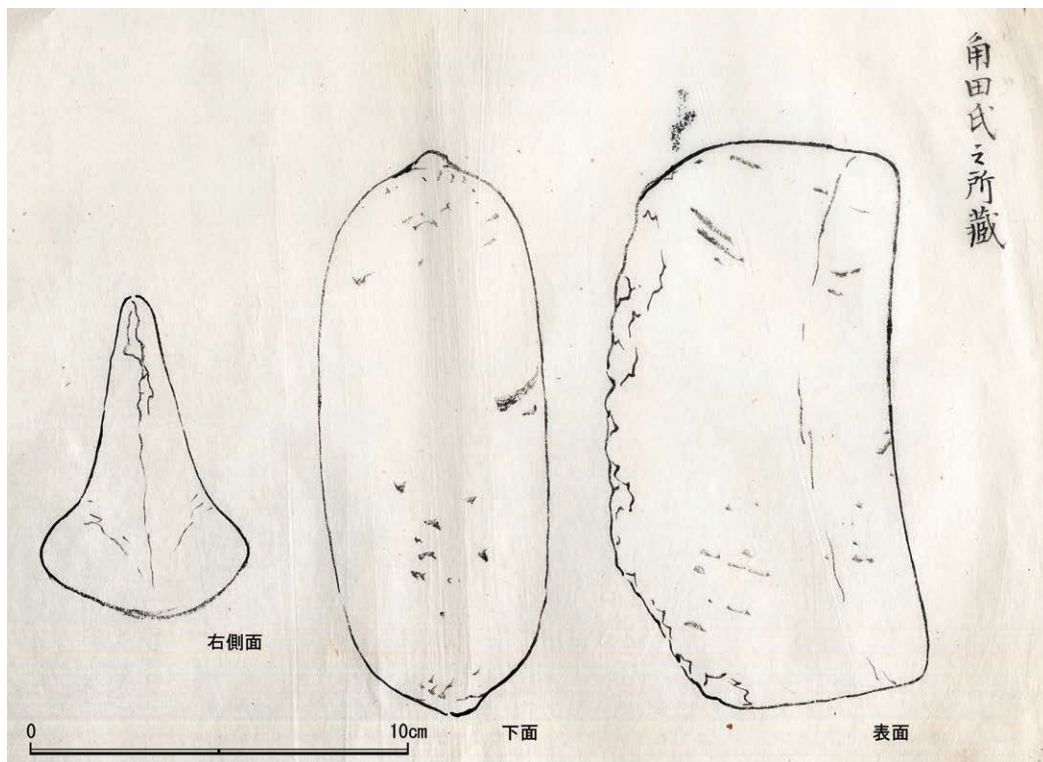
281



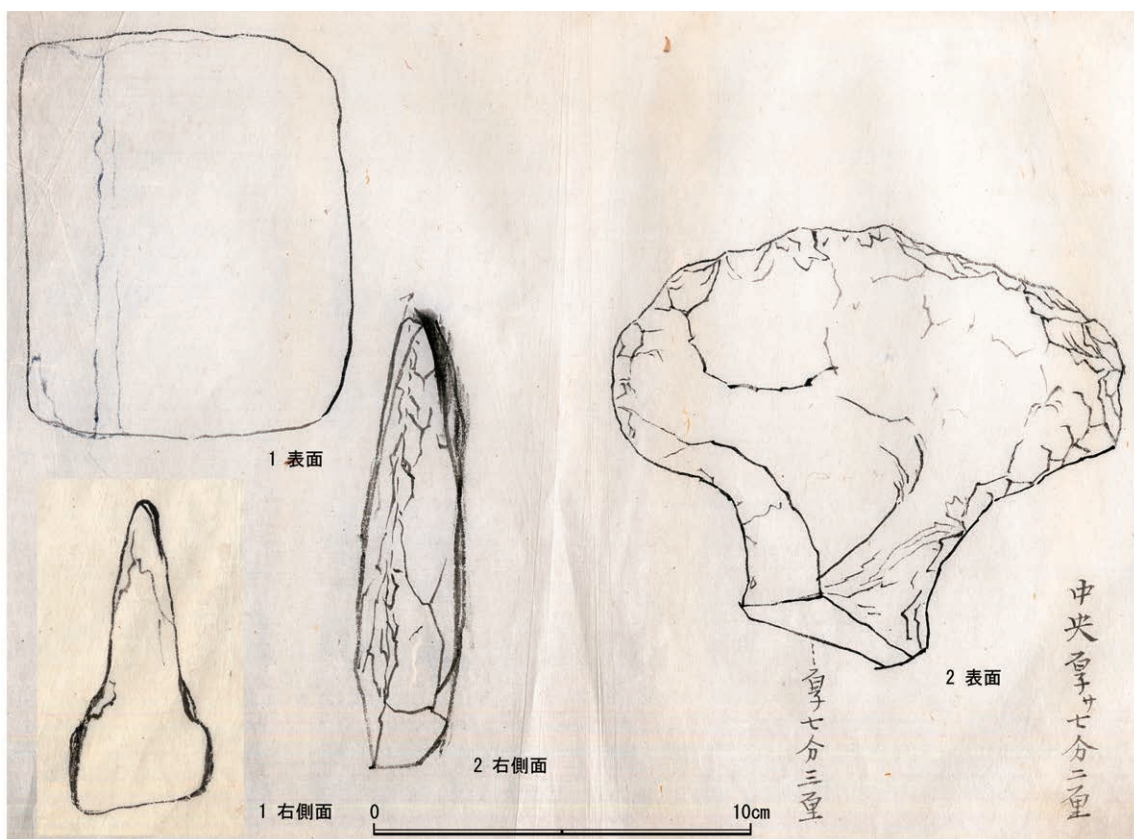
282



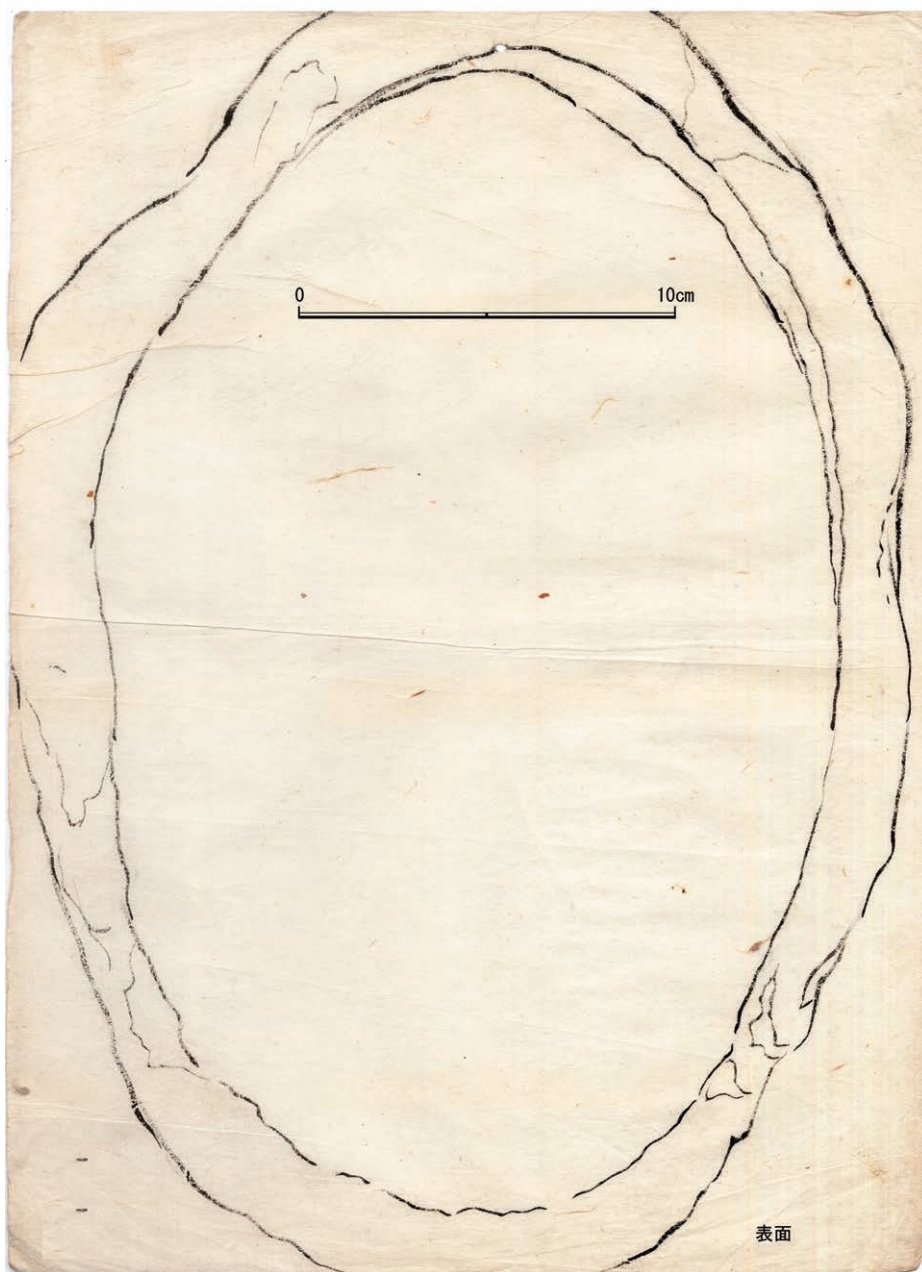
283



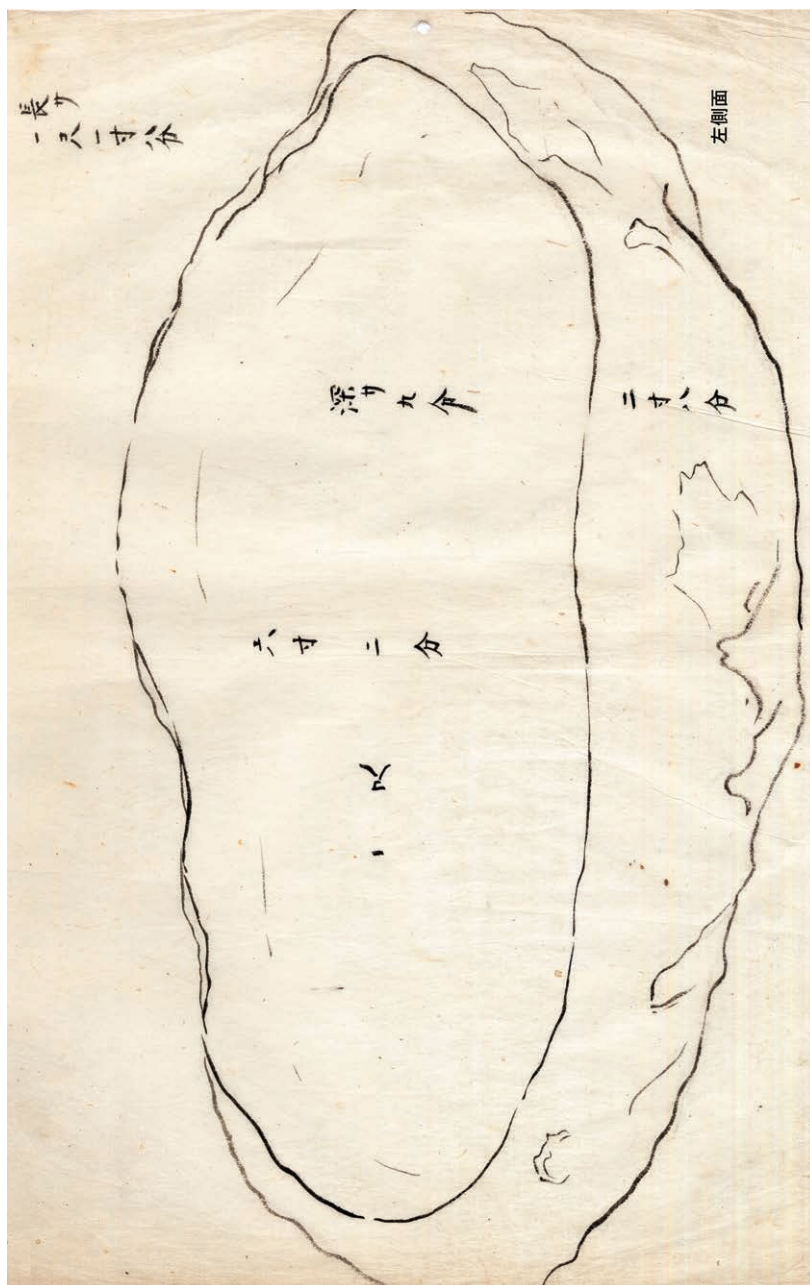
284



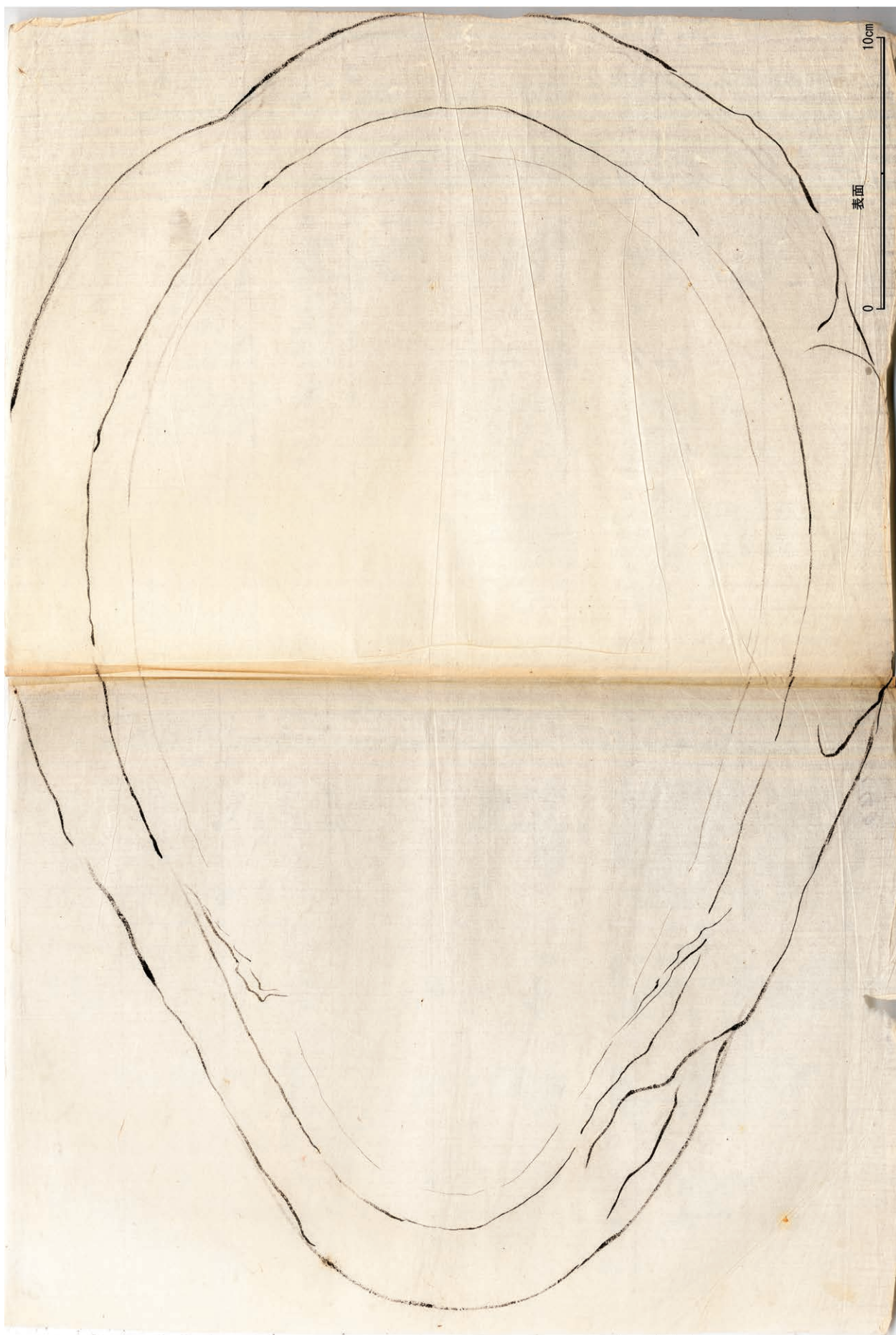
285



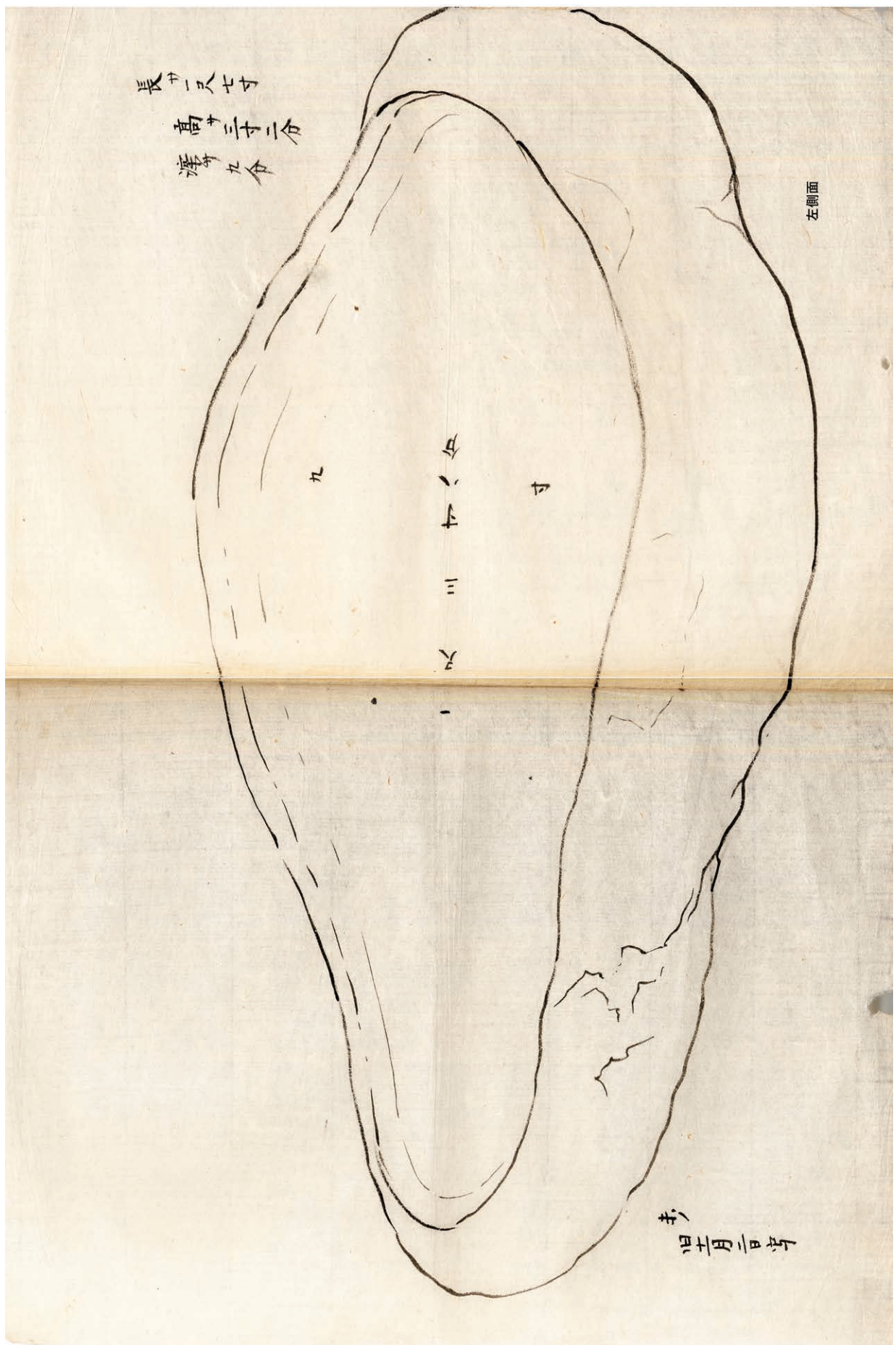
286A



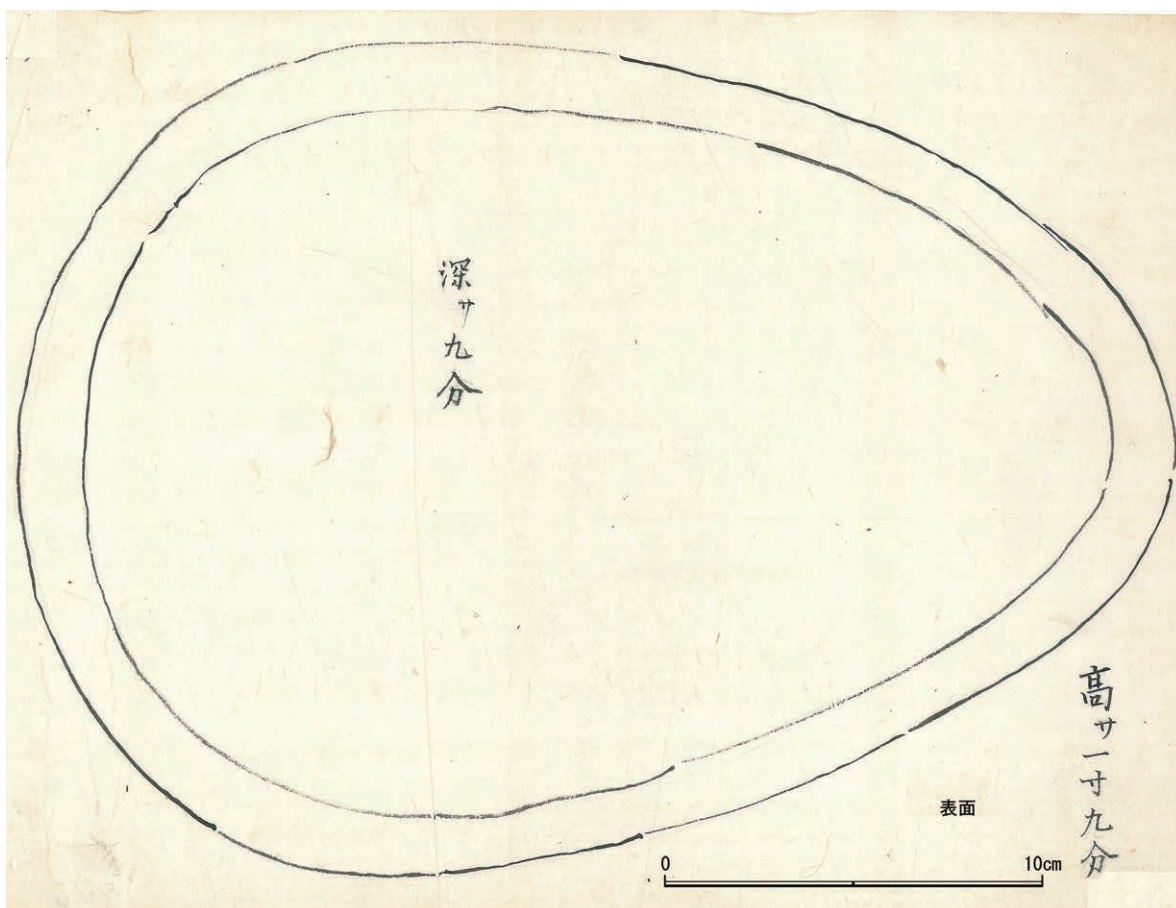
286B



287A



287B



288



289

明治二十九年
四月二十日
玉清水畑地
出

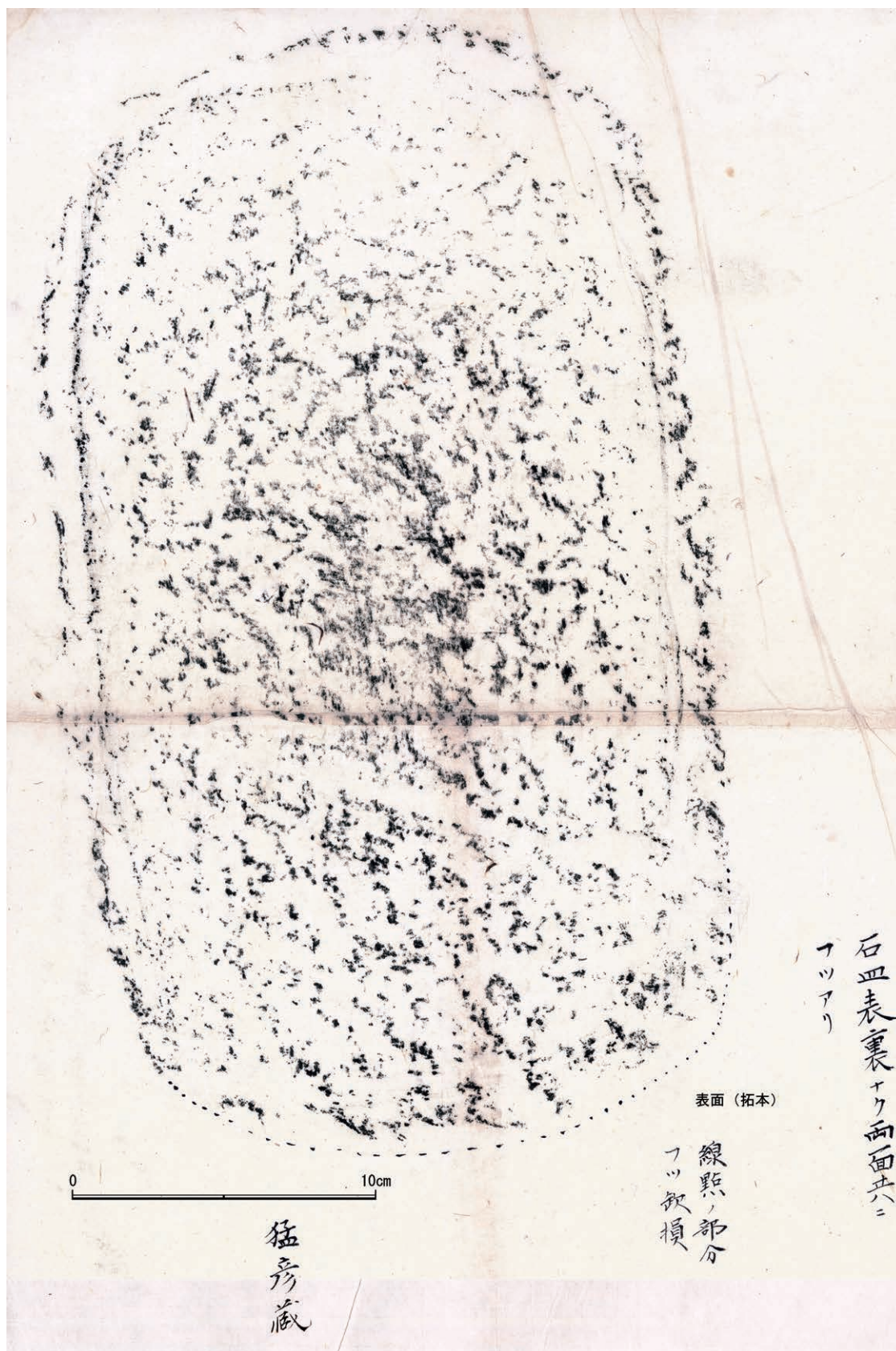
0
10cm

線点
部分
ツツ
欠損

右側面

表面（拓本）

290A



石皿表裏ナリ両面共ニ
ツツアリ

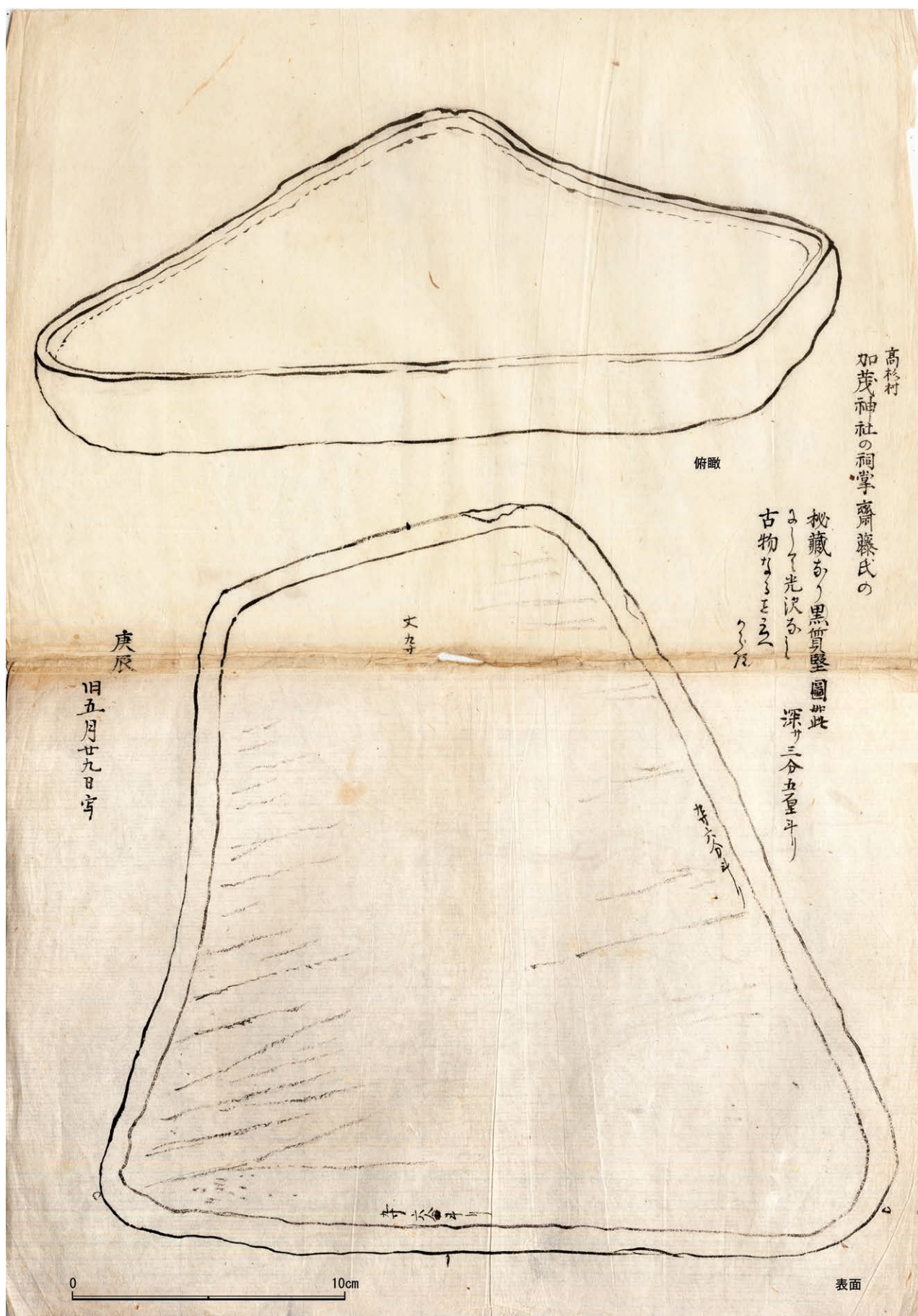
表面（拓本）

線点ノ部分
ツツ欠損

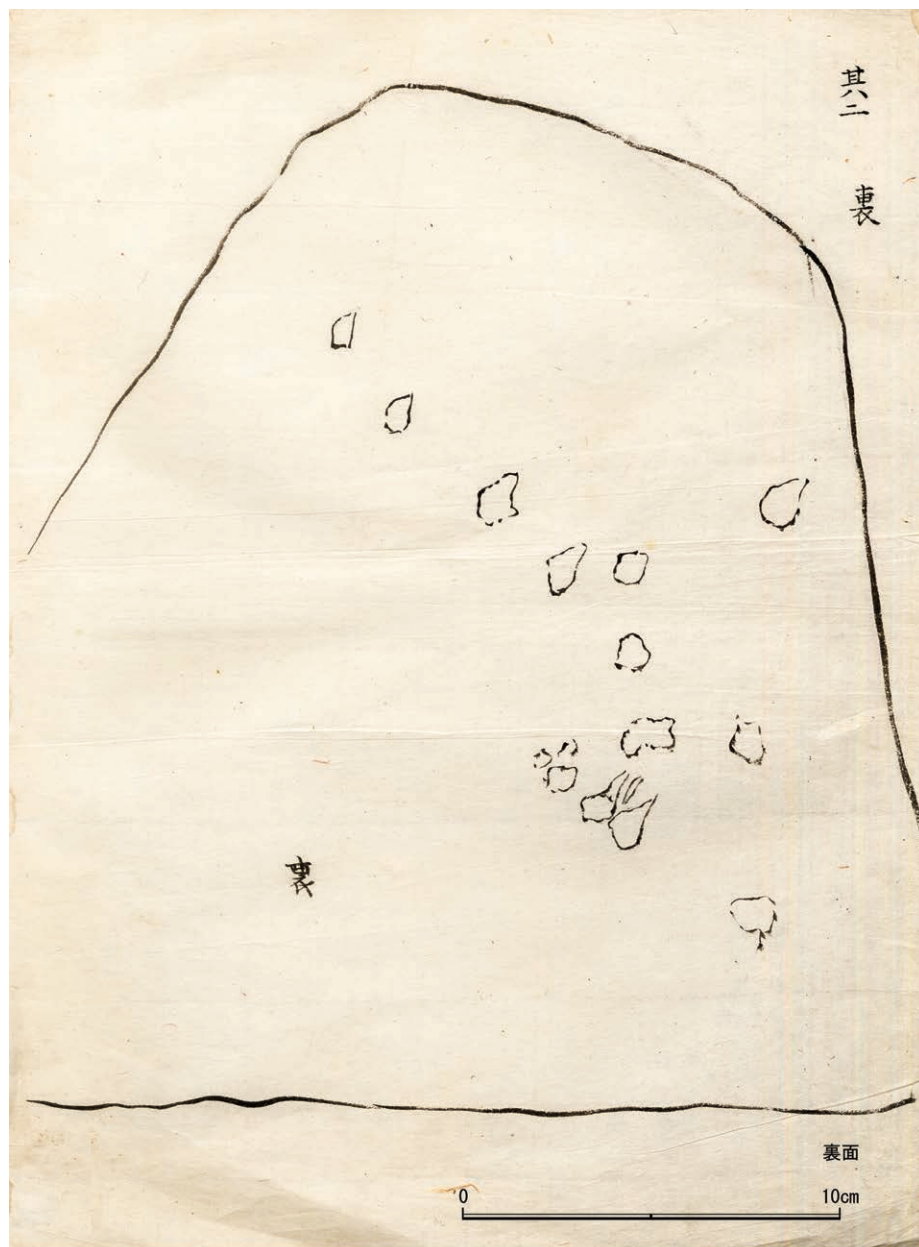
0 10cm

猛彦藏

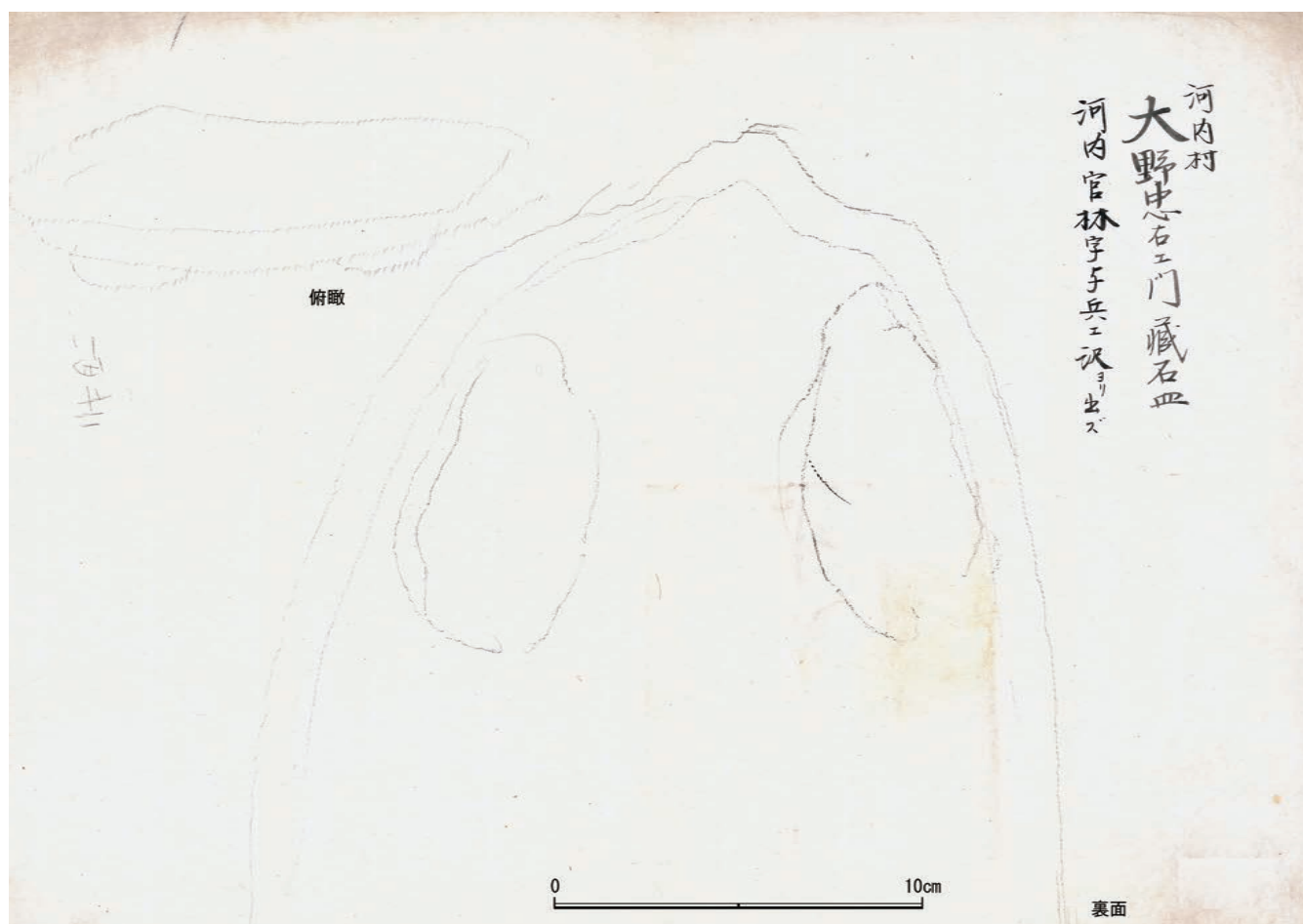
290B



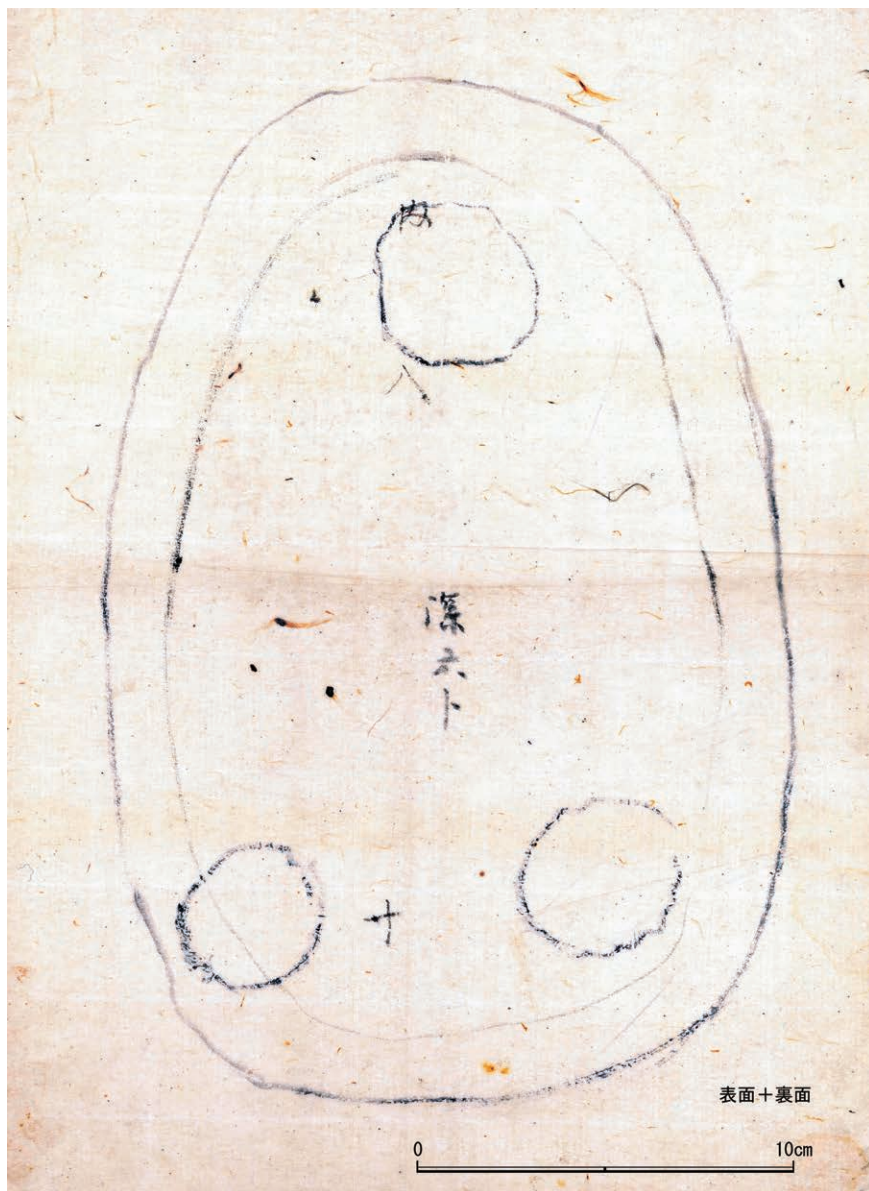
291A



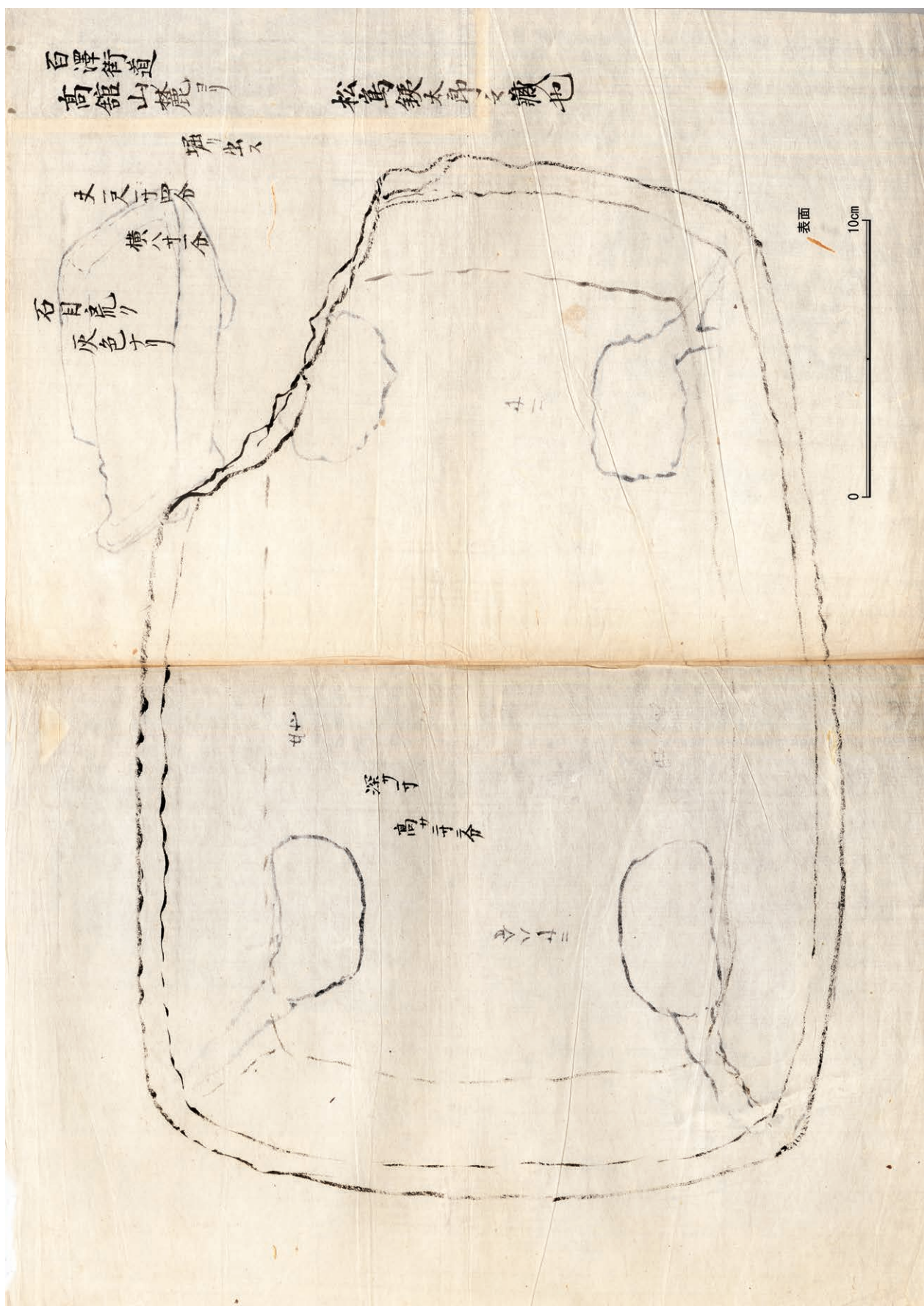
291B



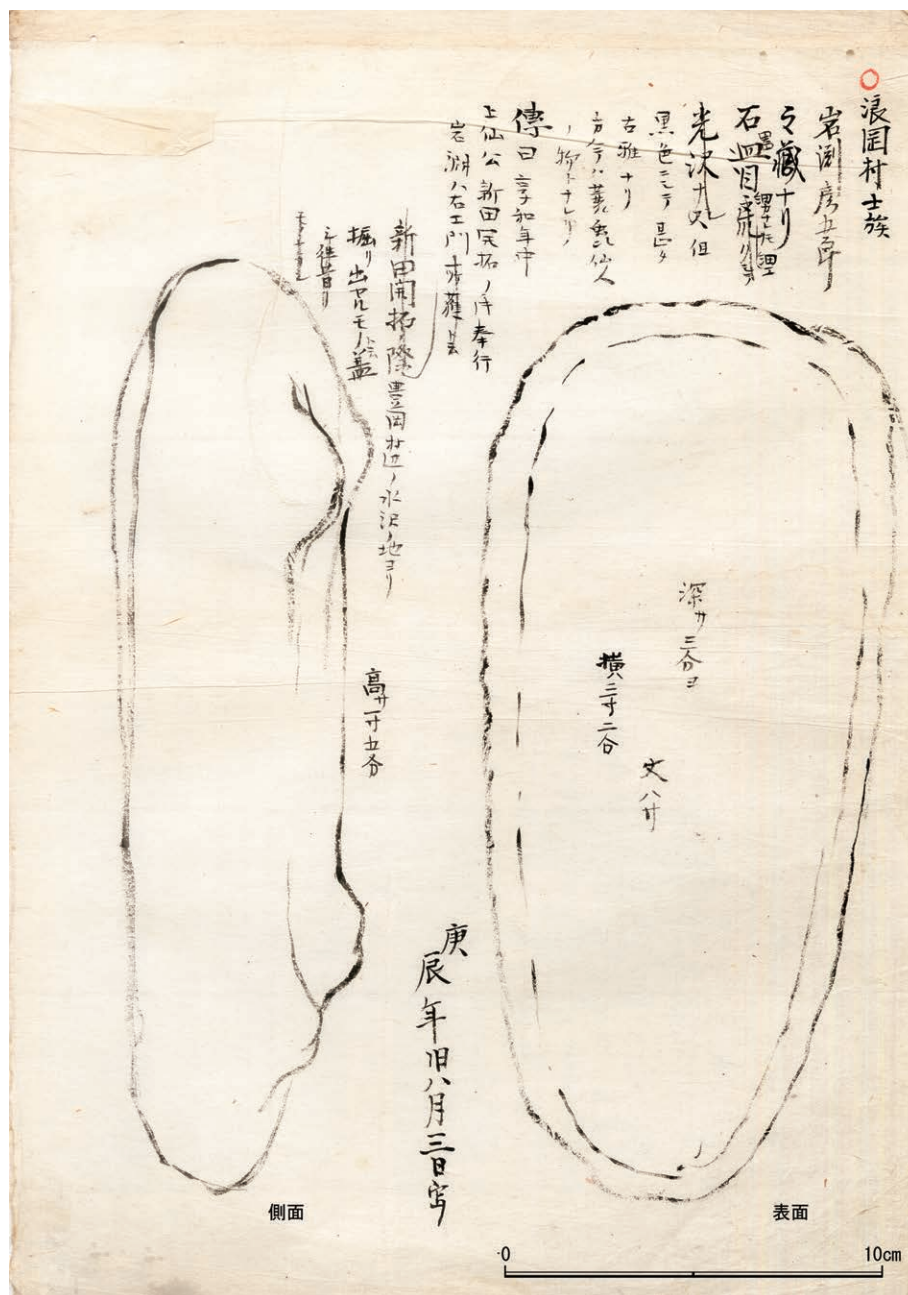
292

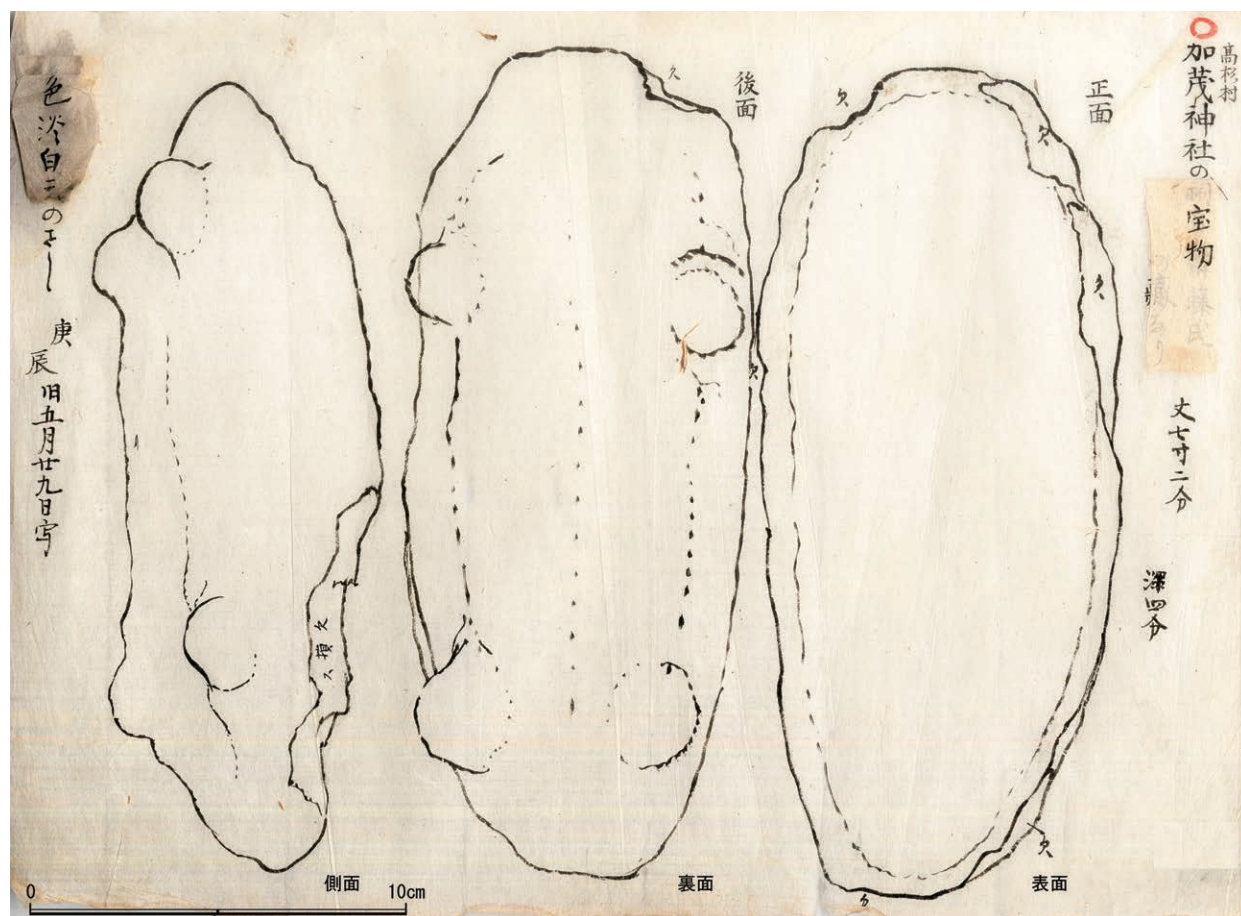


293

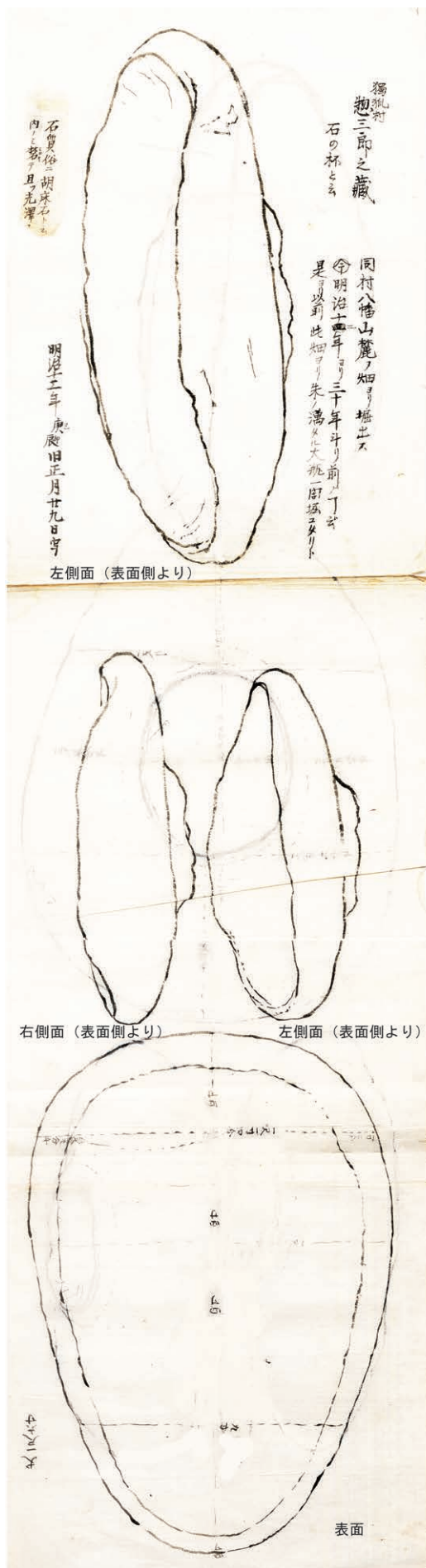


294表

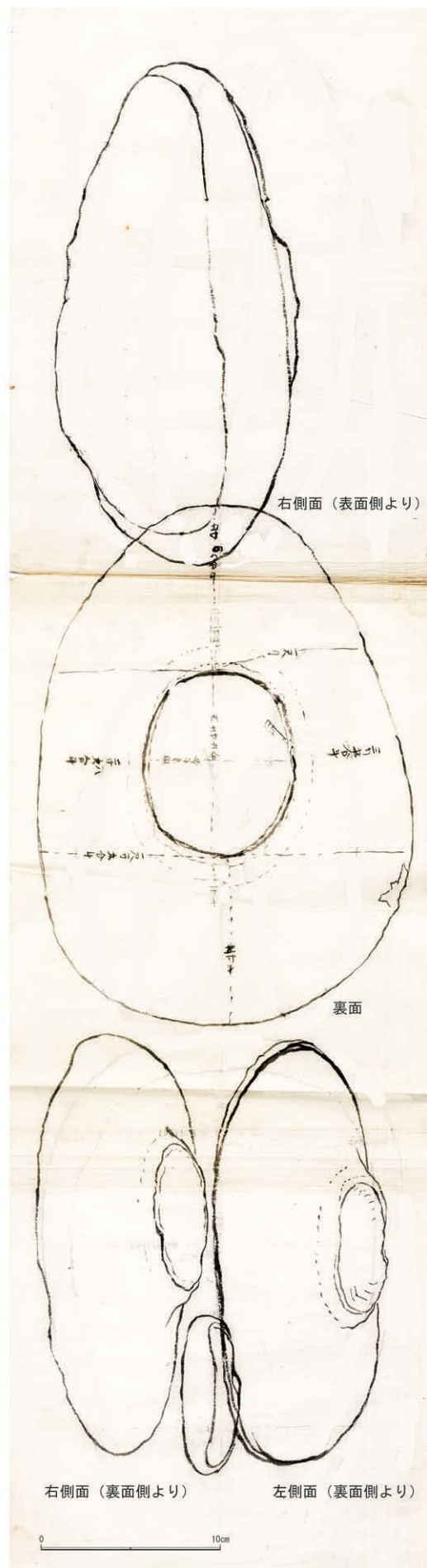




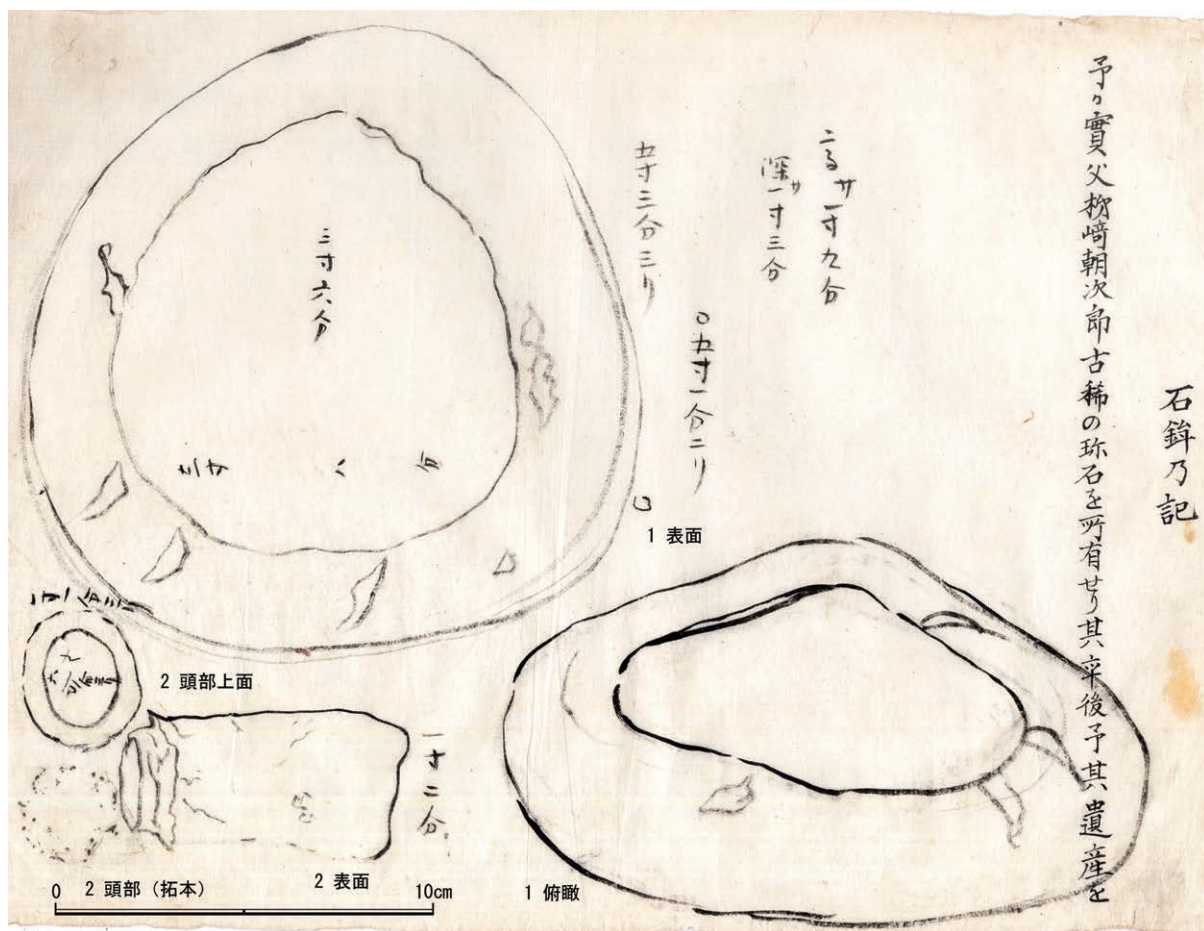
296



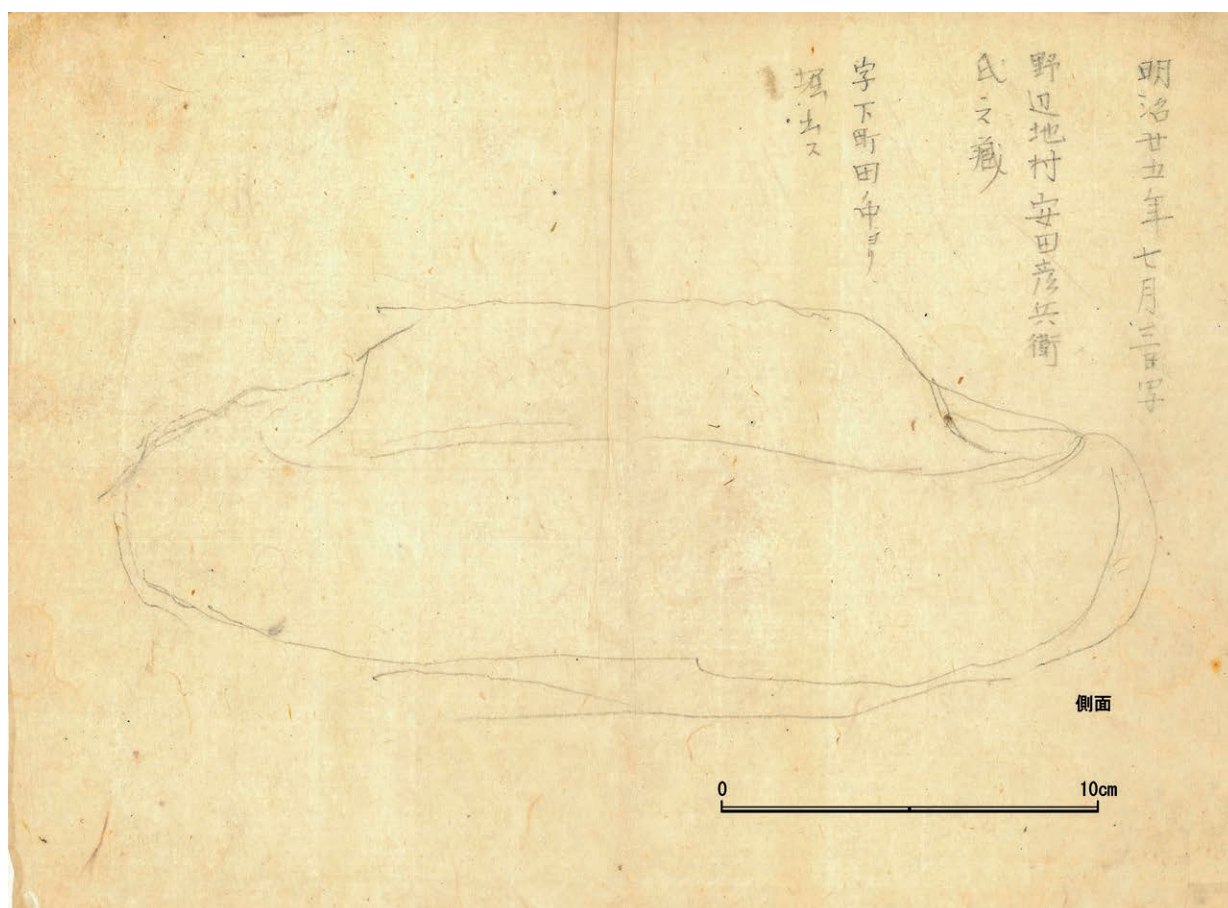
297表



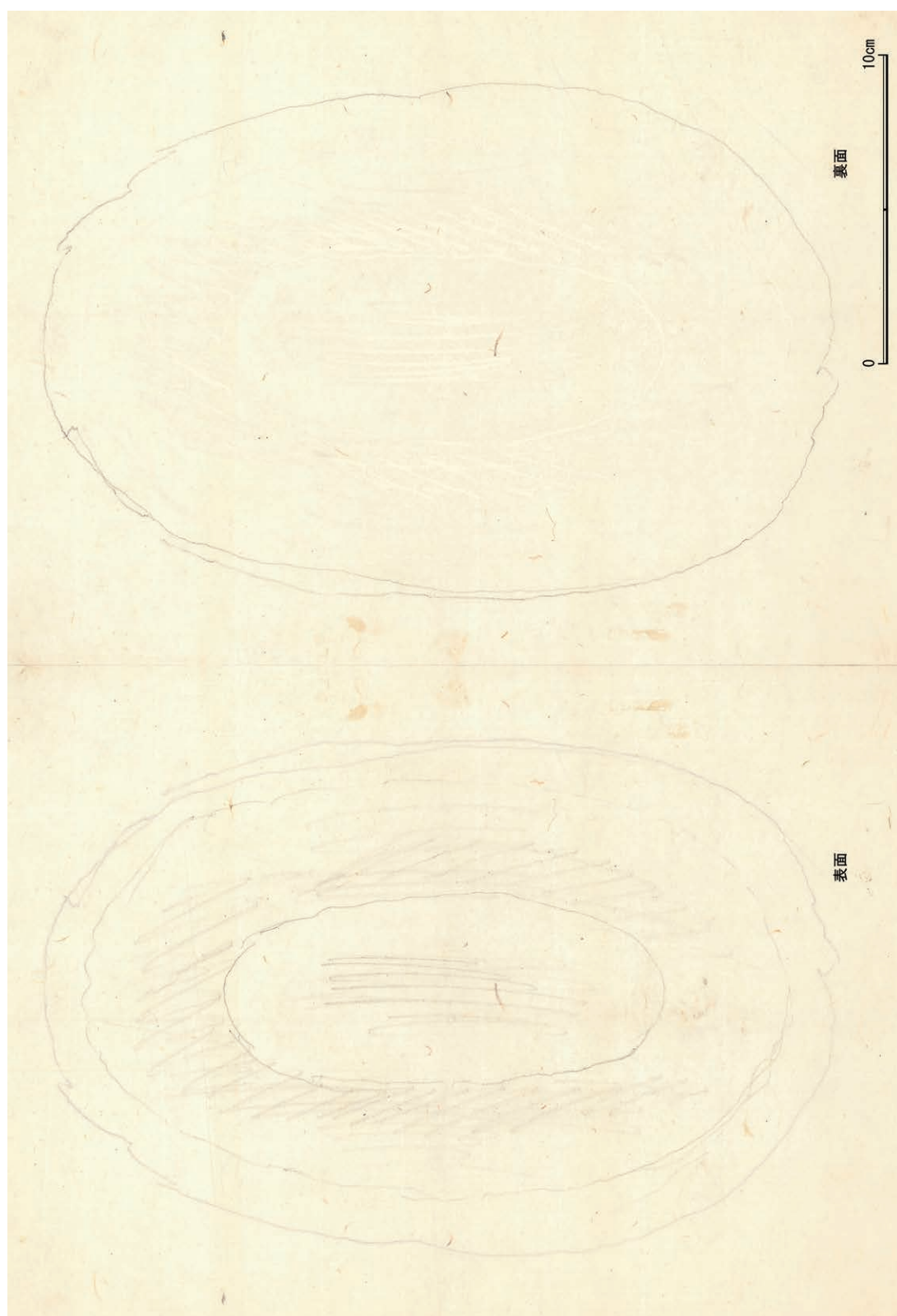
297裏



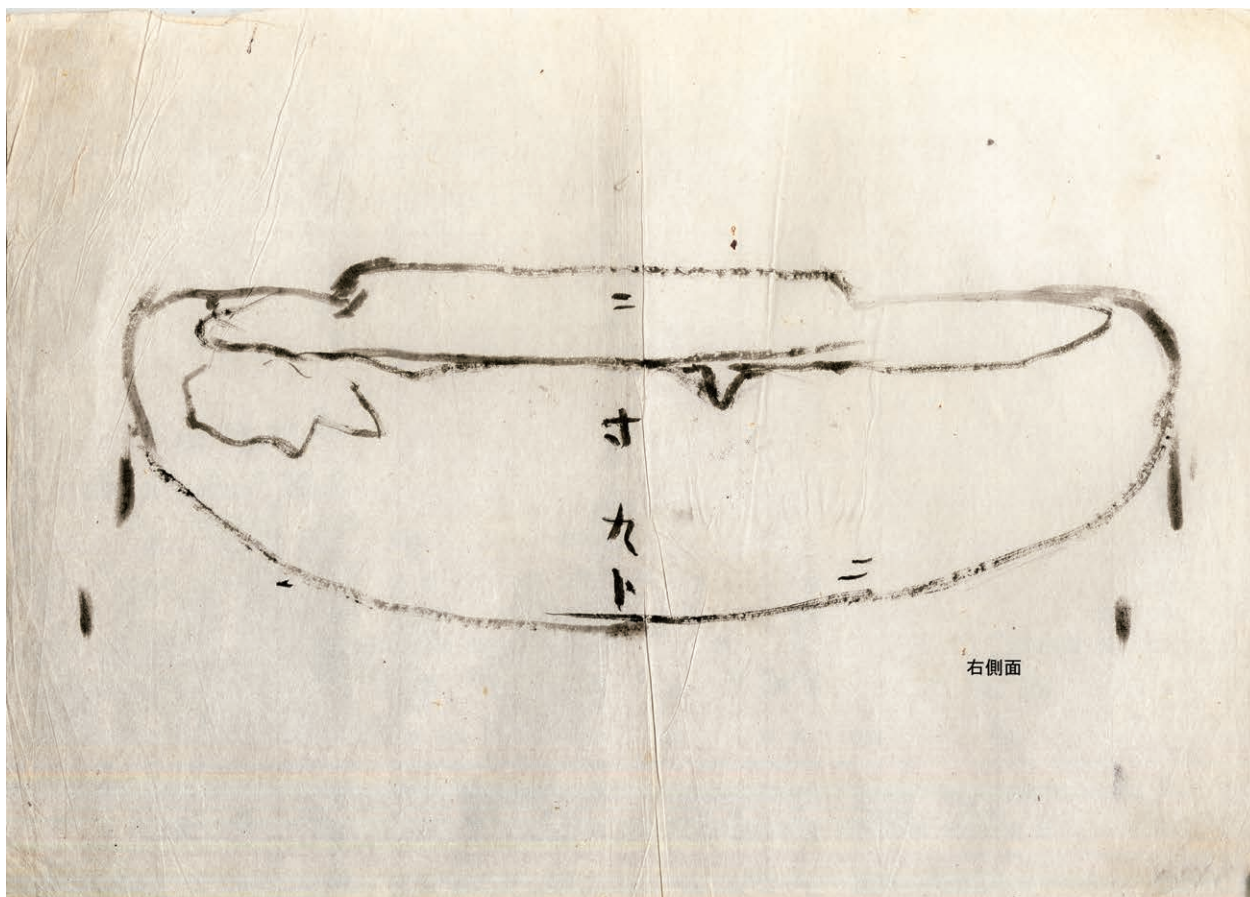
298



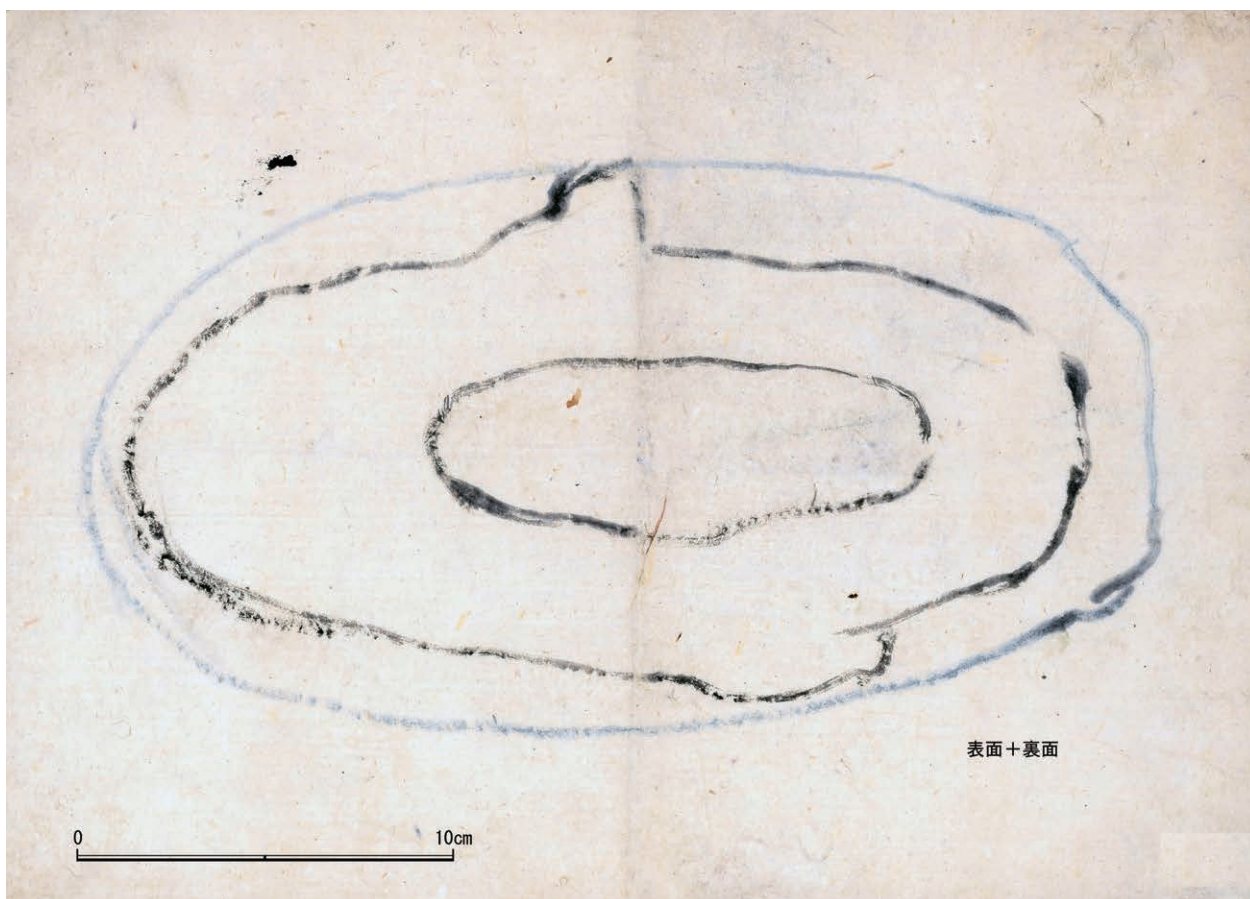
299A



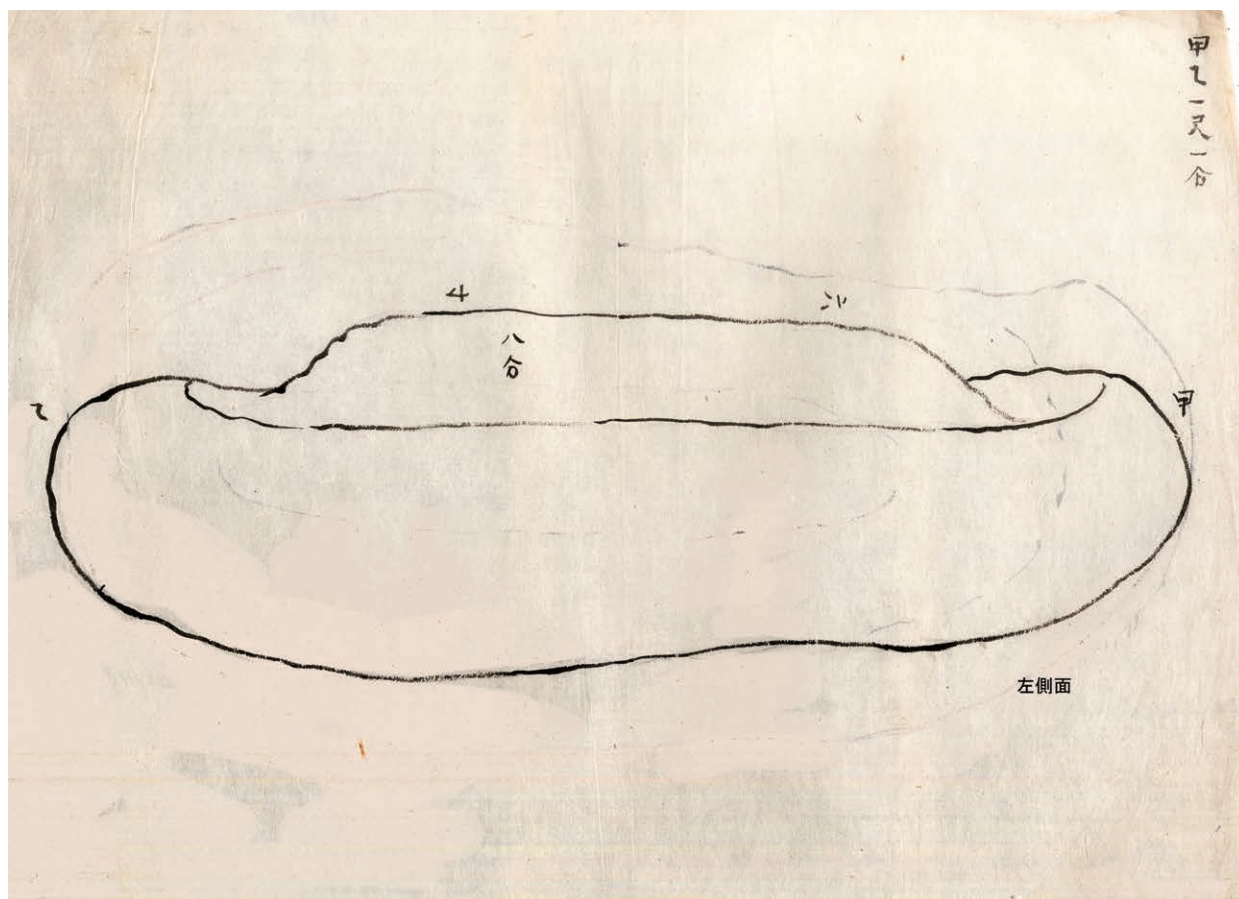
299B



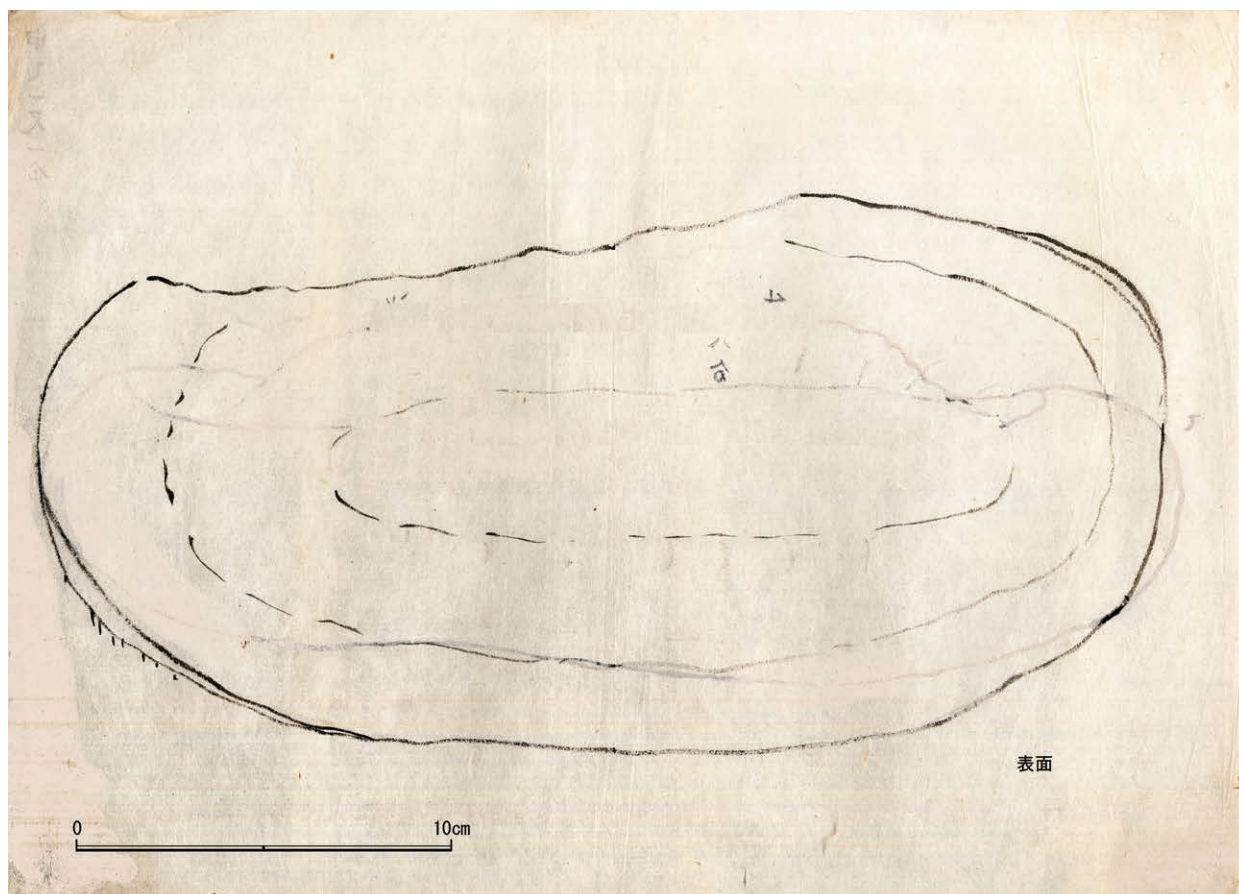
300A



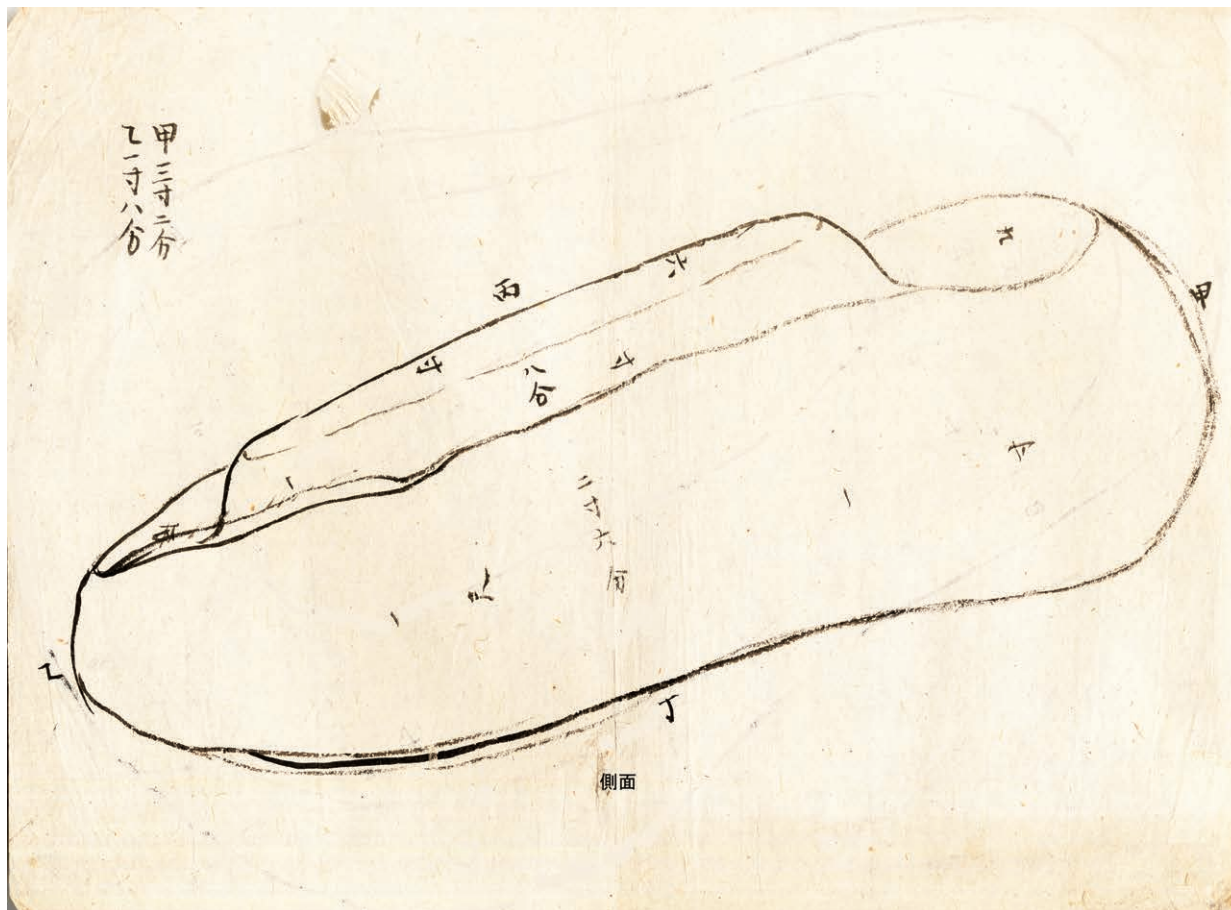
300B



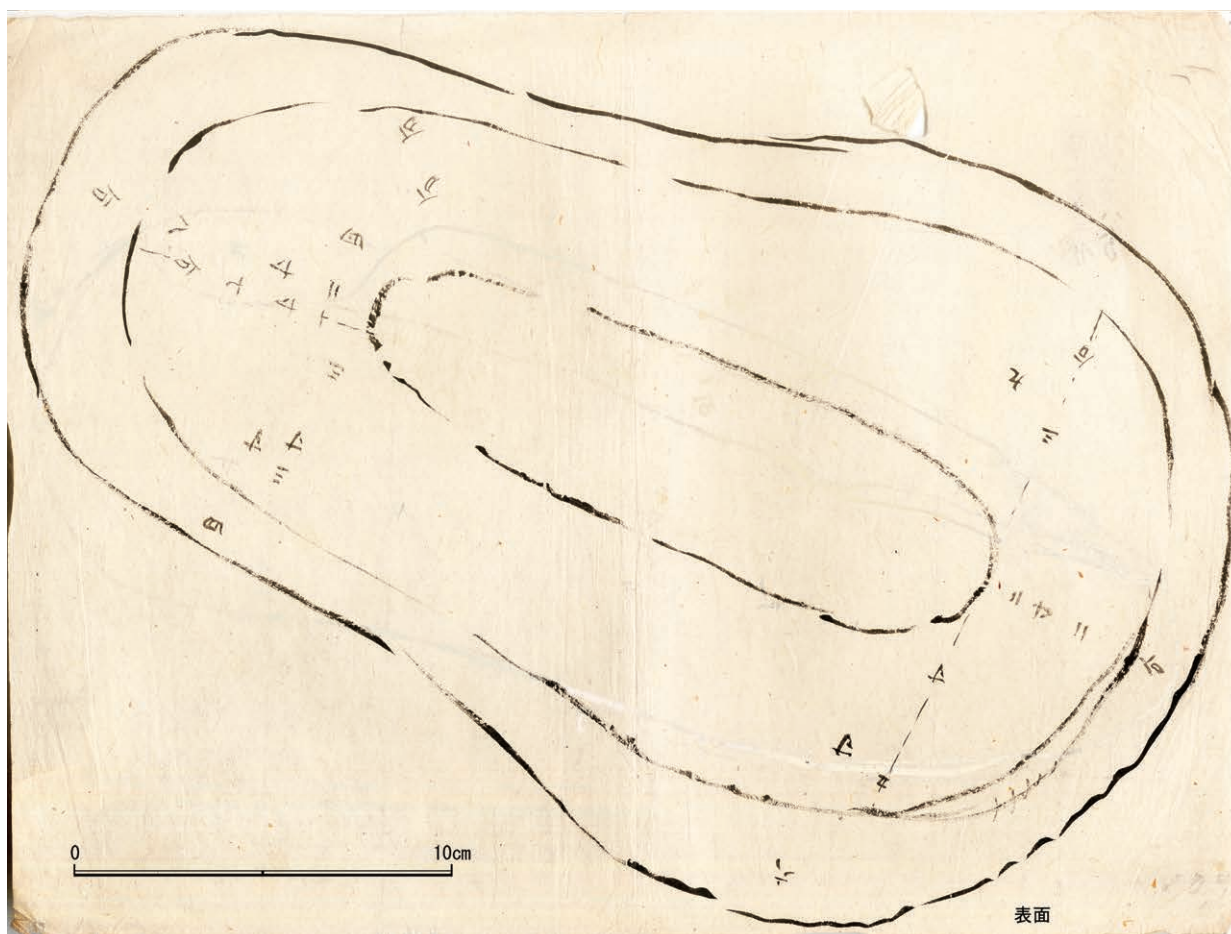
301A



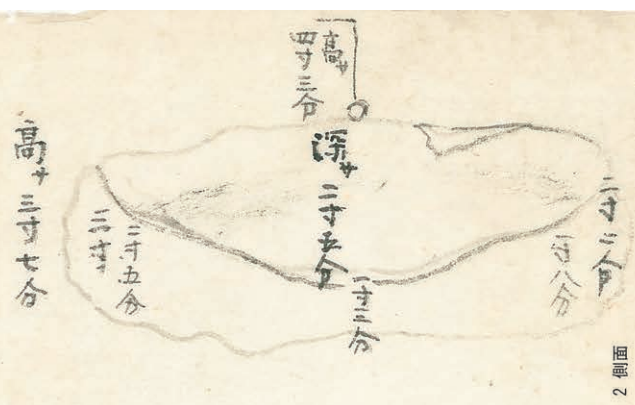
302B



302表



302裏



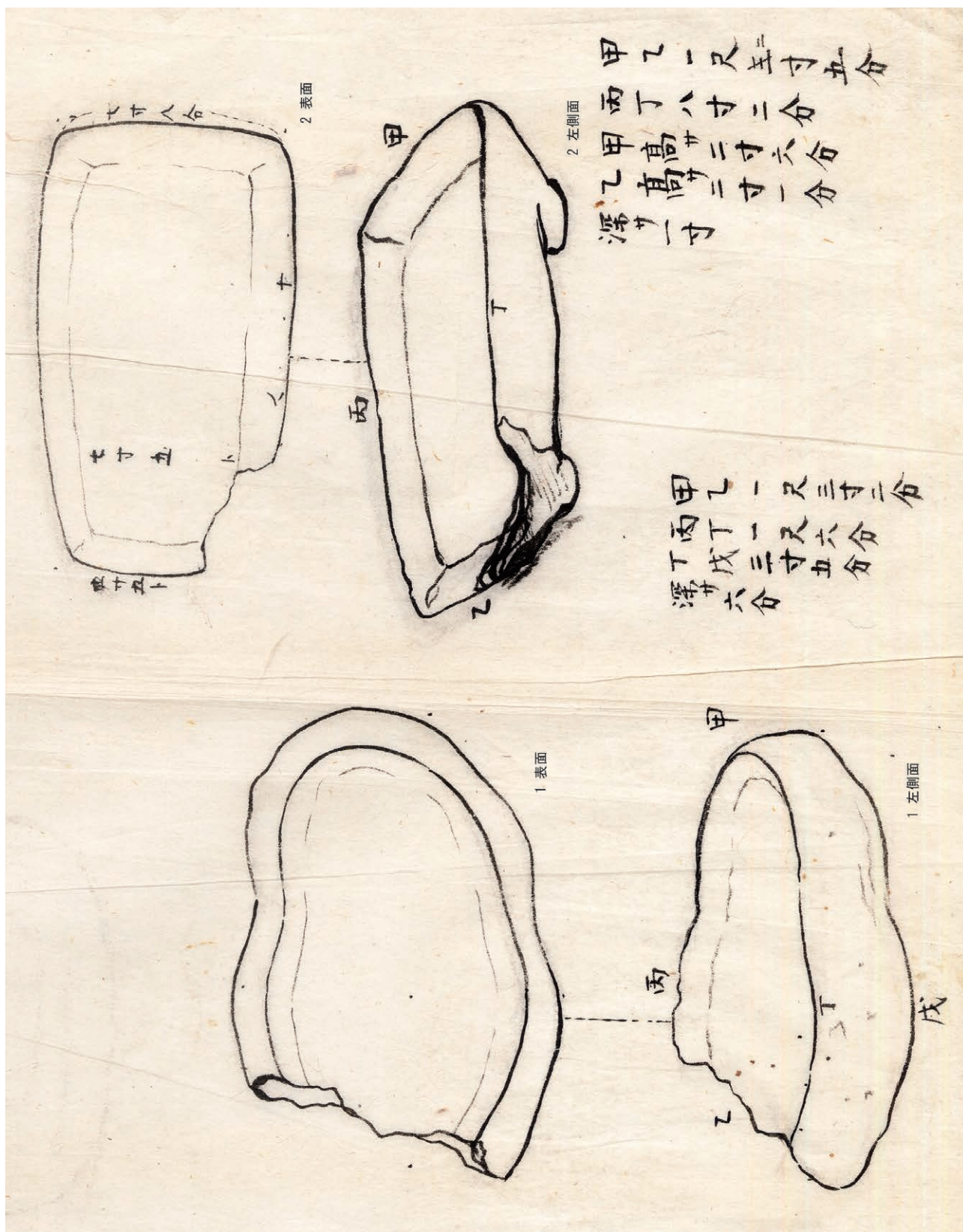
館岡村
野呂米次郎之藏

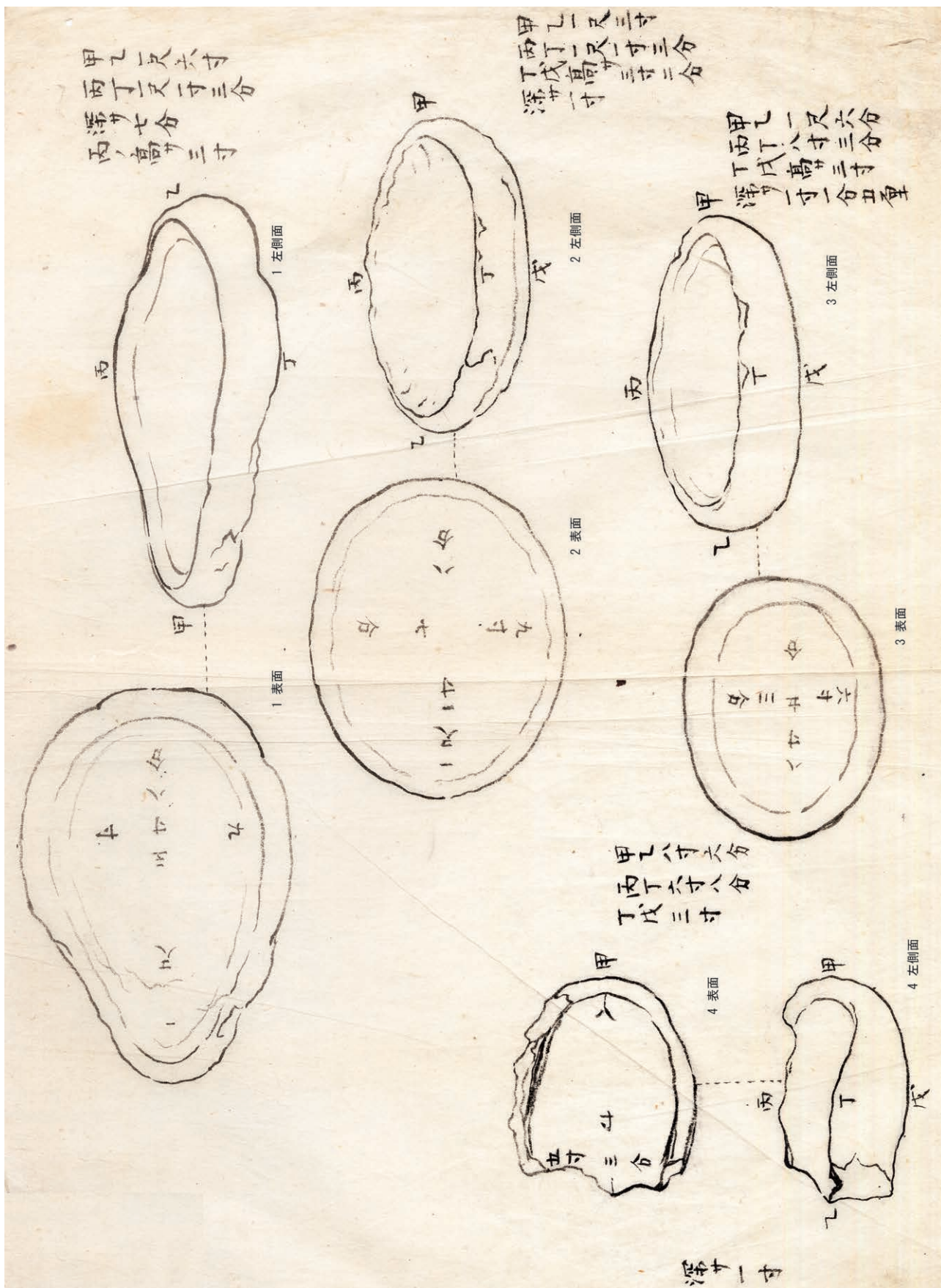
煙土、磁土、石灰、石炭、
灰色、光澤あり



明治十二年乙酉

旧六月三日







1 表面 (拓本)



2 表面 (拓本)



老 瓦 八 寸 五 分

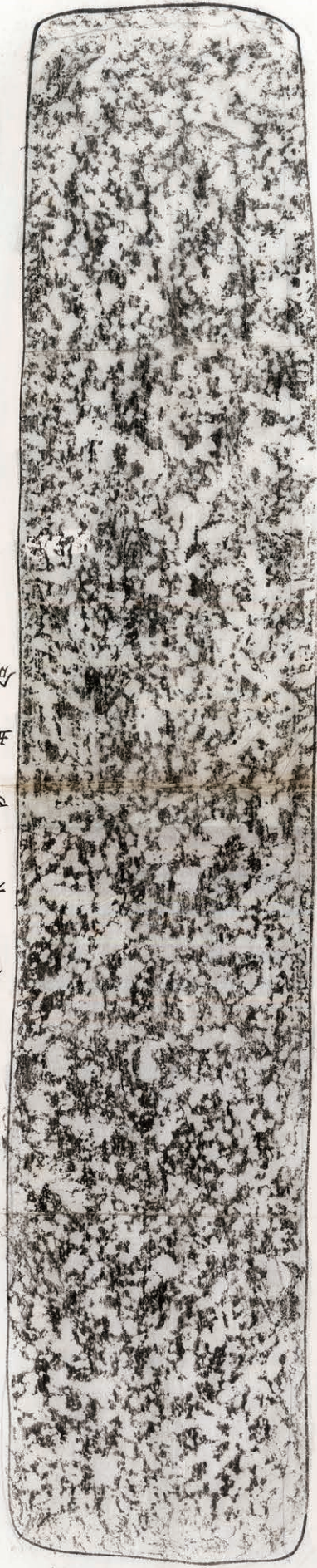


三 寸

三 寸 毫 分

1 表面 (拓本)

老 瓦 八 寸 五 分



三 寸

三 寸 毫 分

2 表面 (拓本)

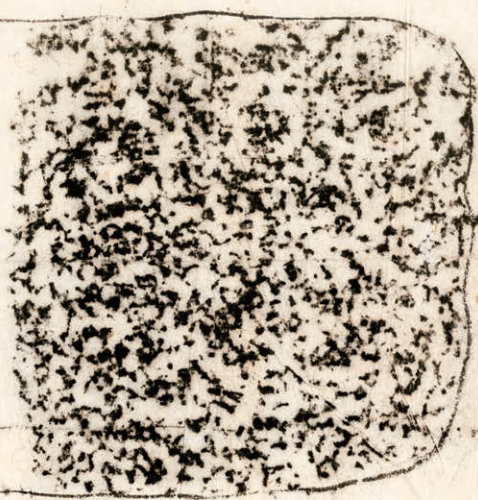


五本松村
加茂神
社之石
棒

三寸九分二厘



上面 (拓本)



表面 (拓本)

0 10cm

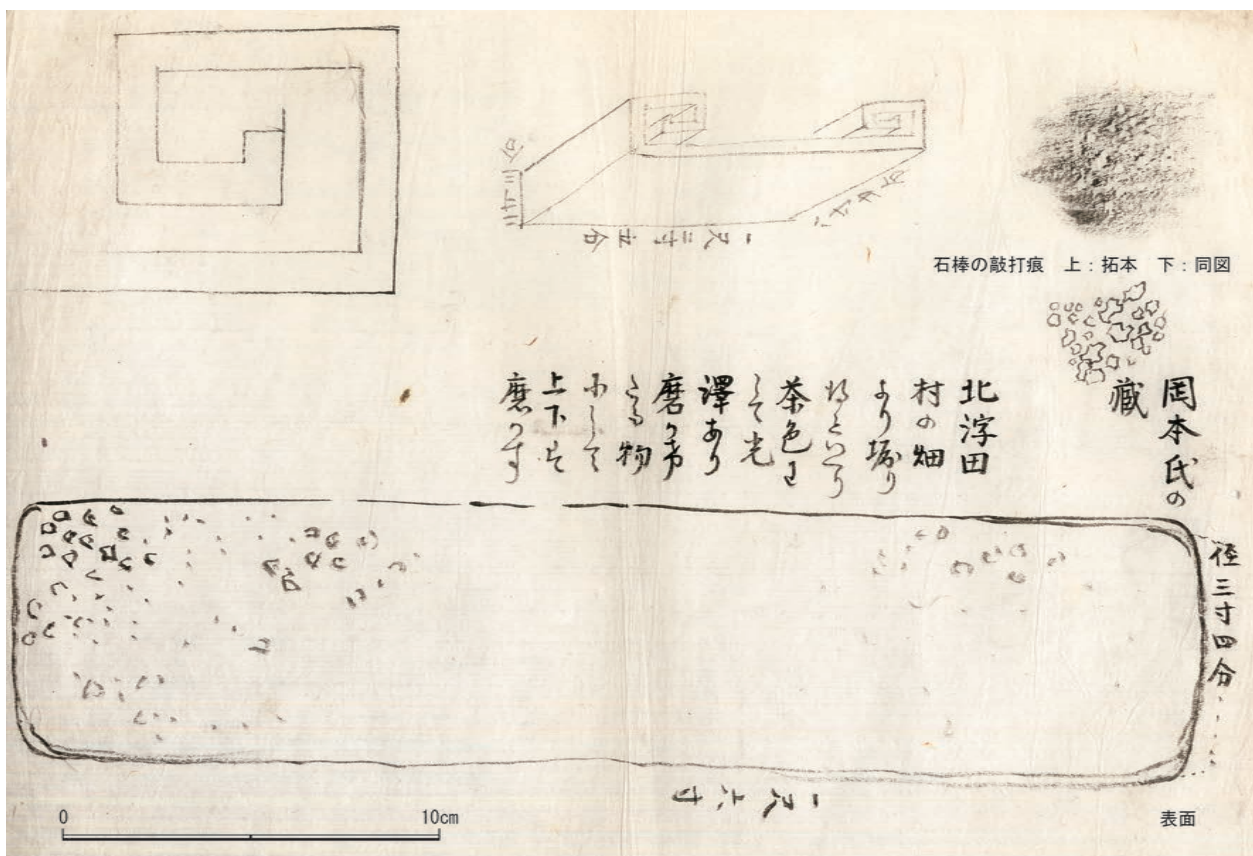
明治十九年四月七日
 宇治市三十三番地
 堀川右衛門左衛門
 住ノ新立アハル地上
 リ三尺余堀場ノ



表面 (拓本)







312



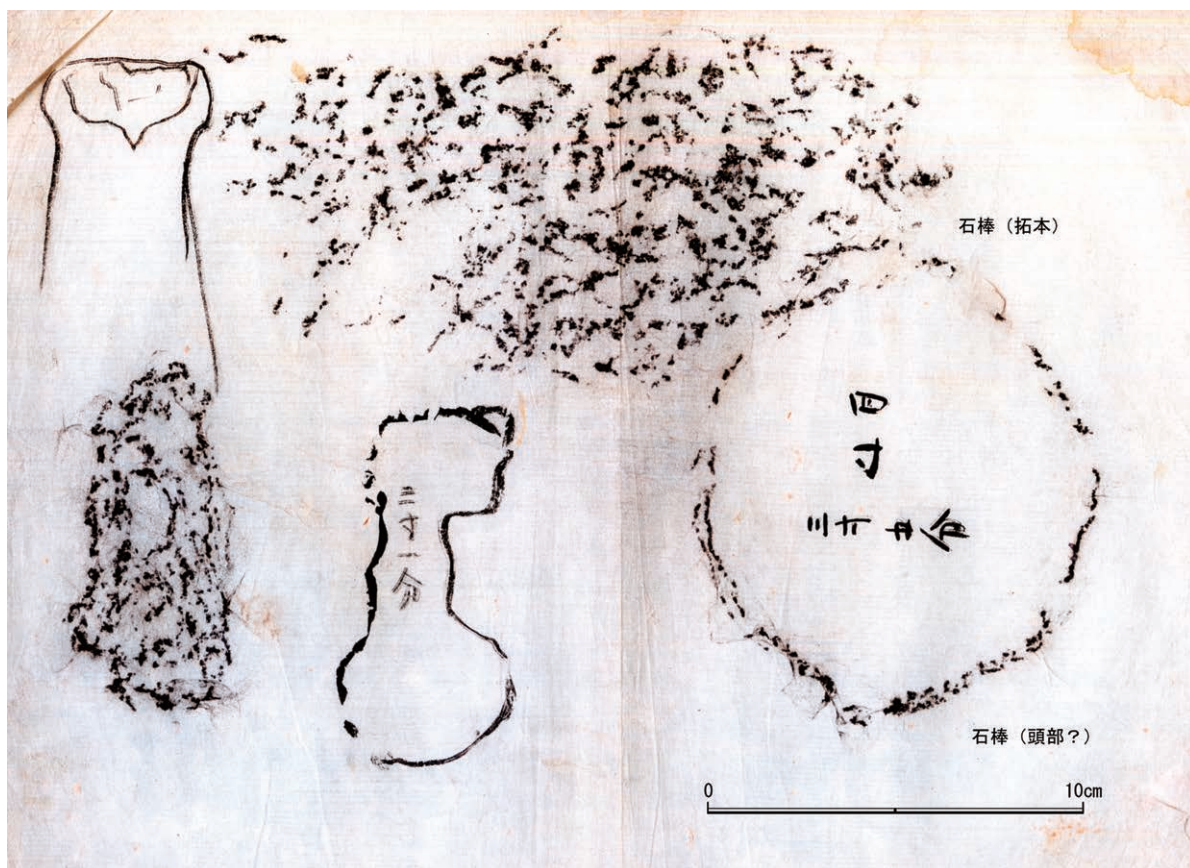
313A



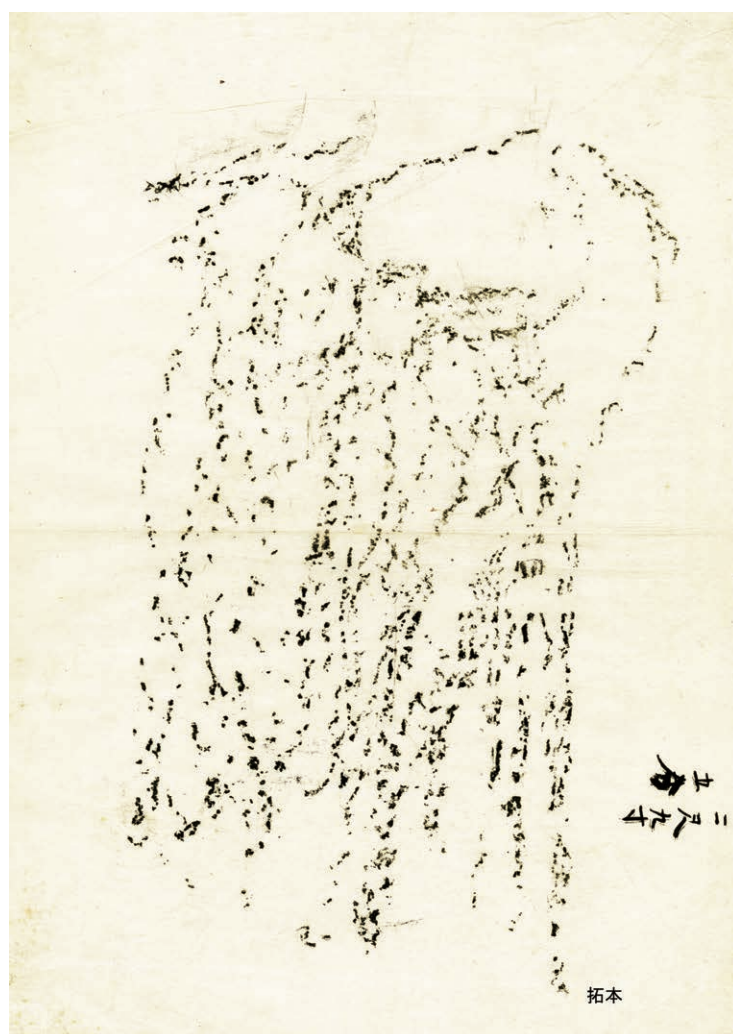
313B



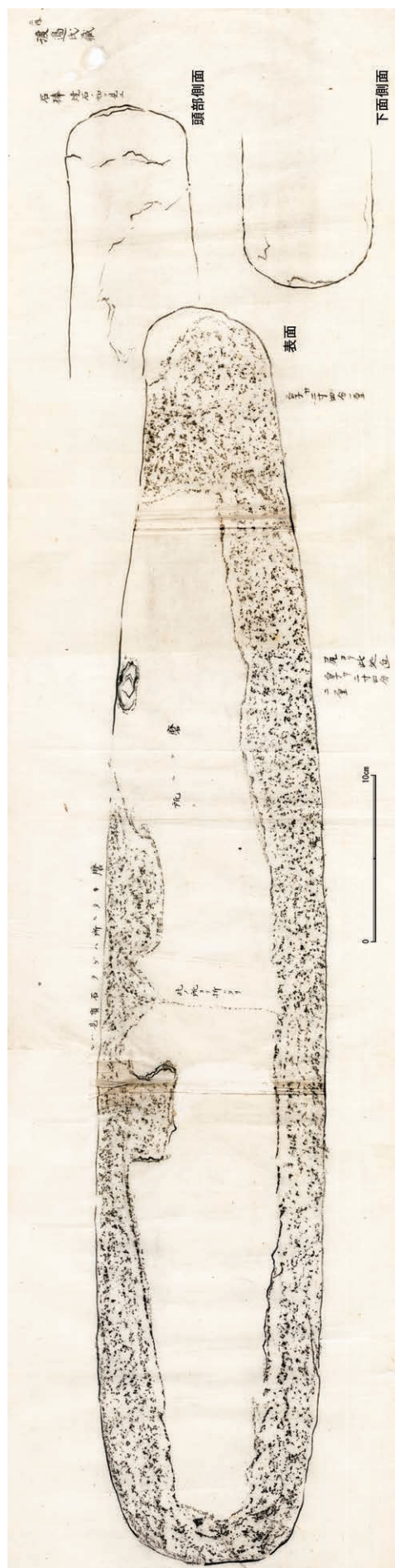
314A

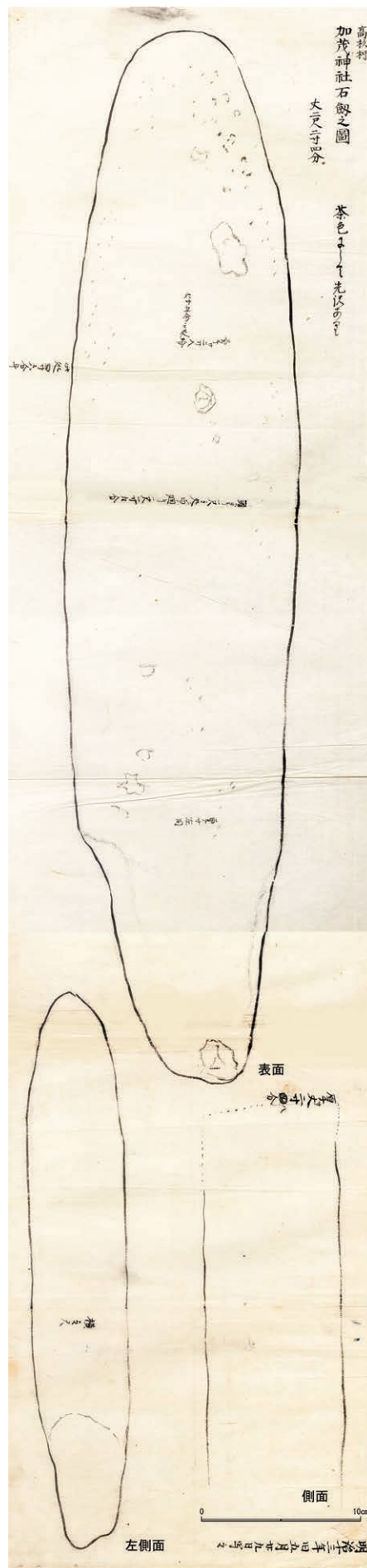


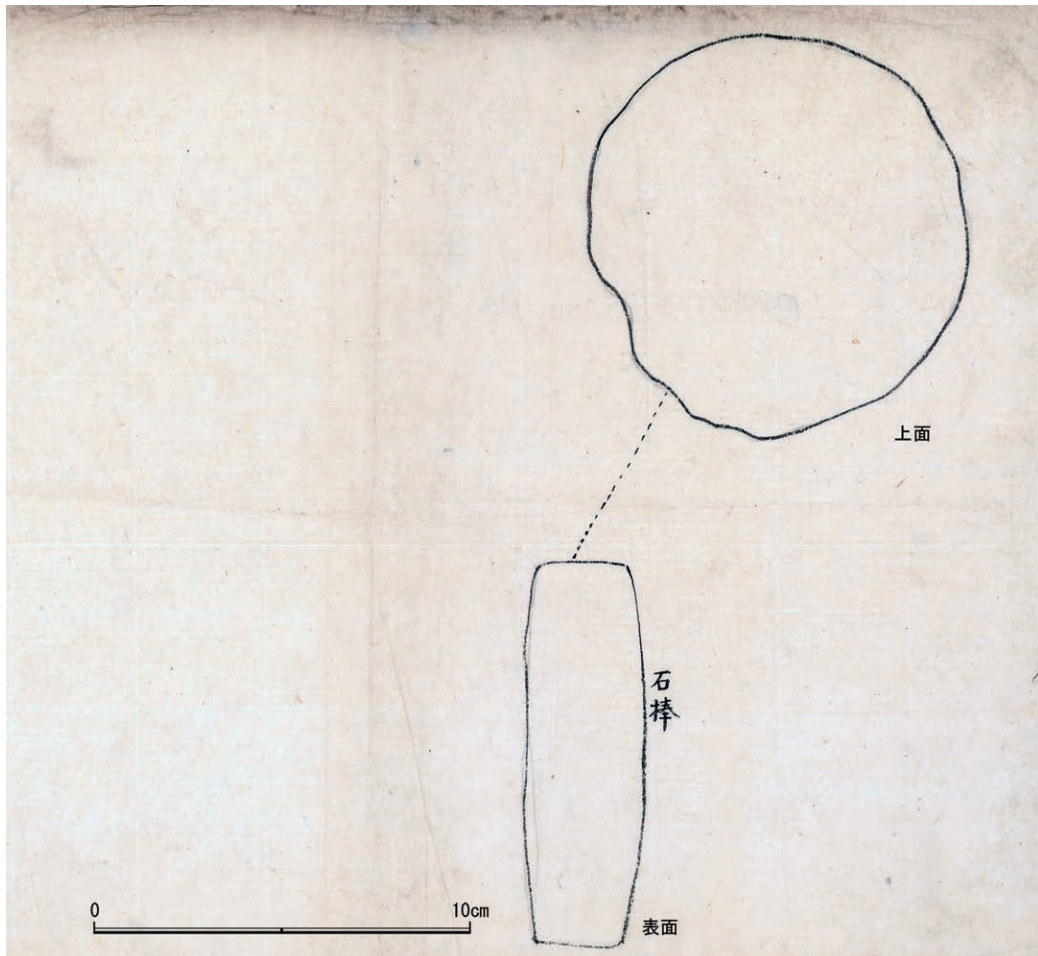
314B



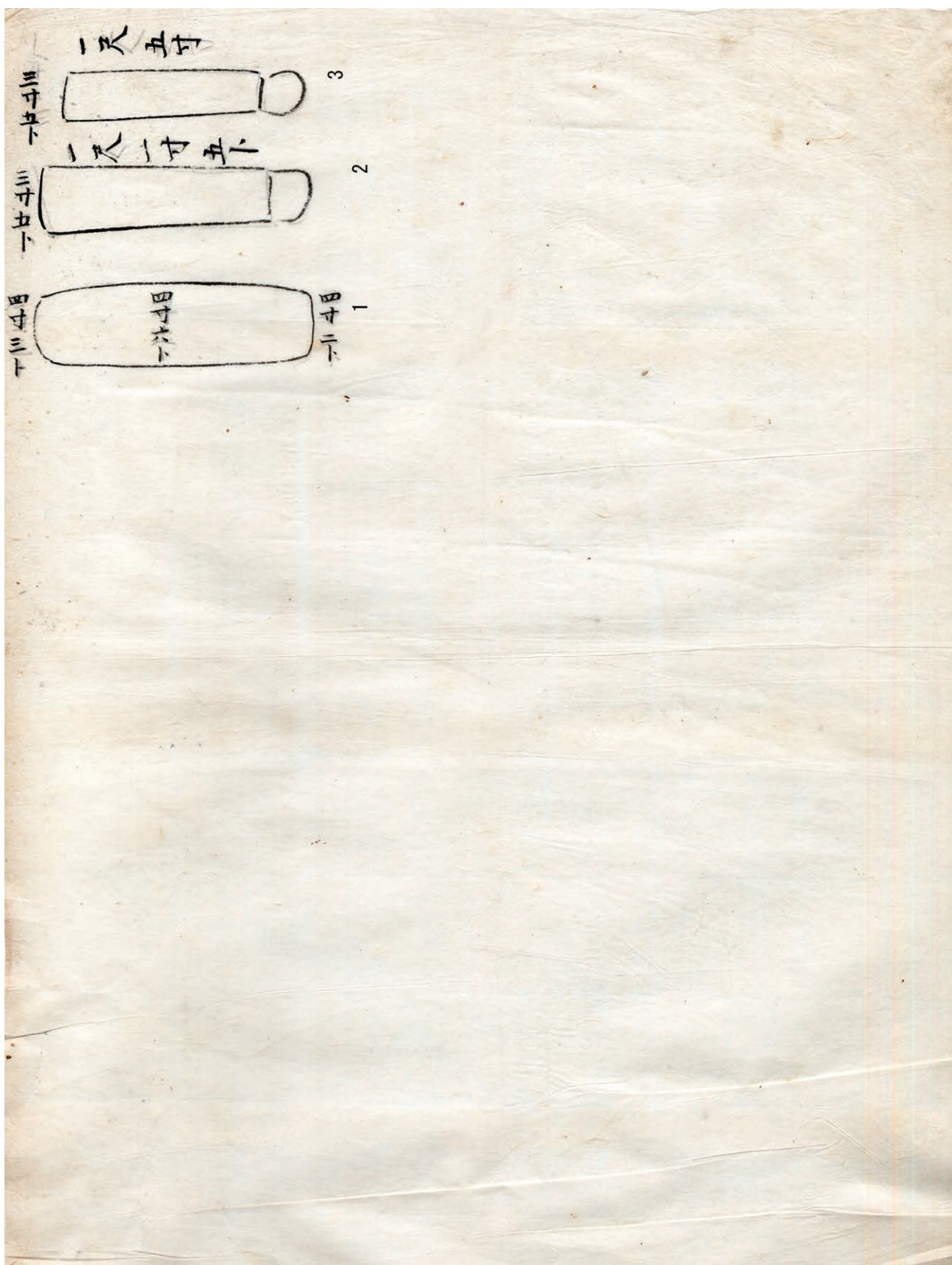
314C



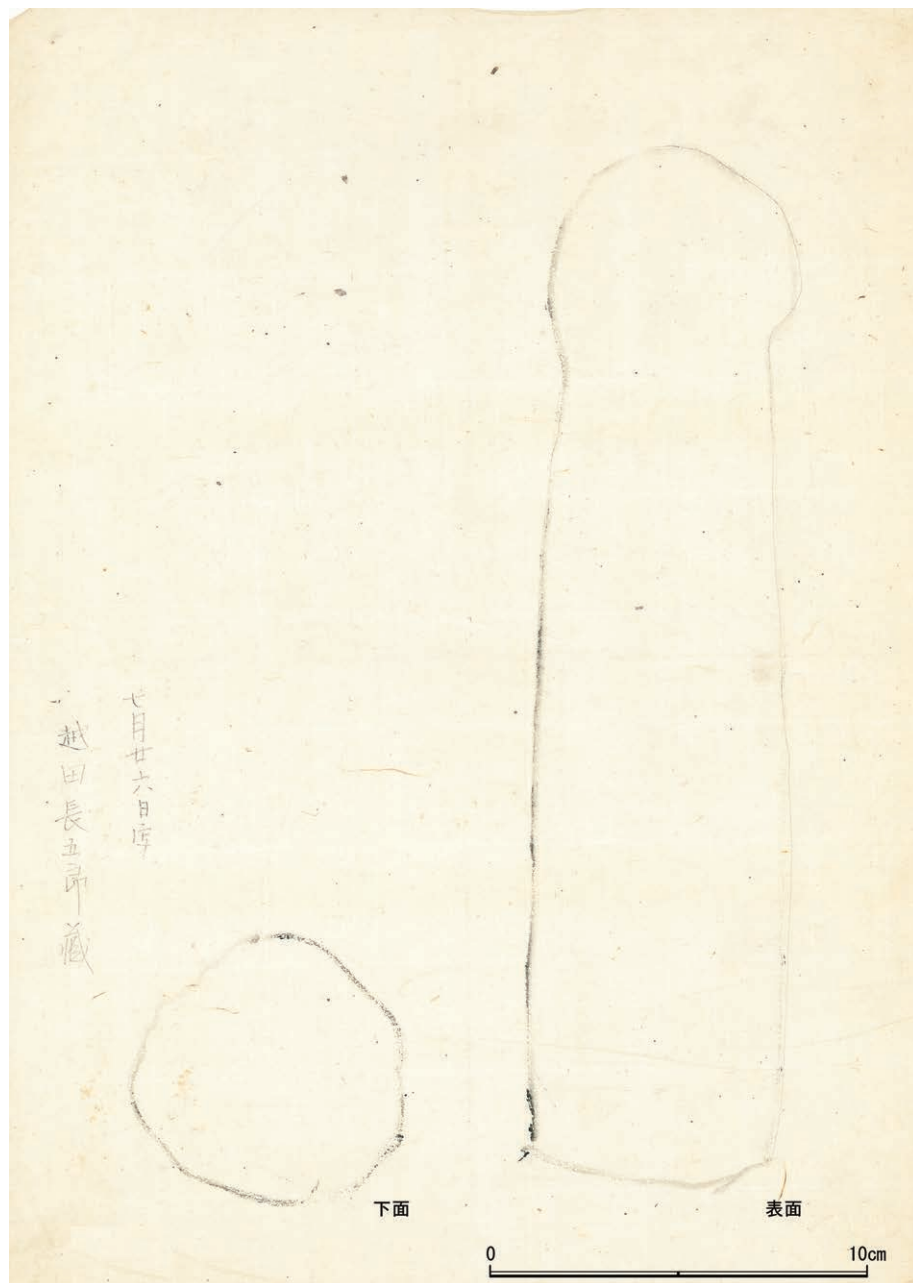




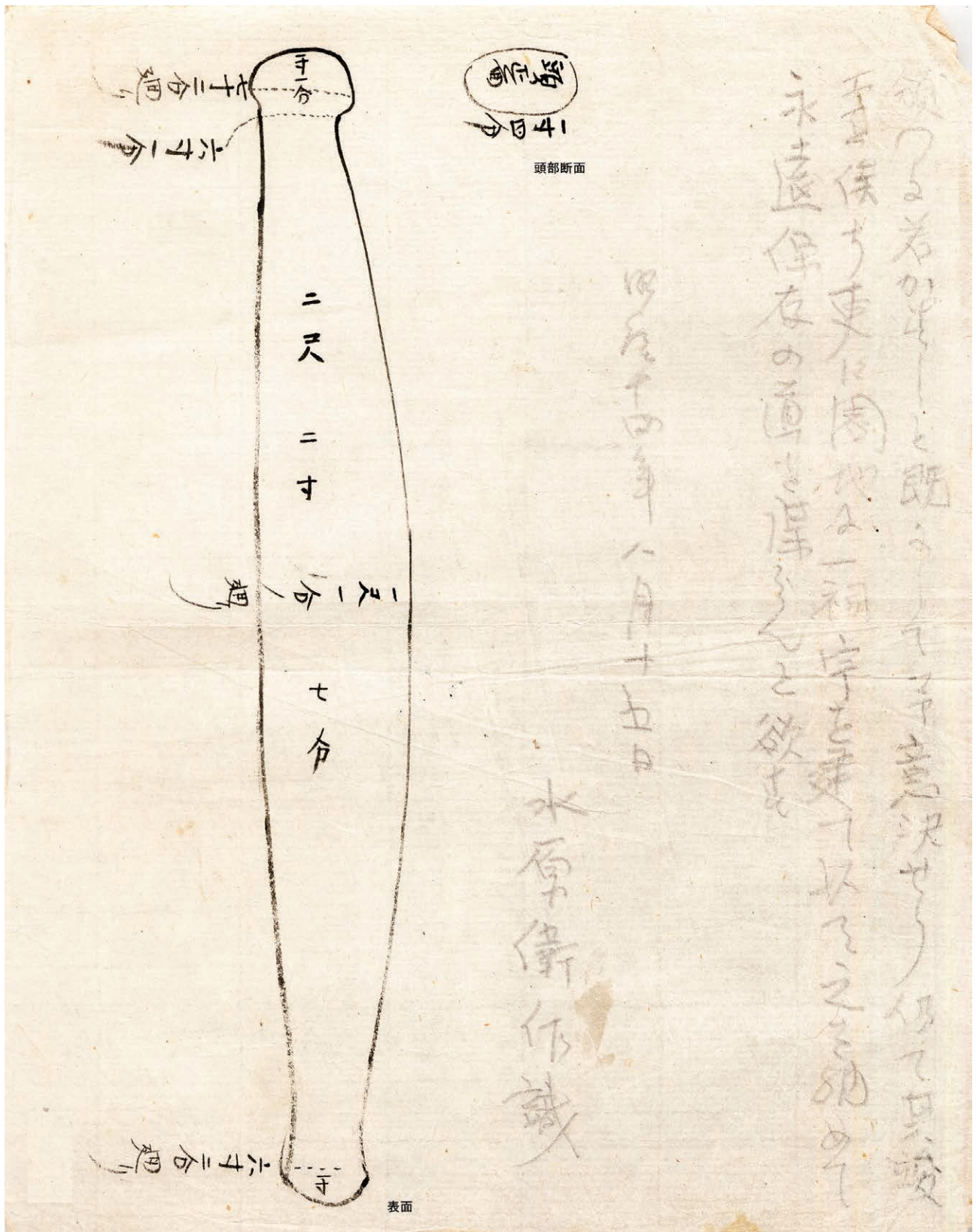
317

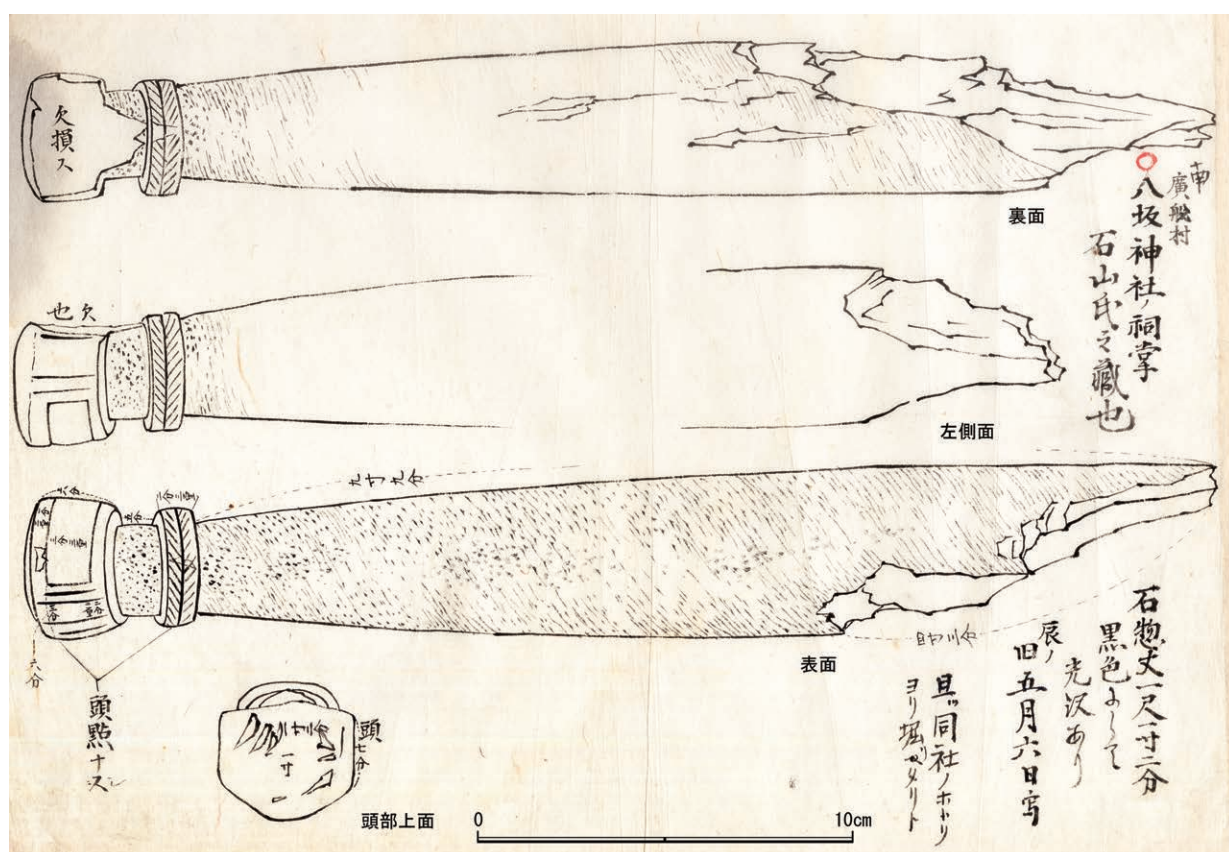


318

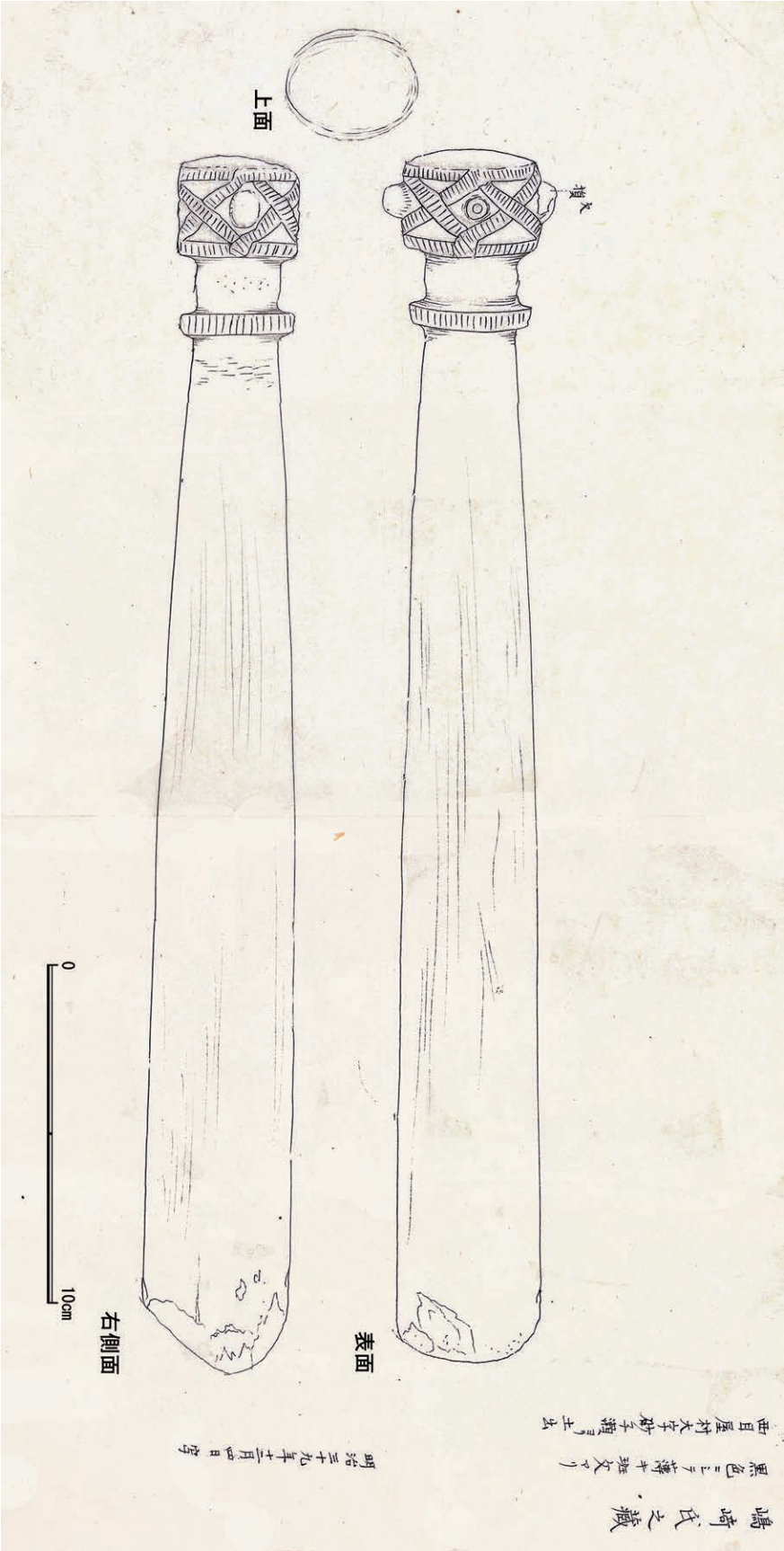


319

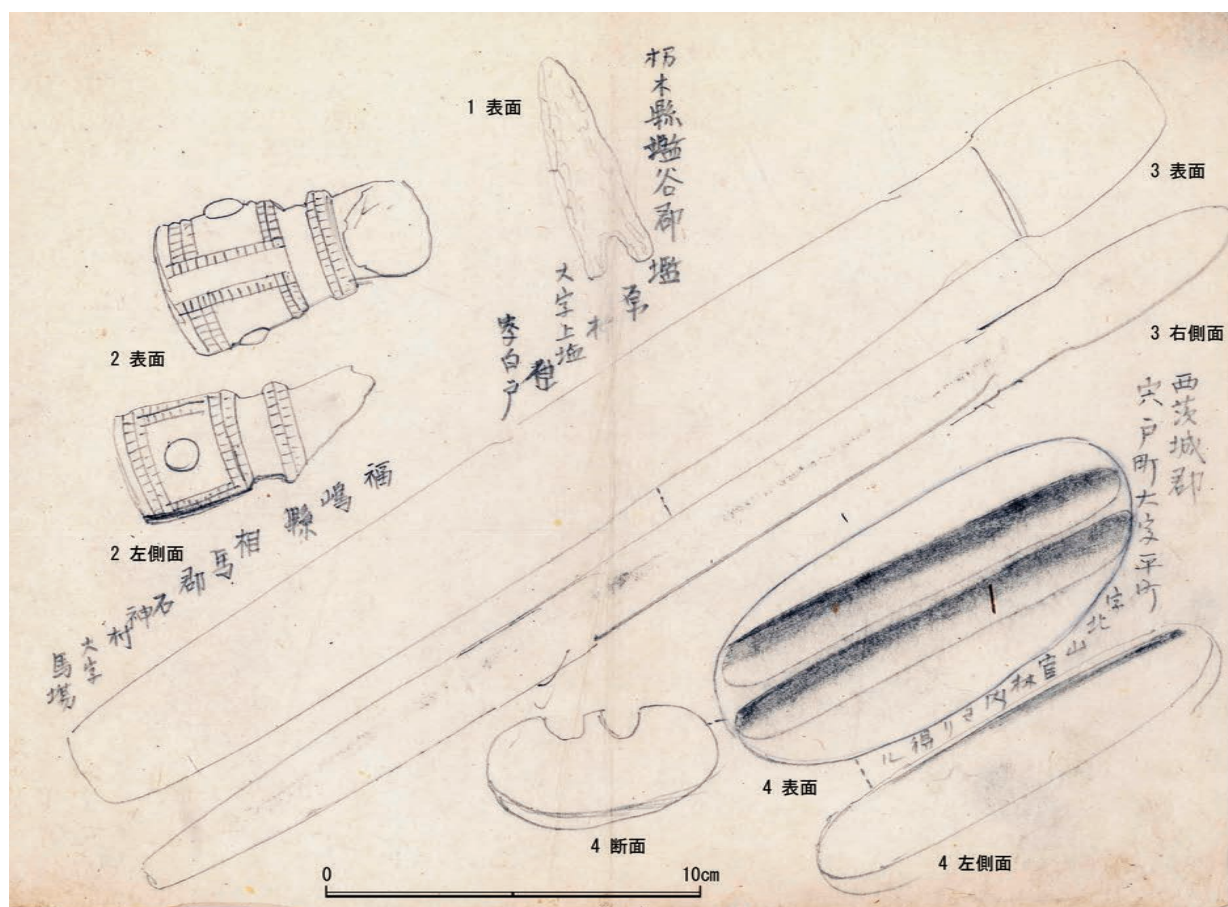




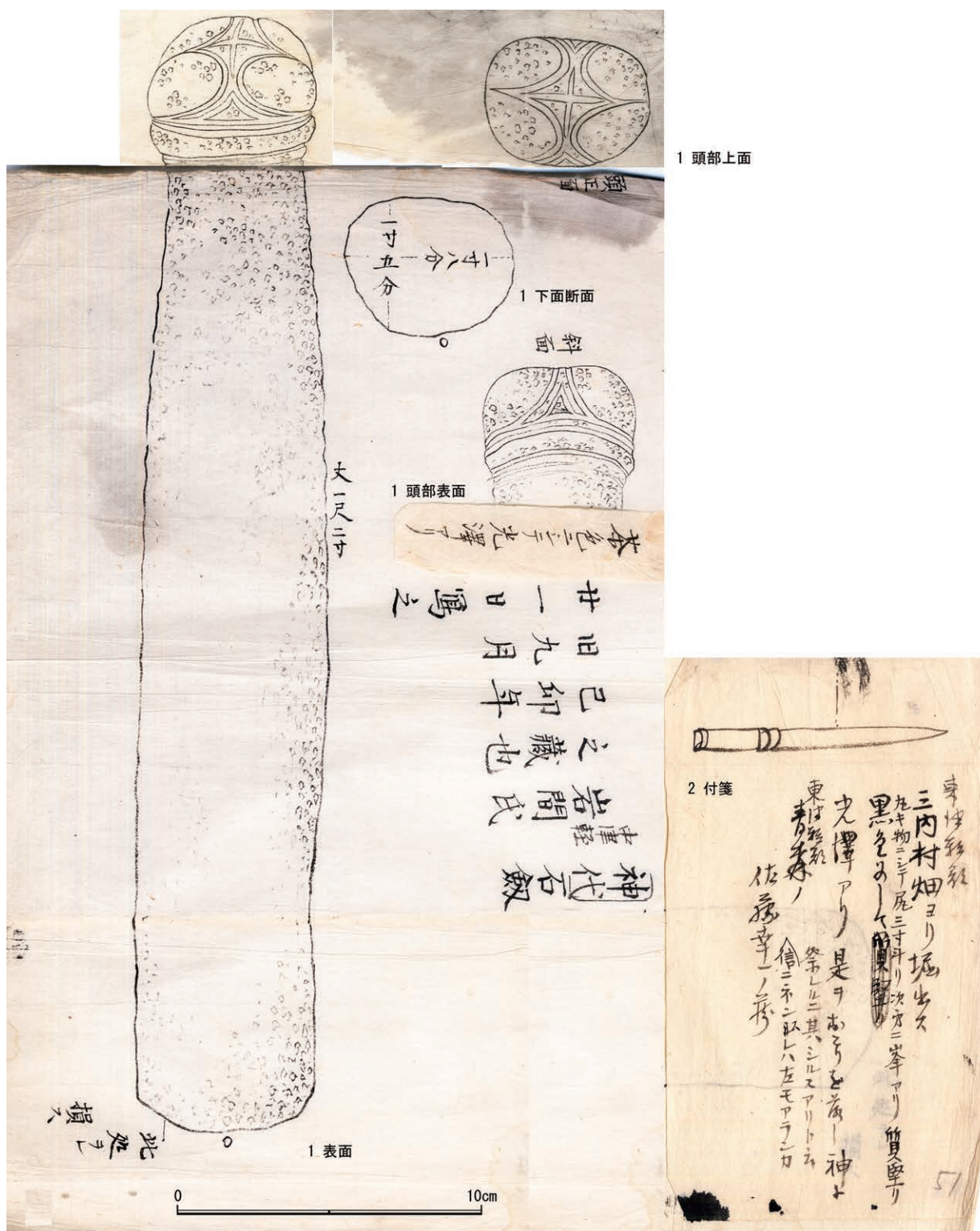
321



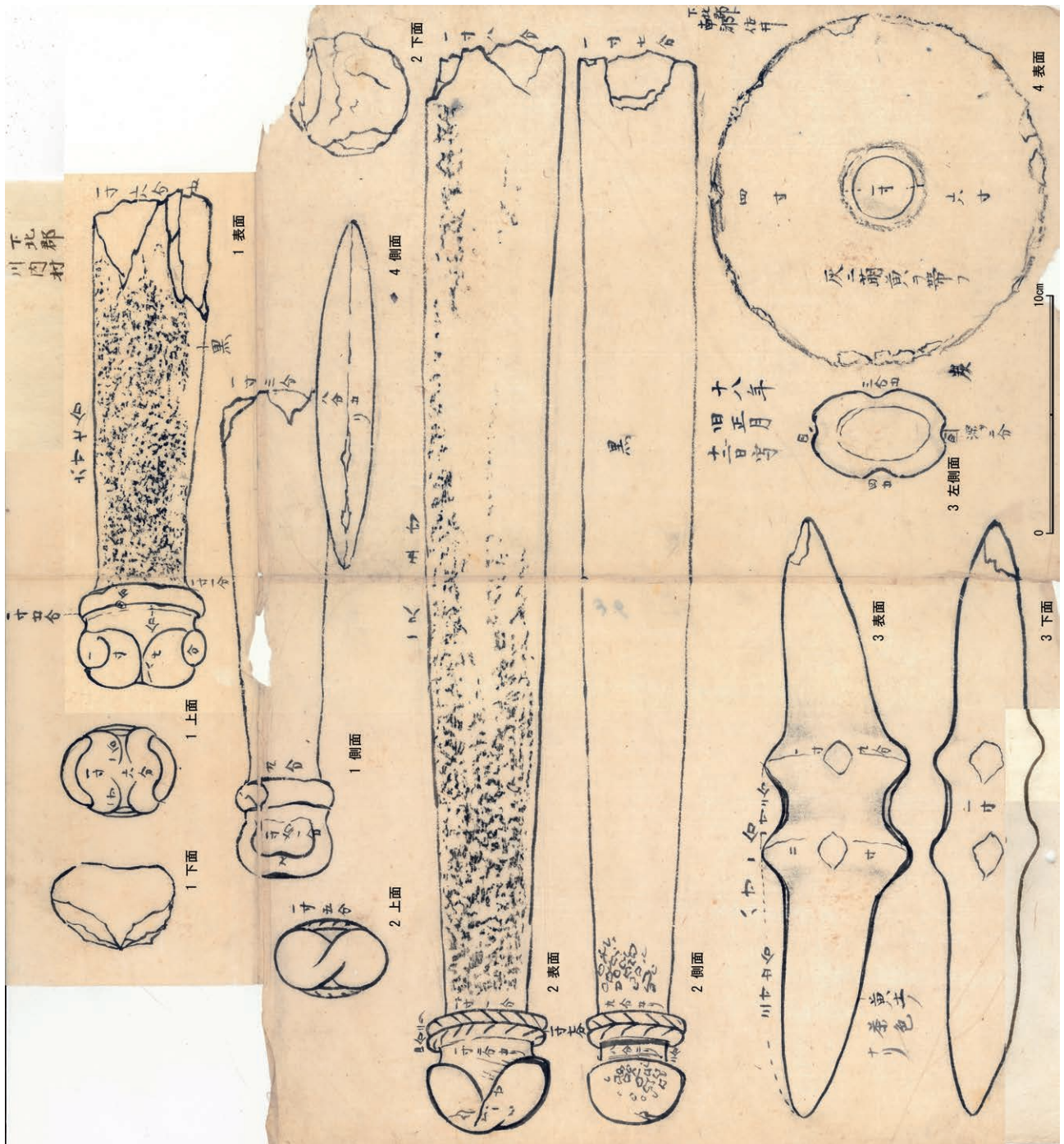




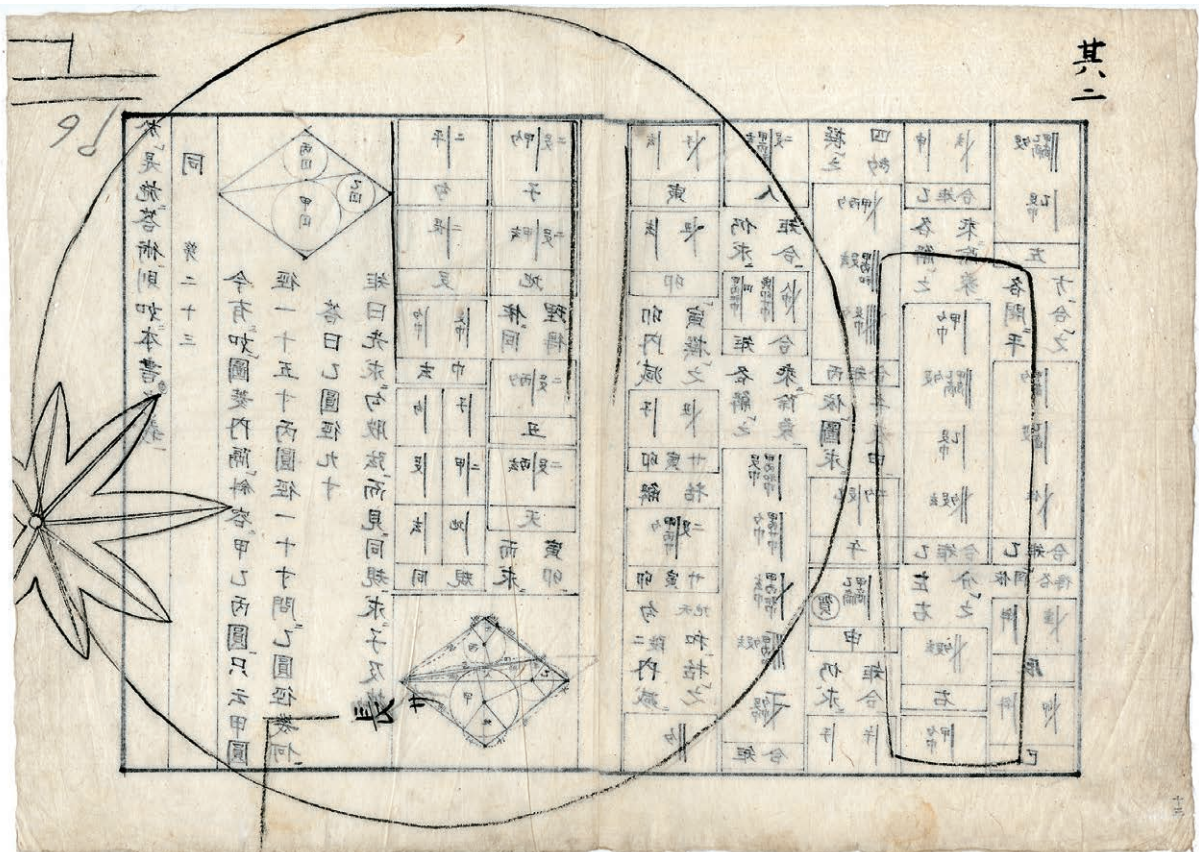




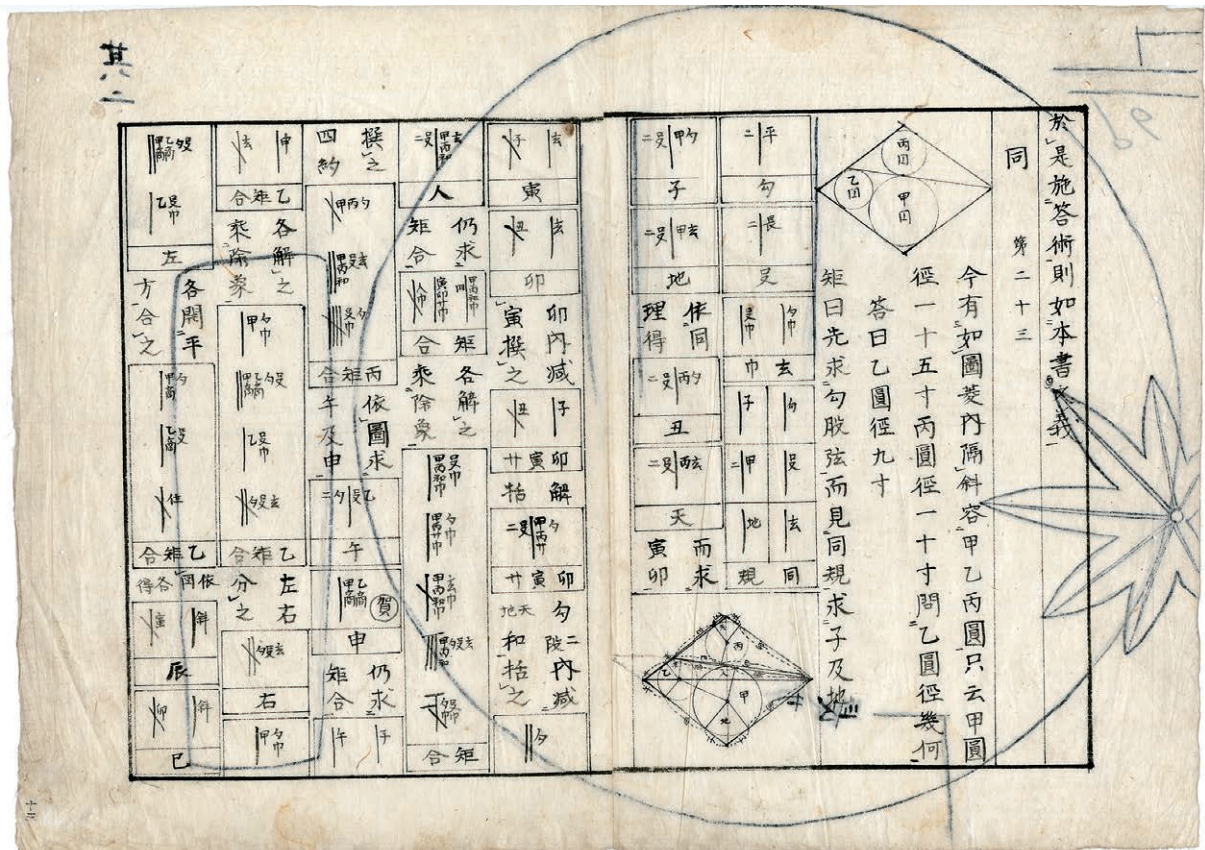
326



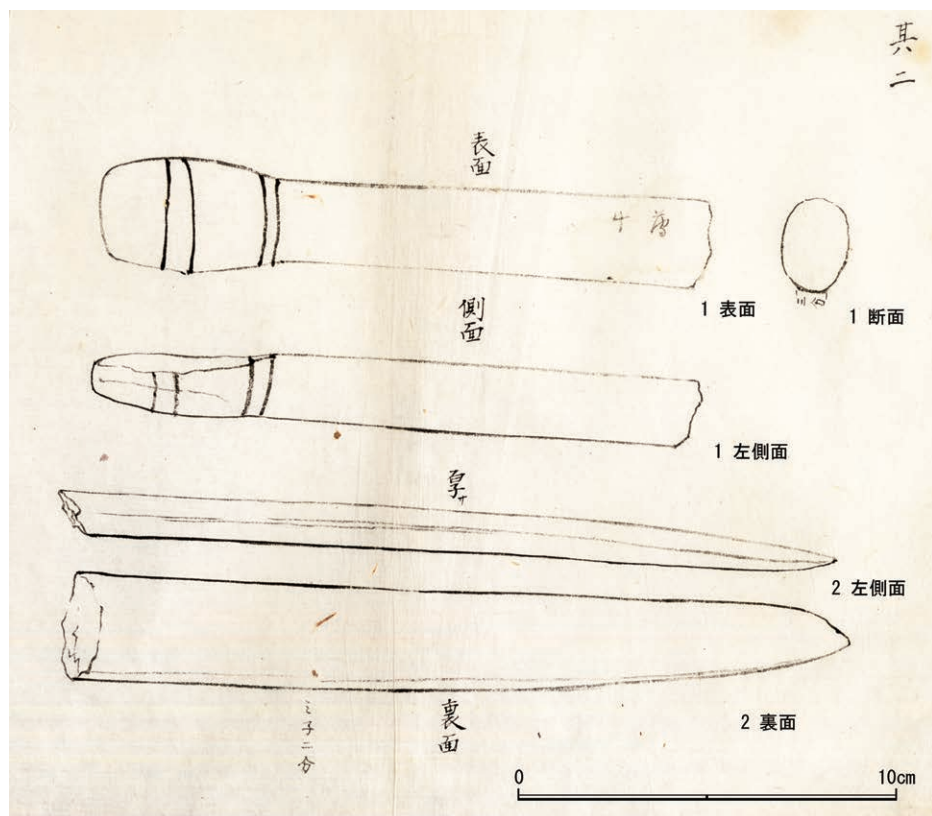




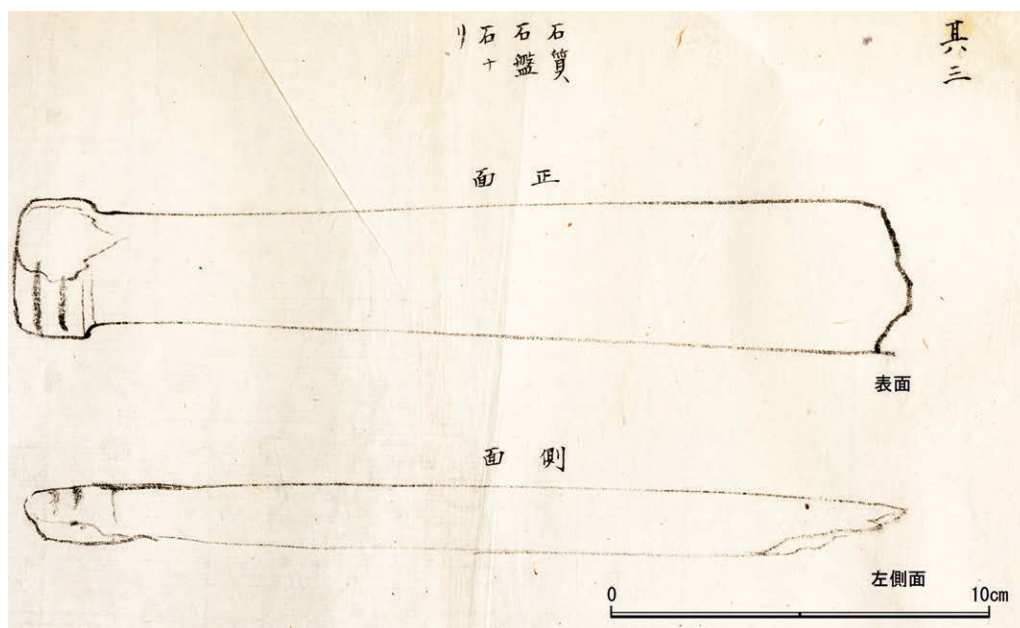
329表



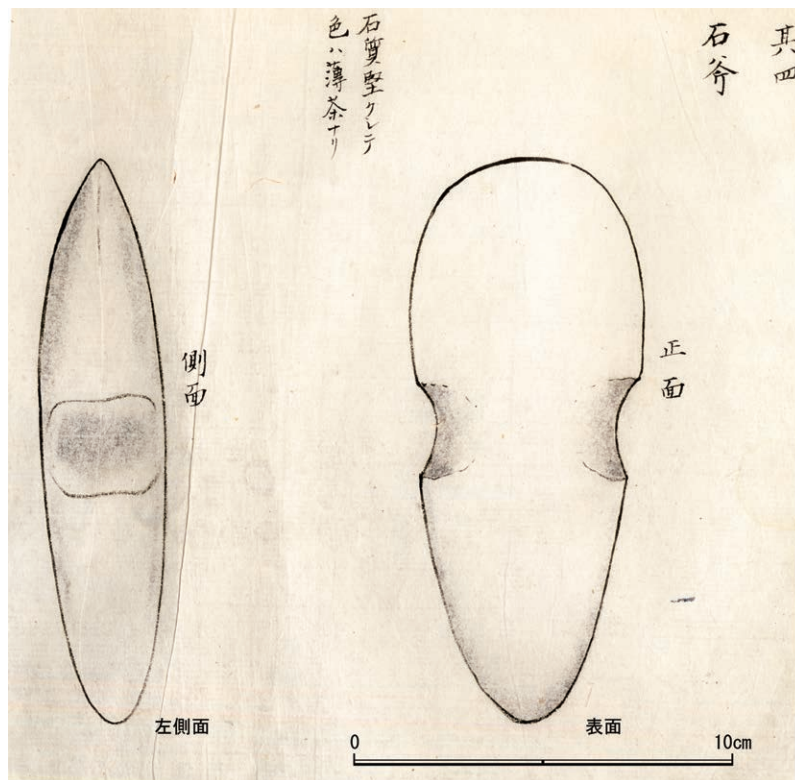
329裏



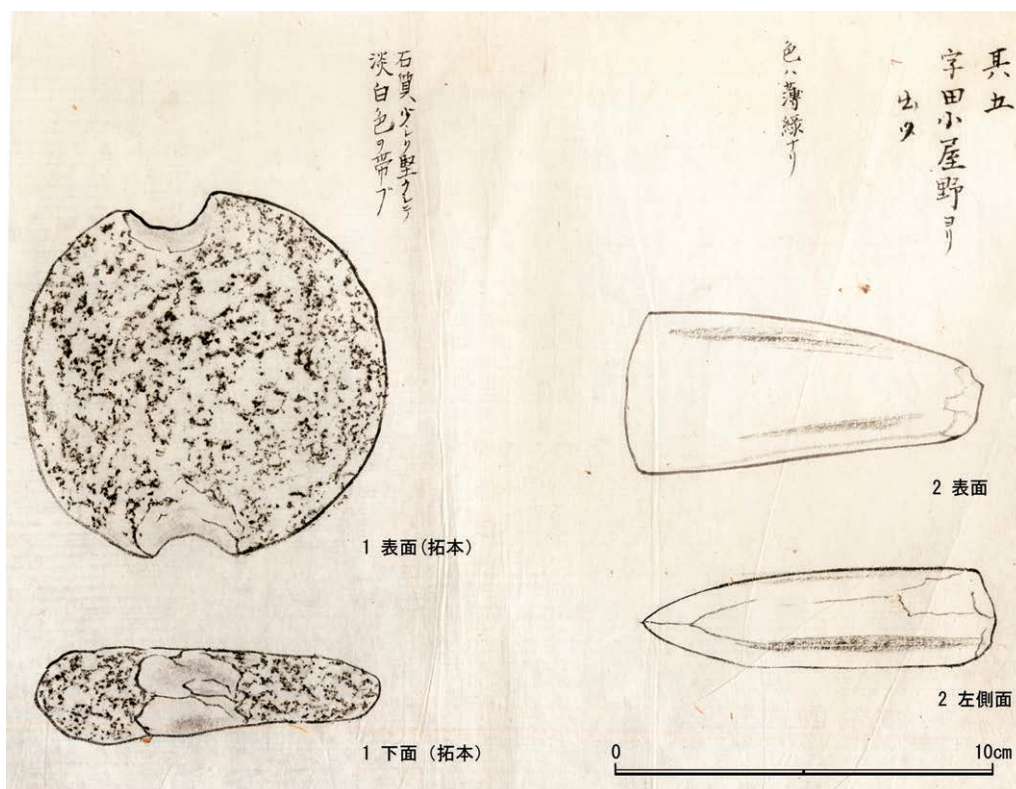
330



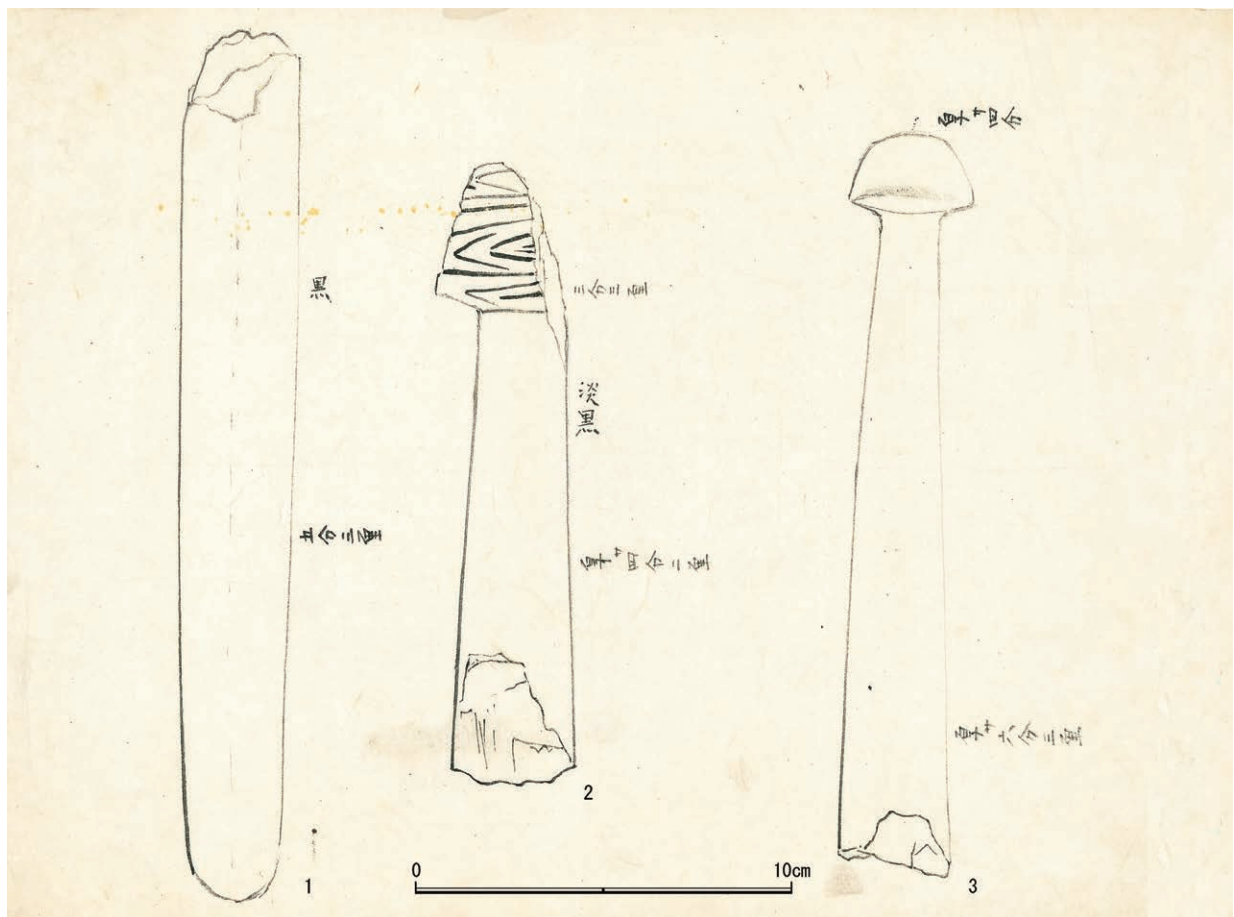
331



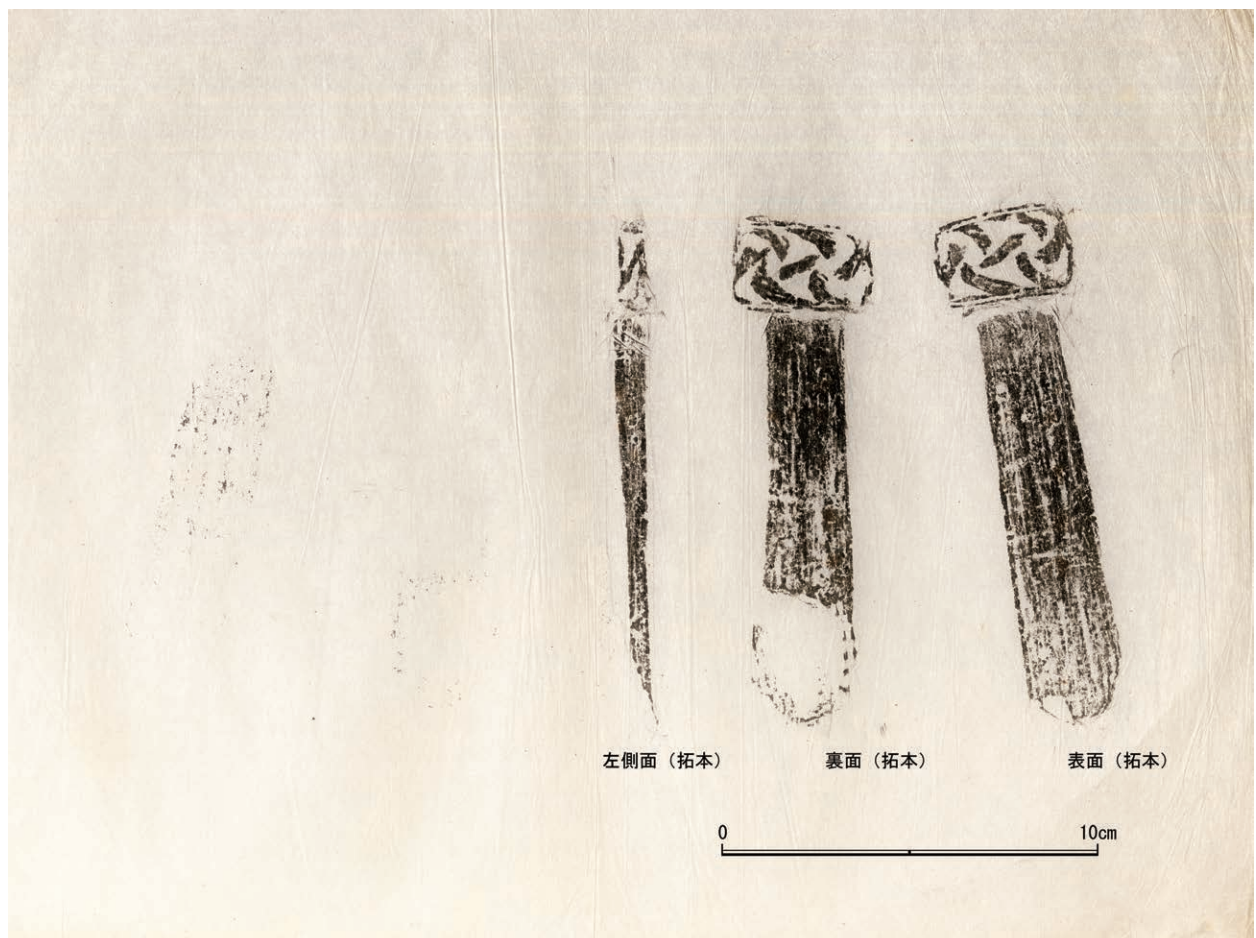
332



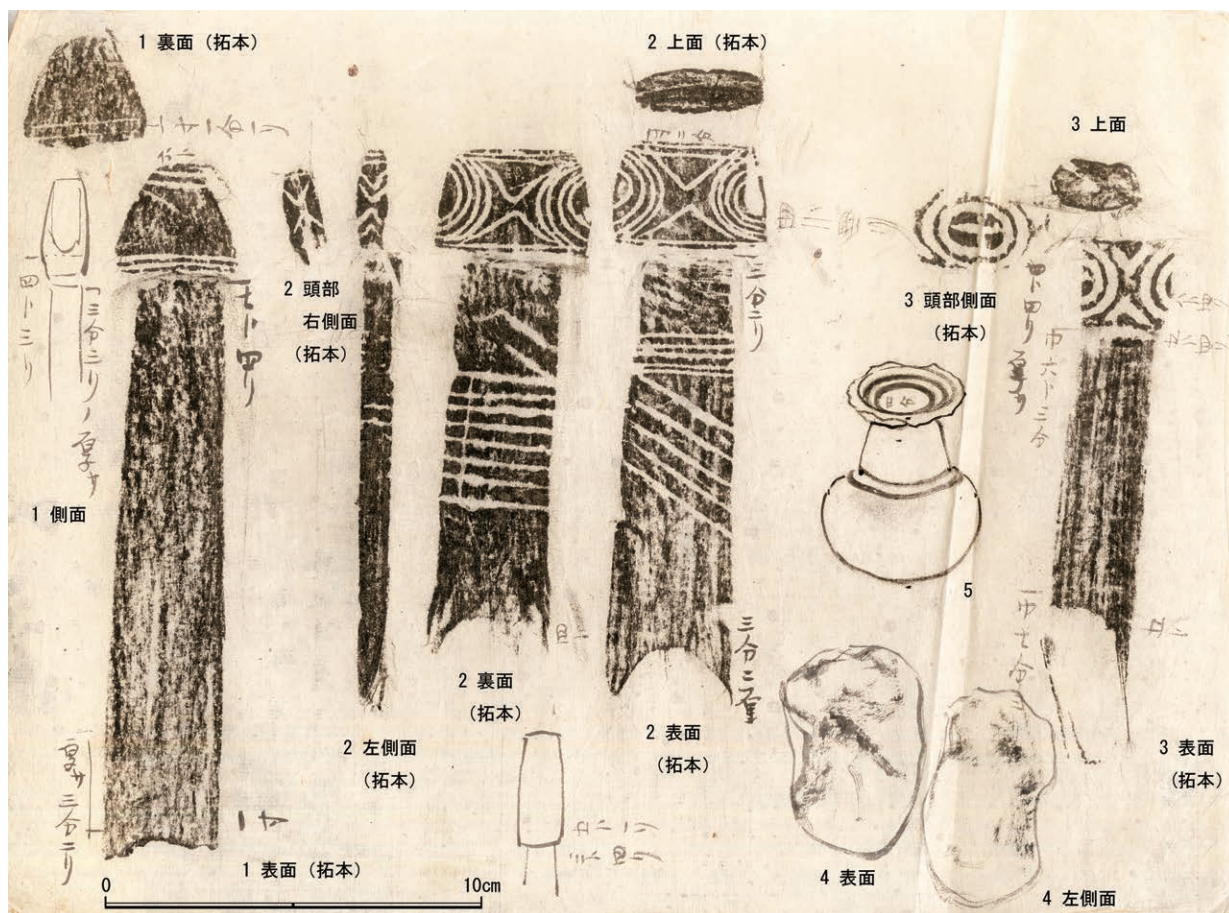
333



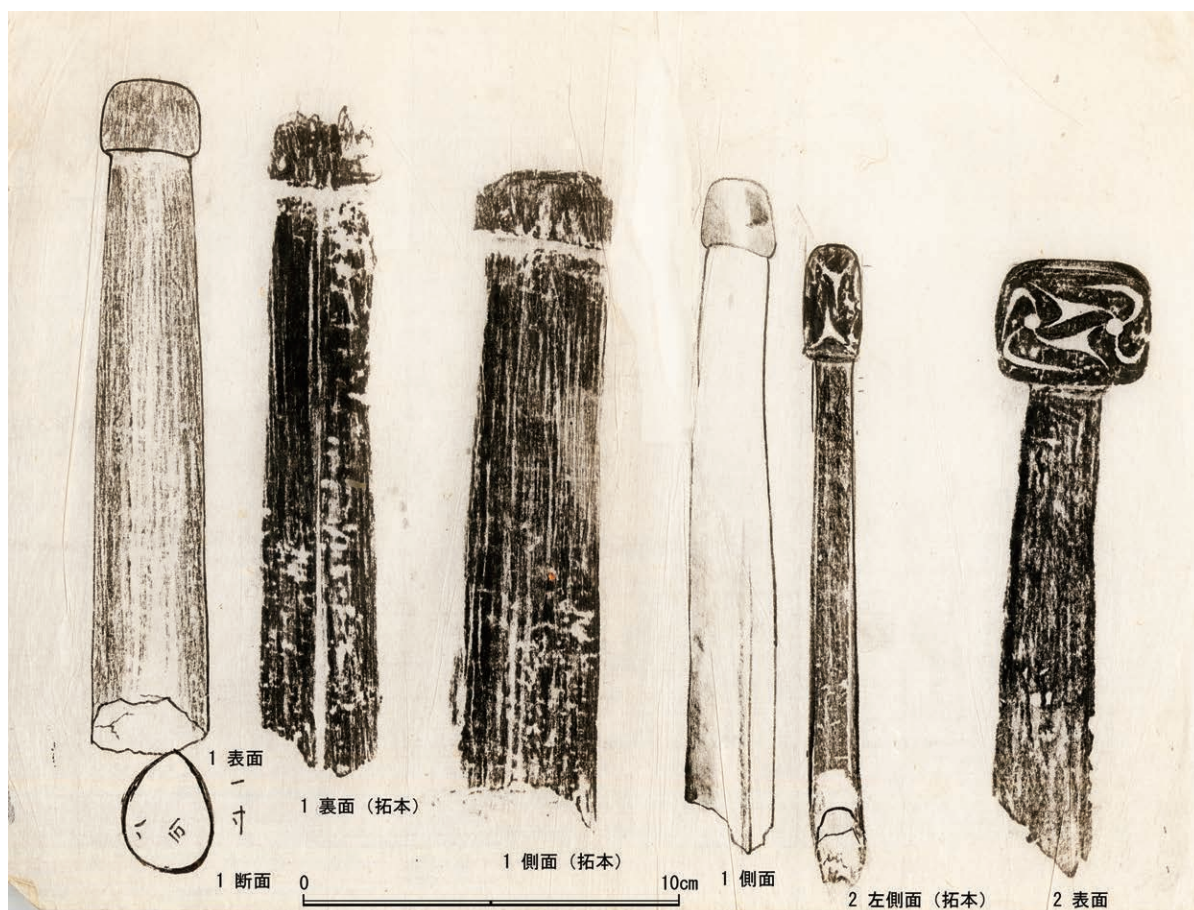
334



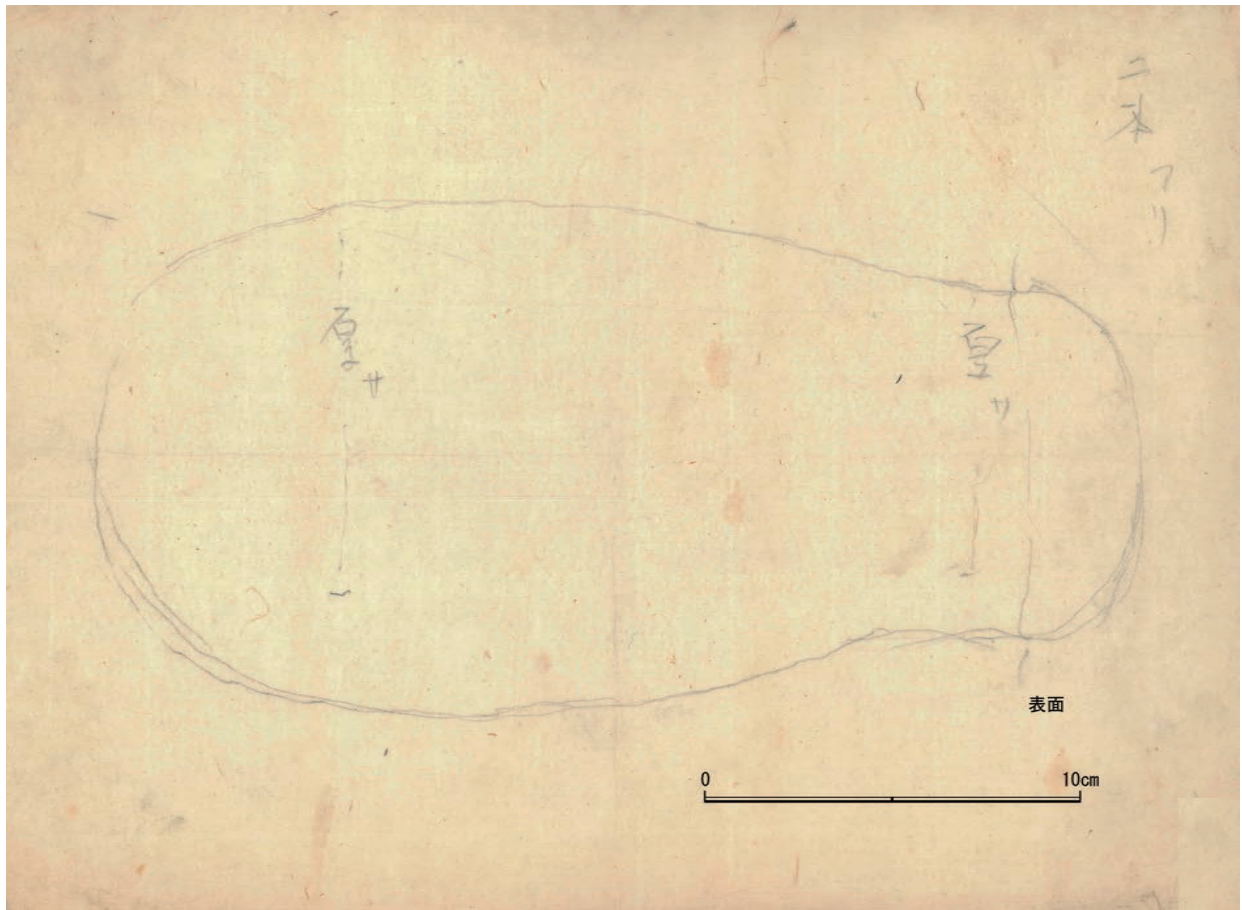
335



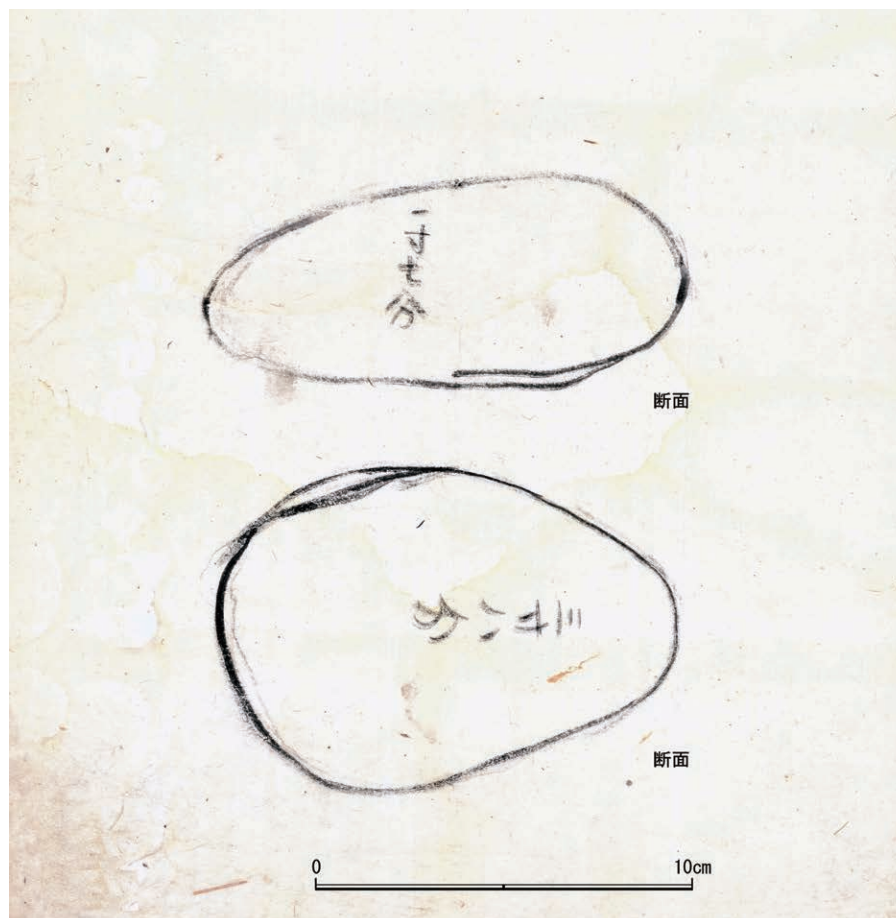
336



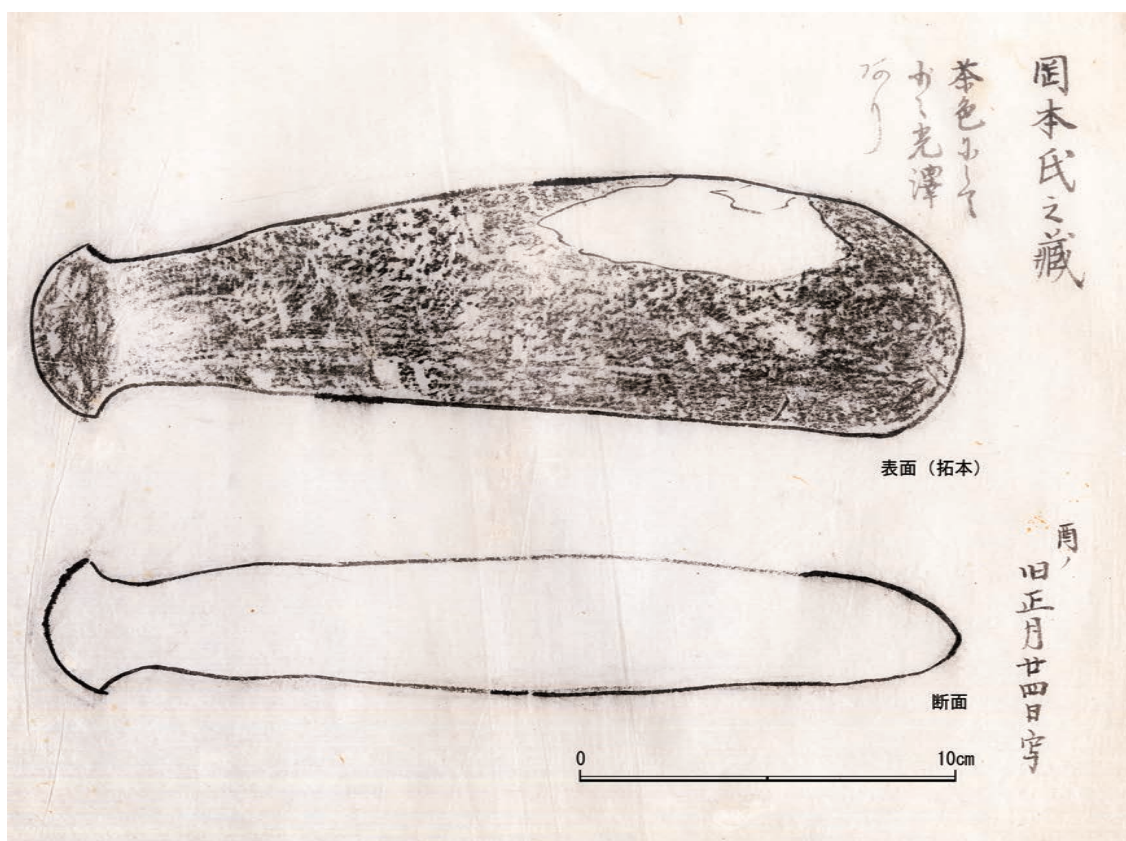
337



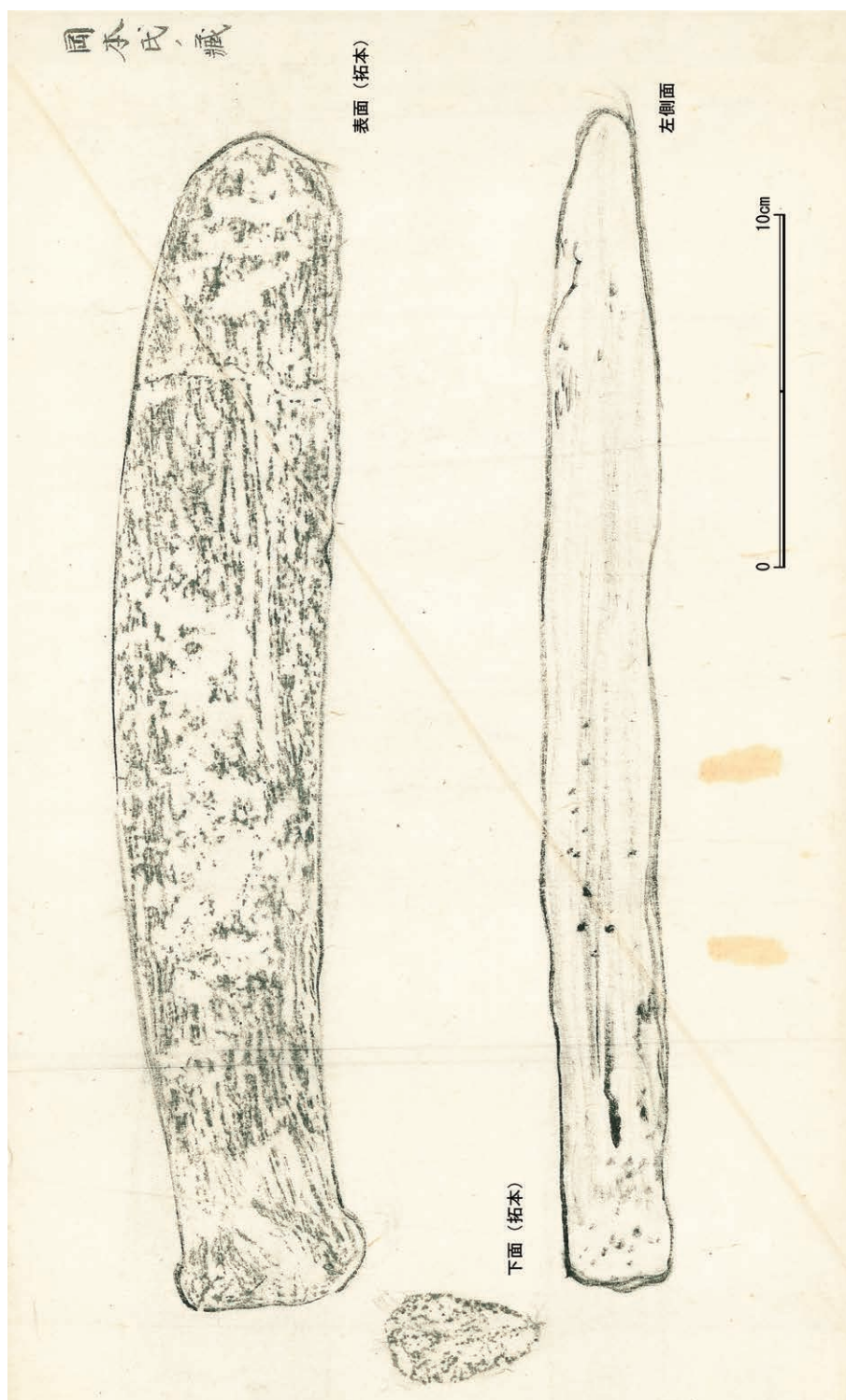
338A



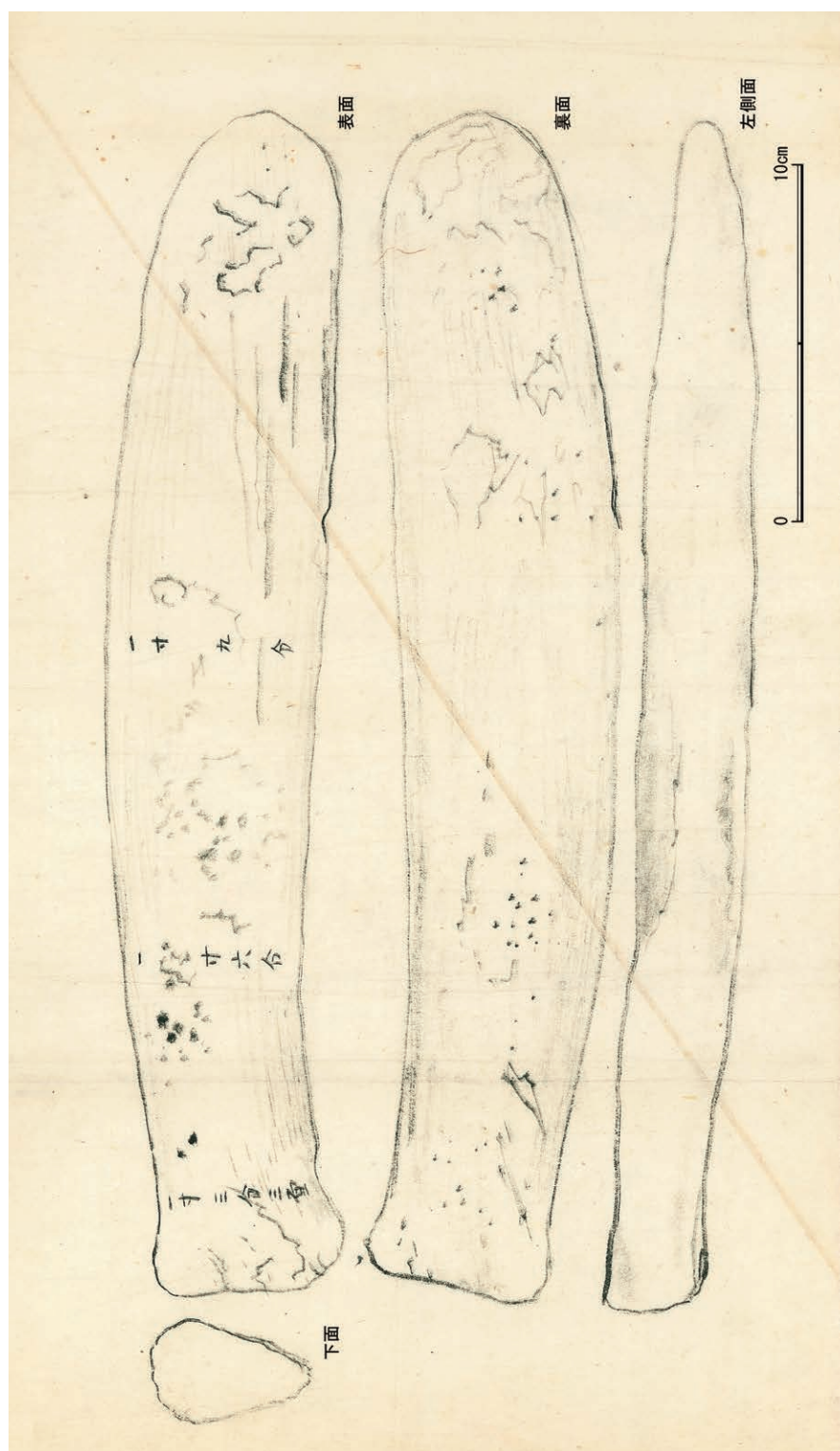
338B



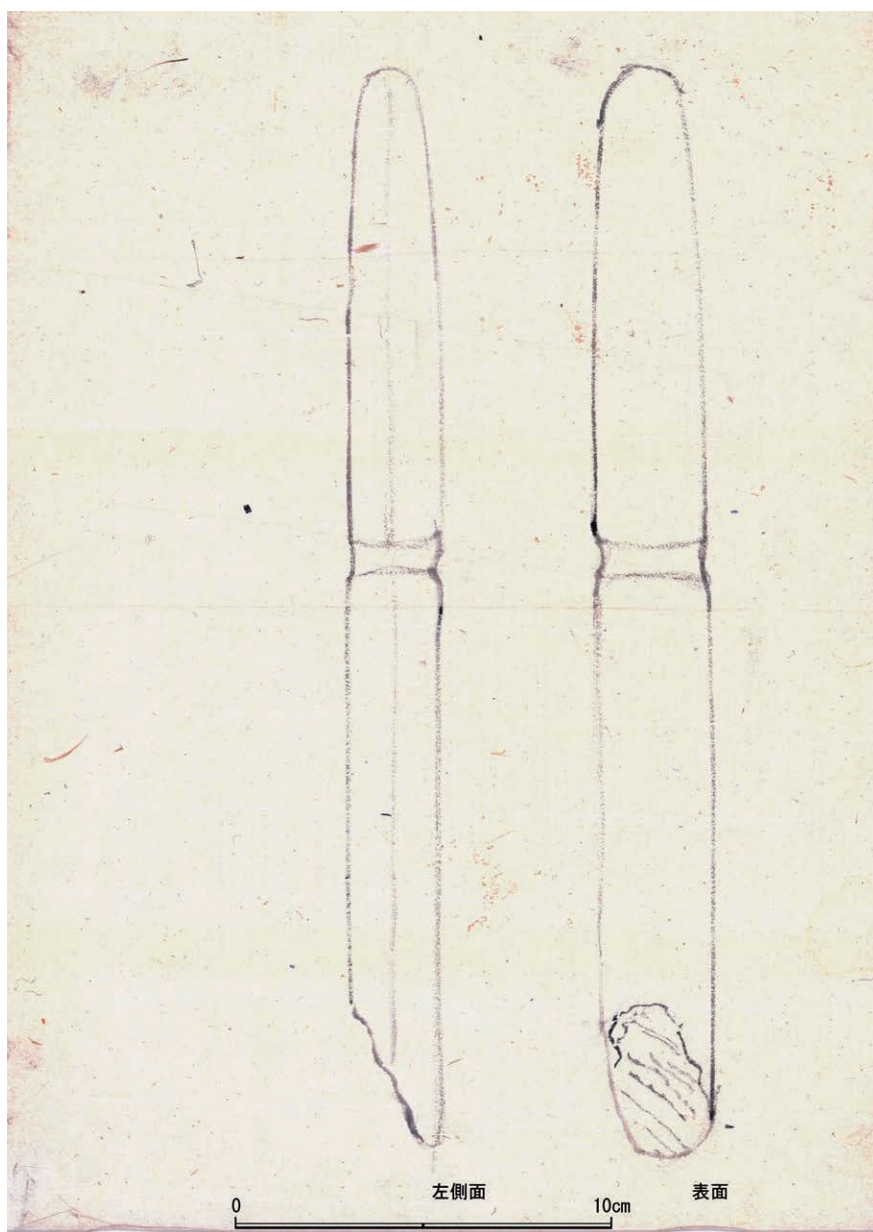
339



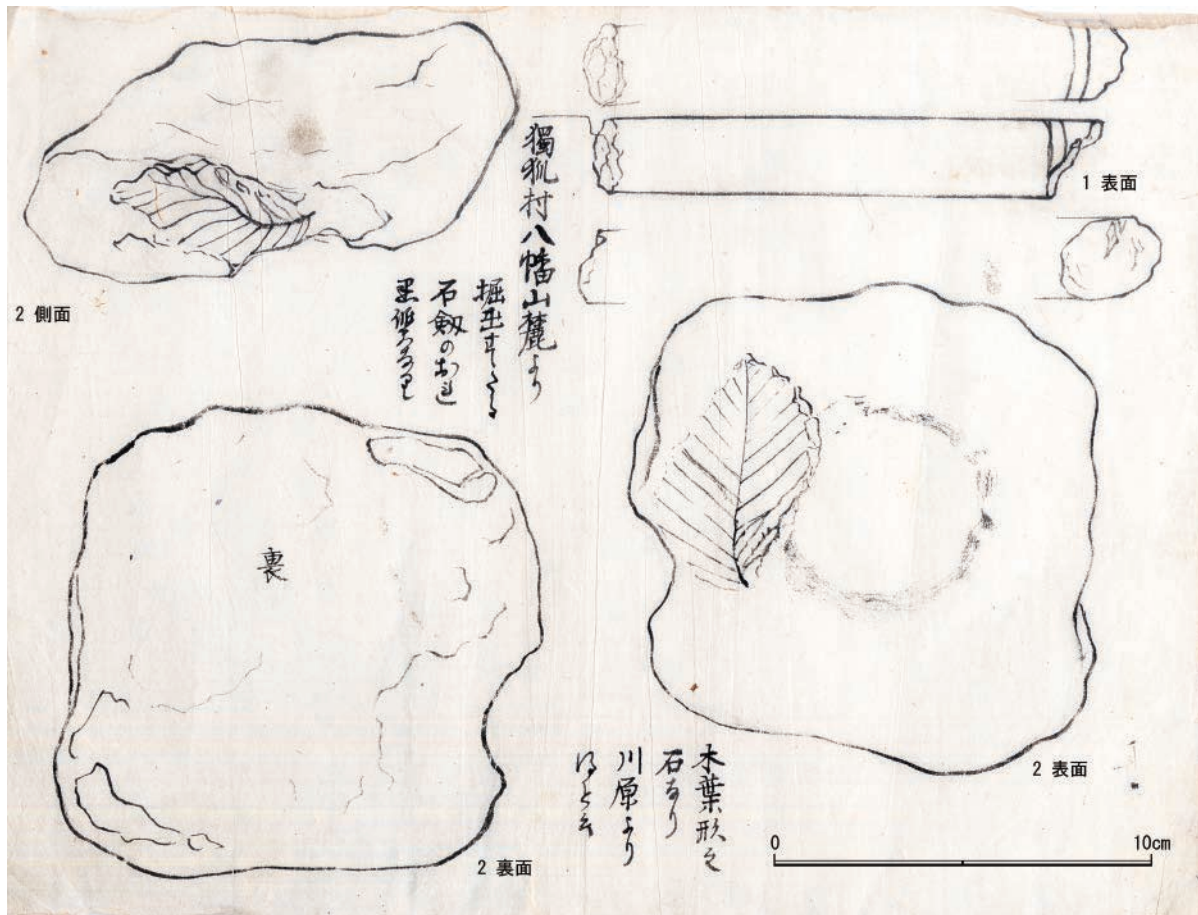
340A



340B



341

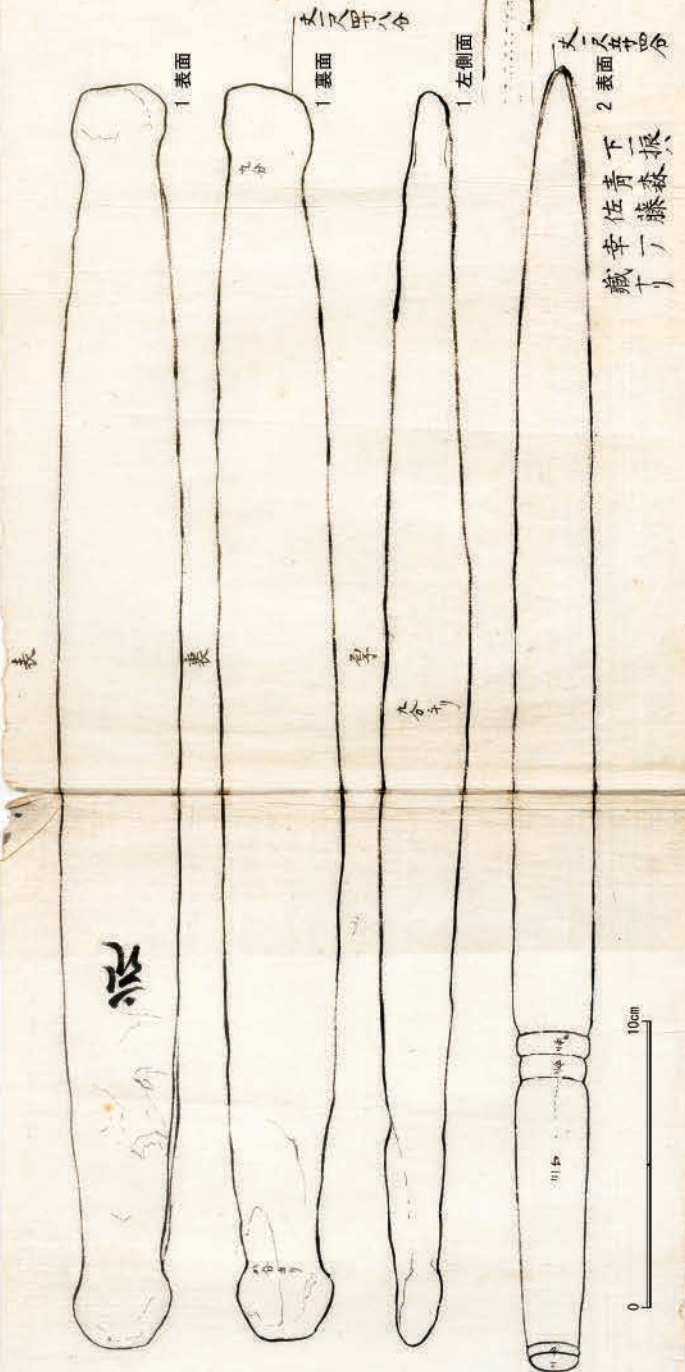


342

古懸山之宝物
石劍名圖
石文字

辰月八月三日

後三墨(書言者十)



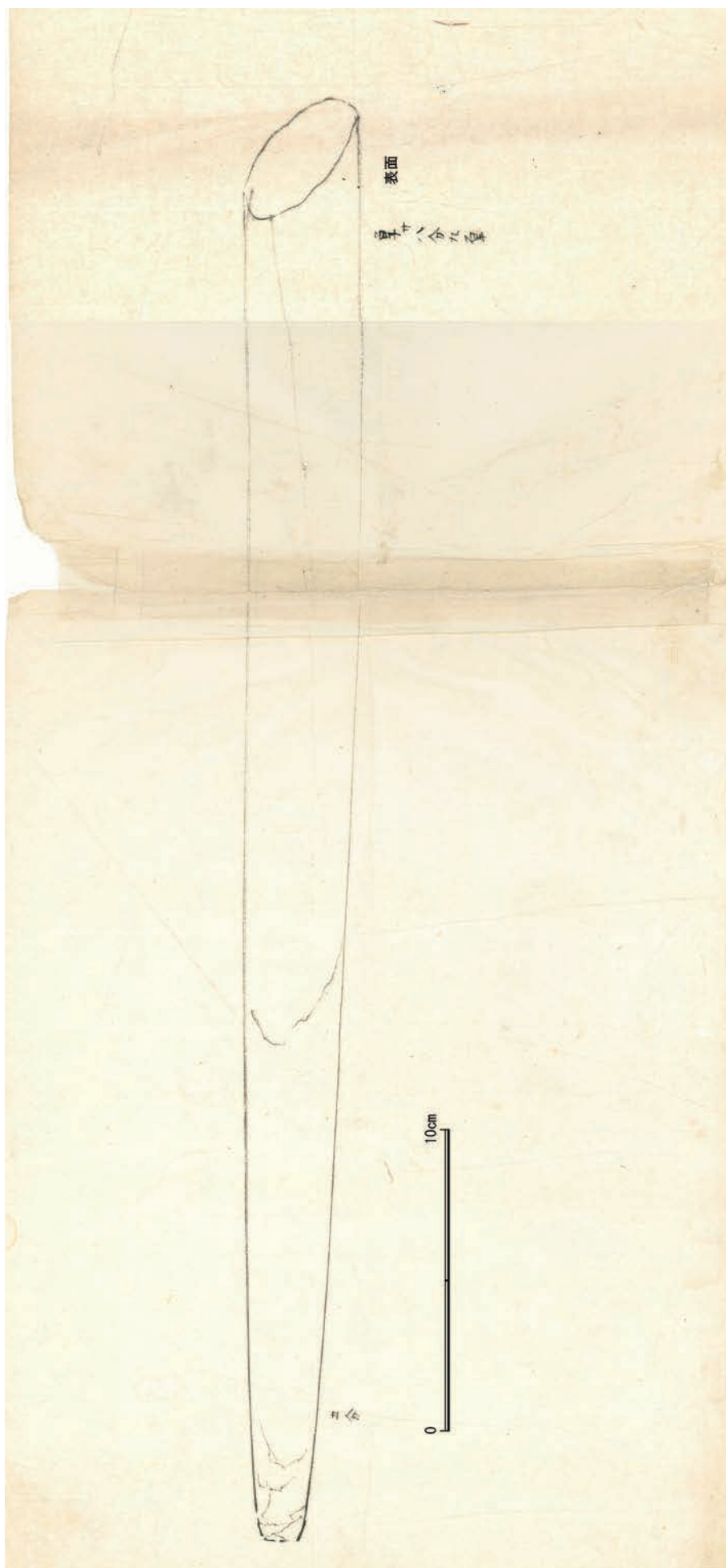
箱之中左文字

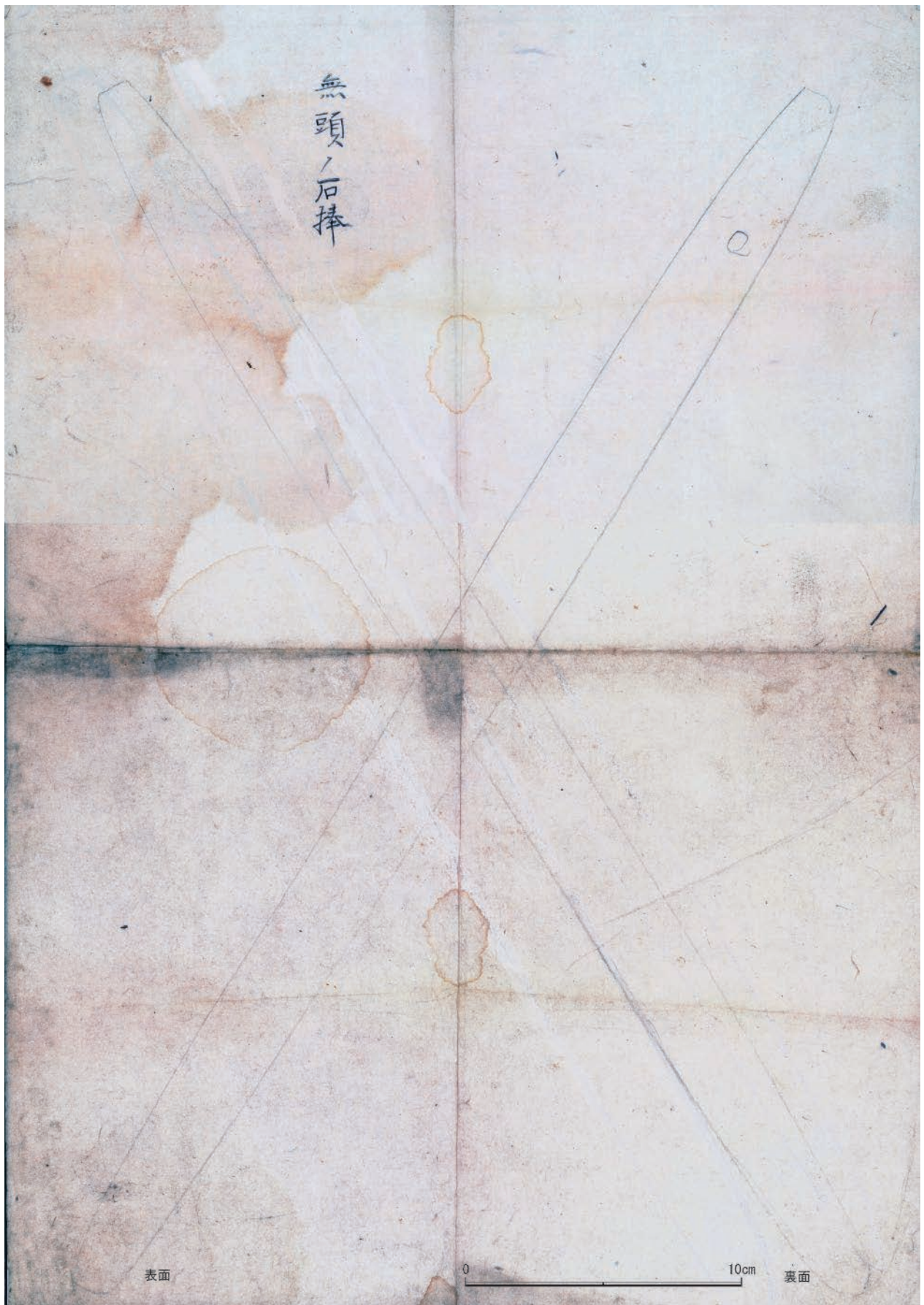
石劍長一尺四寸七分末末厚幅數不同其重一百四十六錢
也古懸山有農氏善次郎者一日刺不動野不圖古劍一
葉乃之于時享享祭卯年三月廿八日也敬之傳之奉古
懸山園上貞吉寺住職朝忍京利而為什物也 太守公
九年甲辰四月三日詣彼寺而二姓矣而後朝忍言上古
劍張本 太守奇之敬之使武運家珍永傳不朽
誘曰此寺凡十有餘年于今侍誦大場正甫聚命謹
志



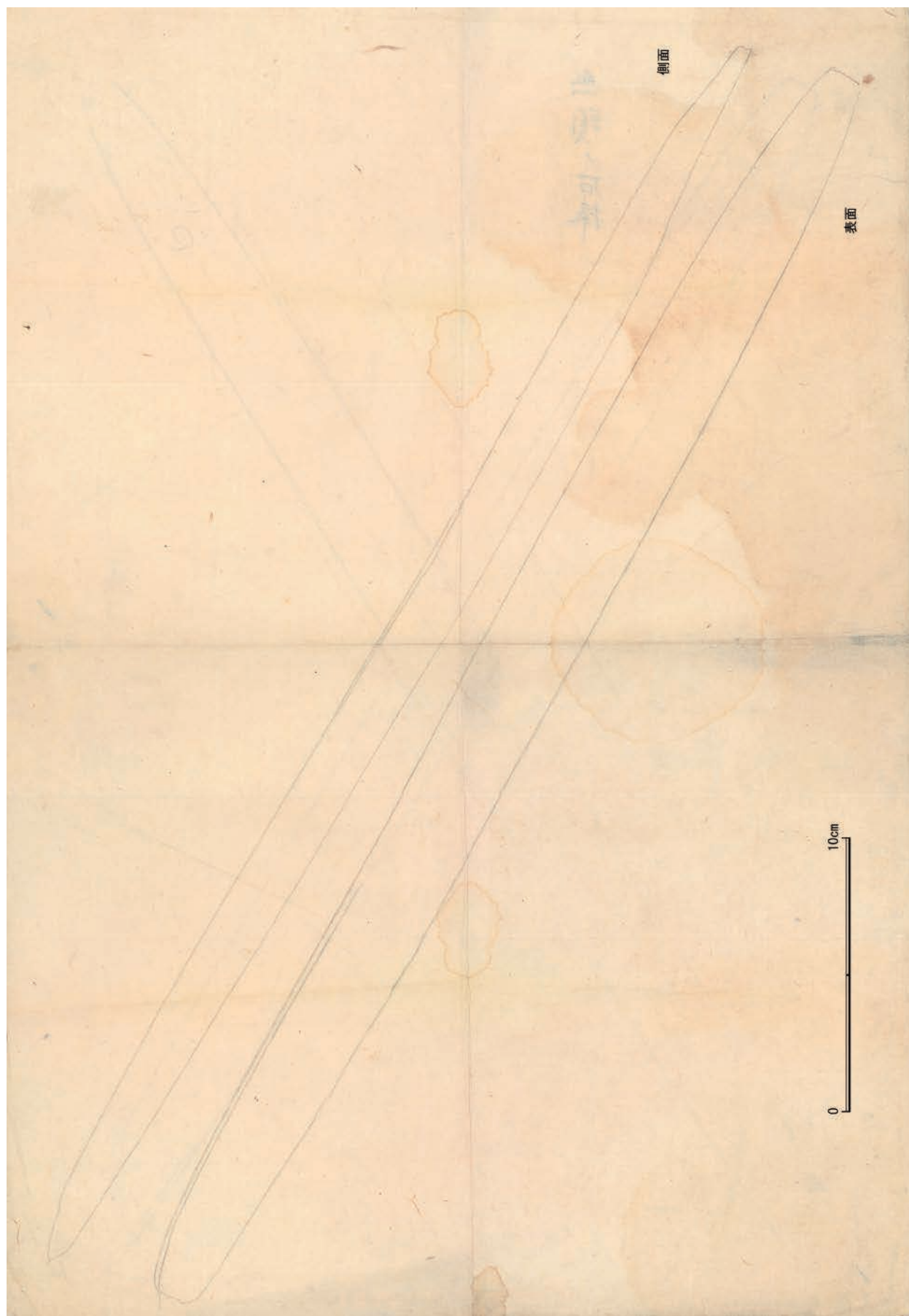


345

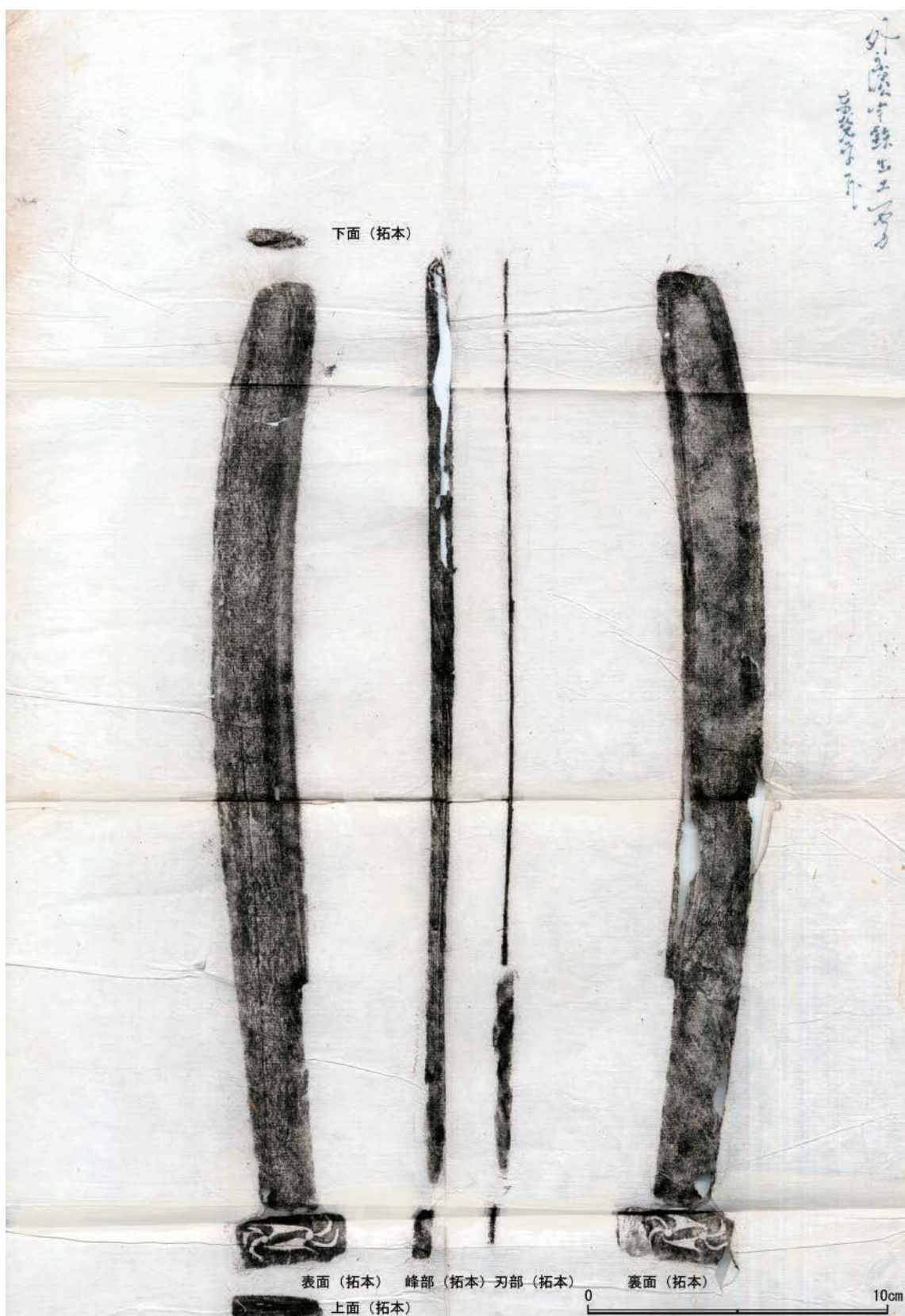




347表



347裏



348

東京
正四位 元老院義官

神田孝平君所藏

明治十九年旧七月十三日

草宅（市来臨アツテ）
古器物御ラニ此日余
御禮ニ出テ石場宅ニテ

寫ス色墨アヘナリ
大サ如圖ス



表面(拓本) 左側面 右側面

0 10cm

明治二十三年七月東京人類學會
 岩峰勝氏本縣龍岡出張探掘
 佐也

石釵

石質石鏢石子

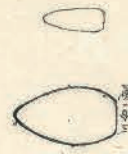


表面

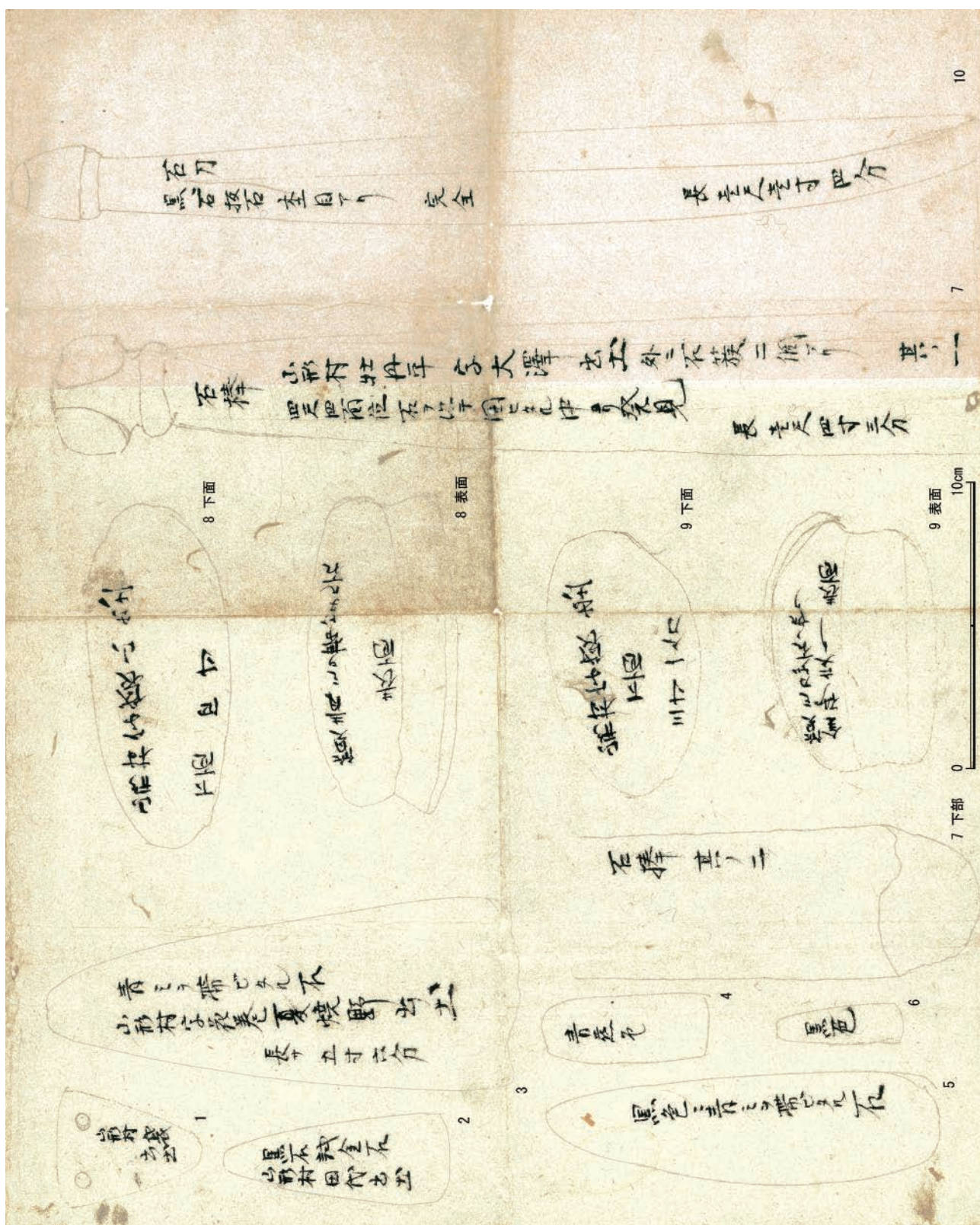


右側面

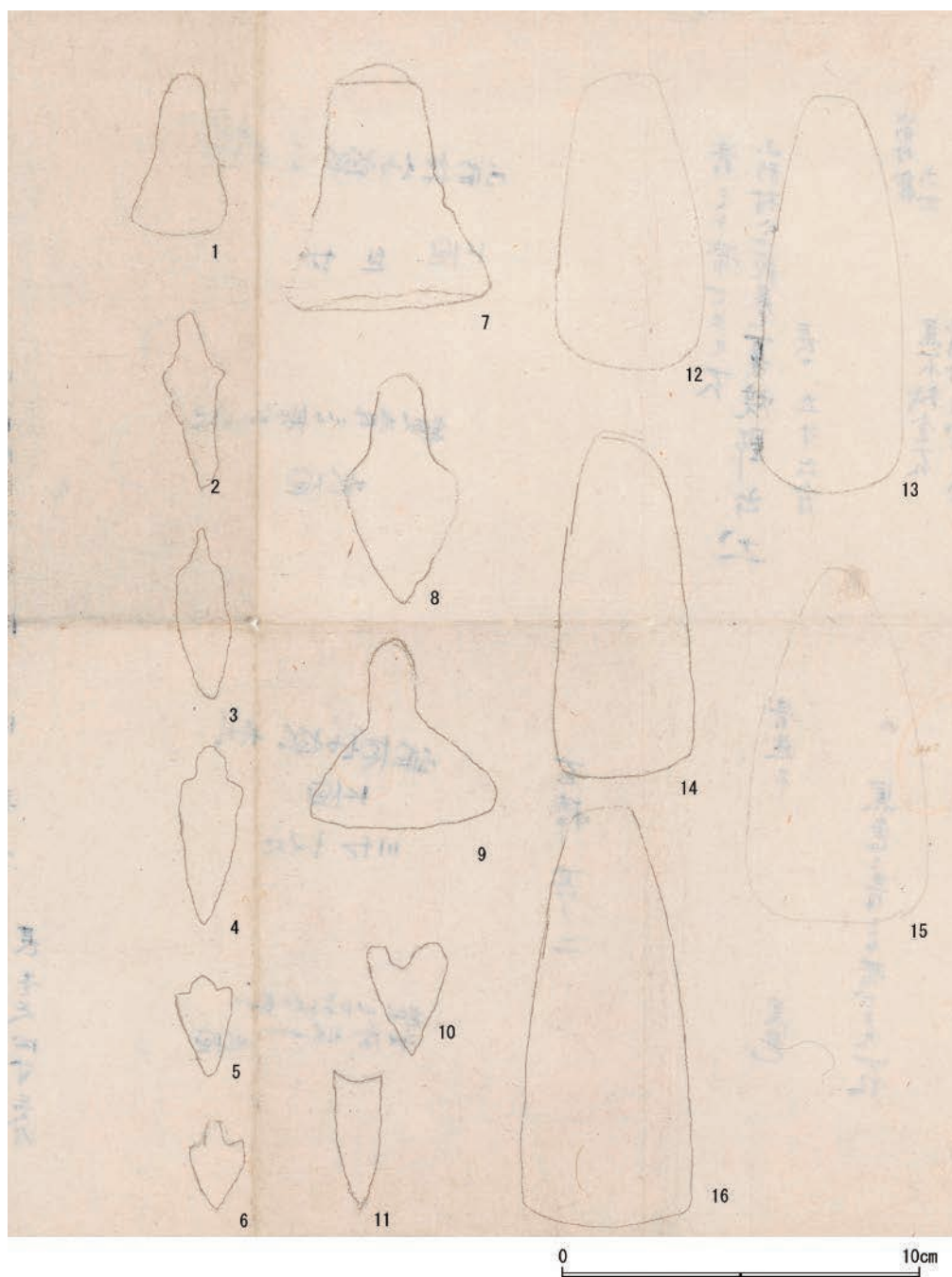
ナモケケト正面
 リ



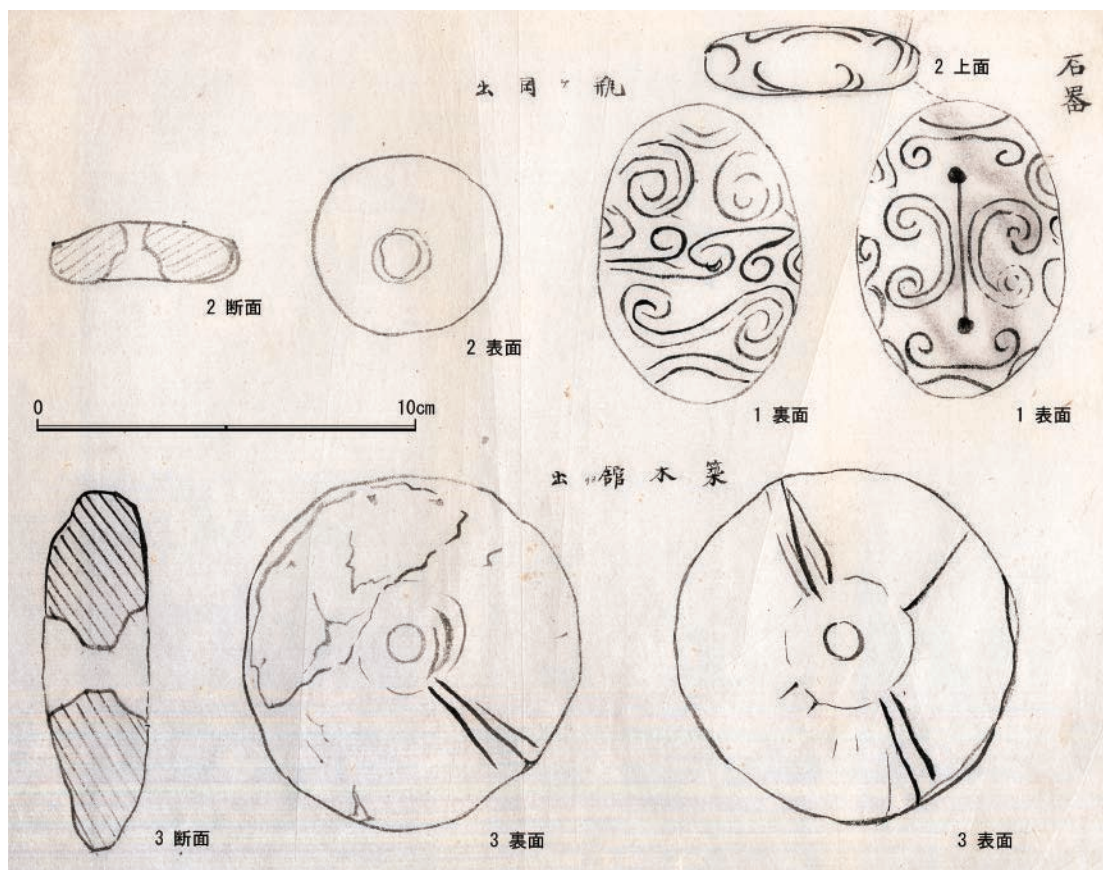
断面 (最大) 断面 (最小)



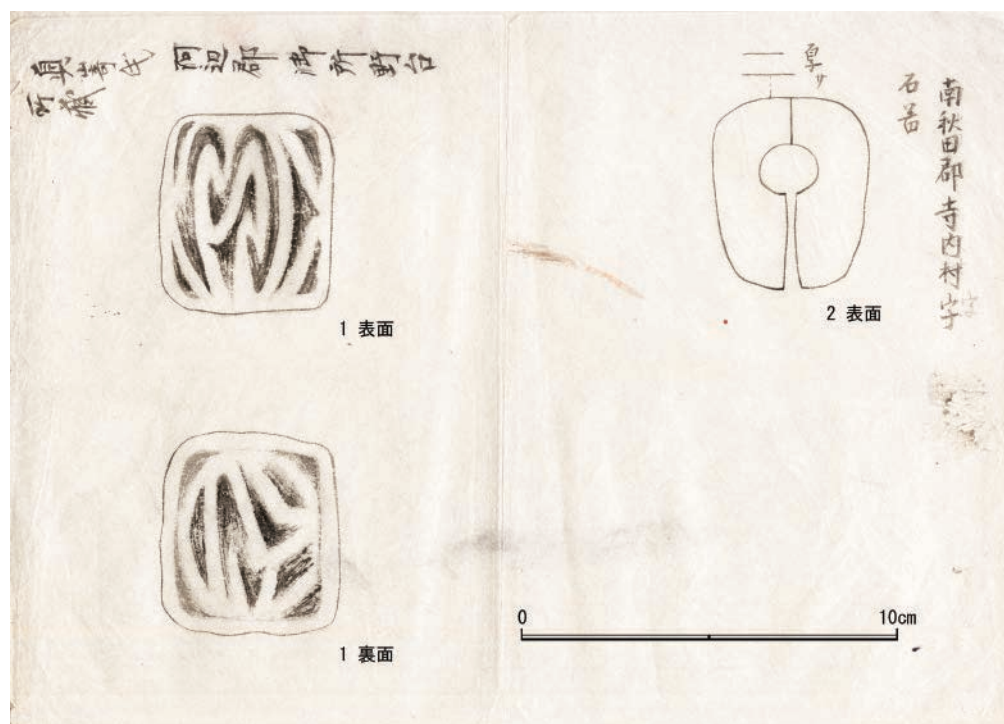
351表



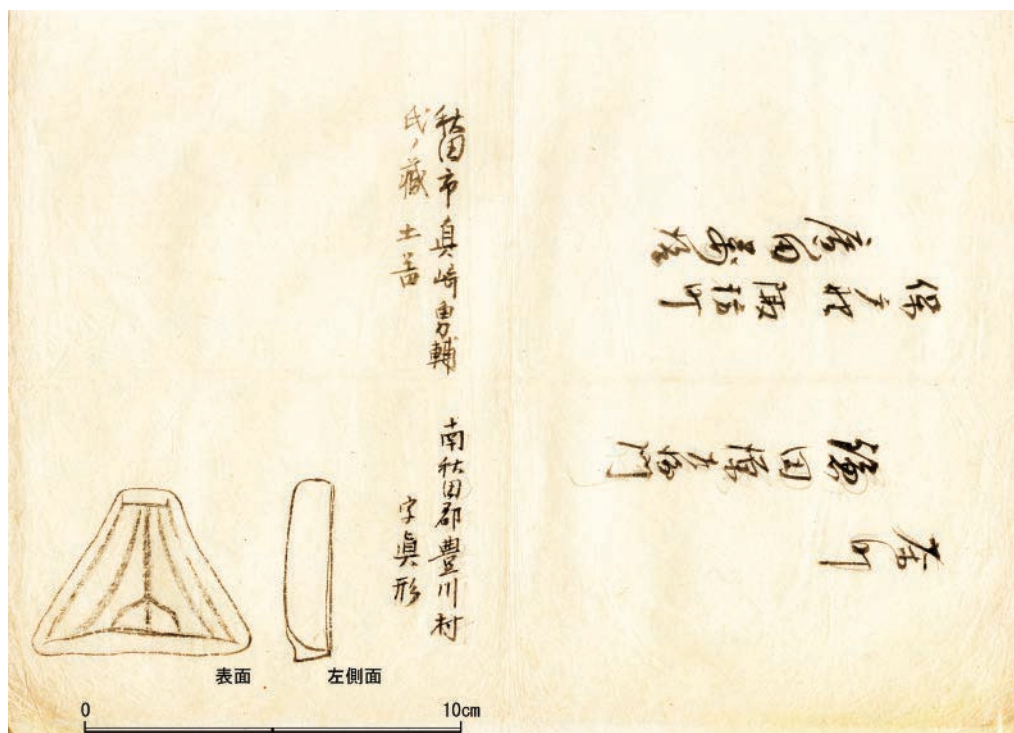
351裏



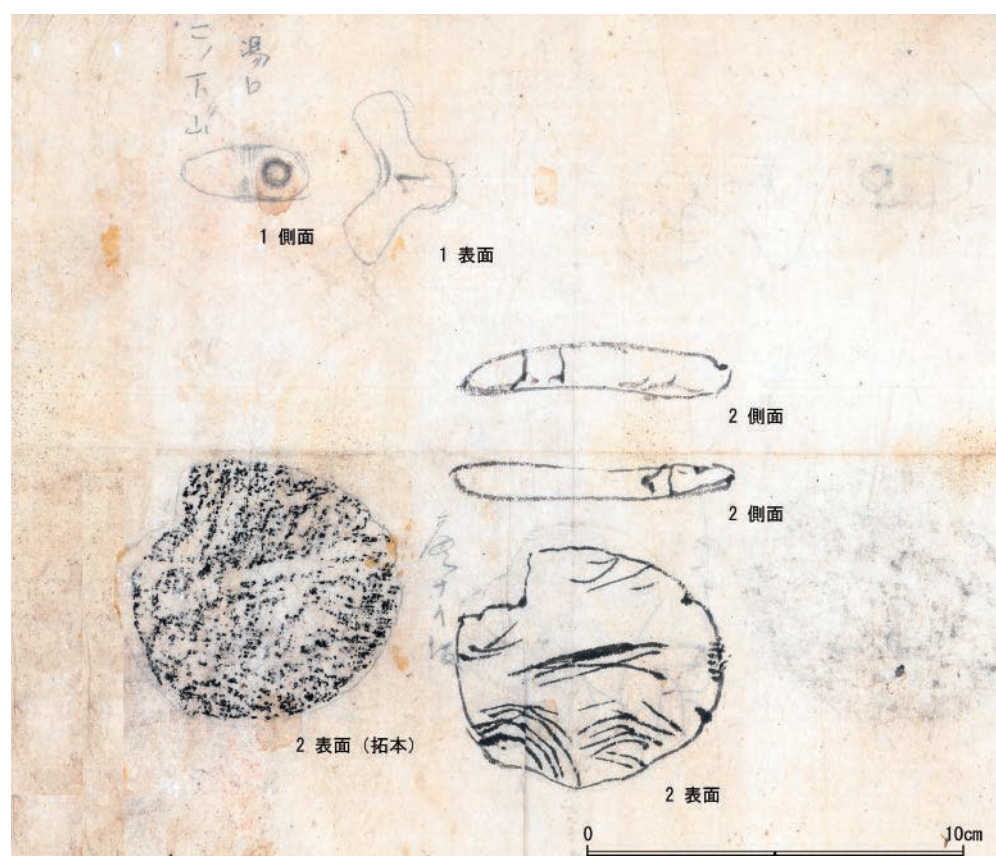
352



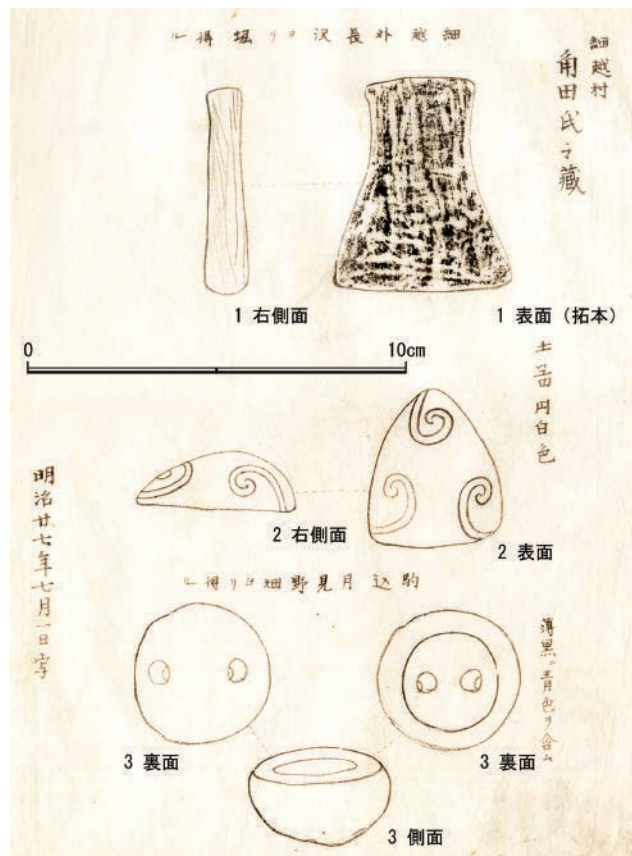
353



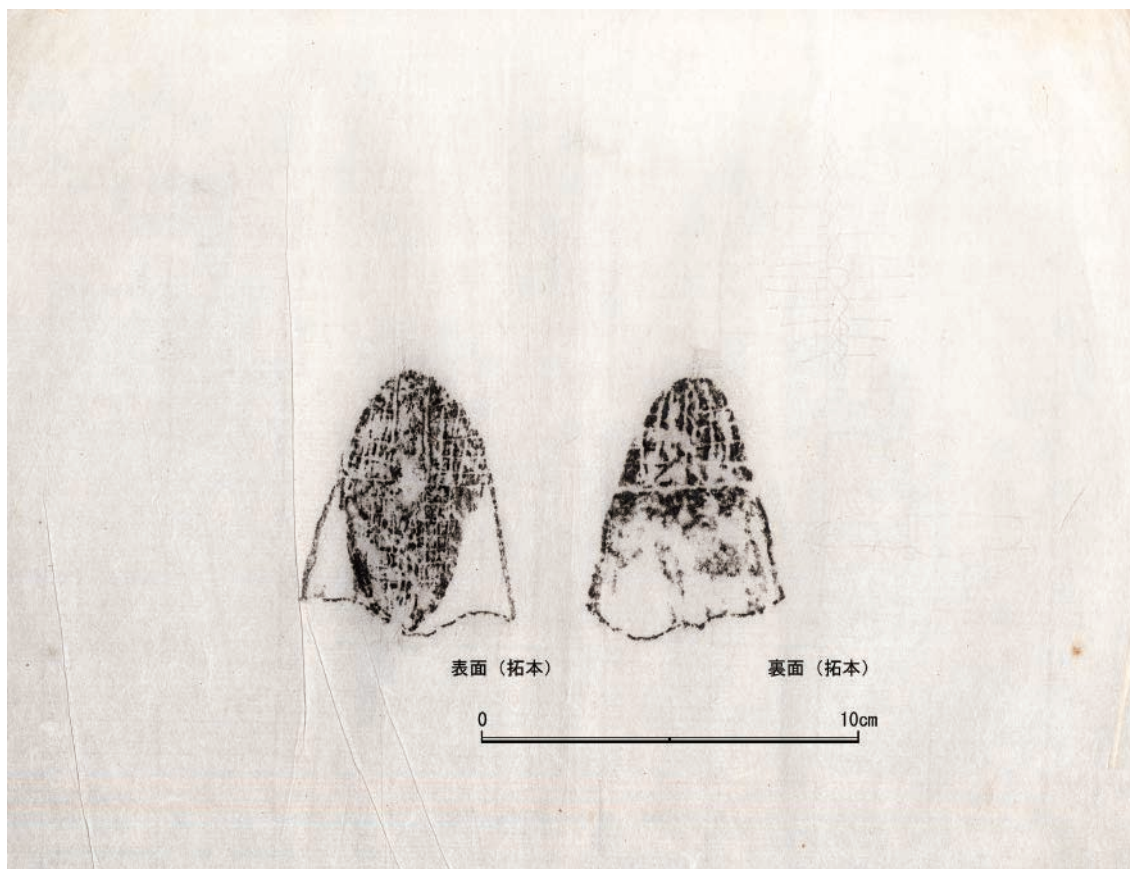
354



355



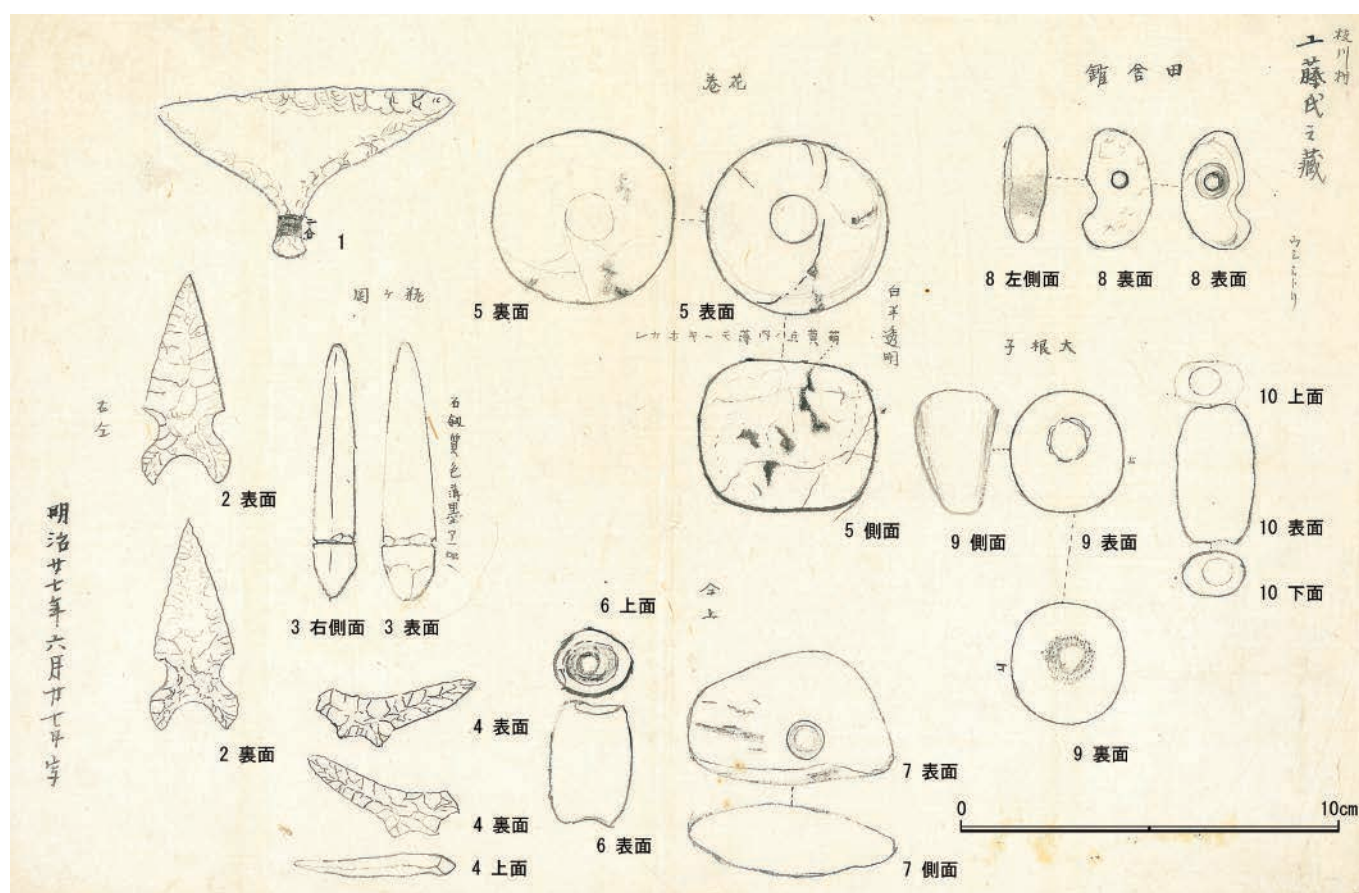
356



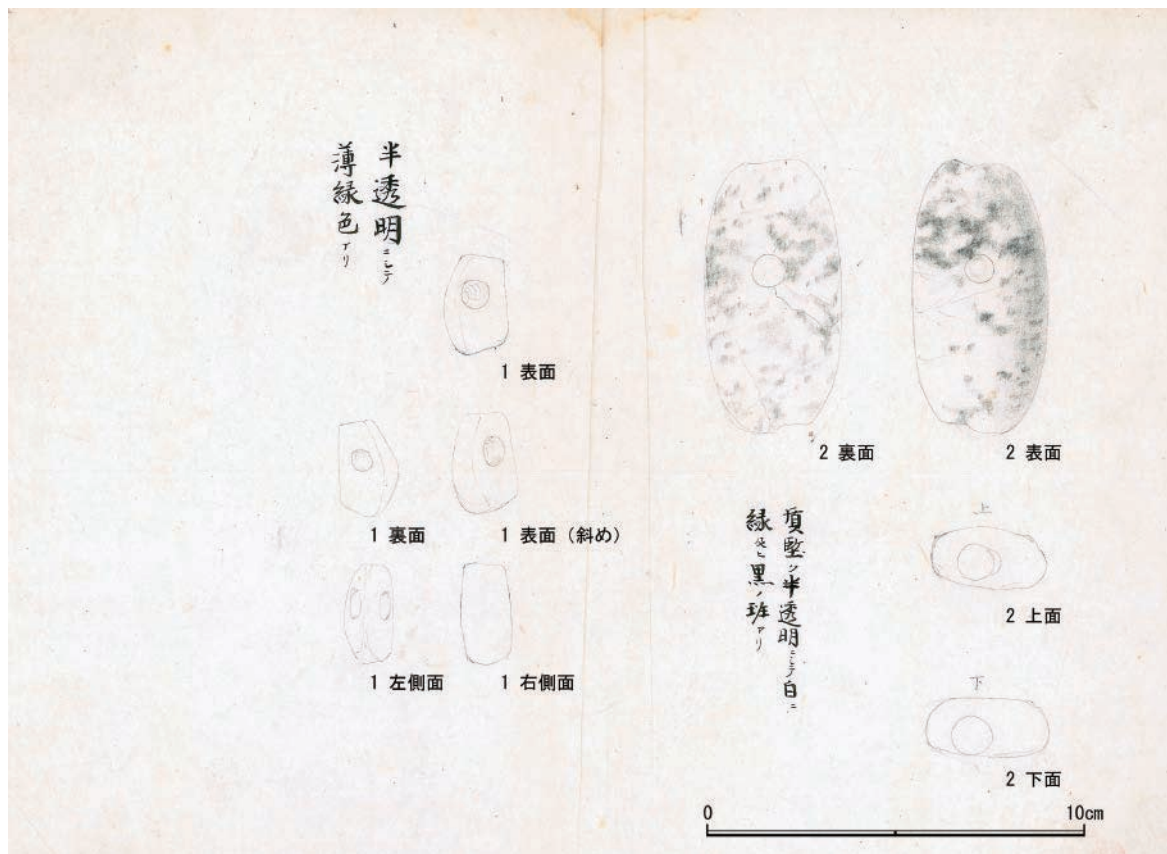
357



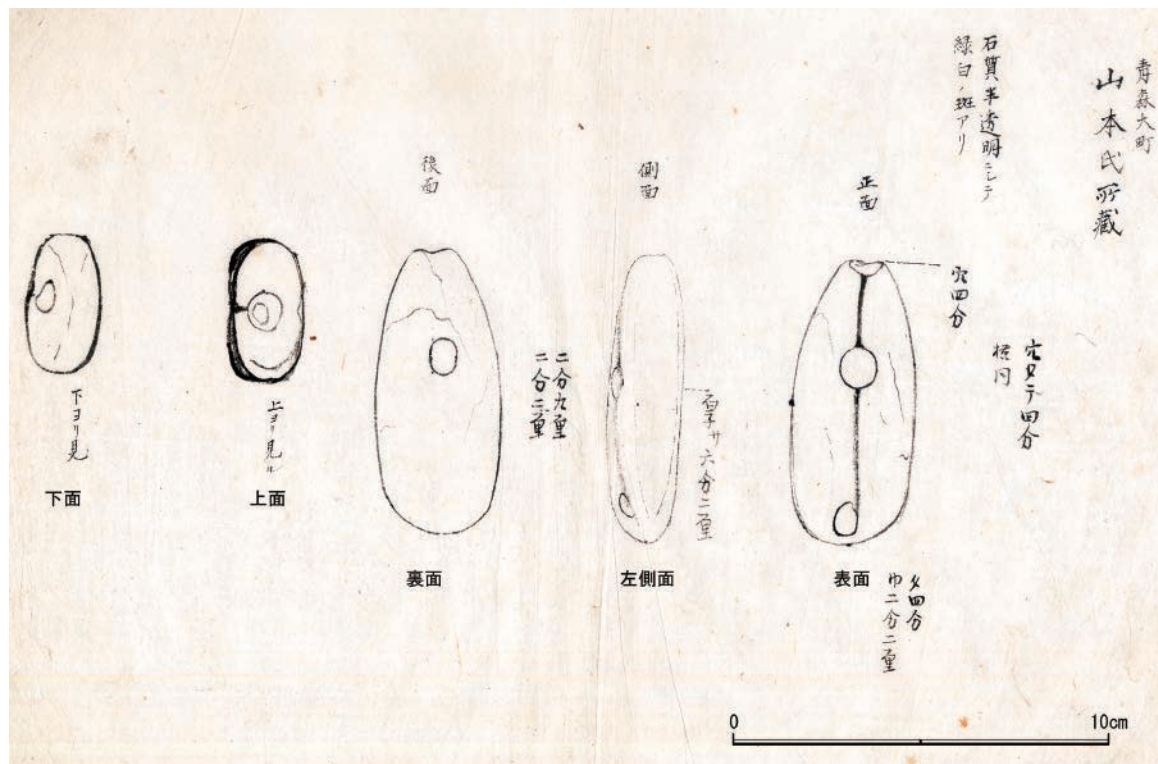
358



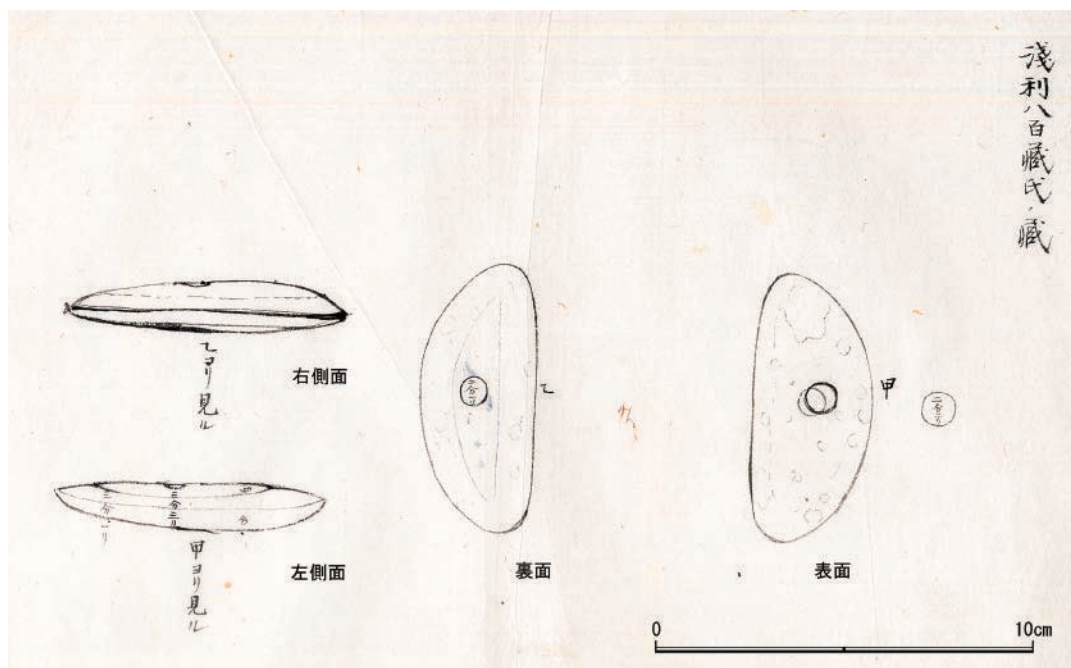
359



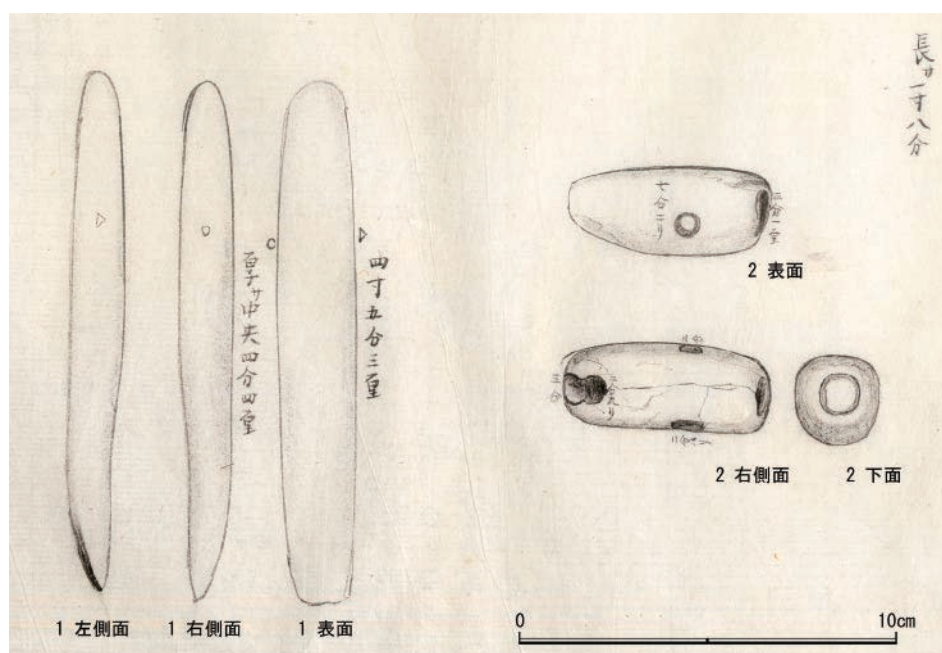
360



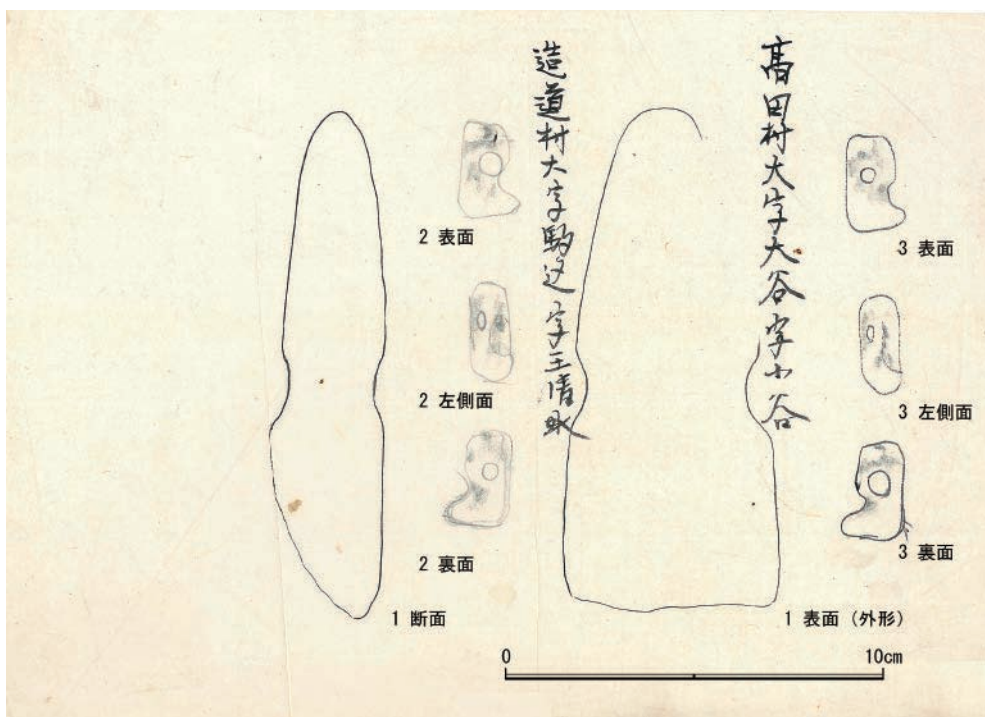
361



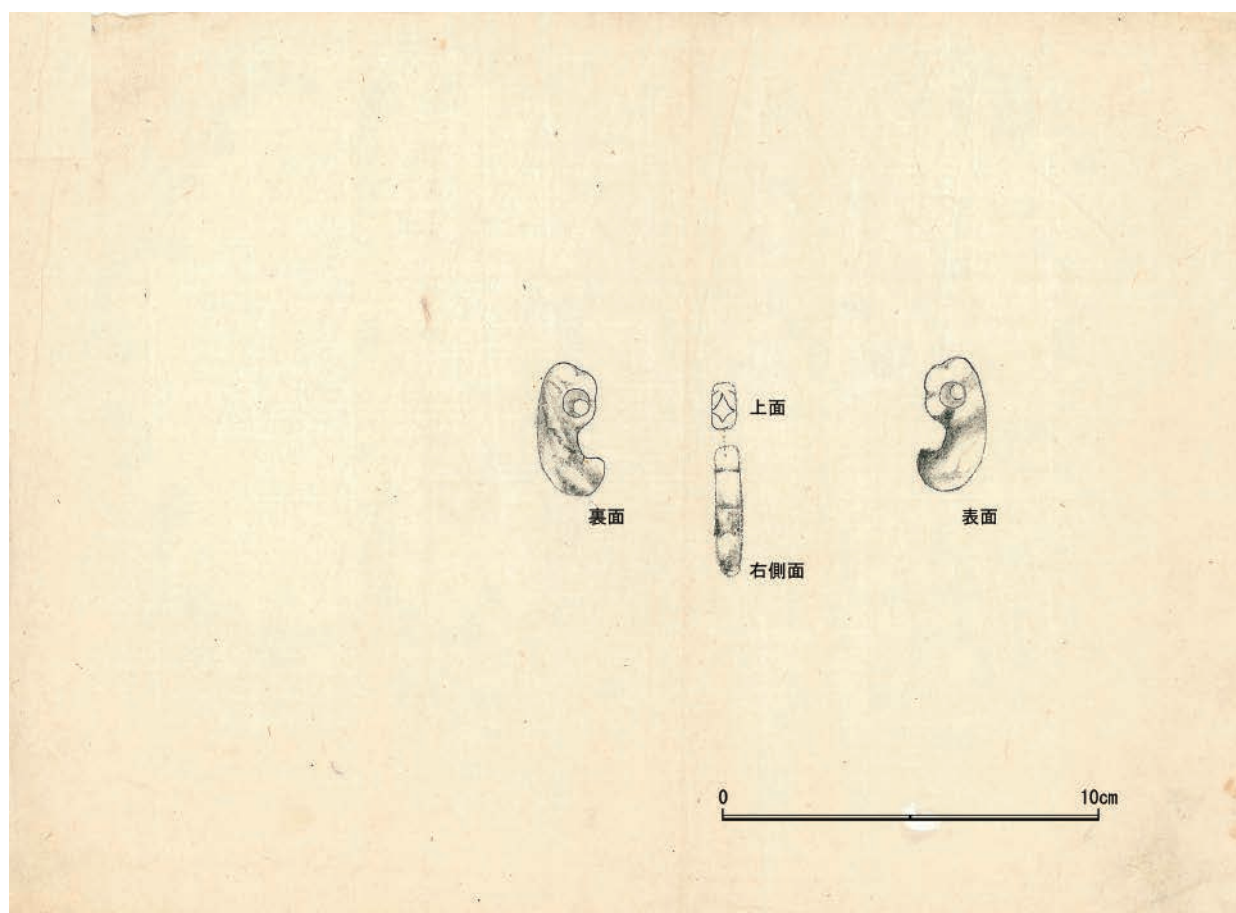
362



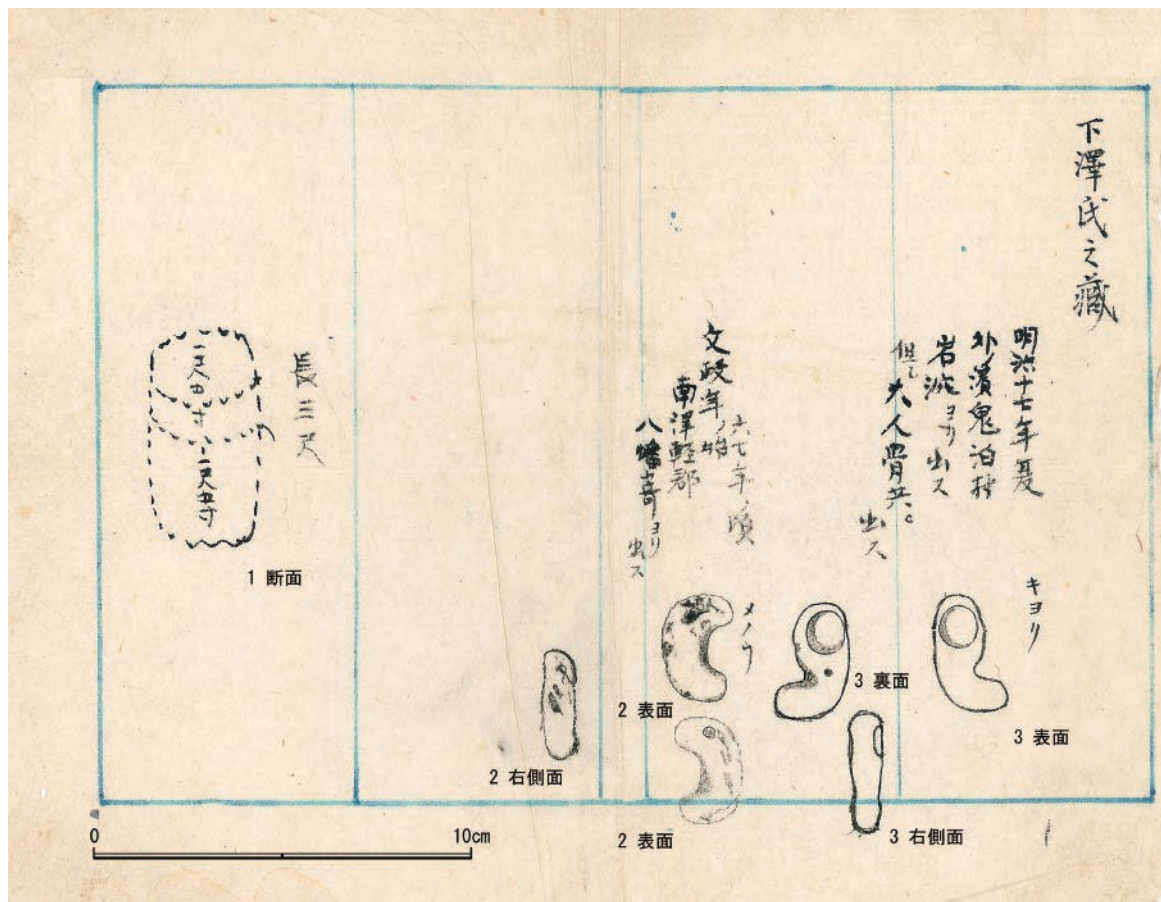
363



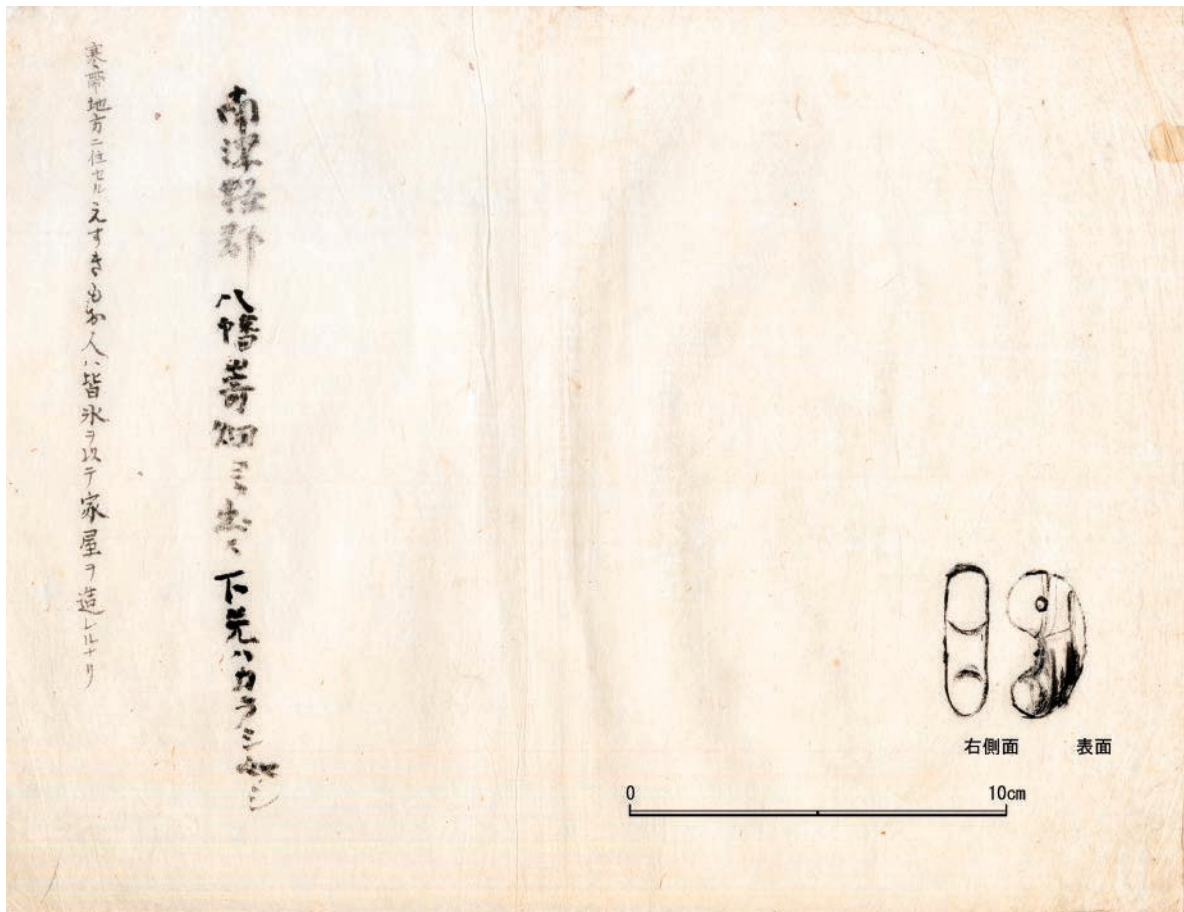
364



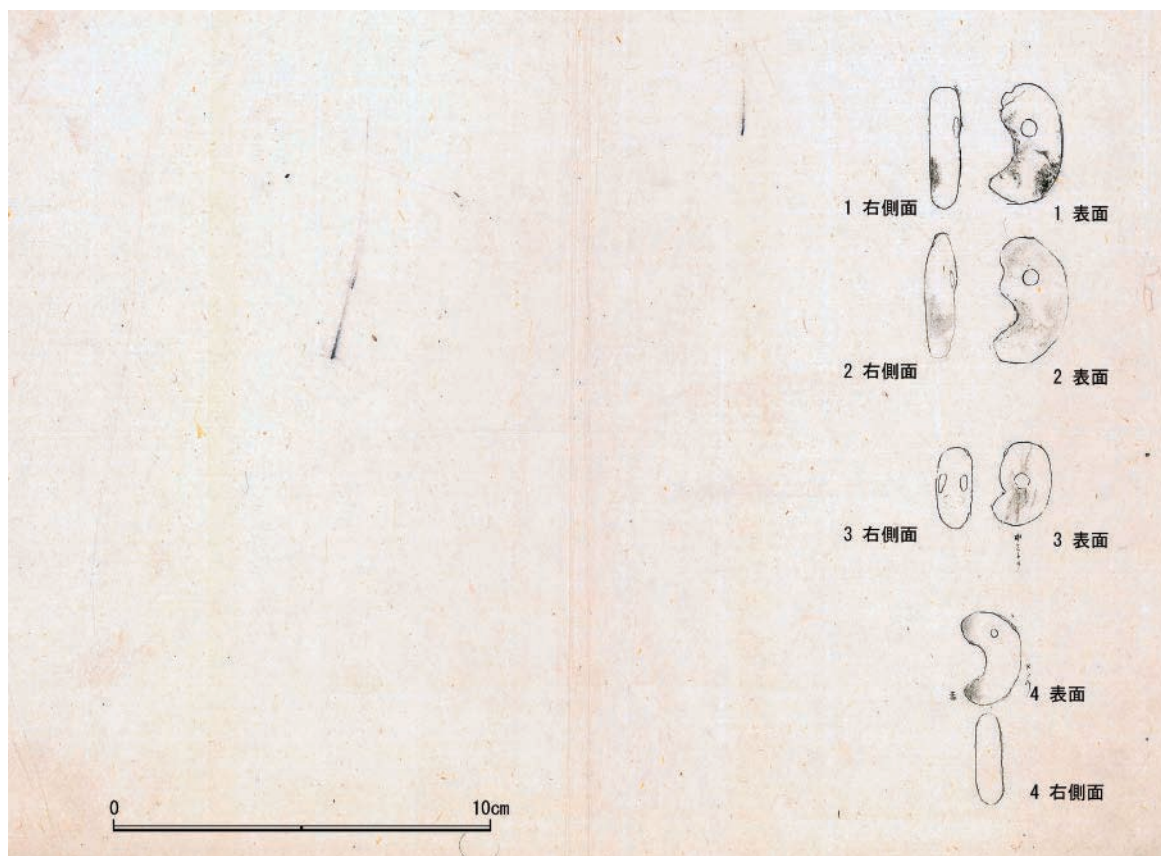
365



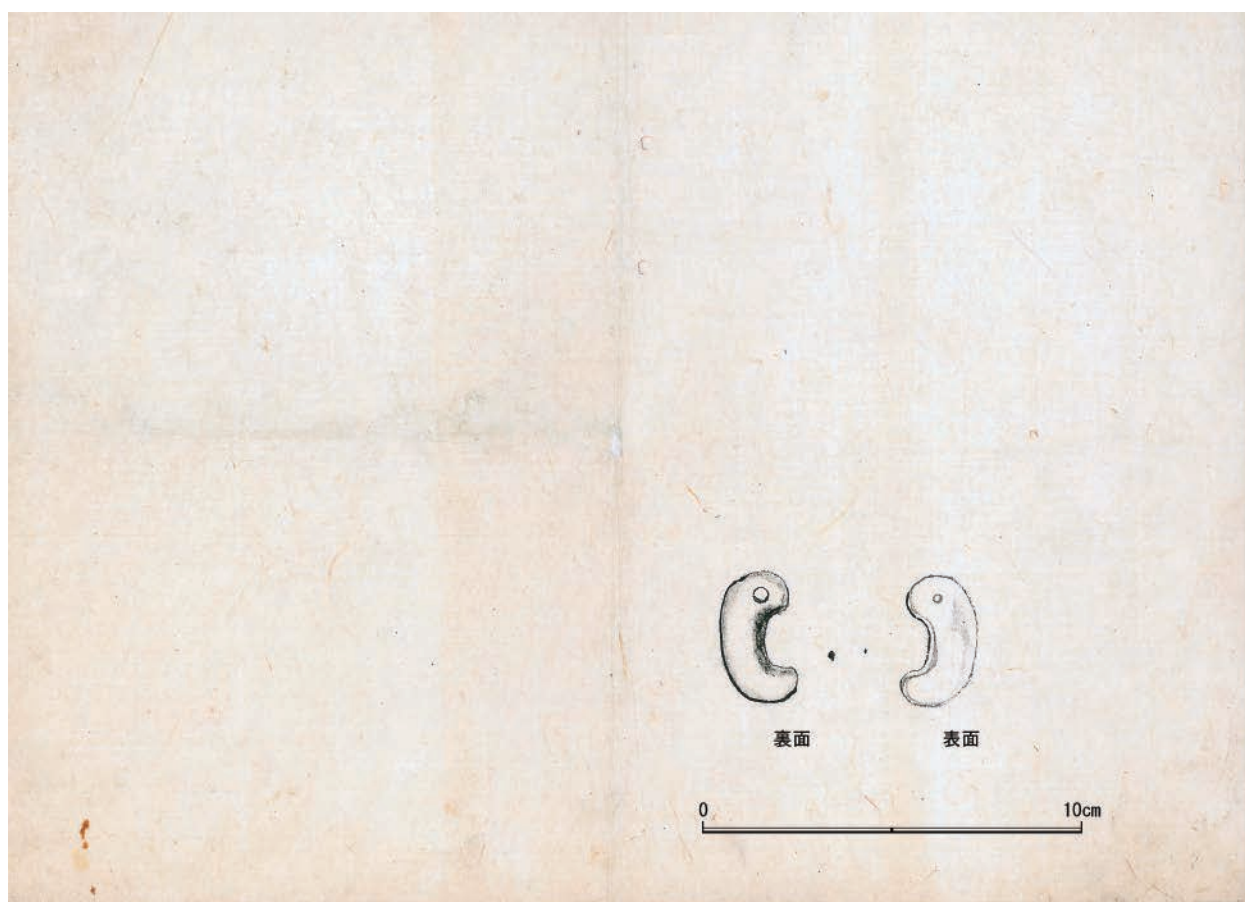
366



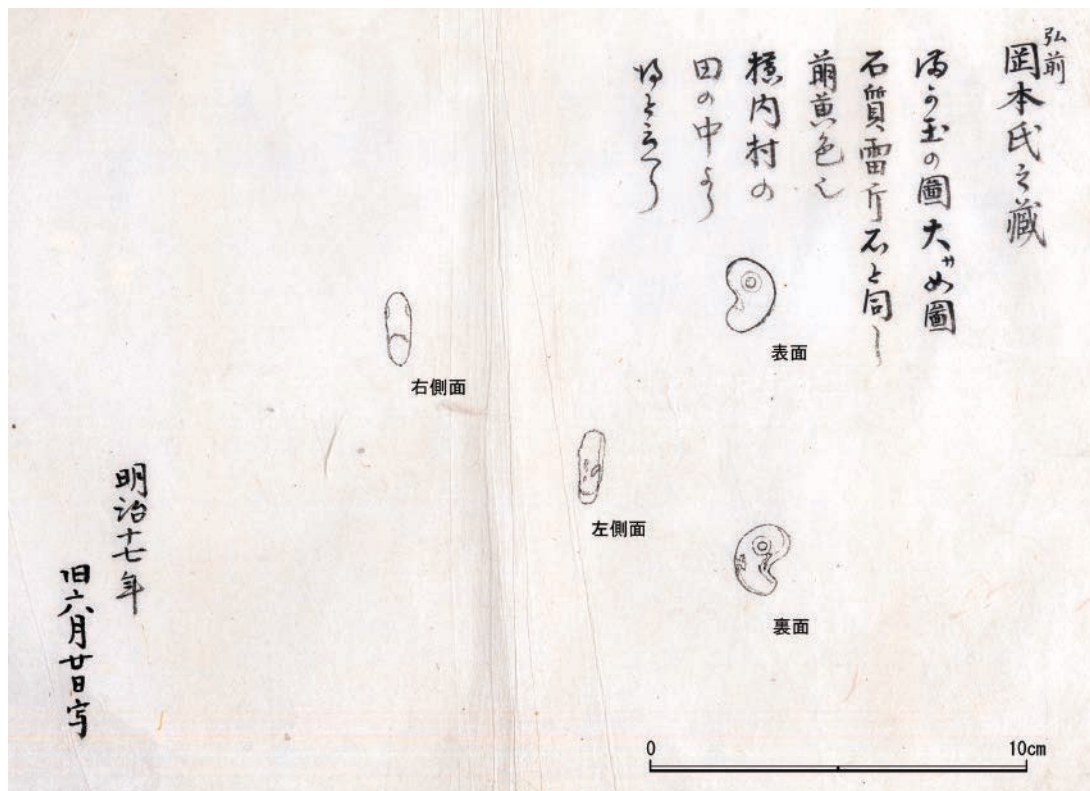
367



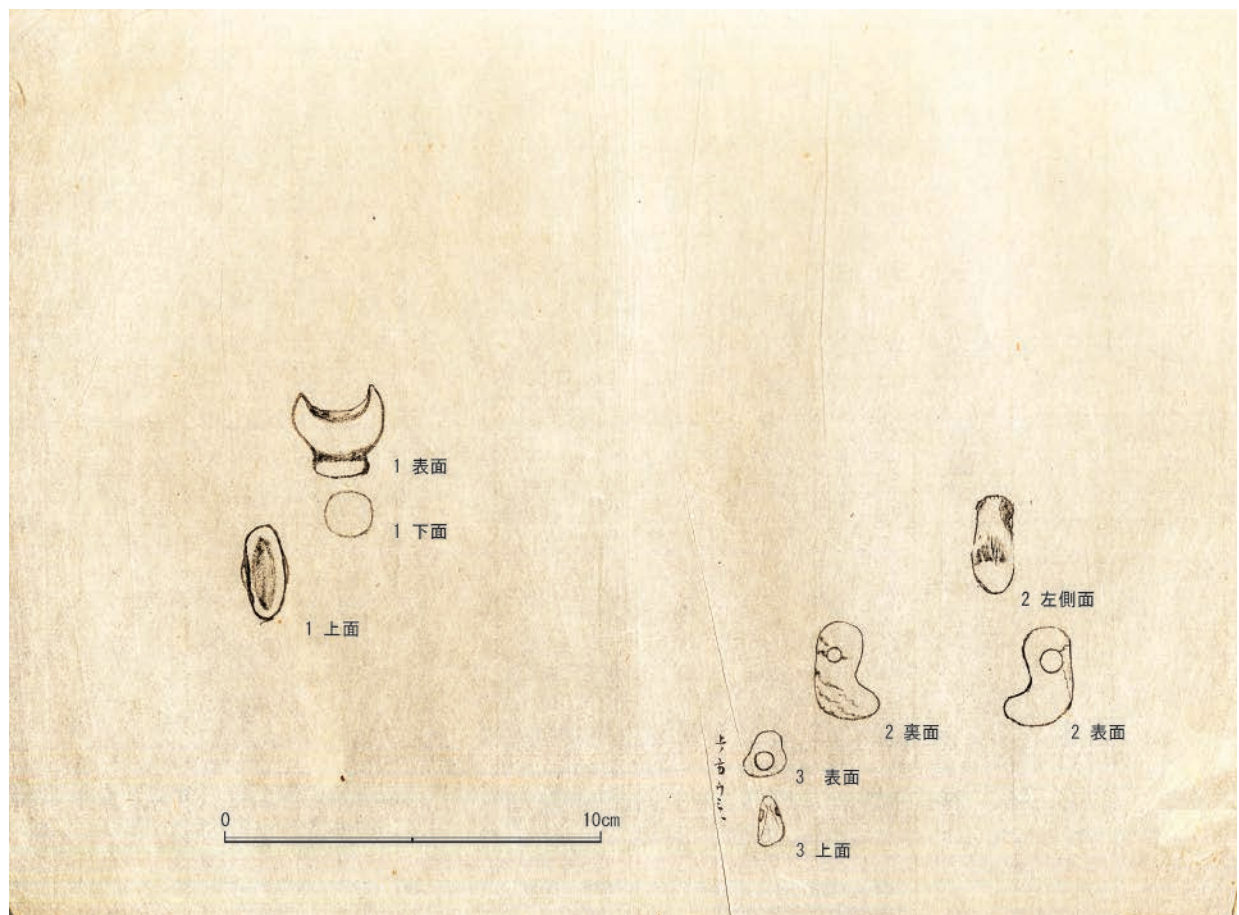
368表



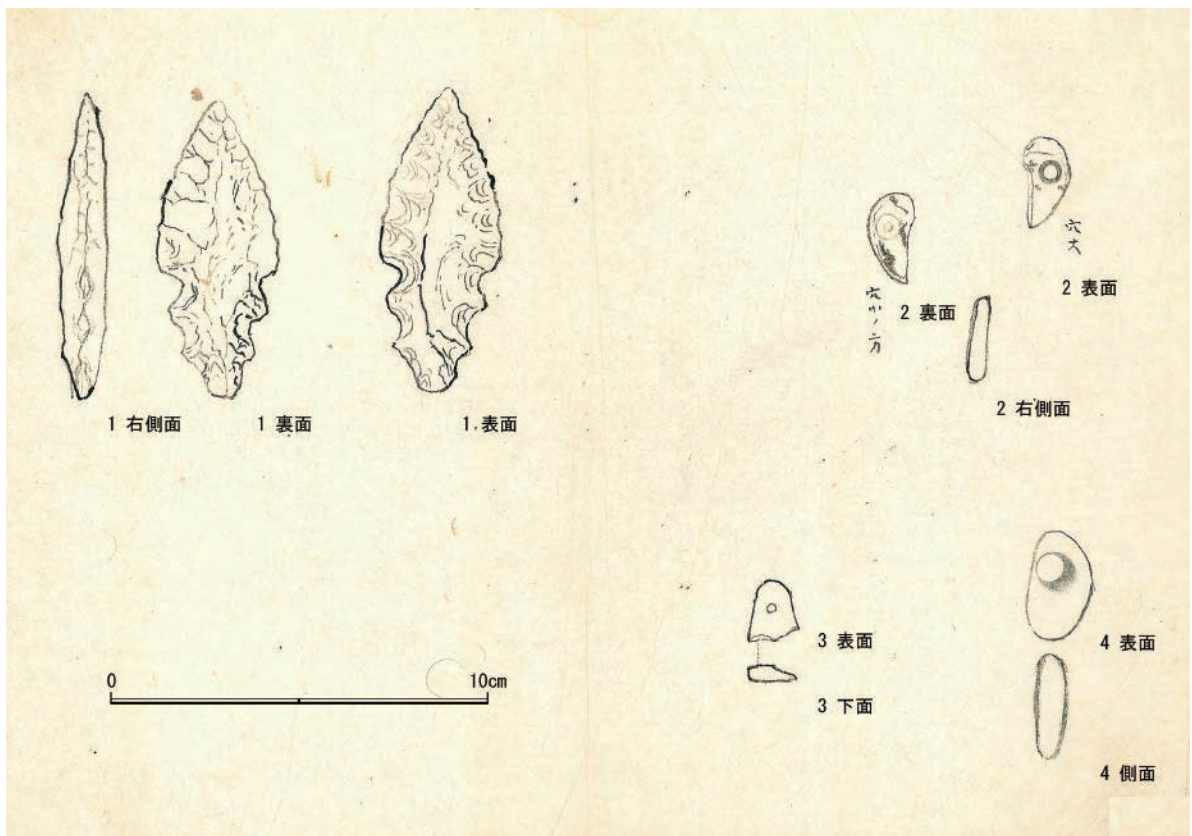
368裏



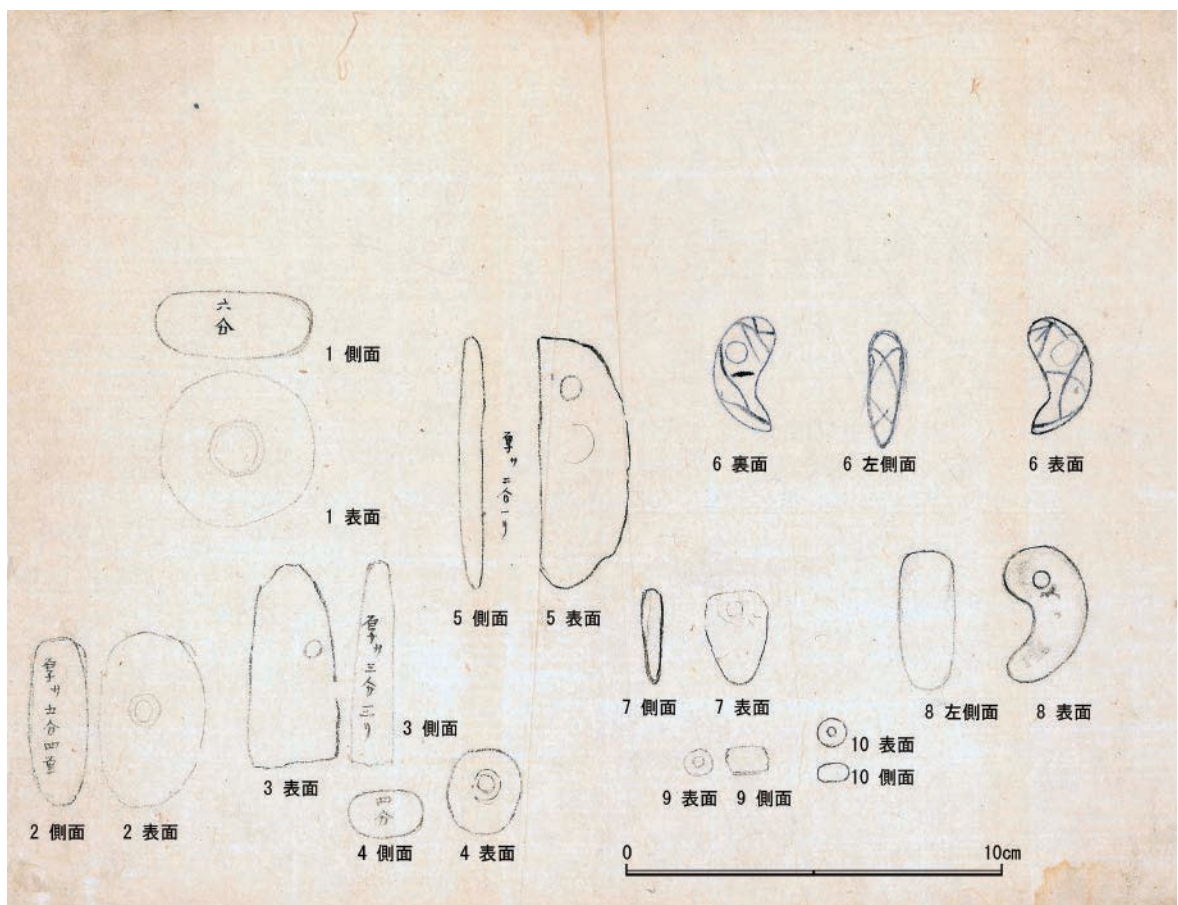
369



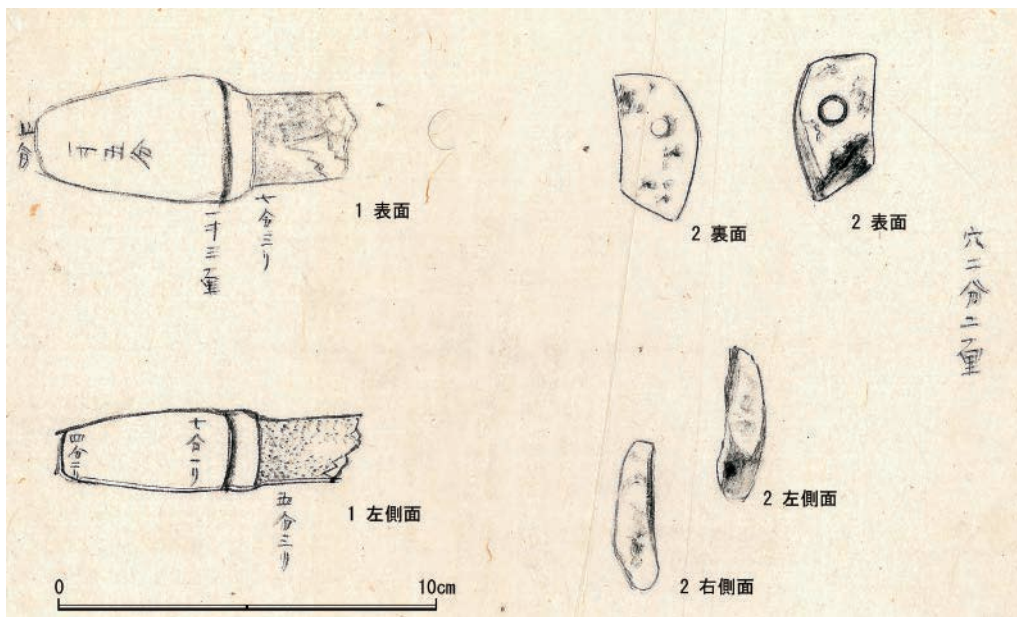
370



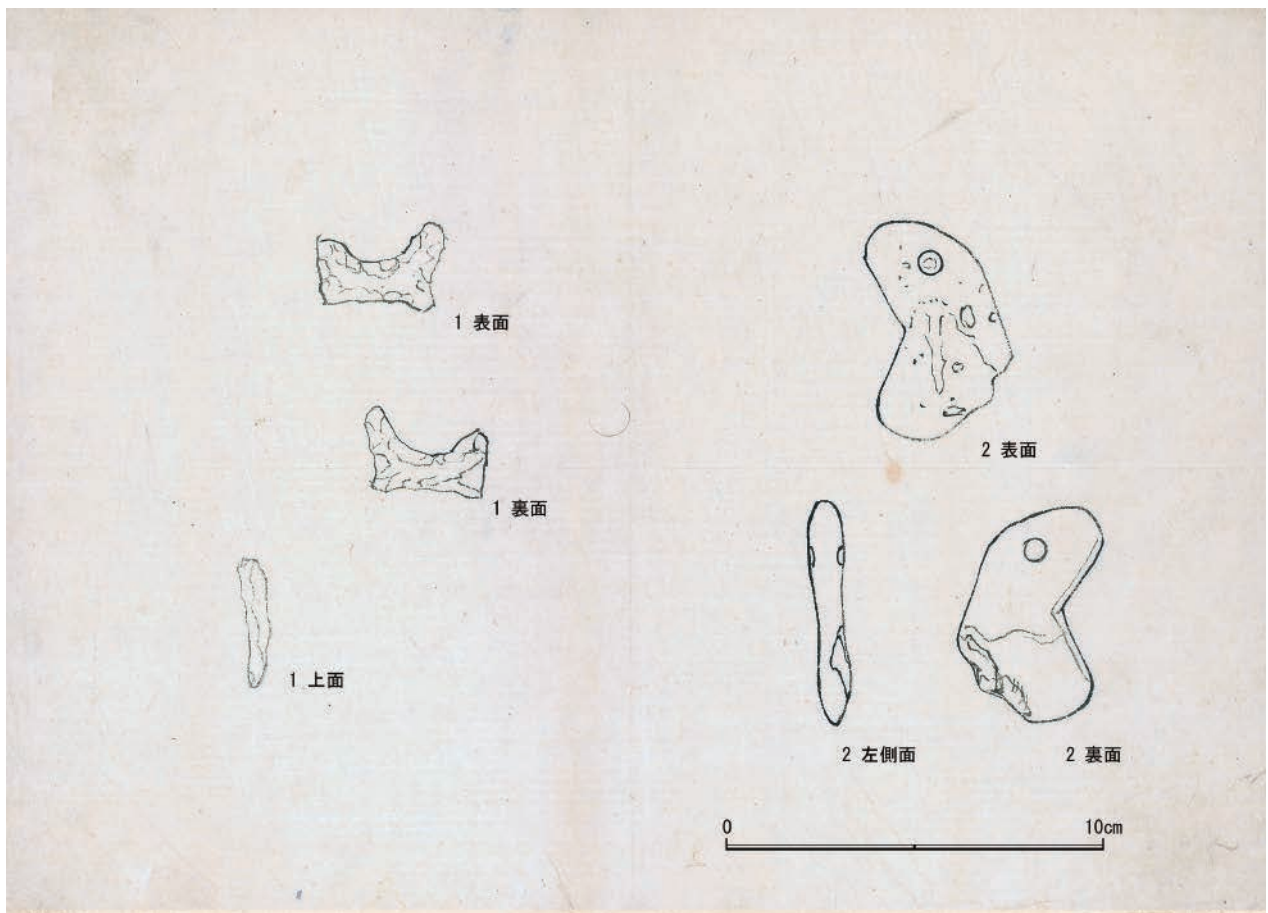
371



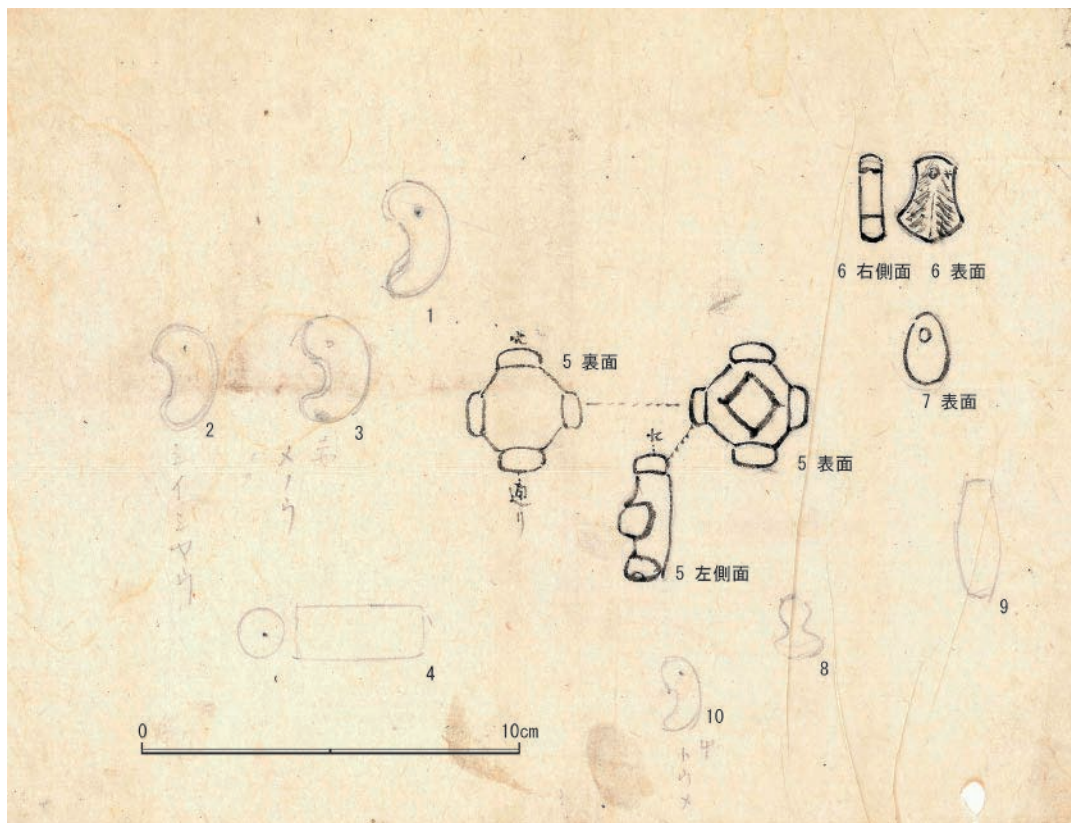
372



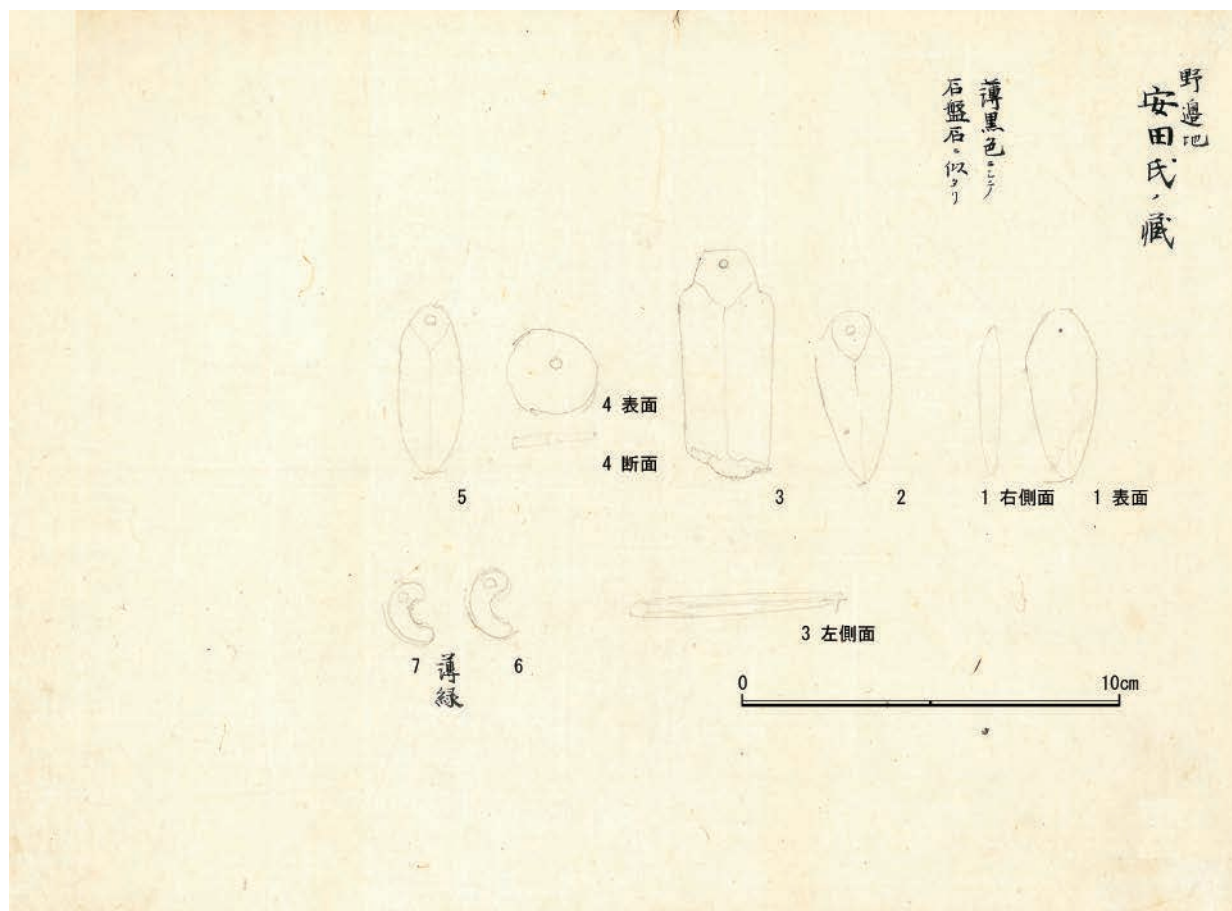
373



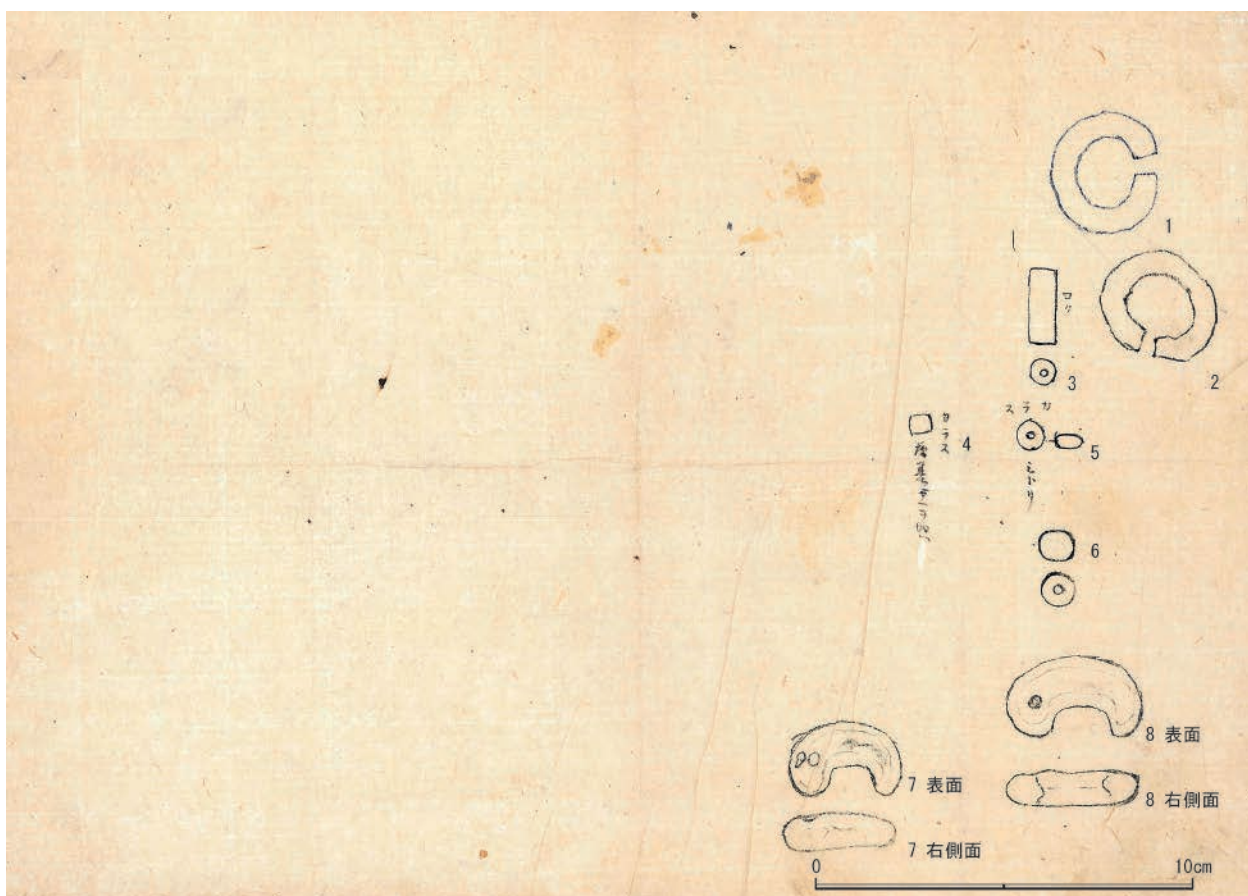
374



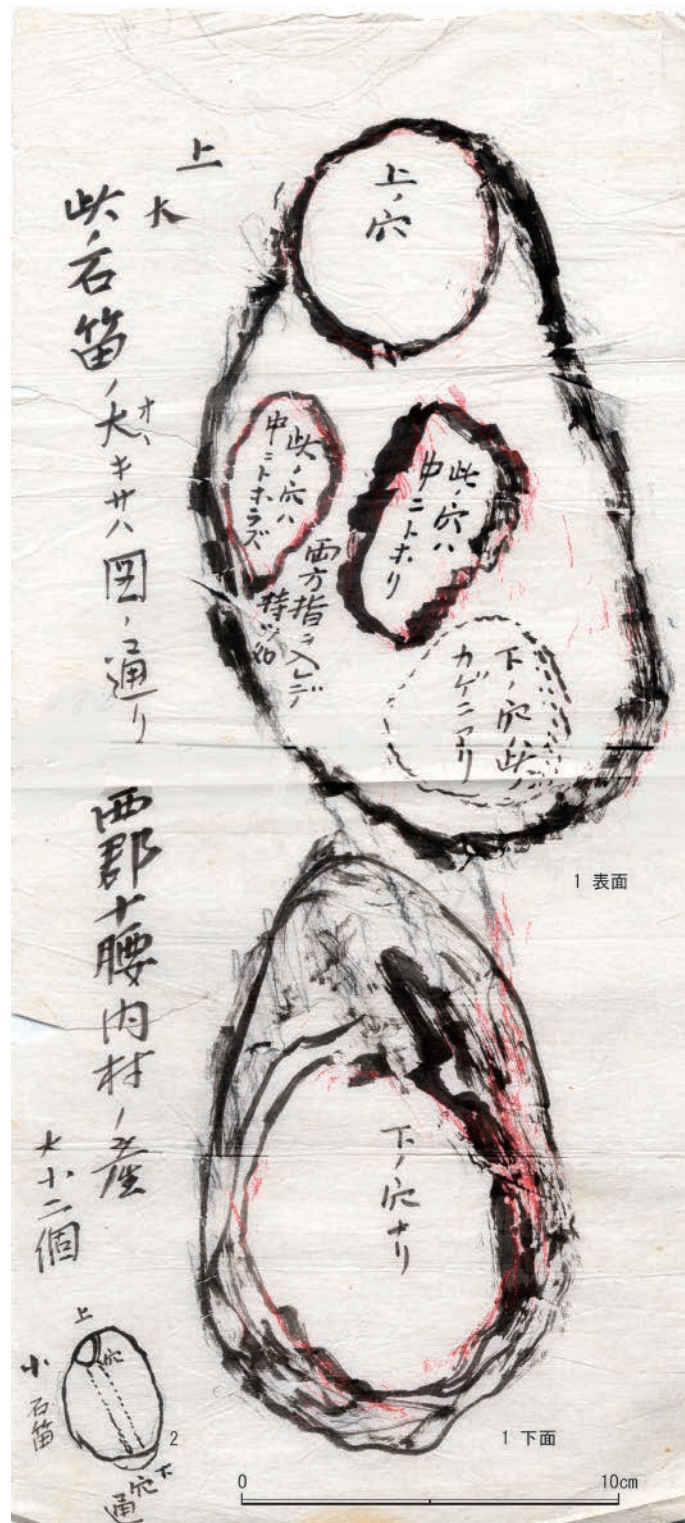
375



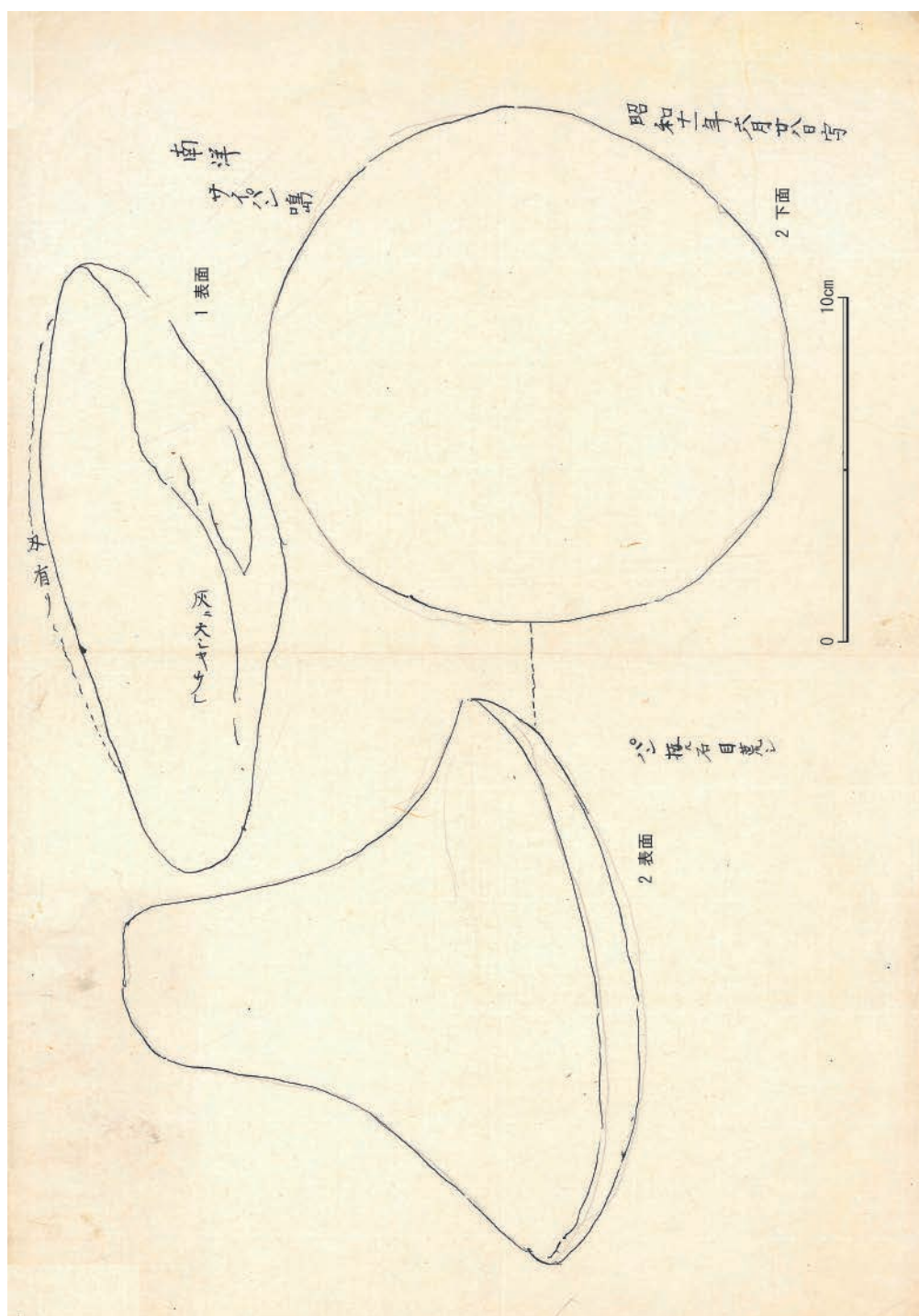
376



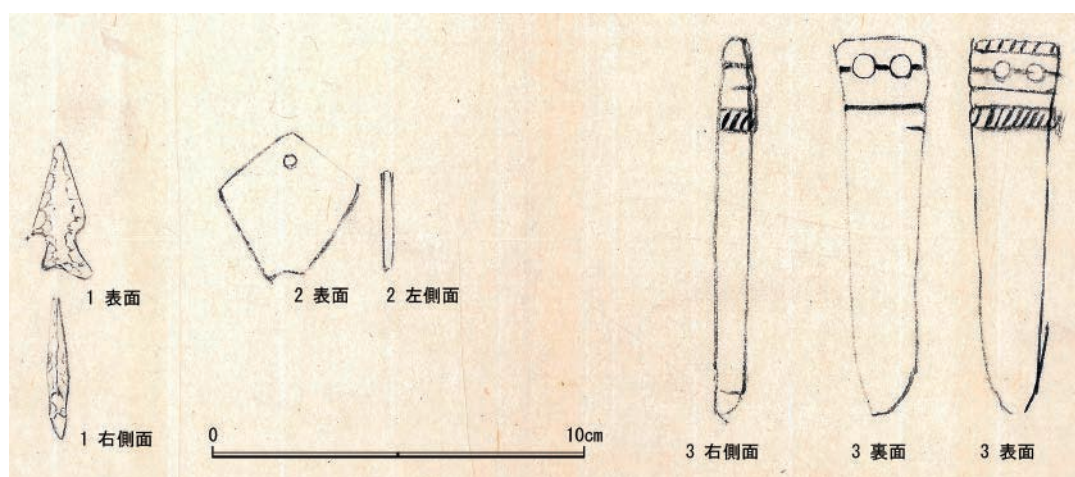
377



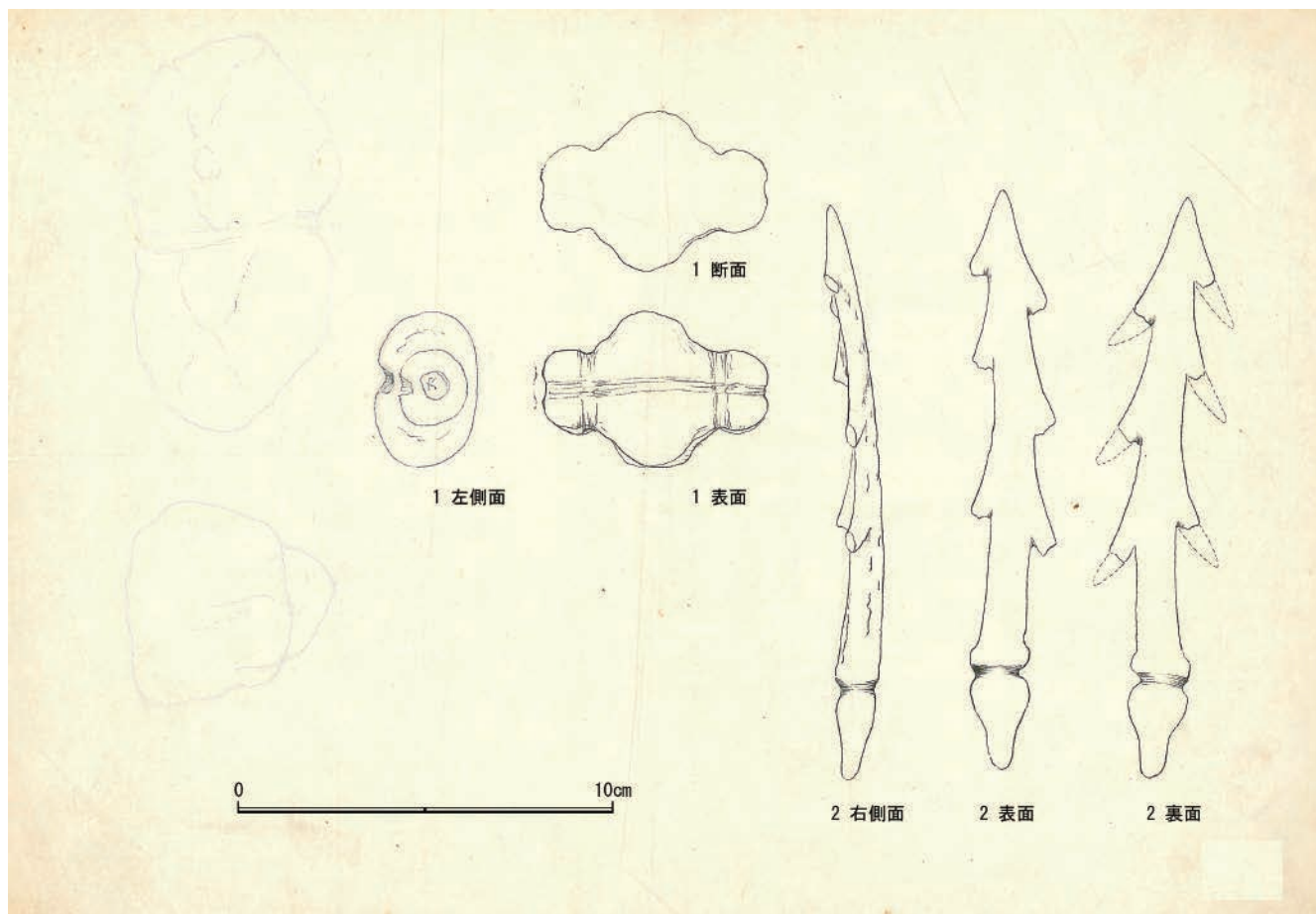
378



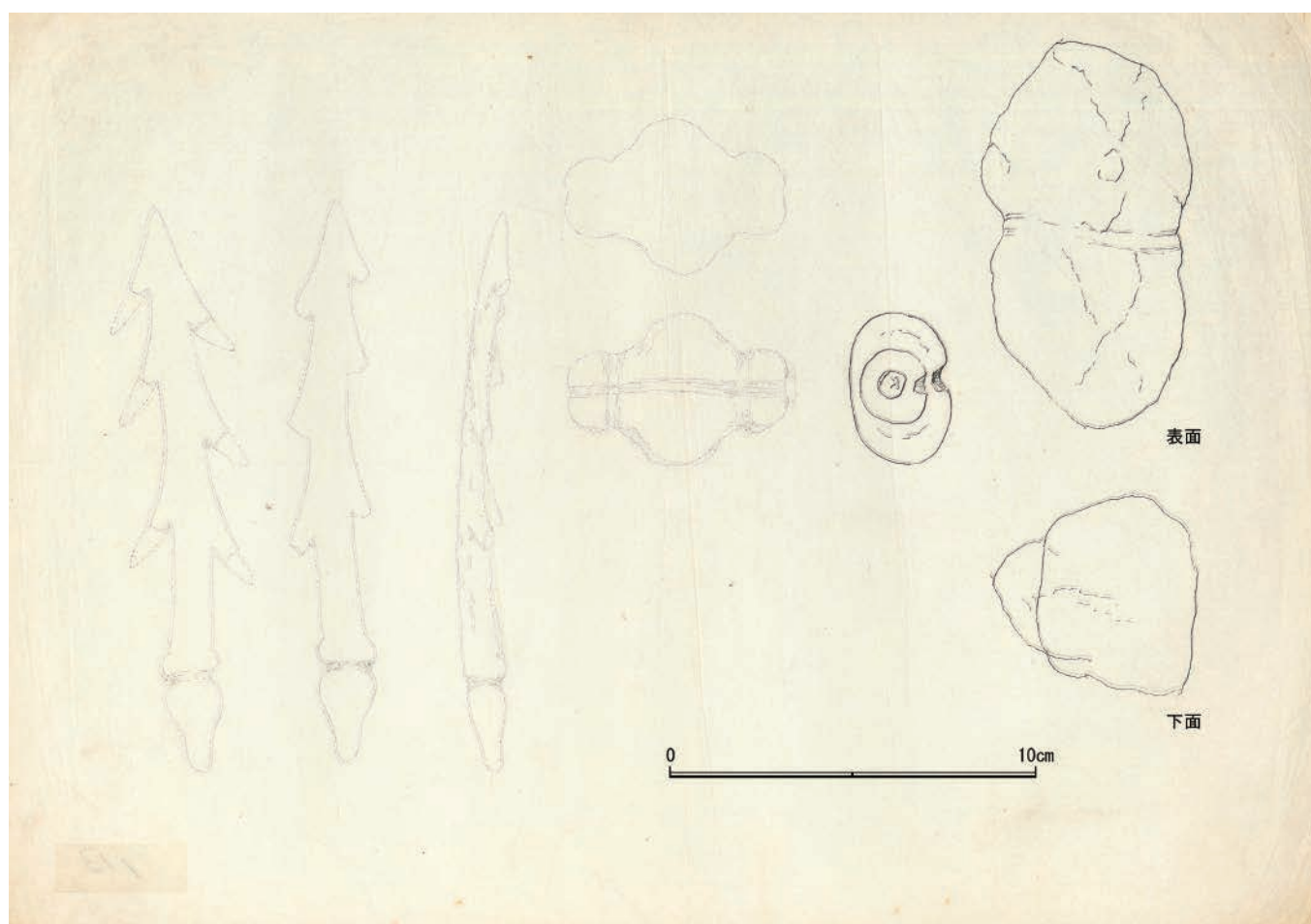
379



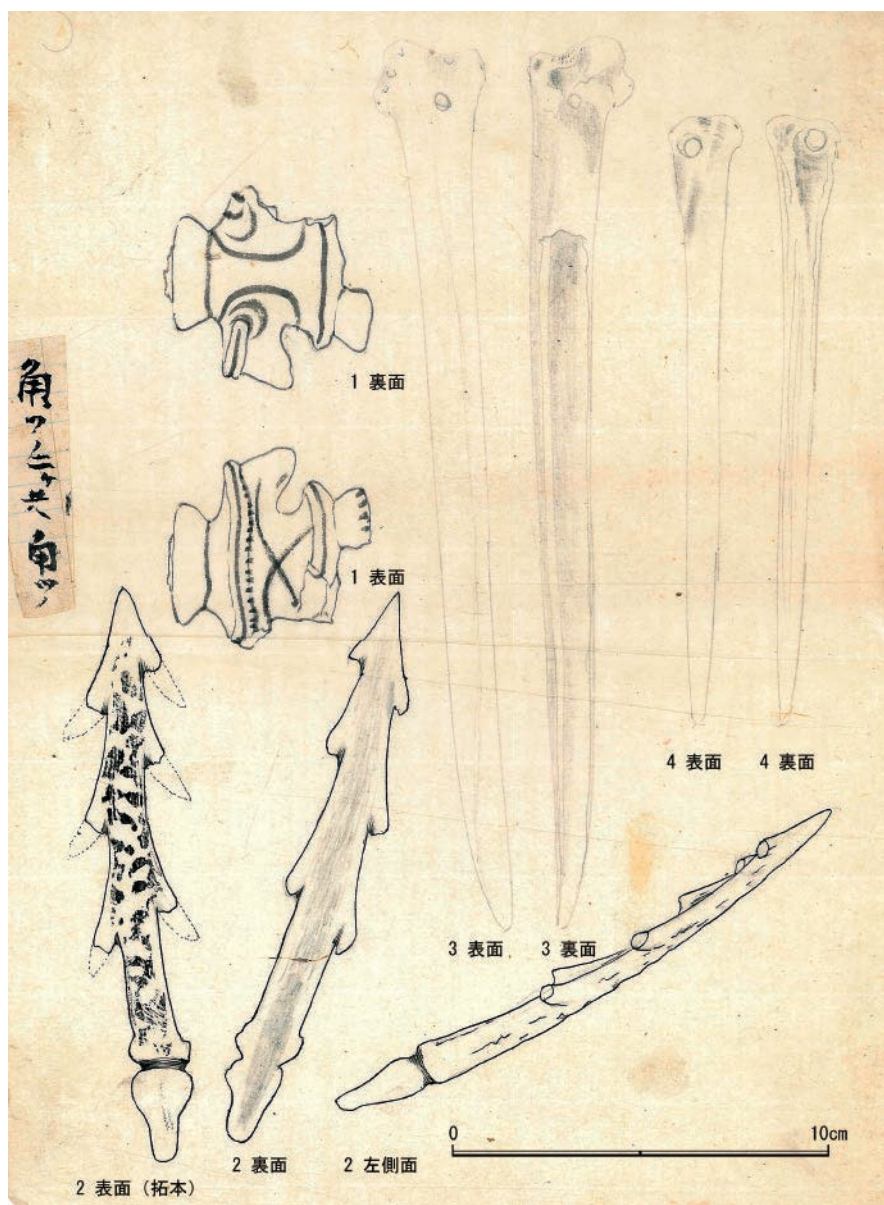
380



381表



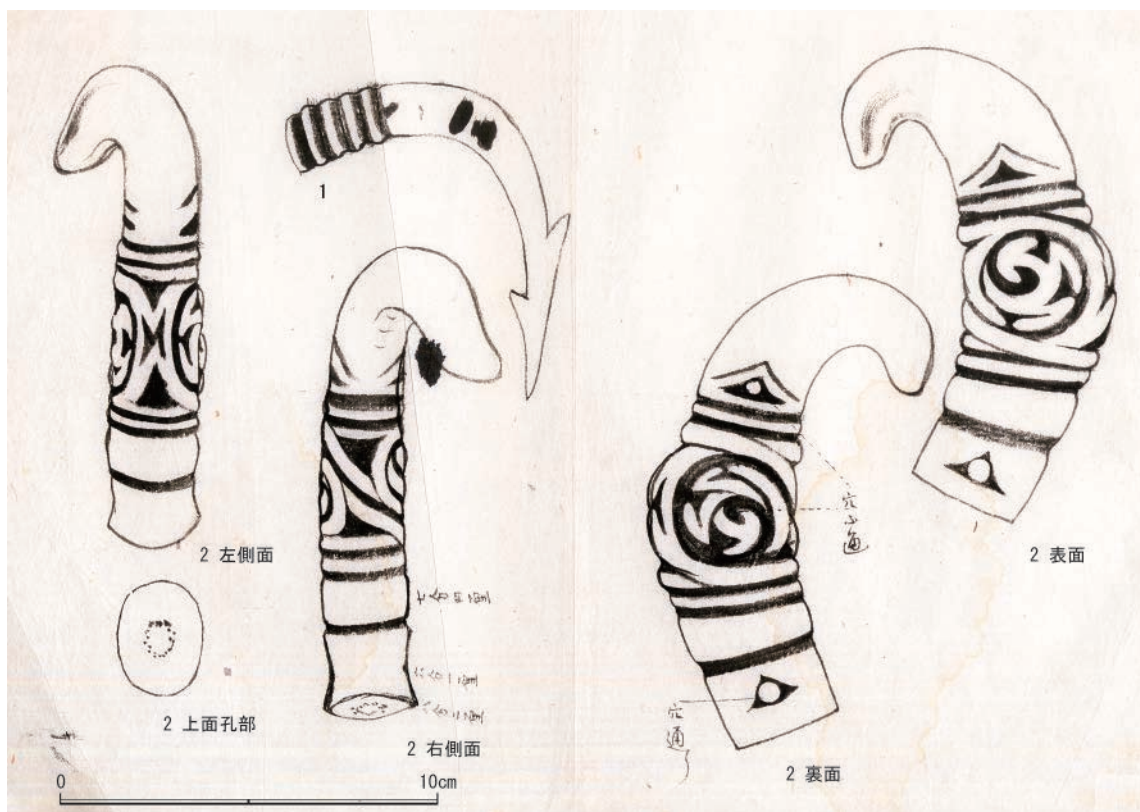
381裏



382



383A



383B

弘前

岡本氏之藏

黒石今常左衛門
より所存物と同
物より頭骨の
根多しと見ゆ



正面

鯨の骨より
元色は淡白
く光澤あり
是は二小加
物よりと見ゆ

クハ、骨



上面

背面



下面 (拓本)

十七年
旧七月五日寅

霹靂 砵 カニナリ
タイコノハナ

石炭 極 有 じや

石 鋒 カニナリ
ヤリサマ

も 鋸 の や る 又 鋸

刀 の や る 片 刃 の 如 き

石 鑿 カニナリ
（ じ ）

大 槌 有 じや

石 斧 カニナリ
アサカリ

大 小 槌 有 じや 内 城 有 じや

鑲 櫃 カニ
ツツテ

内 地 有 じや 有 じや

何 有 じや 有 じや

石 烟 突

有 じや 有 じや

中 有 じや 有 じや

小 煙 突 の 有 じや

有 じや 有 じや

有 じや 有 じや

石 鍬 カニ
ヤノキ

有 じや 有 じや

土 鍋 トイ
エウ

有 じや 有 じや

有 じや 有 じや

有 じや 有 じや

有 じや 有 じや

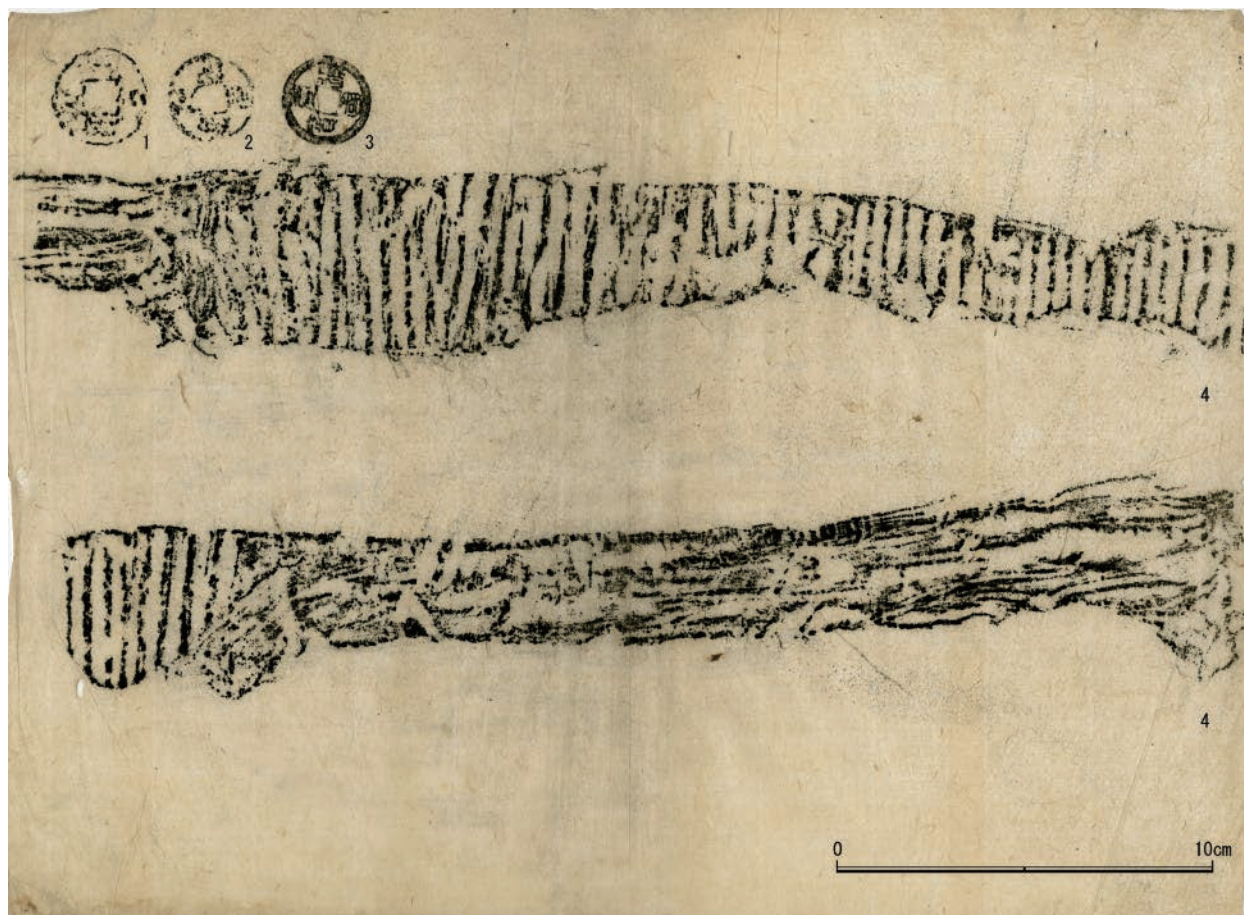
有 じや 有 じや

有 じや 有 じや

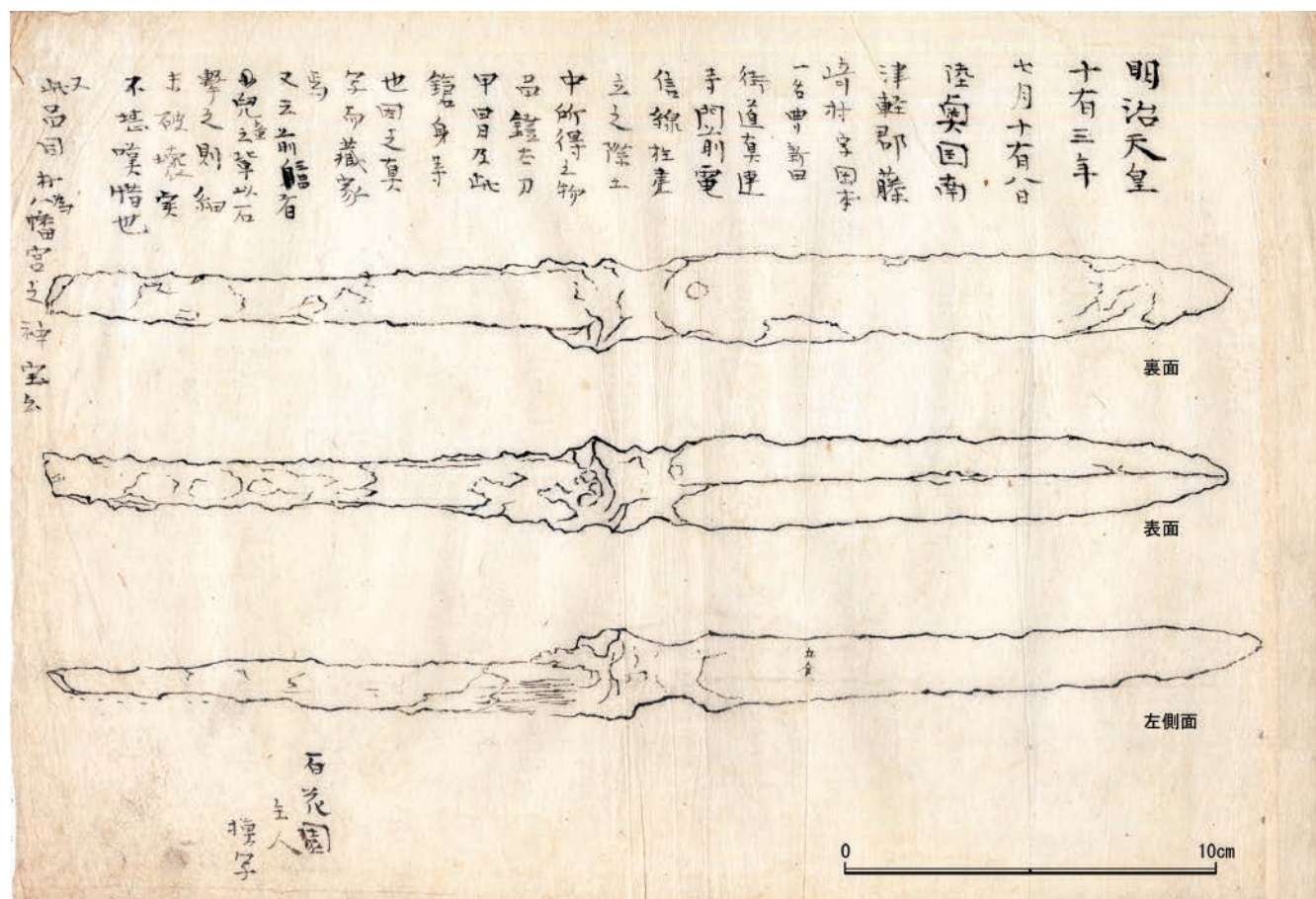
有 じや 有 じや

有 じや 有 じや

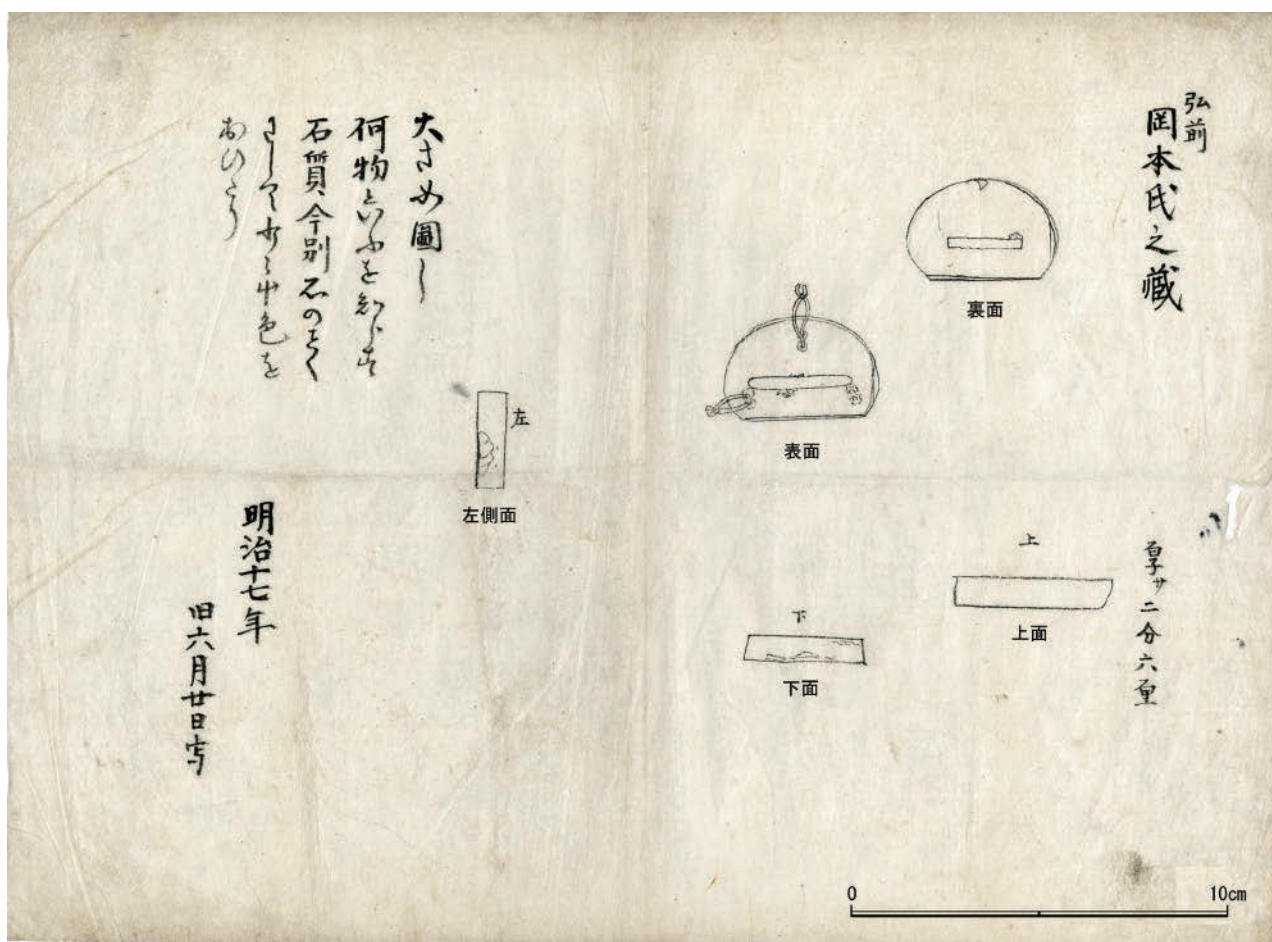




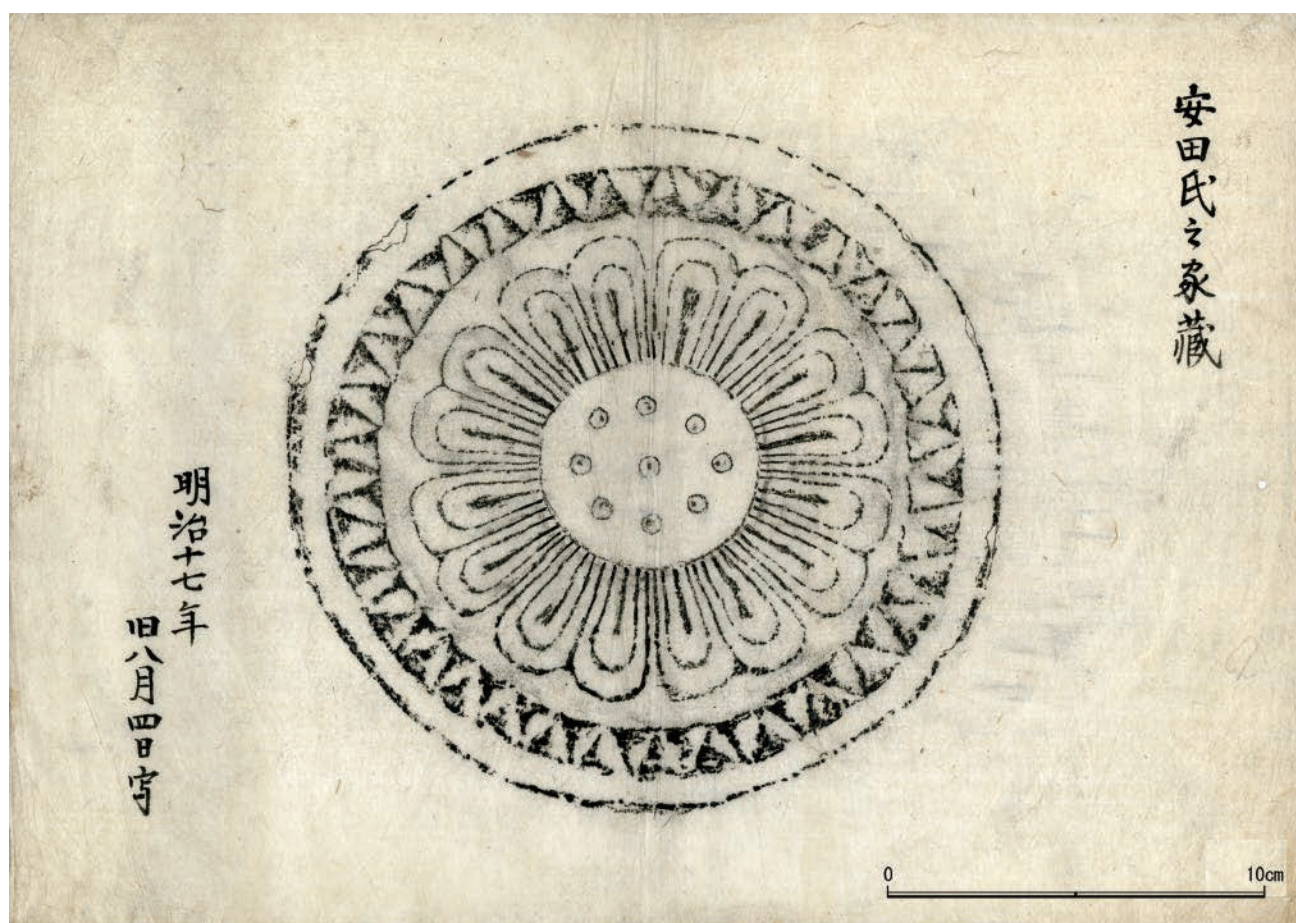
386



387



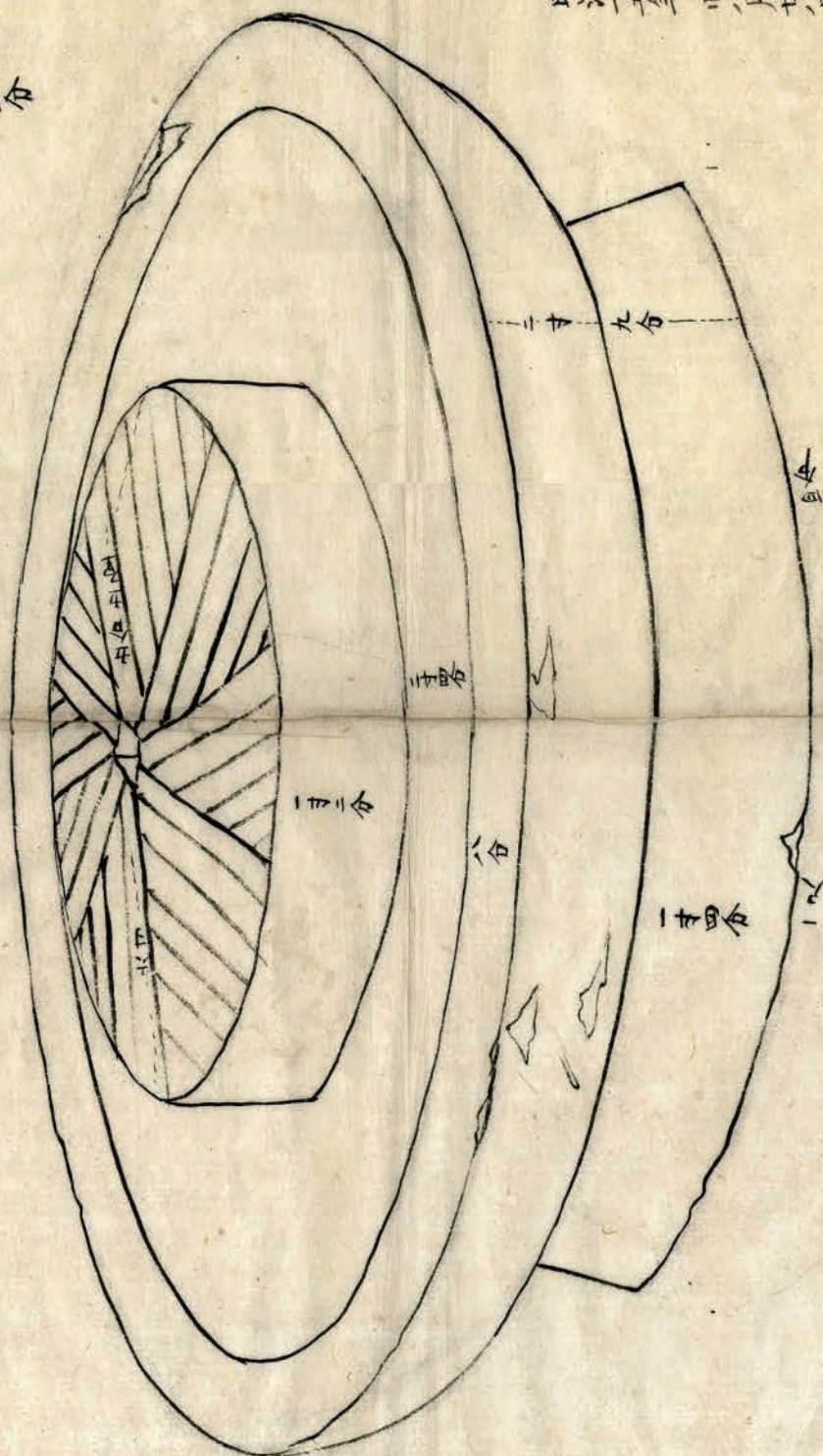
388

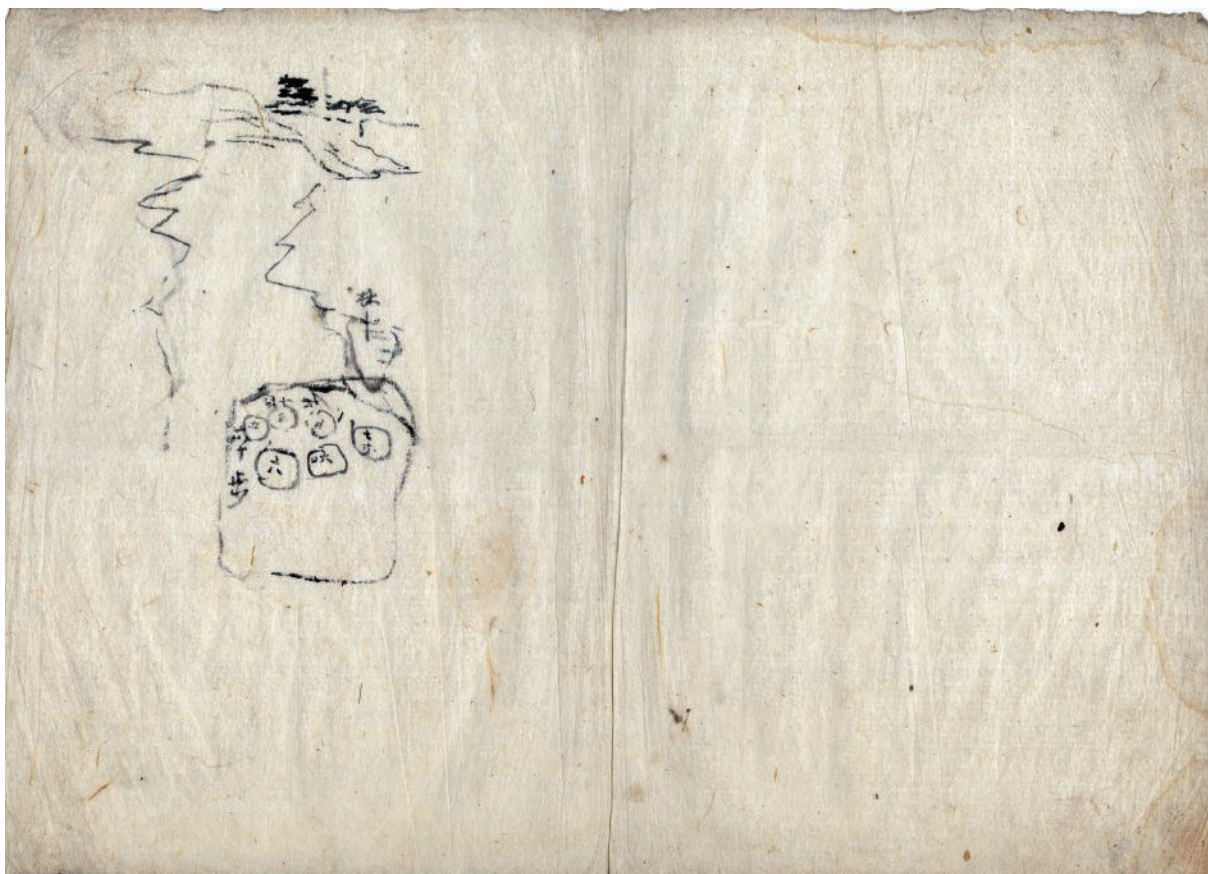


389

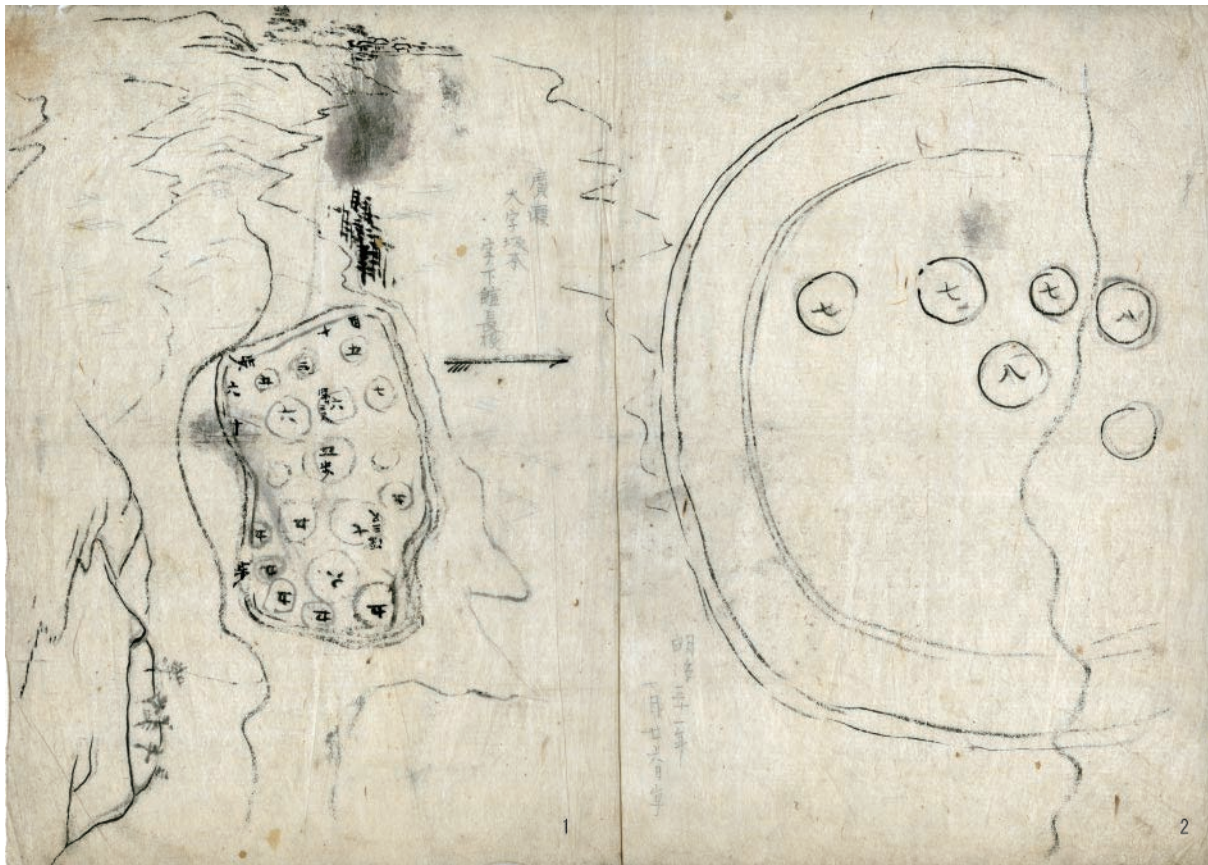
明治十五年 旧八月廿八日 亨

物高三寸五分

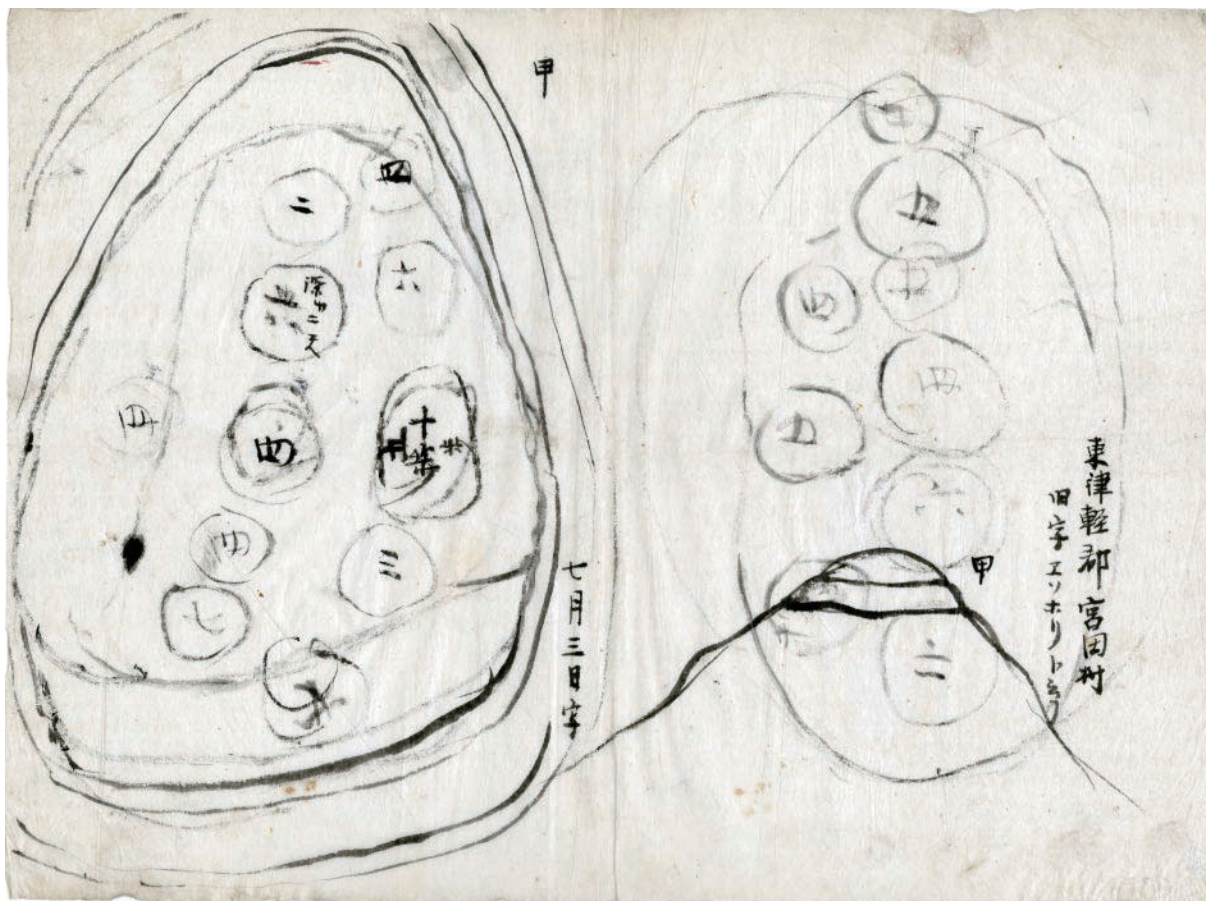




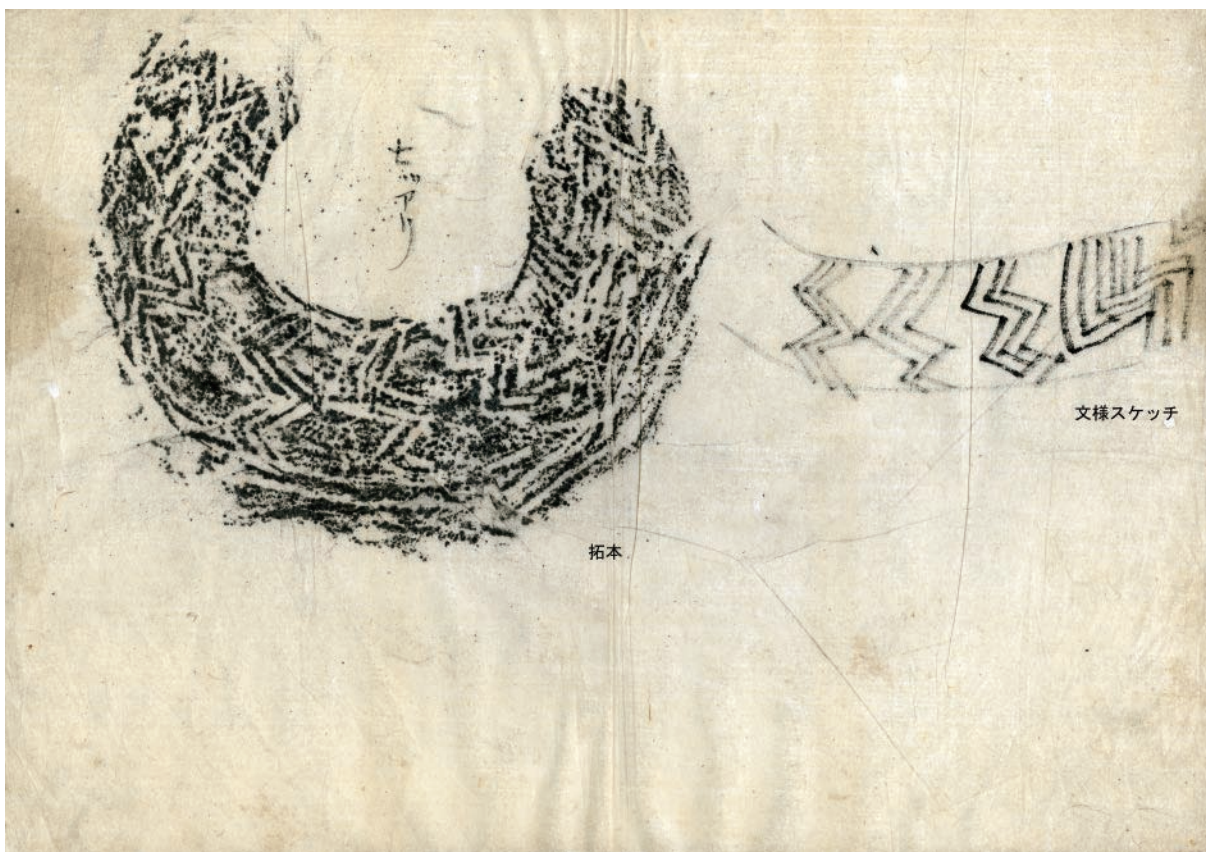
393



394

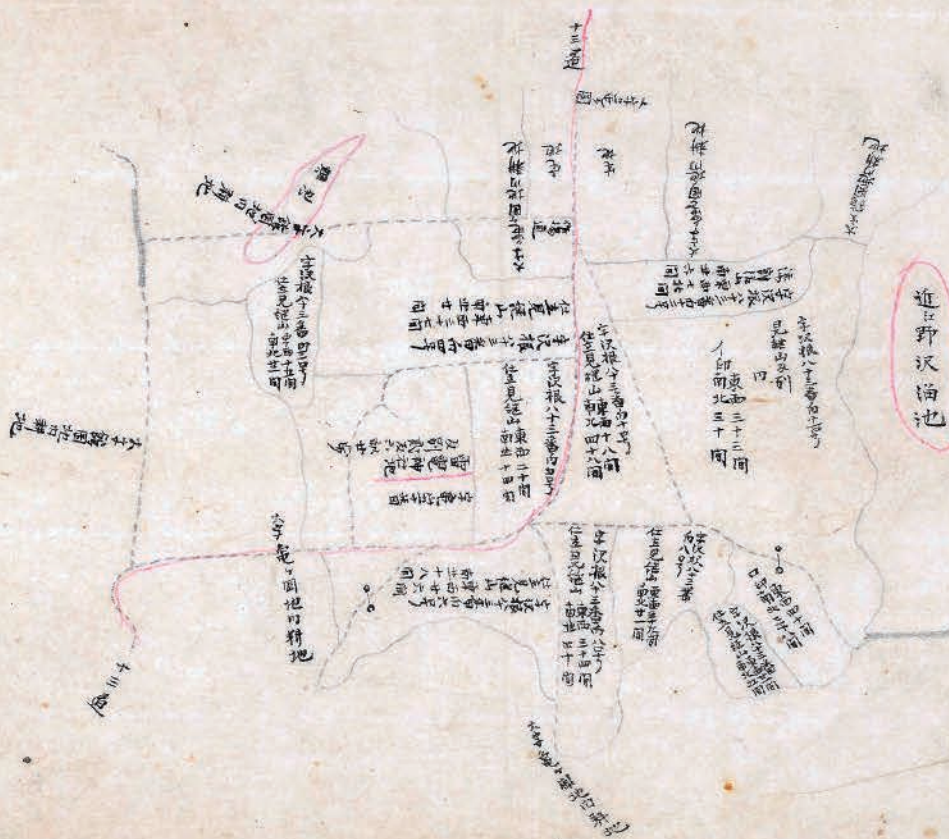
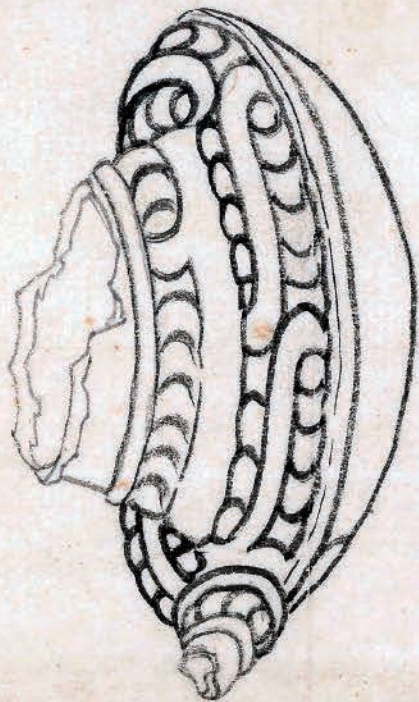


395

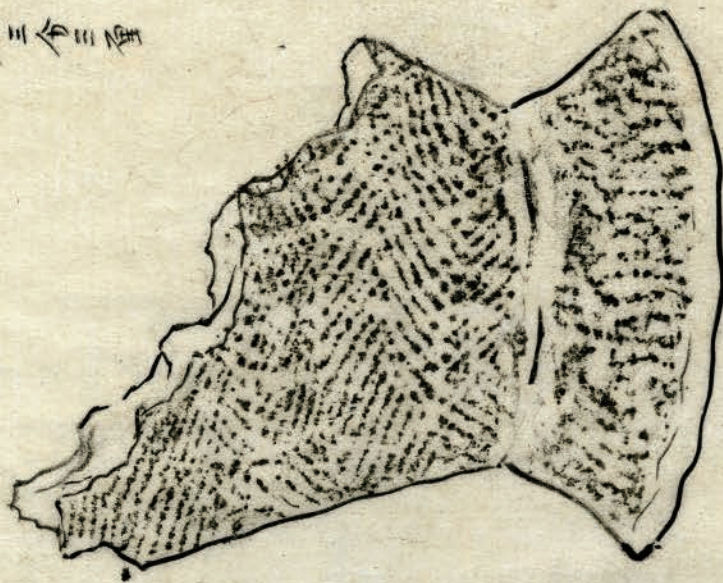


396

高館堤、邊
高廿三寸三合



厚^廿三分三厘

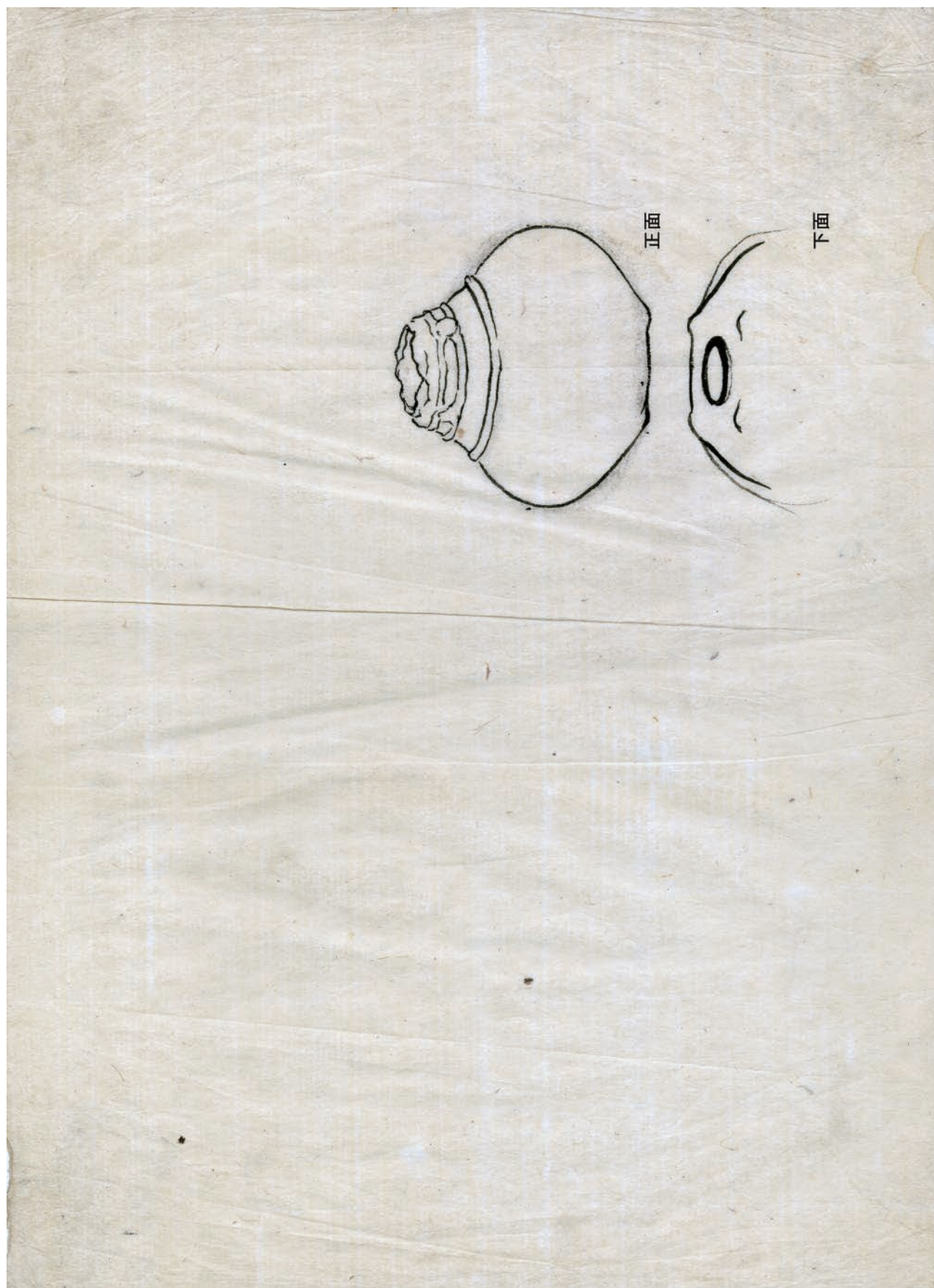


正面



下面

底^深九分



399

其二

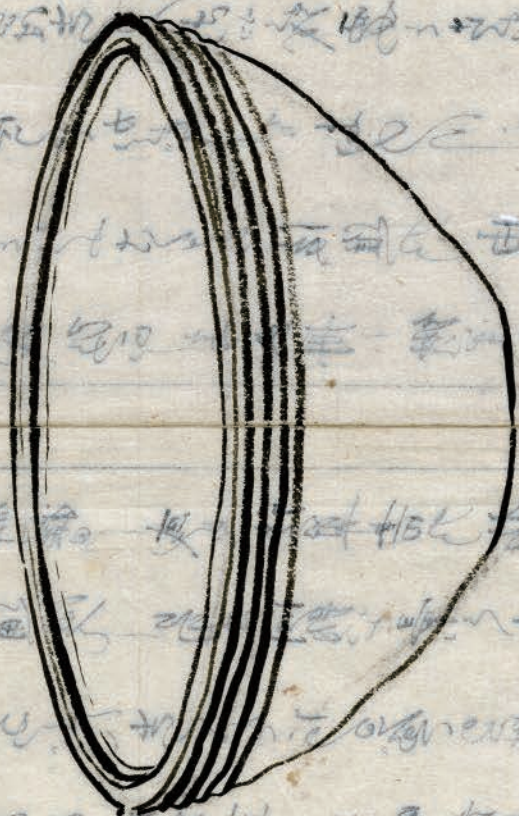
此は、*（英語）* 日本
の、*（英語）* 神



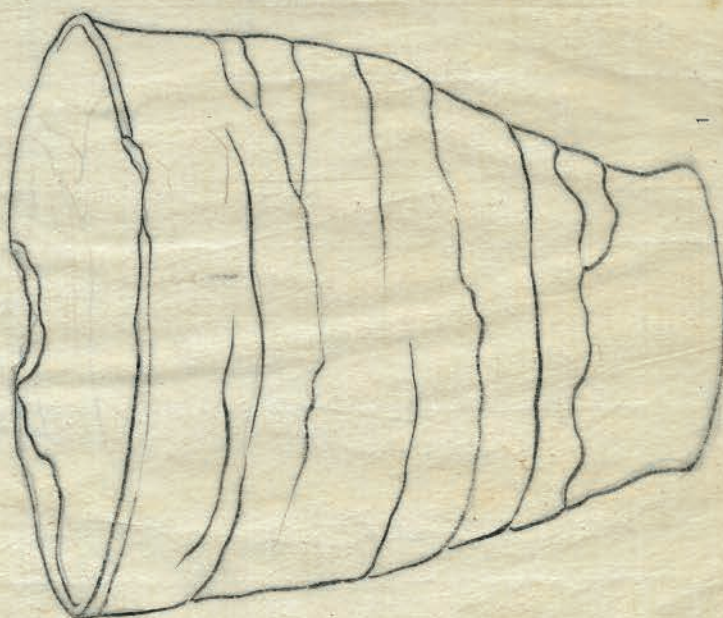
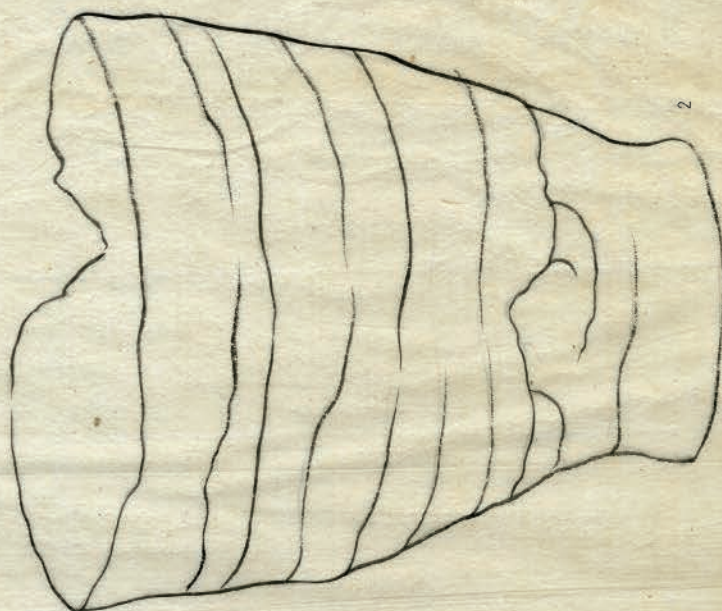
高サ一寸九分

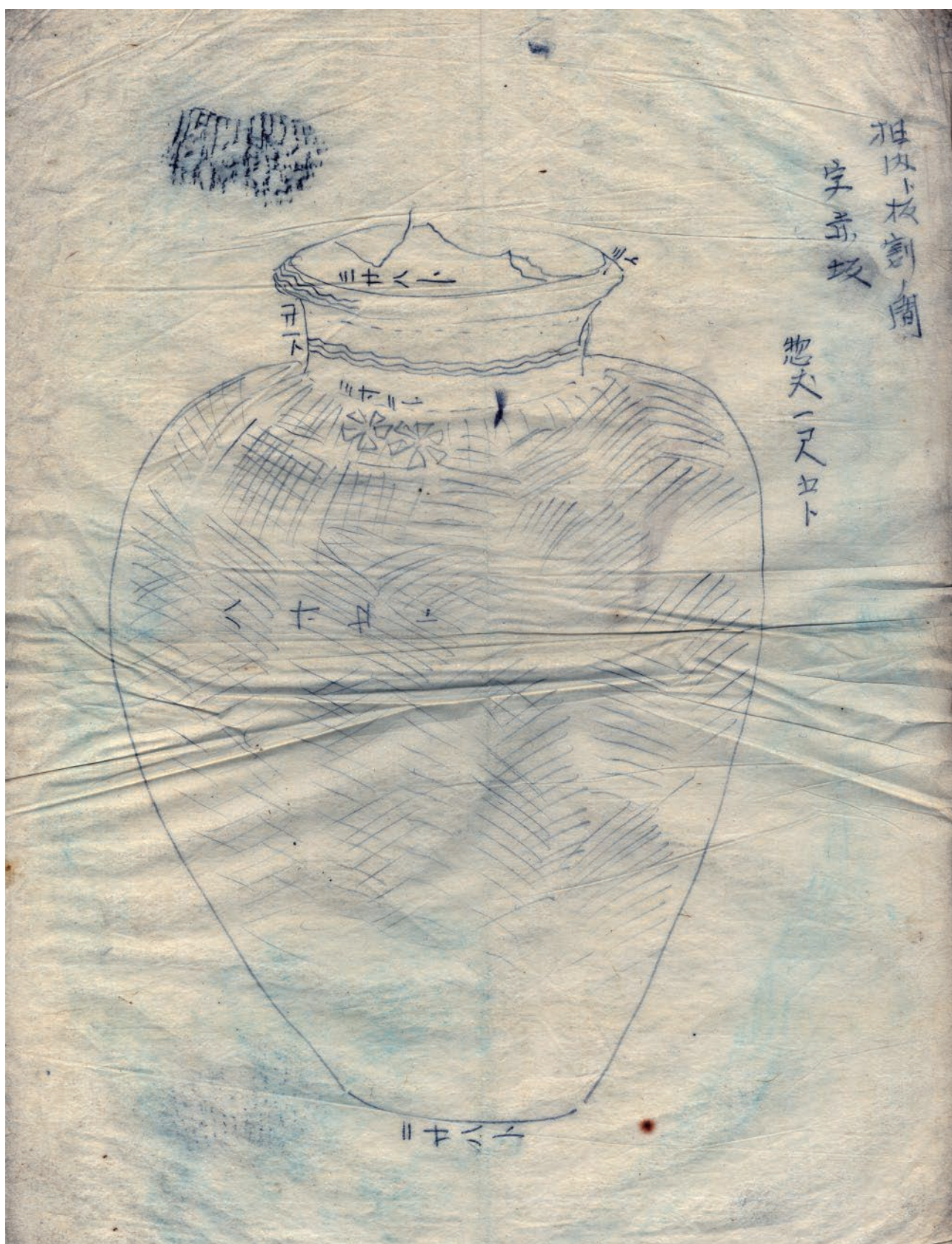
雷斧石の漢名霹靂石
和名きつねのまろり

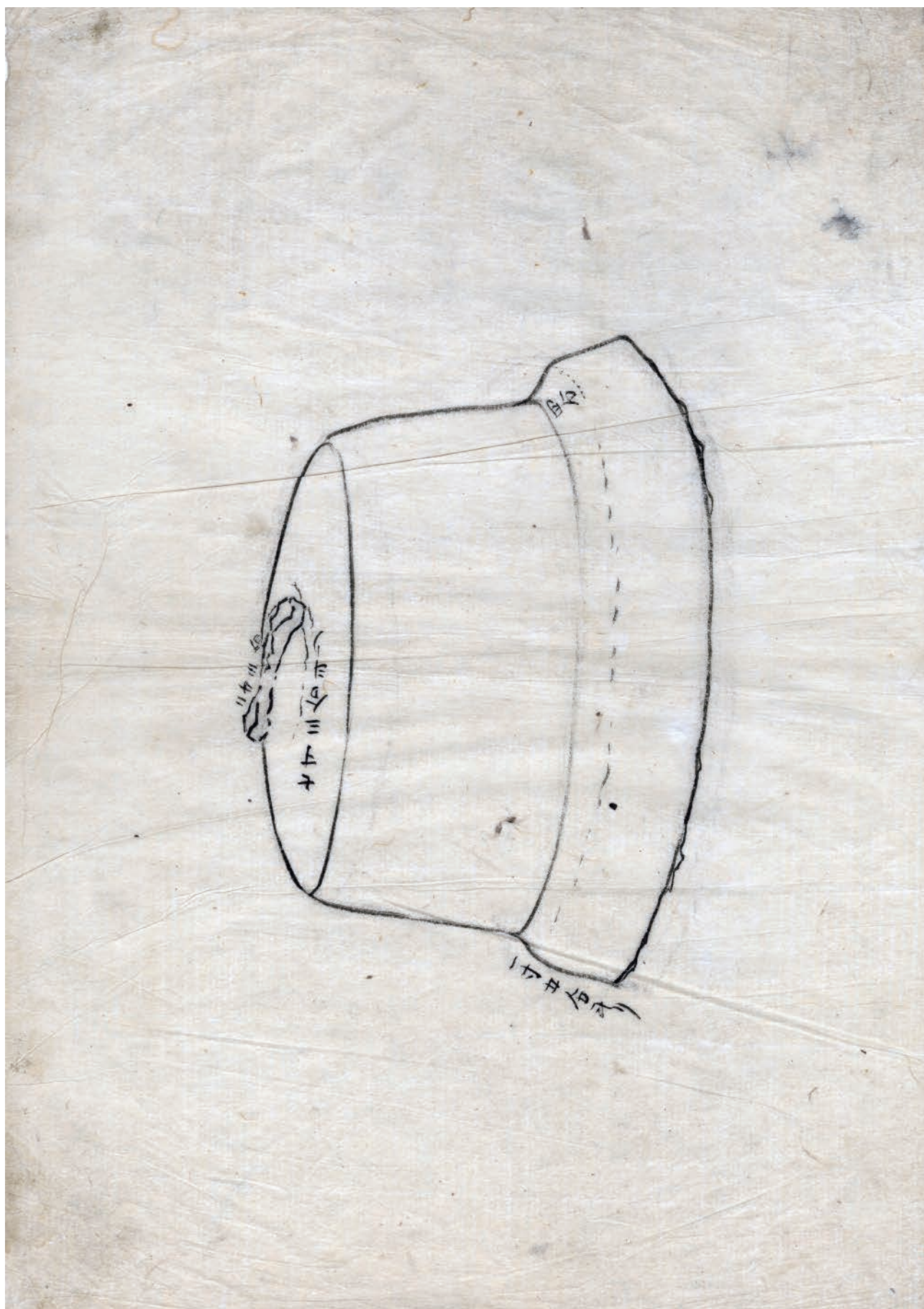
肥前縣三浦郡大浦町大字 吹山 古瀬常盤



上北郡下田村地内宇後谷地堀南際出

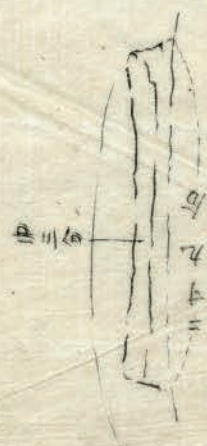
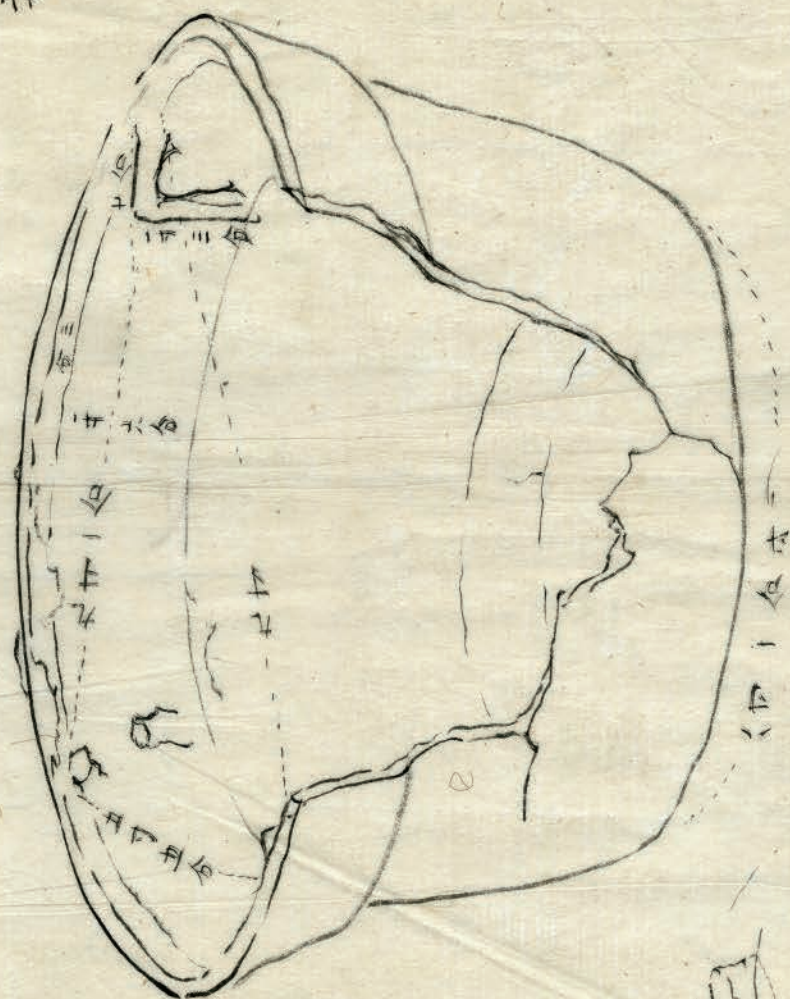






230補遺

口径二尺二分
 身寸二尺三寸
 深九寸



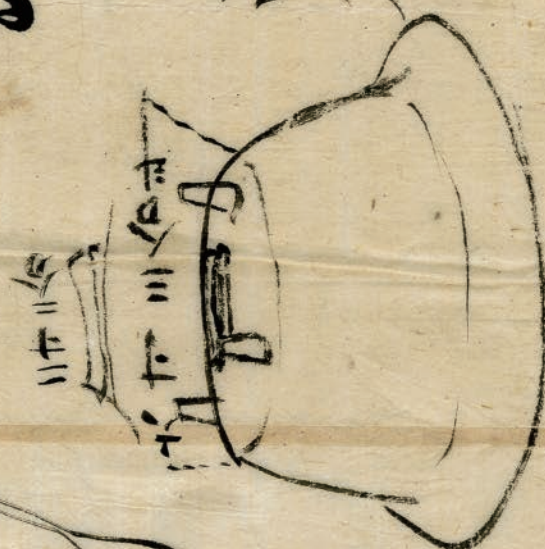
楚文時圖



口徑九寸
高廿四寸
足高六寸

口徑九寸
高廿四寸
足高六寸

口徑九寸
高廿四寸
足高六寸

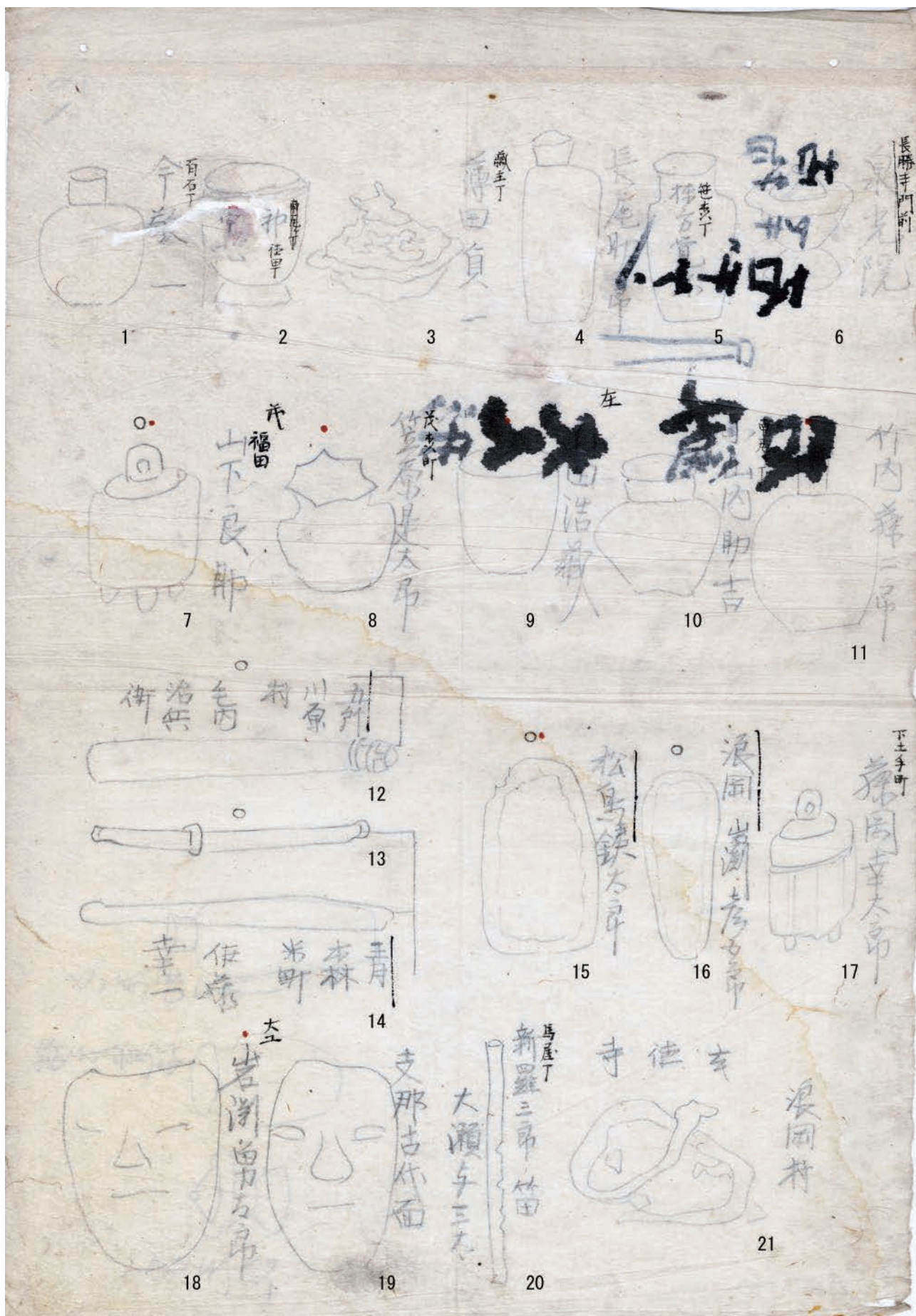


口徑九寸
高廿四寸
足高六寸



厚二寸余

重八百二十斤



萬の王の圖

明治十二年

六月廿五日

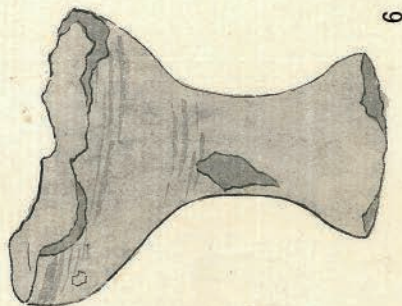
花之義懐乃西人

金之少人云云

金之少人云云

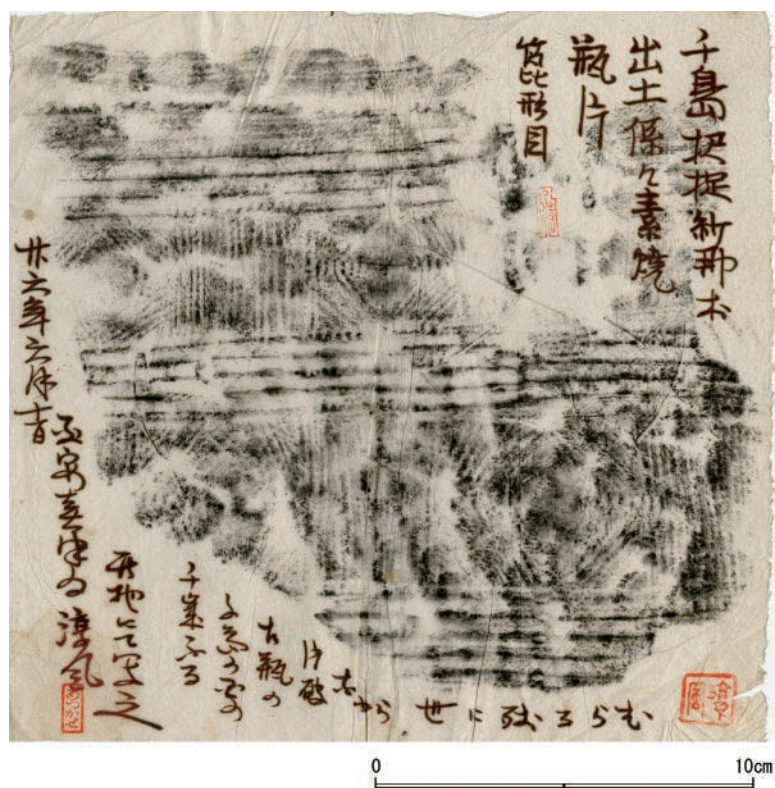


十層も花の
うめー





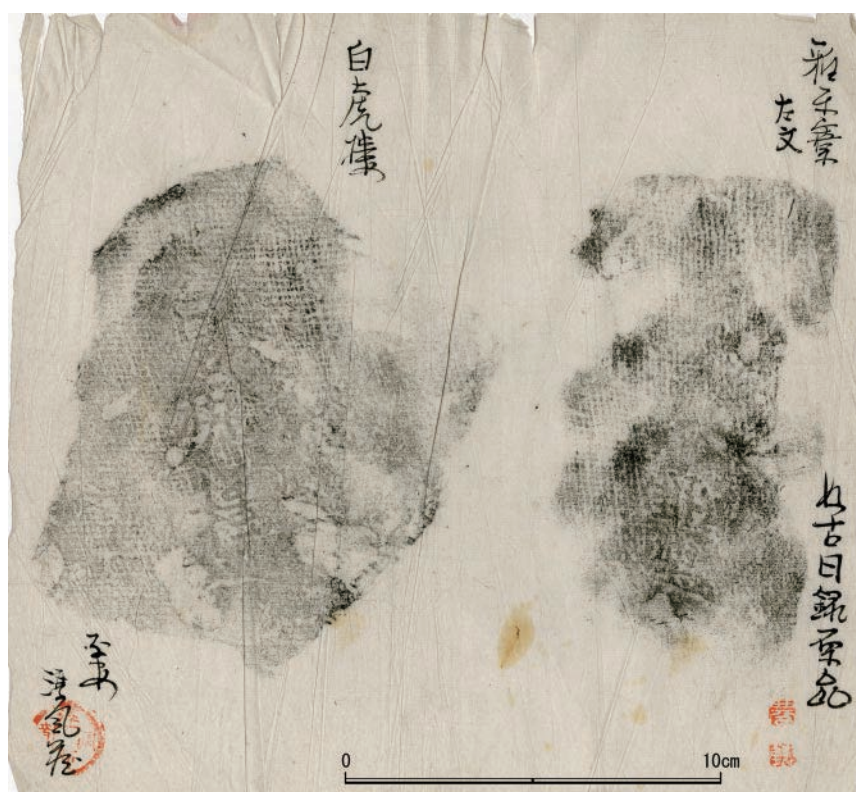
410



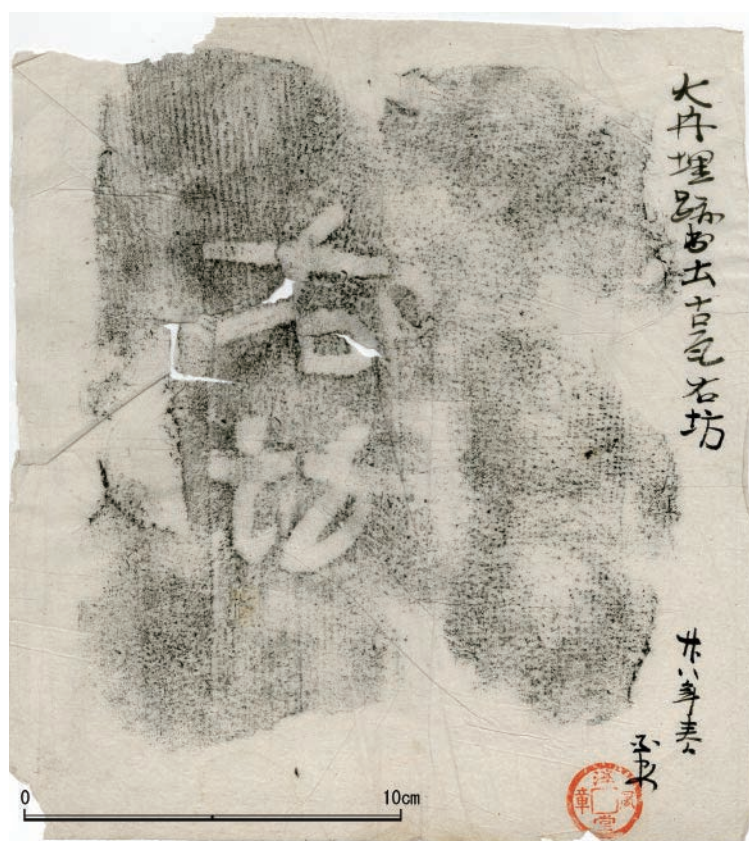
411



412



413



414

佐藤 蒨 考古画譜Ⅲ

2011年3月9日 発行

編集 上條信彦

発行 弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター
〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地
TEL 0172-39-3190

印刷 川口印刷工業株式会社 青森営業所
〒030-0811 青森県青森市青柳1丁目16-3 木村ビル2階
TEL 017-721-6520

